

この素晴らしい天界に祝福を！

勾玉

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

『この素晴らしい世界に祝福を！』のヒロイン達のスピノフ二次作  
完結済み！

# 目次

## 第1章 アクア編

第1話	女神たちの戯れ	1
第2話	爆裂ラーメンひよいざぶろー	6
第3話	ヒキニート	12
第4話	彼のジャージ	16
第5話	彼の大切なもの	22
第6話	彼の物語に始まりの鐘の音を!	28

## 第2章 めぐみん編

第7話	かけがえのない日常	36
第8話	タイムマシン	40
第9話	過去の日本で	46
第10話	ターニングポイント	52
第11話	そこは・・・	59
第12話	魔笛	65
第13話	彼らのいない場所①	70
第14話	彼らのいない場所②	75
第15話	彼らのいない場所③	83
第16話	彼らのいない場所④	88
第17話	タイムリープ	99
第18話	ターニングポイント	114
第19話	ただいま	120
第20話	あなたと出会えた奇跡に永遠を!	130

## 第3章 ダクネス編

第21話	ある紅魔族の少女	137
------	----------	-----

第22話	夢と現実と	143
第23話	ある青髪のプリースト	147
第24話	ある黒髪黒目の冒険者	153
第25話	動乱の王都①	158
第26話	動乱の王都②	166
第27話	動乱の王都③	175
第28話	ダクネス VS ウオルバク	185
第29話	その夢の終わりに新たな希望の光を!	194
最終章 エリス編		
第30話	月夜の銀髪盗賊団	205
第31話	予感	212
第32話	エリス様の憂鬱	219
第33話	ホームレス女神	225
第34話	酔いどれ女神	231
第35話	恋心	241
第36話	疑心	247
第37話	決心	254
第38話	エリス VS ハンス	266
第39話	祈り	274
第40話	決着	282
最終話	この素晴らしい天界に祝福を!	286
番外 ウイズ編 リッチーと学ぶ取引の基礎		
第1話	借金店主	291
第2話	サキュバス店のリッチー①	294
第3話	サキュバス店のリッチー②	305

第4話	サキユバス店のリッチー③	316
第5話	わらしべリッチー	331
最終話	この素晴らしい魔道具店より愛をこめて!	353

# 第1章 アクア編

## 第1話 女神たちの戯れ

【カズマ視点】

「つつ．．．」

目を覚ますと、ひとりの女性が俺の顔を覗き込んでいた。

傷一つない綺麗な白い肌、黒髪のロングのストレート、形が良く大きめの胸。

そしてこの世のものとは思えない程の美貌．．．

そう、例えるならば、それは女神のような美しさ。

後頭部に暖かな弾力を感じる。

ふむ、どうやら俺はこの美女に膝枕をされているらしい。

俺は美女の膝の柔らかさを堪能しつつ、ぼーっと彼女の顔を見る。

と、彼女が俺の視線に気づいた。

「あ、気がついた？具合はどう？」

．．．とりあえず、具合の悪いふりをしてこの時間を延長する作戦でいこう。

「ちよつと頭が痛いです。」

「あらそう？回復したつもりだったんだけれど．．．でも、ごめんね。

私、そろそろ帰らなきゃならないの。ちよつと上の人から連絡があった。ジャージを枕がわりに置いておくから我慢してね。」

「．．．．．。」

もつと早く目を覚まさなかった俺の馬鹿！

「あなたのゲーム、ここに置いておくわね。しっかり守りなさいよ。」

彼女が微笑みながら手に持った袋を脇に置いた。

．．．ゲーム？ああ、今日買ったゲームのことだろう。

周りを見渡すと、今いる場所は公園のようだった。

どこことなく見覚えのある公園だ。

俺はベンチに横たわっている。

・・・えーと、今日何があつたんだっけ。  
すごく密度の濃い一日だった気がするが・・・  
俺は今日の出来事を思い出そうとする・・・

・・・  
・・・



## 【アクア視点】

ここは天界の一角。

日々、死んだ人にその後の転生や天国行きなんかを選択をさせると  
いう、謂わば進路調査と裁決をする場所だ。

私は、その調査員の役割を担う女神アクア。

水の女神にして、数ある世界、数ある地域の中、日本という高度な  
文明、独特な文化を持つ地域を担当するエリート女神だ。

「そんな私は今、日常業務の合間をぬって、後輩女神の話を聴いてあげ  
ているところだった。」

「何突然一人語りをしてるんですかアクア先輩！」

「彼女の名前はエリス。胸パットを司る女神で、とある世界では通貨  
の単位になるくらいに崇められている胸パットの女神だ。おまけに  
幸運も司っている。」

「先輩、声にでてます！そして私は胸パットは司ってませんから！」

エリスが真っ赤になって叫ぶ。

「ごめんね、エリス。誰かがこの天界を覗いてるような気がして、一  
応、紹介しておいた方がいいかなあって。」

「・・・何ですか、紹介って！それに、変な設定をねっ造しないでくだ  
さいー！」

「えーっと、それで何の話をしてたんだっけ・・・確か、クルセイダー

の子と一緒にクエストを受けたとかだったかしら？」

私は話題をエリスの冒険話に戻した。

エリスはとても優秀だけれども、冒険が大好きで、たまに冒険者に扮して下界で好き勝手やっているらしい。今日もエリスが下界に降りた時の話を聞いていたんだった。

「・・・それですね、その子とクエストを受けたんですけど、途中でその子がブルータルアリゲーターっていうワニを見つけてしまつて・・・嬉々としてそのワニのいる湖に突っ込んでいったんですよ。ですが、鎧の重さで溺れてしまつて・・・なんとか岸まで引っ張りあげましたが、その子が顔を赤らめてハアハア言い出して・・・」

「上級職のくせにワニごときに手こずるとか大丈夫なの？」

エリスは危険な冒険ことを随分と楽しそうに話す。

私はお菓子をポリポリ食べながらそれを聞く。

それにしてもエリスは本当にやんちゃな子だ。

先輩の私から忠告のひとつくらいはしておいた方がいいだろう。

「前にも言おうと思ったのだけれど、そんな頭のイタい子と冒険なんてしたら、命がいくつあつても足りないわよ。もつと優秀な子は沢山いるでしょうが。」

「まあ、確かに彼女との冒険は危険の連続ですけど、簡単に敵を倒していつてしまうパーティーよりドキドキして、よっぽど楽しいですよ。」

エリスはニコニコしながら応えた。

仮に私が下界において冒険をするとしても、絶対に、そんな地雷娘とパーティーを組まないと言言できる。絶対だ。

「まったく、冒険もいければ天界の仕事もあるんだから、あんまり危険なことばかりするんじゃないわよまったく。」

「はい。気をつけます。」

エリスは口元に手を当てて苦笑しながら応える。

・・・あ。



エリスのその何気ない動作によって胸元が僅かにずれた。

「それにしても、エリス、今日は胸パットの調子が悪いんじゃない？なんか不自然に見えるわよ。」

「は、はい!？」

エリスは素っ頓狂な声を上げて狼狽する。

「あなたが担当している世界で売っているものかしら？日本でそんな不自然なパットしてたら、女装と間違われて女性専用車を追い出されて駅員さんに連れてかれるわよ。」

「ただ、だから何度もパットでは無いと言っているじゃないですか！ほ、ほほ本物ですから!!」

「その点、日本の技術力はハンパないわね。フィット感、通気性、軽さ、様々な点で優れているし、あなたの今のサイズよりふた周りくらいは盛ることができるわね!!アレね。超もるぜーっていう、アレね。」

「!?!」

エリスが、マジかよ!?!という表情で私を見る。

そこで私は思いついてしまった。ちようど下界の話聞いていたからだろうか。

「そうだわ!あなたのために、私がちよつと下界において日本の胸パットを買ってきてあげるわ!ちよつとエリス!これから私が戻ってくるまで日本の死者の案内を代わって頂戴!」

「せ、先輩!私もそろそろ帰らないと向こうの死者の案内があるんですから!」

「大丈夫よ!日本の案内のルールでわからないことがあったら、天使の子達に聞いてくれればいいから。私が面倒をみる子はね、みんな優秀なの!もちろんあなたもよ!」

「先輩!ドヤ顔で言わないでください!全然答えになっていません!!!」

そうと決まれば、善は急げだ。こんなにも声を張り上げて喜んでくれている後輩のために急いで買ってきてあげべきだろう。

私は慈悲深い女神なのだ。

「うーん。この透き通るような青い瞳や青髪、神聖なオーラを放つ羽

衣装じゃ、日本では目立って仕方ないわね。最悪、私を女神と特定されて騒動になるわ。きつとヤフーニユースのトップを飾って、イイね！されてしまうわね。ちよつと魔法で変装してから行きましょう！」

「先輩！話を聞いてくださーい!!!」

「じゃあ、ちよつと行ってくるわねー。」

「せんぱーーーーい!!!」

後輩女神に見送られ、私は日本の地へと舞い降りる。

## 第2話 爆裂ラーメンひよいぎぶろー

私の降りた先は比較的大きな街、一般的に都会と評される場所だろう。

これくらい規模ならエリスが満足するパットを手に入れることができそうだ。

今の私の外見は、腰まである艶やかな黒い髪に吸い込まれそうな黒い瞳、街中を数歩歩けばモデルにスカウトされそうな美女といえるだろう。

服装はカジュアルを意識したノースリーブ。

周囲に行く男どもがチラチラ私の姿態を伺っている。まったく。

本人は、全然気にしてませんよ、ってつもりなんだろうけれども、私の曇りなき眼の前で隠し通せる訳が無い。

まあ、悪い気はしないのだけれども。

「さて、お店を探しましょうか!」

時刻は昼前。

天界のような荘厳さとはかけ離れ、街は活気にあふれている。

その雰囲気にも包まれ、私も少なからずワクワクしている。

私もパット女神のようにたまに下界に降りてこようかしら。

きよろきよろ周りを見ながら歩く。

と、そこで、とあるのぼりが目に止まった。

『爆裂ラーメンひよいぎぶろー』

「ラーメン・・・? そうよーラーメンよー!」

私は、下界のラーメンなるものを一度食べてみたいと思っていたのだ。

ちょうどお腹も空いている。

このチャンスを逃す手は無い。

そう思い、私は意気揚々とラーメン屋に入る。



「へいらっしやい！一名様ご案内でーす！」

少々混雑した店内、私はカウンター席に案内された。

店内は狭く、男性客の割合が多かった。

「メニューをどうぞ」

「あら、ありがとう。」

そういつて渡されたメニューには様々なラーメンの種類が書かれていた。うーん、何が美味しいのかしら？あ、アルコールもあるのね。おお、これなんて美味しそう。

「すいませーん！とんこつラーメン爆裂盛りとー、あと生ビールくださいー！」

「とんこつラーメン爆裂盛りがおひとつ、生がおひとつですなー。少々お待ちくださいませー！」

そういつて店員は厨房にメニューを伝える。

厨房からは、なまいつちよー！、とか、えくすぷろーじょん！、とか声が聞こえてきた。

威勢の良い掛け声に私のワクワクも高まる。

周りを見ると、ラーメンを食べている客に、スマホをいじって客がいる。

ラーメンを目の前にスマホをかざし、カシヤ、とかやっている。

多分、インスタでラーメンなう、とかやるのだろう。星4つとかやるのだろう。

楽しそうね。私もスマホを買おうかしら。まあ天界に電波は届かないのだけれども。

私の隣は高校生くらいのぱつとしない男の子。熱心に何か冊子を読んでいる。

気になってチラリと覗くと、ゲームの説明書的な何からしい。いわゆるオタクさんかしら。

などと店内をキョロキョロしていると、目の前に注文した生ビールが置かれた。

「生いつちよー!」

「ありがとう。」

私は店員にお礼を言って、出された生ビールを口にする。  
ごくごくごくごくごくごくごくごくごくごく……

香ばしい麦の匂いが鼻をくすぐる。

ほどよい苦みが口の中に広がる。

シャワシャワした感覚、喉が潤されていく。

「プアー……!」

美味しい。

とても美味しい。

昼間から飲むビールは最高だ。

なんだか隣の男の子が、愕然と私を見ている気がするが、私はそんなの気にしない。

更に少し待つと、目の前に注文したラーメンが置かれる。

なんていい匂いだろう。私は蓮華でスープをすくってまずはひとくち。

「ほう……」

口に広がるとんこつの風味旨味に思わず声が漏れる。

それから私は、夢中でラーメンを食べた。

私のラーメン処女が失われた瞬間だった。



「ごちそうさまでした!」

スープまで飲み干し店員に告げた。

それにしても美味しかった。機会を見てまた下界に食べに来たい。アルコールが程よくまわってとても気分がよい。

「ありがとうございました!!お会計1500円になりまーす!」

「はいはい……え?」

「え?」

私は、瞬時に酔いがさめた。

気がついたのだ、お金を持っていないことに。  
地の文が倒置法になるくらいに焦る。

まずい! どうしよう!

「あー．．．えーつと、ちよつと待ってくださいね．．．」

とか言いつつ、ポケットをごそごそやってお金を探しているふりをする。とりあえず時間稼ぎだ。

訝しげな表情で店員が私を見る。

この顔は、あれ? こいつ金持ってねーんじゃねーか、っていう疑いの表情だ!

どうしよう。どうしよう。どうしよう。

働かせてくださいとか頭を下げてみるか。私、女神なのに!

と、私がオロオロしていたときだった。

隣の男の子が店員にお金を差し出して言う。

「あ、こっちの人とお会計一緒で。」

どこにでもいそうなぱつとしない顔立ち、さっきまでゲームの説明書を読んでいた高校生くらいのオタク少年が私の分までお金を出してくれたのだった。

「あ．．．」

私は、ぽかんとその男の子を見る。

「さあ、出しましょう．．．」

男の子は私にさらりと声をかけ、出口に向かって歩き出す。どうやらカッコつけてるようだ。

「お客さん、50円足りませんよ。」

店員から声をかけられて顔を赤くして戻ってきた彼はあんまりカッコよくなかった。

周りのお客さんも痛々しい目でこちらを見ている。彼は真っ赤になつてうつむきながら財布をあさる。動揺して小銭を床にチャリーンとか落とすの、もう見てられない。

「はいーありがとうございますー！」  
私たちは逃げるように店をでた。



「あの、ありがとうございました。」

私はうつむいたままの彼にお礼をいう。

恥ずかしい思いはしたけれども、困っていたのを助けてくれたのは確かだ。

「・・・あ・・・いえ。」

彼は明らかに落ち込んでいる。完全に黒歴史になってしまったようだ。家に帰ってからさつきのことを思い出し、頭を抱えて悶えるのだろう。

「そ、それよりも、お金が無くて帰りとか大丈夫ですか？もう少し渡します?。」

「いえ、お金を使わなくても帰れるので。」

天界へは無料。

帰る姿を人に見られないようにするのだけ注意は必要だけれども。

「そうですか。じゃあ・・・」

彼は超絶美女な私をおいて、さつきと行ってしまった。黒歴史の目撃者からさつきと逃げたかったのかもしれない。

お茶の一杯くらい付き合ってもよかったのに。私はお金がないので彼のおごりなのだけれど。

・・・と、彼の姿が路地に消えてからすぐ、店から店員が出てきた。「あ、さつきのお姉さん。彼、これを忘れてったみたいなのよね。どっちに行ったか知らない?。」

どうやら彼は店にゲームソフトを忘れたようだ。とことんカツコ悪い。

「あの角を曲がっていきましたけれども。」

「ほんとう？ありがとうございます！」

店員はその曲がり角の方まで走って行って確認していたようだが、彼の姿を見つけられずにすぐに戻ってきてしまった。

そして、少し困った顔をして言う。

「見つけられなかったわ。まあ、大切なものならそのうち取りに来るでしょ。」

「あの、時間あるんで、私も少し追いかけてみますね。」

「ほんとう？助かるわ。じゃあ彼を見つけたら、これ、お店で預かってるって伝えてくれないかしら。」

「わかりました。」

彼を探すことになった。

私は慈悲深い女神なのだ。



### 第3話 ヒキニート

私はオタク少年の姿を探すも、結局彼を見つけられないでいた。結構遠くまで行ってしまったのか。

私はたまたま見つけた公園のベンチに腰をかけ、ハア、と深く息をついた。

そういえば、私、何しに下界におりてきたんだっけ？

と思うも束の間、さつき別れた男の子が公園の前を駆けていくのが見えた。

私は咄嗟にその子に叫びかける。

「ちよつとアナター！」

男の子はビクツと身を震わせて私の方を見た。

「あ……」

私に気づき、近づいて来る。

かなり急いで走ってきた様子で、酷く息切れしている。

「はあ、はあ、あの……はあ……俺のゲーム……はあ……」

「それなら、さつきのラーメン屋で預かってくれてるみたいよ。」

「よかつたあああ……」

男の子は心底安心した様子で胸に手をあてて息をもらした。

「……そんなに大切なものなの？」

「え、ああ、あれはとあるゲームの限定版なんだ。数量限定で、この機会を逃したら手に入らなかつたかもしれないんだよ。」

「ふーん。人気なの？」

「うーん、そんなに人気じゃないかな。っていうか、クソゲーの部類かもしれない。主人公は能力低いし、仲間はポンコツばかりだし、なぜかプレイヤー指示を無視したりするし、敵は鬼畜設定だし、人もモンスターも食べ物もみんな揃って大馬鹿設定だし。」

「なにそれ、クソゲーじゃない。」

「でも……」

彼は懐かしい出会いでも語るかのように……

「何というか、どうにもポンコツな仲間達がほつとけないってというか。いちいち突っ込みたくなる設定も、なぜか居心地がいいってというか。最初は酷いゲームを掴まされた、PV詐欺だ、とか思ってたけれども、気がつけば、そんな世界が好きになってたよ。」

それにしても、随分楽しそうに語るものだ。

私も何となく、彼が語るゲームの世界に興味を抱く。

そういえば、エリスの冒険話を聞けばかりだ。

「冒険……か……」

私は彼の楽しそうに語る姿を見て声が漏れていた。

事務的な仕事を長い間続けてきた女神な私にとって、それはとても遠く、尊いもののような気がした。

「まあ、でも俺なんかゲームの世界に行っても瞬殺されちゃうだろうな。」

彼は苦笑する。

「やっぱり、強力な装備やら能力やらで無双するほうがいいな。それで、パーティーメンバーと恋に落ちたりなんかりしてき。」

そう言つて、彼はいろんなゲームの事を語ってくれた。

私はそれほどゲームに詳しいわけではない。

けれど、

彼のゲームの話は、何だかこっちまで楽しい気分になるものだった。



「そういえばあなた、名前はなんていうの?」

自己紹介もまだだったことに気づき、私は彼に問う。

「あ、ああ……ごめん、俺の名前は、佐藤和真。そっちは?」

「私は、水のめが……」

「水のめが？」

そこまで言つてハタと気がつく。

流星に正体を明かしては不味いだろう。

ツイートされて、女神降臨のニュースで瞬く間に世界を巻き込む騒動となつてしまつては大変だ。

100万リツイートは硬いだろう。

「み、ミズノメガ・・・そう、ミズノ　メガよ！」

「何だその、最上もが、みたいな名前は。」

「ちよつとー、人の名前に文句つけないでくれますうー？」

「あ、ごめん。なんだかツツコミ欲が抑えられなくて・・・」

・・・わかる。

なぜか彼の前だと、私も芸人魂に火が付くというか・・・芸人じゃなく女神だけれども。

「ところであなた、見たところ学生のようにだけれども、今日は学校じゃないの？」

そう聞くと、彼は、ウツという声を出し顔を引きつらせる。

「今日は平日よね？体調も特段悪そうじゃないし。どこかの宗教の安息日か何かかしら？宗教はね、しっかり選んだほうがいいわよ。」

と、尊くも告げてあげるが、彼は目を背けたままだった。

ははあ、なるほど。

「今流行りの引きこもりつてやつね。ニートともいったかしら。まさかこんな街中でエンカウントするなんてレアな体験もあるわね。倒せばどれだけ経験値がもらえるのかしら。」

「おいこら。人をどこかのレアモンスター扱いするな。そもそも、こうして街まで出てきている時点で引きこもりではない。それに、引きこもりとニートは一緒じゃない。つてか、俺は学生だからニートでもない。」

「んなことどうでもいいわ。ほら、こんなところで油売っていないで、とつとと学校へいきなさいな。」

「うっ・・・」

そのまま引きこもりのニートさんをしっしっとするが、彼は目を泳がせてその場から動こうとしなかった。

仕方がない。ここで会ったのも何かの縁だ。女神たるこの私が迷える子羊を導いてあげるとしますか。

「とある偉大な宗教の、とある高名な女神様はこう言ったわ。明日頑張ればいいじゃない、と。とりあえず、今日は一生懸命遊んで、明日から頑張りなさい。」

「な、なんて駄目な女神だ・・・」

「それで、アナタは学校をサボってゲームを買いに来たの？」

私は引きこもりのニートさんに問う。

「まあ、それもあるけど、いつも着ていたジャージがダメになったんでそれも買いに来たんだよ。」

「じゃあ、一緒にジャージを買いに行きましょう。私も暇していたところなのよ。ついて行ってあげるわ。ほら、座っていないでいくわよ。」

私は引きこもりのニートさんの手をとって引っ張った。

「ああ、ちよつと。まずはゲームソフトを受け取ってからだ。」

慌てて引きこもりのニートさんが・・・って、この呼称は長ったらしいわね。ヒキニートとでも変換しておきましょう。

私たちは公園を後にした。

## 第4話 彼のジャージ

ラーメン屋でゲームソフトを回収した後、ヒキニートと一緒にジャージを求めて服屋を目指す。

途中、彼は、あつ……、と声を漏らして道脇で足を止めた。「ん？どうしたの？」

突然止まった彼の目線の先を追ってみる。

ゲームセンターがあつた。

気になるゲームでもあるのかしら。

「そういえば私、ゲームセンターに入ったことないわね。」

「マジで？」

彼は少し驚いたような表情を向けてきた。

「いいわ。ちよつと寄っていつてみましょう。」

ヒキニートと一緒にゲームセンターに入る。



店内。

そこかしこ、もの凄い音量の音響が飛び交っている。

ドンドンだの、ギョングョんだの、にやんにやんだの、いやーんだの、って、なんかいやらしい感じの声まで聞こえるわね。神聖な私の耳になんてもの聞かすのかしら。いったいどんなゲームよ。

随分とわちゃわちゃとしている場所だ。

そんなわちゃわちゃとした空間を、彼は一直線に歩き、あるゲーム機体の前まで行く。

私は彼の後ろに立って機体を見る。

「ねえ、これは何？」

「これは、アーケードカードゲームで、全国のプレイヤー達とカードゲームでバトルができるんだよ。」

「ふーん、あなた、強いのか？」

「……まあ、見てろよ。」

彼は機体にお金を入れ、バックから免許証くらいの大きさのカードの束を取り出す。

私はゲーム画面を見たり彼の動作を見たり。

画面には『GAME START』の文字が表示された後、デフォルトメされた人物やらモンスターやらがせわしなく動く。

彼はカードを並べたりかざしたり、画面を見て、アー！とかいったり、フツ、とか笑ったりしている。入り込んじやってる。

ややあつて、彼はこちらを振り返る。

「どうだ？」

どうといわれても。

「さっぱりわからないんですけど。」

「え？だから、さつきそのトークンのフェイズ、スキップしたじゃん、……で、これトラッシュしたから、このコンボが決まって……」

「……なるほど。さっぱりわからないんですけど。」

彼は、説明を諦めたようで、ゲームを再開しようとする。

「ちよつと私にもやらせなさいよ。構ってよ。」

彼は驚いた表情でこつちを向く。

「でも、これは覚えるのに時間が必要だからなあ……」

「別にこれじゃなくてもいいわ。何か二人でできるものはないのかしら？対戦しましょうよ。」

そういうと、彼はニヤリと頬を釣り上げた。

「俺にゲームで勝てると思ってるの？」

自信満々にいうので私は返してやる。

「そのドヤ顔も今のうちよ。あなた、神と戦ったことはあるのかしら？」

「神？」

「ふふふ……」

謎の強キャラ感を醸し出す私。

彼は胡散臭そうにこちらを見ながら言う。

「じゃあ、あれはどうだ？」

と言って、彼は太鼓の形をした機体に指をさす。

はつきり言う。このヒキニート、もう引くほどにゲームが強い。

太鼓のゲーム、レースゲーム、格闘ゲーム、ガンシューティング、どろぶつタワーバトル、USAゲーム、果てはじゃんけんに至るまで、いろいろなゲームで彼と戦ったが、私は一勝もできなかった。

「おかしい！おかしいから！じゃんけんなんて、完全に運の勝負じゃない！どんなずるをしたの!?なんで一回も勝てないの!?!」

「ごめんな。俺、じゃんけんで負けたことないから。」

彼は、両手を少し上げてヤレヤレ、といった仕草をとる。流石に腹が立つ。

なんか周りに人だかりまで出来てるし。

「くう・・・待ってなさい!」

と言って、私は彼のもとを走り去り、人垣をかき分け、ひと目のつかないところに隠れる。

『『ブレッティング』『ブレッティング』『ブレッティング』『ブレッティング』『ブレッティング』『ブレッティング』『ブレッティング』『ブレッティング』『ブレッティング』『ブレッティング』』ちよつとエリス!あなたの祝福魔法をちようだい!」

と、天に向かって声をあげる。

元いた場所に戻る。

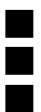
「待たせたわね。悪いけれど、今の私は最強よ?誰にも負ける気がしないわ。」

「なんか、さつき、魔法がどうか叫んでなかった?」

彼は頭の痛い子を見る目で私を見ている。が、気にしない。

「気のせいよ!さあ、行くわよ!じゃんけん・・・」

私は負けた。



ゲームセンターを後にし、ヒキニートとユニクロに入る。  
ユニクロにもジャージがおいっているらしい。

一昔前はユニクロといえば、平民御用達みたいなイメージがあった。  
た。

初めて入る店内は整然としていて清涼感があつた。そして店員の  
愛想がよい。

なによ、リーズナブルが売りのわりに結構いい雰囲気じゃない。

私は、綺麗に陳列された服をキヨロキヨロ見渡しながらヒキニート  
に続いて店内を歩く。

ヒキニートはジャージが置いているコーナーに着くと、陳列された  
商品を眺めていた。

「どんなのがいいの？」

「まあ、これと比べてこだわりは無いけど……」

彼は、こつちをちらりと見て、少し顔を赤くして私に質問してくる。

「あのさ、女の子から見ても、良さそうなの……っていうか、変じやない……  
っていうか、俺に似合いそうなのとか……あるかな……」  
「ハア？そんなこと聞いてどうするの？引きこもりがジャージ姿を女  
の子に晒す機会なんてあるわけないでしょ。」

「そっか……だよなあ……」

彼は、ガクツと肩を落として陳列棚に向き直った。

私は、さらっとヒキニートが見ている陳列棚を見渡し、

「まあ、でも、アタシとしてはこの緑と黒の柄のなんてあなたに似合う  
と思うのだけれど。」

と、彼に告げた。

彼はびっくりした表情で私を見て、

「あ、ありがとう……」

少し頬を赤らめて言う。



店内は老若男女様々な人がいて、家族連れやカップルも多い。



魔法使いのコスプレをした頭が爆裂していそうな挙動不審な女の子もちらりと見かけた。

日本の未来は大丈夫かしら。まったく。ヒキニートが会計に行っている間、私も女性ものの商品を見てみる。

天界では神様印の羽衣姿しかしてないし、なんだか普通の女の子になっただけで心が弾む。

自然に鼻歌などを漏らしながら、陳列棚を物色していると、「どういったものをお探ですか。」

と店員さんが声をかけてきてくれた。

「え、えつとお・・・」

私は突然のことに戸惑って、しどろもどろになる。

「それにしても、お客様、物凄くお綺麗ですね・・・モデルさん？いえ、なんだか、この世のものと思えない美しさというか・・・」

「そうですね！私こそが水のめが・・・」

「はい？」

「ど、どうも、ミズノ メガ です。」

「は、はあ・・・す、素敵なお名前ですね。最上もがさんみたいな。でた、最上もが。」

「・・・そ、そうだ！こちらなんてお客様にとってもお似合いだと思っんですけれど。いかがでしょうか。」

などといって、その店員は、近くに掛かっていたワンピースを手に取り私にかざしてくれる。

「わあ・・・」

ちよつと大人っぽくてシンプルながらも遊びのあるワンピースを見て、私は自然と声を漏らしてしまった。

「試着などもできますが、いかがでしょうか。」

「ええ？いいんですか？着たいです！」

私は嬉々として、頷いた。



数分後、ヒキニートが会計を終えたみたいで、私を探してやってきた。

私の姿に気がついて、目を見開く。

「ふふん、どう？」

私は、試着したワンピース姿で彼の前でふりふりとポーズを決める。

彼は顔を赤らめて呆然と私を見ていた。

「なによ、何か感想の一つも無いわけ？」

私が彼に詰め寄ると、

「すごく・・・可愛いと思います。」

彼は、緊張した面持ちで、何故か敬語で応えた。

店員はそんな彼に向けて、セールストークを繰り出す。

「彼氏さん、どうですか？彼女さん、すごくお綺麗じゃないですか？いかがですか？こちらのワンピース、プレゼントなんて。」

「彼氏!？」

彼はあからさまに動揺している。

私は、目を輝かせて彼の方を見やる。

彼は、うう、と声を漏らし、

「・・・ち、ちなみに、おいくらですか？」

と、うずうずと尋ねる。

「こちらは、12800円です。」

「高っ!!!・・・ごめんなさい。そこまで、お金ないので・・・」  
彼は落ち込んだ顔をして店員に言った。

## 第5話 彼の大切なもの

外は、もう夕方だった。

今の季節だと、このノースリーブな格好では少し寒い。

私は両肩を手で抱き、こしこし、とこすって寒さを紛らわせようとする。

その様子を見たヒキニートは、ちよつとためらいながらも、

「あ、あの、良かったら、さつき買った、このジャージ着ない？」と提案してくれた。

「え？買ったばかりでしょ？いいの？」

「ああ、別に無くなるものじゃないし・・・」

そう言つて、彼はユニクロの袋にガサガサと手をツツコミ、ジャージを取り出して、タグを歯で噛み切る。

そして、私にジャージを、

「ん！」

と喋って突き出してきた。

「あ、ありがとう。」

私はジャージを受け取り、腕を通す。

「わあ、アナタもやっぱり男の子なのね。私には少しだけ大きいわね。肩幅の差かしら。」

新品独特の無機質な匂い。

サラサラした肌触り。

暖かい。

「ありがとうね。」

彼は顔を赤くする。

このジャージはおそらく帰った後クンクンされ、彼の一生の宝物になるだろう。

でもいいの。女神からの贈り物よ。



ヒキニートから借りたジャージを上に着て、彼と一緒に道を歩く。晩御飯、どこで食べようか、とか話しつつ歩いていたその時だった。いわゆる不良と呼ばれる高校生くらいの子達のグループがふざけ合いつつ向かいから歩いてくる。

と、そのうちの一人が私にぶつかってきた。どうやら仲間うちのじやれあいでもつかれたらしい。

「ひゃああああ!!」

不良に体当たりされ、私は道を転げる。

ヒキニートが慌てて叫ぶ。

「もが!大丈夫か?」

・・・私はもがじゃないんですけど。

ぶつかってきた不良少年Aがこちらを睨んで「ツツ」と舌打ちをする。

その態度にカチンと来てAに向かって私は言う。

「ちよつとあんた、自分からぶつかってきて舌打ちは無いんじゃないの?謝って!ほら早く謝って!」

「ハア?そんなところに突っ立っていたアンタも悪いんじゃないか?」

何というテンプレート不良少年。

例えるなら、そう、少年漫画の一話で主人公をいじめるも、覚醒とかした主人公にあつという間に倒される噛ませ不良少年そのものだ。なお、その後、仲間になる展開はよくある(だが弱い)。

テンプレ不良少年Aの仲間達がこっちに近づいてくる。

「おいおい、見ろよスゲエ美人じゃねーか。」「なんだよ、こんな美人と喋る機会ができてラッキーじゃん」「なあ、姉さん、俺らと遊びにいかない?」「そっちのオタクっぽい彼と一緒にやつまんないでしょ?俺らとくればもつと楽しぜ。」「ヒヤッハー。」「

「ハア!?何言っているの?親の扶養を受けてる身分でこの私を口説こうなんて100年早いわよ。とりあえず、ごめんなさいをしなさい。」



ヒキニートがAに殴り飛ばされた。

そのまま建物の壁に激突して、気を失う。・・・なんて弱いのかしら。

「ハハハ、マジでよええじゃねーか。姉さんも彼氏がこんな雑魚で不憫だねえ。安心しなよ。俺らそれなりに喧嘩で鍛えてるから、こんなヤツと一緒にいるより安全よ?」

「・・・・・・・・」

「お、何だこれ?」

Aはヒキニートが取り落とした袋を拾い、中のものを取り出した。「うん?なになに、限定版?へー、こんなゲームあるんだ。ハハ、俺らに絡んできた彼氏の粗相はこれでチャラにしてやるよ。おっと、あんたは一緒に来なよ。」

Aはヘラヘラ笑いながら私の腕をとる。

それは、ヒキニートが目を輝かせながらボロクソに語っていたゲームだ。

私は、ヒキニートが、このゲームの世界が大好きだと語ったのを覚えてる。

・・・・・・・・

「・・・・・・・・それを返しなさい。」

私はAに向けて言う。

なぜだかはわからない。

けれども、私にとっても、このゲームがとても大切なものに思えたんだ。

「ハア？これは俺をイラつかせた慰謝料代わりだっつーの。ほら、来なよ、姉ちゃん」

Aが私の腕に力を込める。

私は、情けない顔で失神しているヒキニートを横目で眺め、私のためになけなしの勇気を振るってくれた彼を眺め、

「……女神様をキレさせたこと、後悔するんじゃないわよ。」  
Aに対して告げる。

「は？女神様？なんだ、この女マジでイカれてんのかよ。」

例えば、下界に降りたことで力が大幅に制限されていたとしても……  
「歯、食いしぼりなさい。」

……私のステータスで彼らに遅れをとることはない。

「何？やるき？女だからって手加減し『ゴツドブ  
ローオオオオオオオオ!!』ねヒデブウウウウ!!!」

私の拳が目の前のAの頬にめり込む。

Aは、変な声をだして後ろへ吹っ飛ぶ。

ガツ、と地面に体を打ち付け、そのままAは白目を向いてピクピクしながら気を失った。

「うわああ、何だこの女、ヤベエよ!!!」「何だよ、今のパンチの威力!」「  
「つてか、なんか技名とか素で叫んでたし！マジヤベエよ！こんな厨  
二女見たことねえよ!」「お、おい、とりあえず逃げようぜ！関わり合  
いにならない方がいいって!」

彼らは、その場にAを残してバタバタと逃げていった。

私はAが取り落としたゲームを手にとった。

その時、ちらりとそのタイトルが目に入ったのだった。  
『この素晴らしい世界に祝福を！』



## 第6話 彼の物語に始まりの鐘の音を！

【カズマ視点】

「つつ．．．」

目を覚ますと、ひとりの女性が俺の顔を覗き込んでいた。

傷一つない綺麗な白い肌、黒髪のロングのストレート、形が良く大きめの胸。

そしてこの世のものとは思えない程の美貌．．．

そう、例えるならば、それは女神のような美しさ。

後頭部に暖かな弾力を感じる。

ふむ、どうやら俺はこの美女に膝枕をされているらしい。

俺は美女の膝の柔らかさを堪能しつつ、ぼーっと彼女の顔を見る。

と、彼女が俺の視線に気づいた。

「あ、気がついた？ 具合はどう？」

．．．とりあえず、具合の悪いふりをしてこの時間を延長する作戦でいこう。

「ちよつと頭が痛いです。」

「あらそう？ 回復したつもりだったんだけど．．．でも、ごめんね。私、そろそろ帰らなきゃならないの。ちよつと上の人から連絡があった。ジャージを枕がわりに置いておくから我慢してね。」

「．．．．．」

もつと早く目を覚まさなかつた俺の馬鹿！

「あなたのゲーム、ここに置いておくわね。しっかり守りなさいよ。」

彼女が微笑みながら手に持った袋を脇に置いた。

．．．ゲーム？ ああ、今日買ったゲームのことだろう。

周りを見渡すと、今いる場所は公園のようだった。

どことなく見覚えのある公園だ。

俺はベンチに横たわっている。

．．．えーと、今日何があつたんだっけ。

すごく密度の濃い一日だった気がするが・・・  
俺は今日の出来事を思い出そうとする・・・

そういえば、あの不良達はどうしたのだろうか。

・・・不良？

・・・

・・・

俺は、ガバつと置き上がる。

「あ、あ、あの不良達は!? つか、大丈夫!? 俺、あの時、突き飛ばされて・・・、つか、え? もしかして事後!？」

「ハア? 何言っているの。あんなやつら、もう追っ払ったわよ。ていうか、頭は大丈夫なの?」

「え? 何もされてない?」

「当たり前でしょ。ていうか、頭は大丈夫なの?」

「はああああ、良かったああああ・・・」

「ねえ、頭は大丈夫なの?」

しきりに頭が大丈夫か聞いてくる失礼な女の子だが、せっかく仲良くなった女の子が、速攻で不良に捕らわれて、まいっちなぐなことをされるなんて、多感な高校生の俺には、一生もののトラウマになるだろう。

「まあ、それだけ元気なら大丈夫でしょ。それじゃ、今日は楽しかったわ。いろいろありがとうね!」

「え? 帰るの?」

「そうよ。さつき、上の人から呼ばれたって言ったじゃない。じゃあね。」

上の人って上司だろうか。この子、社会人だったのか。  
彼女は立ち上がり、俺のもとを離れていく。

俺は、それを眺め・・・

「あのっ!!」

・・・気がつくと言張り上げていた。

彼女はビクツとして、こちらを振り返る。

そんな彼女の反応がとても愛おしく感じた。

「あのーできれば・・・また・・・会いたい・・・なあ、なんて・・・」

彼女は、ぽかーん、としたほうけ顔で俺を数秒眺めて、その後、少し困ったような顔をして返事を返してきた。

「次に会うのは、できればもつとずっと先だといいわね。」

・・・速攻で振られた。

まあ、当然だわな・・・あんな美人が、出会って数時間の引きこもりのオタク少年の相手をしてくれる訳が無いわな・・・

「じゃあね。」

彼女は手をひらひらさせながらその場を去っていく。

・・・と、途中で、彼女が、はたと何かに気づき、振り返ってこちらに手をかざす。

そして、何かをぶつぶつと囁いた。

ふっと、彼女の手のひらが淡く光ったような気がした。

そして、彼女は満足気な表情をした後、再度歩き出した。

・・・  
・・・  
・・・

彼女の姿が見えなくなった。

なんだか、異世界で大冒険でもしたような一日だったな。

ジャージに残った淡い彼女の香りが、一人であることを実感させる。

残された俺が何気なく、足元に目をやると、そこには四葉のクロールバーが生えていた。

仲良く並んだ四つの葉っぱ。

そして俺は、

「・・・送っていくって、言えば良かったな。」  
とか独り言をつぶやくのだった。

【アクア視点】

私が帰ろうとすると、彼が声をかけてくれた。

「あのーできれば・・・また・・・会いたい・・・なあ、なんて・・・」  
どうやら彼はまた私と遊びたいようだ。私としてもまた下界に遊びに降りるのはやぶさかでない。だが、彼が気絶している間、創造主様から、エリスに仕事を丸投げしたことについて、いい加減にしろ、とお怒りの言葉をいただいでしまった。しばらくは謹慎だ。彼と次に会うのはきつと彼が死んだ時になるだろう。

「次に会うのは、できればもつとずっと先だといいわね。」

何年先になるかわからないけれど、もし、天界で彼を案内することになったら、誠意をもって対応しよう。

「じゃあね。」

それにしても、今日は一日楽しかったな。

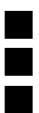
いつか、またこんなワクワクするような日が来るといいな。

そうだ、最後に私から彼に感謝の気持ちを贈ろう。

私は振り返り、彼に向かって手をかざして静かに唱える。

『『ブレッツシング』』

・・・彼の行く先に、あのゲームの仲間達のような素敵な人達との出会いが訪れますように！



「ただまー」

私は天界に戻ってきた。

「せんぱーい！ひどいですよー！私の担当世界がてんやわんやだった、天使から報告があつて大変だったんですから！」

エリスがプリプリ怒って私を待っていた。

「エリス、死者の案内、ありがとうね。何か変わったことはなかったかしら。」

「ええ。何人か私の世界に転生させておきましたから！もう！あとはご自分でお願いしますね。次の死者はこの御剣さんという方です。」

そういつて私に死者の情報が記載された書類を渡してよこした。

「ごめんごめん、おかげで下界でちよつと面白い男の子と出会ったの。」

「面白い子？」

「ええ。これがとんでもない引きこもりのゲームオタクなのだけけど、なんだかんだで色々と助けられたわ。なんだか一緒にいて随分居心地のいい子だったわね。」

「へえ、なんてお名前なんですか？」

「・・・名前？」

「・・・」

そういえば、脳内で彼のことをずっとヒキニート呼ばわりしていたせいですっかり忘れてしまった。

「・・・じゃあ、容姿はどんな方でした？」

「エリス、男性の話をするときに、いきなり容姿に食いついてはダメよ。とんだ面食いだと思われてしまうわ。男はね、顔じゃないの。中身の。あなたがとんでもないダメンスに引っかかる姿を私は見たくないの。」

「・・・」

容姿もこれといった特徴がない。ちよつと冴えない感じでもどこにでもいそうな子だった。故に記憶にとどめておくのが困難だ。実際、女神様である私の記憶力をもってしても、すでに彼の顔にもやががかってる。

「全く・・・、それで先輩は目的のものを手に入れられたんですか？」  
エリスはそう言うと、少し顔を赤らめ、上目遣いでチラチラとこちらを見てくる。

「目的のもの？」

はて、なんのことだろう。

そんなに赤い顔でチラチラ見られても私にそっちの気は無いのだけれども。

「・・・もういいです。」

エリスはガクツと肩を落として言った。

「では、私は担当世界に戻るの、次の死者の方、お願いしますね。」

「わかったわよ。マツリギさんから案内すればいいのね。」

「カツラギさんです！・・・あれ？」

エリスは、カツルギ？ミツラギ？などと首をひねりながらその場をあとにした。



数カ月後・・・

私は天界で代わり映え無い日々を送っていた。

その日も、これから案内する死者の情報が載る書類に目を通していった。

「死者の名前が・・・佐藤和真・・・？どこかで聞いたような名前ね。あれえー？この写真の顔とジャージどこかで・・・まあ、それもそうか。どこにでもいるような名前に顔だしね。ジャージの人も結構来るしね。」

ちらりと死因の欄に目をやる。

「何この珍しい死に方!?女の子を突き飛ばし、トラックに轢かれたと勘違いしてトラックターの前でショック死!?ヤバい、超ウケるんですけど！プークスクス！」

私は佐藤和真の経歴に簡単に目を通す。

まあ、どれだけ面白い死に方をした人だとしても、案内の間だけの関係だ。

そう思うと、この仕事のなんて淡白で寂しいものか。

そんなことを考えながら、私は佐藤和真の待つ部屋へと足を踏み入れた。



今回も、いつも通りにやるだけだ。

・・・と、その時はそう思っていた。

しかし・・・

「佐藤和真さん」

この出会いが、

「ようこそ死後の世界へ」

ある世界を大きく変えるきっかけとなり、

「あなたはつい先ほど、不幸にも亡くなりました」

ポンコツで愛おしい仲間達との、

「短い人生でしたが」

素晴らしい物語の始まりだったと気付くのは、

「あなたは死んだのです」

もう少しあとになるのだった。



## 第2章 めぐみん編

### 第7話 かけがえのない日常

【めぐみん視点】

私の目の前に仮面の悪魔が立っている。

「覚悟はよいな、紅魔の娘よ。ここには、あの薄汚い女神もいない。蘇生は不可能だ。」

悪魔が言い放つ。

傍らにいるゆんゆんが泣きながら言う。

「やめて……めぐみんを殺さないで……」

……

私はそんなゆんゆんに笑い顔を作って見せる。

そして、

「抵抗はしません。ひと思いにやっってください。」

悪魔に向けて言う。

「ふむ。その度胸や良し。では、さらばだ。」

次の瞬間、ザンツという音とともに首に激痛が走る。

視界に広がる世界がゆっくりと回っている。

私の首が宙を舞ったのだ。

私の目に映る絶望的な世界は暗転していつて、急速に意識が闇に飲まれていく……



時は二週間前までさかのぼる。

【めぐみん視点】

我が名はめぐみん、アクセル随一の魔法使い。アークウィザードにして爆裂魔法をいつか極めし者。

普段、だいたい爆裂魔法のことしか頭にない私だったが、今、爆裂魔法以上に私を惹きつけて止まない存在がいる。

そう、私の目の前にいる彼、サトウカズマだ。

それは昼食のひととき。

珍しくダクネスが食事当番をやると言い出し、彼女が食事を準備していた。

「おいーララティーンお嬢様!!お前、俺の料理、塩と砂糖間違ってるぞ!!」

カズマの声が食事の席に響く。

ちなみに私の料理に間違いはない。

「む、やっと気づいたか。テヘペロ。」

「・・・何それ。」

「何って、お前が言ったではないか。女の子が失敗しちゃって、てへつと笑い、ペろつと舌を出すのが可愛いんだよ、一度俺も女の子のテヘペロを間近で眺めてみたいでござるう、と。」

「・・・」

それからカズマとダクネスは取っ組み合いの喧嘩になる。

最近、ダクネスは喧嘩からのボディータッチを狙う作戦に出ているようだ。マジで痴女だ。

「このペロティーナ!!!構って欲しいならそう言えばいいのに、いつも周りにくどい方法とりやがって、そんなだから肝心な時にさっぱり役に立たないんだ!!ハーレム構成員3号のくせに、調子に乗りやがって!」

「んなあつ!!!」

と、ダクネスが真っ赤になって大声で叫ぶ。

「本つつつ当に頭にきた。本当にぶっ殺してやる。」

「お、おい、ダクネス・・・なに剣を取り出してるんだよ・・・それで斬られたら本当に死んじゃう!!!」

「大丈夫だ、私の命中率はお前も知っているだろう。なあに、お前の幸運値なら間違ってもあたりはしないだろう。」

ダクネスは不敵な笑みを浮かべてカズマに詰め寄る。

後ろでアクアがすかさず口を挟む。

「女神様をハーレムに加えようなんておこがましいにも程があるわ。ダクネスが私に代わって神罰を下してくれるでしょうから、身をもつて後悔することね!」

「え?いや、お前が構成員とかお呼びじゃないから。3号までの中にお前は入っていないから。」

アクアがダクネスに言う。

「ダクネス、支援は私に任せて頂戴!とりあえず筋力増加ね!バインドで絡め取られてもすぐに解呪してあげるわ!ぶっ殺しちゃってもリザレクションがあるし、遠慮なくぶっ殺しちゃいなさい。」

「おい聖職者!何血迷ってるんだ!!お前、ペロティーナを止めろよ!!」  
そう叫びながら、カズマはペロティーナに追いかけてられて屋敷の奥へと駆けていった。

残った私とアクアは、

「アクア、食器を片付けたら爆裂に行きたいのですが、付き合ってくださいませんか。」

「いいわよ、めぐみん。カズマラティーナも私たちが戻ってくる頃には落ち着いてるでしょう。そうだ！この前、珍しい花の咲く花壇を見つけたの！寄って乙女力を蓄えていきましよう！」

などと、平和な会話をしつつ出かけることになったのだった。

## 第8話 タイムマシン

アクセルの街をでて、いつもの爆裂スポットへと向かう。

「・・・それですね、最近はずまの提案で、合体技なるものを考えています。」

「めぐみん！ついにカズマの毒牙にかかってしまったのね！ああ、私がつとつっかり見張ってあげていれば・・・それで、どこまでの合体技を試したの？ 駅弁？ つばめ返し？ ちんぐり騎乗？」

「違います。」

全く乙女力はどこに行ってしまったのか。

レベルの高い事を言い出した頭の中がピンクなプリーストを制して話の続きをする。

「私の奥義、爆裂魔法とカズマのスキルで何か有用な合わせ技はないかをいろいろ試してみているんですよ。」

「ふーん、何かいい組み合わせは見つかったの？」

「教えていえば、クリエイト爆裂アースでしょうか。」

「・・・何それ？」

「爆裂魔法の爆風でクリエイトアースの目潰しの飛距離を結構伸ばせます。」

「・・・」

アクアが口をHの形にして私に目を向ける。

「アクアとなら・・・ターン爆裂アンデットか、リザレクエクスプロージョン、あ、花鳥爆裂風月なんてどうでしょう。」

「めぐみん、なんで爆裂魔法をサンドイッチしたがるの？ 意外にめぐみんは、二人になると如実にポンコツ具合が現れると思うの。」

などと、アクアが失礼なことを言ってきたので、顔をふいと背けた。

と、視線のその先、妙な洞窟が目に入る。

「あれ？あの洞窟は何でしょうか。」

「あら、本当。っていうか、洞窟の手前が妙なかたちで、えぐれてるんですけど。」

「もしかして、この前、爆裂魔法を使ったことで掘り起こしてしまったのかもしれないね。」

「お宝があるかも！入ってみましょう！」

アクアが目を輝かせて言った。

ちようど私も洞窟探索を提案する所だった。



洞窟の中は、私たちの屋敷の居間くらいの広さだった。踏み荒らされた形跡は無い。

「あ、あれは何でしょうか。」

洞窟の奥に人が4人くらいの中に入れてそうな箱型の物体を見つけてアクアに声をかけた。

車輪が4つ付いている。

「あれは・・・自動車かしら。」

「自動車？」

その単語に聞き覚えはないが、変形とかしそうで、かっこいい。紅魔の血が騒いでいる気がする。

私の疑問符にアクアが答えをくれる。

「そうよ。中に入り込んで操作することで馬車のように高速で移動ができるというものよ。でも、何でこんなところに自動車が置いてあるのかしら。」

どうやら、中に入って使うものようだ。アクアはたまに驚く博識ぶりを発揮することがあるので侮れない。

それにしても・・・

「カッコいいですね・・・どうやって乗り込むんですか？」

側面を杖でごんごんやってみるが、自動車はピクリとも動かない。そこで、アクアが説明してくれる。

「そこに取っ手があるでしょ。それを引くとドアが開くはずよ。私も助手席乗ろつと！」

そういつて、アクアが私の反対側に回って、ドアを開いて中に乗り込んだ。

アクアがやったことを真似するとドアが、ぱかっとな開いた。カッコいい。

中に乗り込むと、手前にドーナツ形状の筒がついており、手の届く範囲にいろいろボタン、足の先にはペダルがついている。すごくカッコいい。

アクアが隣で自動車の中をあれこれいじりながらいう。

「これ動かしたら、移動がすごく楽そうね。そうだ、あの変態仮面に言っただけで売り出してひとやま築けないかしら。」

その言い方だと、何となく頭に女性ものパンツをかぶってるイメージだが、仮面の悪魔、バニルのことだろう。

「あのね、めぐみん……って、何つけてるの？」「え？」

何って、眼帯ですが。

テンションが昂ると、意味なくつけたり外したくなるのですが。

「運転する時にそんなのつけちゃダメよ。ダメ絶対。危ないのだから。」

私は渋々眼帯を外してアクアに聞く。

「それで、アクアは何を言おうとしたのですか。」

「そうよ。めぐみん、自動車に乗るときはね、シートベルトを締めなければならぬの！法律でそう決まっているのよ。」

と、法律という言葉に最も縁のなさそうなアクシズ教のプリーストは、そういつて私にシートベルトなるものをつけてくれた。

肩口から腰のあたりまで、斜めに伸ばして、ガシャッと固定する。絶対にカッコいい。

私は調子に乗って、ドーナツを回してみたり、運転席の周りのボタ

ンをポチポチ押ししてみたりする。

「なにこれ。」

アクアが何か見つけたようだ。私もアクアの手元を覗き込む。

「手記でしようか。かなり古いですね。」

「えーつと・・・。」

アクアはその手記を開いて読み始める。



『――○月×日 大国ノイズに来てから俺はこの国に多大な貢献をしてきた。俺の能力でノイズは繁栄を極め、魔王軍への対抗策も着々と積み上がっていった。しかし、ここに来て俺の研究は行き詰まりを迎えた。』

この自動車を作った者の日記だろうか。ノイズといえばデストロイヤーを作ったとされる国だ。その研究者が書いたものらしい。

『――○月×日 どうしても研究が先へと進まない。俺には悔やんでも悔やみきれない過去があった。過去の過ちに今更ながら苛まれているのだ。こみ上げる悔しさに夜も眠れず昼寝を繰り返して、女研究者に蹴り起こされる日々。もう、この女なんなの？暴力系ヒロインなの？俺のこと好きなの？』

同情するべきかどうか悩ましいところだけでも、一応、研究者の苦難が感じられる。

『――○月×日 その日、俺は女研究者の一撃を喰らった瞬間ひらめいた。そうだ、タイムマシンを作ろう。それで過去の過ちをやり直すのだ。そう、あの時見逃してしまったパンチラを拝むために！いざ逝かん！バックトゥーザフューチャー!!いや、フューチャーじゃありませんけれどもね。』



引っ張りに引っ張って過去の過ちってこれですか……何というガツカリ感。バニルあたりが好みそうな悪感情が湧いてくる。

アクアも、散々盛り上げておきながらオチで滑った素人芸人を見るような、うわーやっちゃまったなあ、という表情になっている。

『——○月×日 タイムマシンを作りながら気がついた。あれ？　そういや、これ、日本に行けるの？俺、日本から来たんだから日本に行けなきゃダメじゃん。急遽、日本に行ける仕様に作り変える。戻ってくる時には『戻る』ボタンを押すだけで戻れるようなお手軽仕様にしておく。』

ニホンという地名は聞いたことがある。屋敷の幽霊騒動の時にカズマが言っていた。確か、トイレの前で歌う習慣のある国で、カズマの故郷だ。

このタイムマシンはニホン行きのようにだ。

『——○月×日 タイムマシンに乗って過去に行った。はずだった。いや、行ったのだろう。タイムマシンを起動させた記憶はある。しかし、次の瞬間には、もといた世界だ。なんてこつたい。過去に行った記憶は全て消えてしまう仕様のようだ。それじゃあパンチラ見れても覚えてないんじゃない。タイムマシン作った意味ねえじゃんかよ。まじフアック。』

どうやら記憶が消えるらしい。

「記憶が消去されるなんて、欠陥もいとこね。これが小説なら、つじつま合わせに最適じゃない。まるで作者に都合のよく書かれた二次創作のようだよ。」

アクアはよくわからないツツコミを入れている。

『——○月×日 っていうかー、この世界って日本と違って戦士職の姉ちゃんがいつもパンツ晒して歩いているような恰好してんじゃない。よく考えたら、わざわざパンツ見るために日本行く意味ねえわ。もうタイムマシンとかどうでもいいや。でも壊すのも勿体ない

し、適当な洞窟に隠しておこ。』

「……終わり。」

「……………」

なんだか無性に腹立たしい手記だ。

……と、タイムマシンらしいその自動車が、突然キューンとか妙な音を立てて動き出した。

「え？何これ？なんかマズいわ！めぐみん！出るのよ！ほら早く！」  
そういつて、アクアはタイムマシンから外へと飛び出した。

アクアが飛び出すと同時に、タイムマシンは宙に浮かび上がる。

「あ、アクア！ちよつとまって！このベルトが……とれな……」

「めぐみん!!!」

そして、タイムマシンは私を乗せたまま洞窟の天井を穿ち、空に飛び出す。

空を飛んで移動するなら車輪のついていない意味が全くないじゃないか!!

ガタガタと揺れるタイムマシンの中、私は必死にドーナツにしがみついた。

「めぐみ……………」

地上からアクアの声が聞こえる。

間もなくタイムマシンから見える景色が白一色に染まって……

## 第9話 過去の日本で

気付くと私が乗っていたタイムマシンは静止していた。

「……うう。何なんですか一体。」

窓の外には、木々や青い空が見える。

私は、シートベルトをなんとか外してタイムマシンの外に出た。

そこは、小高い岡のようなどころだった。周りにひと目は無い。

そして、眼下には、石造りの高い建物が地平線の奥まで続いていた。今までに見たことのない作りの街だった。

「ここは一体……」

いや、タイムマシンが機動したということは過去に移動したのだから。

しかも、あの手記の通りならばここは……

「……ここが、カズマが過ごした国……」

私は、湧き上がる興味に抗えず、タイムマシンをその場に残し、街の方に向けて歩き出した。



建物の立ち並ぶところまでやってきた。

建物は高く、とても頑丈そうな作りだ。所々、文字のようなもの何か書かれている。が、なんと書いているかさっぱりわからない。

道行く人は誰も見たことのない小綺麗な服を着ている。

私のような魔法使いのローブを羽織り、三角帽子を被って杖をもつ人はいない。

杖どころか剣や槍、弓を持つ人も一人もない。  
冒険者っぽい人がいないのだ。

これで魔物の襲来にどう対処するのだろうか。

みんな防御力の低そうな服を来て、手には杖や剣でなく、冒険者カードくらいの大きさの謎の板をもって指でシュツシュとやっている。

この世界の冒険者カードだろうか。なんかカッコいい。

周りの人は私に妙な視線を向けてくる。どうやら私の格好が珍しいようだ。

何だか私だけ浮いているような気分だ。

ズレているような気分だ。

ゆんゆんな気分だ。

それでも私は、物珍しい光景に目を奪われ、キョロキョロと周りを見ながら道をゆく。

タイムマシンと同じ形をした道を走る無数の自動車、

目の前に立つと自動で左右に開く透明なドア、

一定の感覚で緑と赤とそれぞれ点灯する不思議な箱、

なんてカッコいいもので溢れかえっているのだろうか。



「……これは何でしょうか。」

目の前には、屋敷のテーブル程の大きさの黒い板。

ちようど、テーブルの面を横長に立てた感じだ。

「中に人がいるのですが……」

板の中で人が動いているのが見える。

「文字も浮かび上がっているのですが……」

その板には時に文字が自動で浮かび上がっては消える。

「いや、なんかピーンとききそうですよ……紅魔族随一の天才的に……」

この魔道具は・・・」

テレポート装置・・・!!!

そう、行きたい場所が表示された瞬間に板に入れば、その場所にテレポートできるといふものだ！

「なるほどなるほど、ちよつと試してみますか・・・」

私は、恐る恐る、板に向けて手を伸ばして・・・

コン☆

「・・・」

コン☆

コン☆

コン☆

「・・・」

何なんですか、全然テレポートできないじゃないですか。

私は板に向かって両手を伸ばして魔力を込めてみる。

「はあああああ・・・!!」

たつぷり10分くらい魔力を込めてみた。

こつちを見ながらヒソヒソする人が多かつた気がする。

たまにカシヤツとか聞こえてきたのは何だろう。

まあ、いいか。

「さて・・・それでは・・・」

コン☆

「・・・」

コン☆

コン☆

コン☆  
コン☆

「……………」



そろそろ歩き疲れて、帰ろうかな、と考えていた時だった。

……目に入った。

外まで聞こえる物凄い音の響く賑やかでやたらキラキラした建物の中から、姿を現したその男性が。

カズマだ。

私がカズマを見間違う訳が無い。

少し顔は幼いが、確かに彼はカズマだ。

カズマは私のいる方とは反対側に向かって歩いていく。

「カズマ……カズ……カズ……」

と、あとを追いかけてかけようとする私の足が止まる。

黒いロングのストレートの髪をした胸のそこそこ大きめで、大人な雰囲気的美女が彼を追いかけて、そして彼の隣を歩く。

「……………」

とても仲良さそうに歩く彼らの姿を見て、私は言葉を失う。

そう言えば、カズマに好みの女の子のことを聞いたことがあった。

確か、髪がロングでストレート、胸が大きくてカズマを甘やかしてくれる子……。

……………

・・・いや、ここにいるカズマは過去のカズマ。  
今のカズマとは何の関係も無い。

そう言い聞かせ、胸の締め付けられる感覚を、握りこぶしを作って胸をドンドン叩くことで紛らわす。

私は、その場で深呼吸すると、彼らの後を追った。

■■■

彼らは服屋に入っていた。私も後を追うように服屋に入る。今まで見たこともない綺麗な服屋だった。

「カズマの国の服屋はとても清潔なのですね・・・」

普段、服装などほとんど気にならない私だが、着古された自分のローブ姿を見下ろし、何だか惨めな気がしてくる。帰ったら少しおしやれな服でも買おう。

カズマと例の美女は、服が沢山積んである棚を見て、イチヤイチヤと何か話している。

私は棚の影に隠れながらそれを眺める。

店員らしき人物に、何やってんだこいつ？みたいな目を向けられる。

なんだかだんだんイライラしてきた。

と、そこでカズマが手にとった服を見て私は、つい「あ・・・」と声を漏らしてしまった。

あれはカズマがいつも屋敷で着ているジャージだ。

「あの子が選んであげたものだったのですね・・・」

何だかさつきからシヨックなことが続く。カズマがよく言うメシマズ状態だ。

カズマはジャージを持ってカウンターに向かう。

カズマにちよろちよろついてまわっていた美女は、女性服らしきものが並ぶエリアに歩いていく。

・・・カズマに話しかけるなら今だ。  
私は意を決してカズマに近づく。



「カ、カズマ・・・」

会計が終わったタイミングを狙い、声をかけた。  
が、ろくに話すことも考えておらず続く言葉を失う。  
カズマは驚いたような顔をして私の方を見る。

カズマだ。

・・・やっぱり少し幼い。

今のカズマは、強敵と戦って、いくらか顔が凛々しくなったのかも  
しれない。

私は目の前のカズマの顔を見て、ろくに続ける言葉もなく惚ける。

×

×するとカズマが口を開いた。

×

「？」

「え？」

×聞いたことの無い言語だった。何を言っているかさっぱりわから  
ない。

「カズマ、私の言うことがわかります？」

と聞くと、カズマは顔をしかめる。どうやら通じていないようだ。

「そ・・・そうですか。」

無性にカズマが遠い存在に感じて悲しい気持ちになる。

「・・・すみません。人違いでした・・・」

言葉が通じていないにもかかわらず、私は言い訳をしつつ、走って  
その場から逃げ出した。



## 第10話 ターニングポイント

私は公園のベンチに一人で座っている。  
日もそろそろ暮れようとしていた。

「……何をやっているのでしょうか、私は。」

偶然出会った過去のカズマの姿にときめいて声をかけようとしたら、

物凄い美人と仲良くする姿を見せつけられて、  
カズマが大事にするジャージの来歴を知って、  
やつとの思いで声をかけたら言葉が通じなくて、  
挙げ句の果てにカズマの前から唐突に逃げてきてしまった。

「……はあ。」

思えば過去のカズマに声をかける必要なんてないんだ。

このままタイムマシンで帰ってしまったても何も問題は無いのだから。

「……でも、あんなカッコ悪い逃げ帰りなんて許されませんよね。  
紅魔族的に。」

×× 私がひとりであれこれ悩んでいると、

×× と、女性の声が聞こえ、ふと、顔を上げる。

×× カズマと一緒にいた美女だ。

カズマのジャージを着ている。

ぎゅっ、とまた胸が締め付けられる。

私はダクネスじゃないのでこんなNTRプレイは勘弁願いたい。

いや、彼女でも無いのにNTRもないか。

と、背中にカズマをおぶっていることに気がつく。

カズマは・・・寝ているのだろうか。

「その、カズマはどうしたのですか？」

あ、言葉が通じないのか・・・

そう思っていたが、

彼女はビククリした表情をして、

「あ、あなたエリスのところの子!?なんでここに!?!」

なんと、私の知っている言語を発した。

私は突然のことに唾然となる。

その美女は、間違つて転生させちゃった・・・?、とか訳の分からないことをぶつぶつと言っていたが、間もなく考えるのをやめたように私に話しかけてきた。

「こんなところで、そんな魔法使いのコスプレなんかしてたら、頭のおかしい子と思われるわよ。」

「おい、ニホンにまで来たのに、その呼び方で私を呼ぶのはやめてもらおう。」

まさか、ここでもその通り名で呼ばれるとは思わなかった。真剣に自分のことについて考えてしまう。

「まあいいわ。このヒキニートを横にしてあげたいのよ。少しベンチを空けてもらえないかしら。」

私は、慌てて立ち上がり、その美女に声をかける。

「カズマが・・・どうかしたのですか?」

彼女は気を失っているカズマをベンチに下ろしながら言う。

「カズマ?おお、そう言えば、この子、カズマって名前だったわね!」

・・・名前も知らない相手とあんなに仲良くしていたのだろうか。

「あの、貴方とカズマは・・・その・・・恋人か何かなのでしょうか・・・」

「へ?全然違うけど?」

彼女はほうけ顔になる。しらばくれているようにも見えない。

・・・彼女とカズマは特別な関係という訳ではない。

そう思うとだんだん冷静になってくる。

そういえば、なぜカズマに通じなかった言葉が彼女には通じるのだろうか。

思えば、この美女は、私と一緒に暮らす彼女によく似ている。

と、いかヒキニートなんて言葉を使うのは彼女しかいない。

「!!!」  
「!!!」  
「!!!」

美女は、目玉が飛び出してしまうのではないかってほど驚き顔になり  
こちらを見た。

「あ、あ、アナタ何を言ってしまったのですか？ワタクシがあんな  
清く気高くも美しい水の女神様なんて、恐れ多いにもほどがあります  
わよ？」

絶対にアクアだ。

というかアクアがなぜここにいるのだろうか。

私は問うてみる。

「アクアもタイムマシンでこの国に来たのですか？」

「は？タイムマシン？」

どうやらタイムマシンのことを知らないらしい。私のことも知らないようだし、目の前にいるアクアは過去のカズマと同じく過去のアクアなのだろう。アクアとカズマは二ホンにいた頃から知り合いだったのか。

改めて、話を戻そう。

「私はいろいろ事情があつてアクアのことを知っています。」

「ふーん・・・」

「それで、カズマなのですが、何かあつたのですか？」

「この子、不良に殴られちゃって気を失っているのよ。一応回復魔法もかけたし、命に別状はないけど、どこかで寝かせてあげられないかと思つて、この公園まで来たのよ。」

「そうなのですか。この頃はカズマもまだ弱かつたのですね。・・・い

や、今もそんなに強くはないですね。」

「へ？」

アクアの頭にクエスチョンマークが浮かぶ。  
が、すぐハツとした表情になり私に話します。

「アナタ、この子の知り合いなんでしょ？ 悪いんだけど、この子の面倒を見てあげてくれないかしら。大丈夫！ この子、ヘタレだから身の安全は保証するわ。私、ちよつと上の人から呼び出し喰らっていて早く帰らなきゃならないのよね。」

カズマがヘタレなのは私も身をもつて知っている。

「ほら、早くベンチに腰掛けて！」

といって、アクアは私の返事を待たずに促す。

まあ、私としてもカズマのことが心配だから面倒を見るはやぶさかでない。

私がベンチに腰掛けると、アクアは私の膝を枕にするようにカズマを寝かせた。

「あと、これも渡しておいてあげて。」

といって、持っていた袋を私に差し出し、着ていたジャージを脱いでたたみ、これも私に寄越す。

アクアはそそくさとその場を立ち去ろうとしていたが、私はどうしても気になることがあったので聞いてみる。

「アクア、ちよつと聞きたいことがあるのですが。」

「ん？ 何？」

「この男のこと、どう思っているのですか？」

私はアクアに問う。アクアはぽかーんという表情を浮かべる。

私は少し緊張して答えを待つ。

「一緒にいて居心地のいい子ね。」

私の胸が少しだけキュツとなる。

けれども、これまでの痛みとは違ったなんだか心地よい痛みだった。

・・・私にはダクネスのようにNTR趣味は無いのだが・・・

「あ、その格好、目立ちすぎるからちゃんとした服を着たほうがいいわよ。」

確かにニホンではゆんゆんのように浮いているが、これは私の一張羅なのだ。

私は頬を膨らます。

「それじゃあね。」

アクアは手をひらひらとさせてその場を去っていった。



なぜ、太ももを枕にしてるのに太もも枕でなく膝枕というのだろうか。

どうでもよいことを考えつつ、私は太ももの上の気を失っているカズマを見下ろす。

やっぱり少し幼い。

初めてあつた時のカズマの顔に近い。

私はカズマの髪を少し撫でる。

「・・・カズマ」

彼の名前を読んでみる。

自然と顔がにやけてしまう。

・・・そういえば、アクアから受け取ったこの袋の中のものは何なのでしょう。

ベンチの上にジャージとともに置かれたそれが袋の口越しに中のものが目に入る。

『この素晴らしい世界に祝福を！』

ニホンの言葉で読めないが、おそらくカズマの大切なものなのだろう。



「つつ．．．」

と、カズマのまぶたがゆっくりと開かれる。

まずい、カズマの無防備な顔に見惚れて彼にかける言葉を考えていなかった。

私は途端に焦り始める。

×カズマが私の顔を見上げ．．．目が合った。

×鼓動が高鳴る。

×カズマは口を開く。

×「．．．．．」

×まあ、そうですね。

×カズマは、頭を起こして周りをキョロキョロと見て、  
×「アクアを探しているのだろうか。」  
×と続ける。

「彼女は、呼ばれたとかで帰りましたよ。これはカズマのものなのでしょう。これを預かっています。」

×「といって私はアクアから預かっていたジャージと袋を差し出した。  
カズマはこれを受け取って、×、と言葉を告げる。」

×「おそらく、ありがとう、と言っているのだろう。多分。」

「そうだ、カズマ．．．」

私は、言葉が通じないにもかかわらず聞いてしまう。

「~~×~~ホンでの暮らしは楽しいですか？どうして私たちのいる国に来たの~~×~~ですか？こっちの国に大事な人がいるのではないのですか？」

「私の問いにカズマは応える。」

「~~×~~」

「~~×~~会話は全く噛み合っていないだろう。」

「~~×~~」

「~~×~~カズマと話がしたい。」

「~~×~~そう思うと、途端に元の世界に焦られる。」

「~~×~~そういえば、ニホンで結構な時間を過ごしてしまったが、元の世界はどうなっているのだろうか。」

「~~×~~カズマ、私は貴方のもとに帰りますね。」

「~~×~~そう言っつて、カズマに笑いかけ、私は立ち上がる。」

「~~×~~」

「~~×~~とカズマは言う。」

「~~×~~カズマ、何を言っているのか、わかりませんよ。」

「~~×~~私は苦笑する。」

少し歩いて、ある思いが湧いてくる。彼の心に私と会った記憶を刻んでおきたい。

私のことを覚えてもらえるように、インパクトのある去り方で：

私は羽織っていたマントをバサツと翻し、ポーズを決めてセリフを吐く。

「我が名はめぐみん!!!アークウイザードを生業とし、最強の攻撃魔法、爆裂魔法を操る者!!!」

カズマが啞然とした表情で私を見ている。

「カズマ、未来で待っています。」

私は、そう言っつて三角帽子で目を隠し、横顔でフツと笑いかける。そして、タイムマシンのもとへと駆け出した。

## 第11話 そこは・・・

カズマと別れた後、私はタイムマシンのある丘まで戻り、タイムマシンを起動させて過去のニホンから現代の元いた洞窟までもどってきた。

『戻る』ボタンを押すだけだったので、自動車の操作ができない私でも余裕で戻ることが出来た。

しかし、移動中は激しい揺れで体が打ち付けられる。

「いたた・・・全く。もう少し揺れを抑える設計にできなかったのでしょうか・・・」

そう呟くと同時に、タイムマシンが『可動限界に達しました』というアナウンスを発し、ボンツという音と共に煙を立てて動かなくなる。

私はタイムマシンのドアを開けて外に出た。

「・・・えーと、確か私は、この洞窟でタイムマシンに乗って空を飛んで・・・」

・・・

「・・・あれ？そのあとどうなったのでしょうか。」

全く記憶がない。

そういえば記憶が失われる仕様だ、などとあのフザけた手記を読むアクアが言っていた気がする。本当にボンコツだ。

私はニホンの地を踏むことができたのだろうか。

「まあ、無事に戻って来れたのでよしとしますか。」

なんだか知らんが、とにかくよしだ。

私は深いことは考えないようにして、一緒に洞窟に来ていたアクアに声をかけることにする。

「アクアー！戻りましたよー！」

・・・



.....

アクアを呼ぶが返事がない。どこか近くの散策にでも行ったのだろうか。

と、いうか、私はどれくらいの間二ホンに行っていたのだろうか。戻るのが遅くなったのであれば、アクア一人で先に帰ってしまったのかもしれない。

少し周りを探してみよう。

そう思つて、洞窟の周辺でアクアの姿を探そうとするが・・・

「あれ？周辺の地形、変わってませんか?？」

木々が所々倒壊して随分と荒れている。

「な、なんでしよう。そんなに長い時間二ホンにいたということでしょうか・・・」

言いようのない不安が私を襲ってくる。

いや、多分、そのうちアクアが、神レベルのドッキリ宴会芸でしたー  
どうどう?、とか言つて出てくるに違いない。うん。

「・・・とりあえず、アクアを少し待ちますか。」

洞窟の壁によしかかり、杖で地面にちよむすけやカズマの似顔絵を描いて不安を紛らわせつつ、アクアを待つことにした。

.....  
.....  
.....

・・・待てども待てどもアクアが洞窟に戻る気配は無い。

不安はどんどん増していく。

地面の絵はもう身近な人のネタが切れ、1人〇×ゲームなどをやりだしていた。完全にゆんゆんだ。

「・・・どうやらアクアは一人で帰ってしまったようですね・・・私も帰りますか。」

私は屋敷に戻ることにした。



「なん・・・ですか・・・これは。」

アクセルの街の景色は一変していた。

街を囲う壁が破壊され、家々は倒壊し、がれきで溢れかえり、人の顔には覇気が無い。

一面スラム街のようになっていた。

私がああのタイムマシンで二ホンに行っていた間に何が起きたのだろうか。

「そ・・・そうだ、カズマは？ダクネスは？アクアは？」

嫌な予感がして私は屋敷に早足で向かう。



「・・・あれ？」

屋敷に戻った私はすぐさま異変に気がついた。

屋敷の前に妙な立札が立ててあったのだ。

そこには、『売出中』との表記があり、不動産屋への連絡先が記されていた。

私は急いで屋敷の扉を開けようとするも鍵がかかっている。扉が開かない。

そういえば、鍵はアクアが持っていたのだった。

私の帰宅を知らせるべく扉をドンドン叩く。

「カズマ、ダクネス、戻りましたよー、鍵を開けてください。なん

ですか外の立札は。またどんな遊びを思いついたのですかー?」

叫ぶが一向に扉の開く気配がない。

「ちよつと!!悪い冗談はよしてください!開けてくれないと、爆裂魔法で新しい出入り口を作ることになりますよ!!!」

声を張り上げるが返事は返って来なかった。

「ぞ、そうですーきつとみんなでクエストに行ったにちがいありません!ギルドに行けば・・・」

言いようの無い不安が押し寄せる。

・・・思えば過去から戻ってきてから何かがおかしい気がする。  
なにか過去で取り返しのつかないことを・・・。  
いや、まだそうと決まったわけじゃない。

気が付けば私はギルドに向けて全力で駆け出していた。



「ハア・・・ハア・・・わ、私のパーティーは!!!? 私のパーティーがどこに行ったのか知りませんか!!!」

ギルドの受付のお姉さん、名前をルナと言っただろうか、彼女に対して、早口で回答を迫る。鬼気とした剣幕になっていたのだろう。彼女は、ヒツ、などと少し怯えている。

ギルドに来る間、倒壊した建物など街の景色が嫌でも目に入り、有り得ない現実を突きつけられ、心の中の楽観的な部分が失われつつあった。

「め、めぐみんさん!?どうしたんですか!?!」

「いいから!!!」

「ヒッ!!」

彼女は慌てて言葉を続ける。

「・・・パーティーと言いましても、その・・・めぐみんさんは、ソロでいろいろなパーティーに混じりながら活躍されていたのではないのでしょうか・・・」

「ソ・・・ソロ・・・?」

私は杖をカラン、と取り落とす。

取り落としたようだが、それに構っている余裕は無い。

「そんな訳ないじゃないですか!!! アクアは!? カズマは!? ダクネスは!?」

私の声がギルド中に響く。

私には完全に余裕が無くなっていた。

傍から見たらマジキチだ。

「ヒィ・・・!! あ、あの、ダクネスさんは、基本的にクリスさんという盗賊の方とパーティーを組まれています。たまに他の冒険者のパーティーにも混ざっているようですが・・・」

確かに、ダクネスは私たちと会う前、クリスとパーティーを組んでいたようだった。それは覚えている。

でも・・・

「じゃあ・・・」

声が震える。

全身から嫌な汗が吹き出す。

心臓が有り得ない強さで鼓動する。

「か、か、カズマとアクアは・・・」

ルナが眉をよせる。

「めぐみんさん……」

「カズマさんとアクアさんって、」

「どなたのことでしょうか？」

急速に血の気が引いていく。

頭が真っ白になっていく。

私を支える足の力がフツと無くなり、その場に崩れ落ちる。

そのまま、私は気を失った。

## 第12話 魔笛

「……うう。」

「お、気がついたか！めぐみん！」

「めぐみんが起きたの!？」

誰かが、私の名前を呼ぶ。

気がつくと私はベットの上で横になっていた。

私は声のする方を見る。

「全く！突然倒れたって聞いたから、心配したぞ。」

……カズマだ。

「めぐみん、どこか調子の悪いところはないか？」

ダクネスが心配そうな様子でこちらに顔を向ける。

「私の曇りなき眼によると、原因はあのヘンテコ悪魔ね！うちのめぐみんに酷いこととしてまったく！今度みんなでお礼参りにいきましよう！」

アクアもいつものアクアだ。

とても安心できるみんなの声。

「……とても、とても怖い夢をみました。」

そうだ。私は夢を見ていたのだ。

「カズマ達が私の前からいなくなっていて、このアクセルの街が廃墟のようになっていて……どうしよう、どうしようって……」

話しながら震えてくる。

「おい、大丈夫か、めぐみん？俺らはみんなここにいるから。」

カズマは震える私の手を握ってくれる。

温かい。

私は、握られた手をぎゅっと握り返す。

「そうだぞ。アクセルの街だって、今日も平和だ。めぐみん、外を見てみる。」

ダクネスが窓の方を指差す。

外を見るのが少し怖い。

廃墟が広がっていたらどうしよう。

私は上半身を起こして、恐る恐る窓の外を見た。

・・・外にはいつも通り、平和な街の風景が広がっていた。

緊張が解けていくのを感じる。

私は、ホッと息をついて、私の仲間達の方を向きなおす。

「・・・いったい、あの夢はなんだったのでしょうか・・・カズ・・・」  
「ん？めぐみん？どうしたの？」

「おい！めぐみん！顔が青いぞ！」

・・・私の手を握っていたのは、アクアだった。

「カ・・・カズマは？」

「カズマ？」

「おい、めぐみん、カズマとは誰のことだ？」

震えが戻ってくる。

「え・・・今、私の手をカズマが握ってくれていて・・・」

「めぐみん、カズマが誰のことかわからないけれども、アナタが震えていたから私が手を握ってあげたのよ。」

「そうだぞ、めぐみん、怖い夢を見て混乱しているのではないか。ついていてあげるから、しっかり休め。」

アクアとダクネスが優しく言ってくれるが、私は気が気でない。

「な、なんで・・・カズマ・・・カズマは・・・」

ぽろぽろと涙が溢れてくる。

「めぐみん、私たちがそばにいてあげるから。ほら。」  
アクアが私の頭をギュッと抱擁する。

「アクア・・・お願いですから、冗談を言わないでください！ダクネスも！」

「・・・め、めぐみん。」

私はアクアの抱擁を解いて2人に訴える。

「カズマを探しに行きましよう!!アクア!ダクネス・・・ス・・・」

「ダクネス?誰?」

アクアは眉をひそめる。

「ダクネスは・・・?今・・・そこにいたダクネスは?」

「めぐみん、ここにいたのは私1人じゃない。あ、屋敷の幽霊の子のいたずらね!今度叱りつけとくわ!」

「・・・う、嘘ですよね。」

「めぐみん、ほんとうに大丈夫!?ちよつと落ち着いて!そうだ!元気がでるように、今まで誰にも見せたことのない最強の宴会芸をめぐみんだけに見せてあげるわ!ちよつと準備してくるから待っててね!!!」

「ア、アクア!!!駄目!!お願い!行かないで!!!」

部屋を後にするアクアにすがる思いで手を伸ばす。

勢い余って、ベットから落ちた。

アクアはどたどたと部屋から姿を消す。

「行かないで!!アクア・・・!お願い・・・ダクネス・・・カズマ・・・」

その時、フツと窓の外から風が吹く。

私が窓の外に目を向けると、そこには廃墟となったアクセルの街が広がっていた・・・





「あああああああああ  
!!!」

「め、めぐみん!？」

「あああああああ  
!!!!」

「めぐみん!!落ち着いてめぐみん!!!」

「あああああ．．．ああ．．．あ．．．ゆ、ゆんゆん?」

気がつくと、ゆんゆんが私の肩を抱き、不安げな表情で私の顔を覗き込んでいた。

場所はどこかの宿。私はベットに寝かされていたようだ。

「もう!どうしたのよ、めぐみん。ギルドでもいきなり倒れたっていうし。」

「ゆんゆん．．．ゆんゆん．．．!!」

「何よ一体?．．．って、ええええええ?」

私はゆんゆんを抱きしめていた。

「い、行かないで!!どこにも行かないで!!!」

「めぐみん．．．」

ゆんゆんは私を抱き返して頭を撫でてくれる。

「普段とても強がりなめぐみんが、こんなに取り乱すなんて、きっと何かあったのね。」

「うう．．．みんな．．．なんで．．．」

ゆんゆんは私が泣き止むまで、ずっと抱きしめていてくれた。

普段憎らしい発育おっぱいも、この時ばかりはその柔らかさに安心  
を覚えた。

ゆんゆんが、私の前から姿を消すことは無かった。

## 第13話 彼らのいない場所①

ゆんゆんのおっばいでひとしきり泣き枯らして少し落ち着きを取り戻す。

「ゆんゆんのおっばいのおかげで少し落ち着きました。ありがとうございます。ございます、ゆんゆんのおっばい。」

「めぐみん…もつと打ちのめされたほうが良かったんじゃないの…?」

おっばいが物騒なことをいう。

もちろん、ゆんゆんにはすごく感謝している。

ゆんゆんがいなければ、私は孤独と恐怖でがんじがらめになっていただろう。

「あらためて、おっば…ゆんゆんにこの状況を聞きたいのですが。」  
「めぐみん、今、私のことをおっばい、って言おうとしたわよね!? そうよね!」

「なぜアクセルの街はこんな状況になっているのですか?」

私は、宿の窓から見える廃墟と化したアクセルの街を眺めて言った。

「なぜって…デストロイヤーに蹂躪されたからに決まっているじゃない。」

ゆんゆんが、今更それ聞く?という表情で私の質問に答える。

でも…

「デストロイヤーは私の究極魔法で破壊しましたよね?」

「え?何言ってるの?今も世界中の脅威として存在しているじゃない。」

「そんな…2体目がいたってことですか?」

「2体?私はそんな話聞いたことないわよ。あんなのが2体もいた

ら、今頃、この世界は魔王城とアクシズ教徒以外全滅してるわよ。」  
確かに私もデストロイヤーが2体いるなんて話は聞いたことがない。

「もうひとつ・・・聞きたいのですが・・・」

「何?」

本当は聞きたくないのだけれども・・・。

「ゆんゆんは、カズマとアクアを知っていますか?」

「え? アクアって、アクシズ教が崇拝する女神だったかしら? カズマって珍しい名前の人は知らないわよ。」

ほら、この事実を突きつけられるからだ。

「カズマとアクアは冒険者で、もうひとりダクネスを加えた4人が、私のパーティーメンバーでした・・・」

「めぐみん・・・」

ゆんゆんが私を心配するような顔をしたと思ったら、すぐに、ハツとなつて私に言う。

「あーイマジナリーフレンドってやつね! それなら私も10人くらいいるわ! 最近は僧侶のステファニーと戦士のジークがパーティーに隠れて夜二人でどこかにでかけるのよね・・・それから盗賊のブルーがこの間ダンジョンで隠し扉を見つけたんだけど・・・」

・・・更に聞きたくなかった話が飛び出してきた。

ゆんゆんのひとり遊びがここまで進化していたとは・・・

今度、真剣に精神系魔術専門の術師に見せに行つた方が良いかもしれない。

ただ・・・

ルナもゆんゆんも、カズマとアクアのことを覚えていないという。彼女達はアクセルの中でもカズマとアクアとの接点が多かつたはずなのに。

そして、アクセルがめちやくちやなのはデストロイヤーの襲来によるものだという。

デストロイヤーは、カズマの指揮とアクアの結界破りが無ければ破壊できなかっただろう。

私たちの住んでいた屋敷は売出中になっていた。

カズマが屋敷を手に入れたきっかけは、アクアが除霊をサボって屋敷に幽霊が住み着いたという騒動にあった。

周囲の状況が大きく変化したのは、私がタイムマシンで過去の二ホン、カズマの故郷から戻ってきた直後。

つまり……

「私が過去の二ホンで何かを変えてしまったために、カズマやアクアはアクセルに来ることが無くなり、そのため、未だ屋敷は買い手がつかずに売出中、アクセルの街はデストロイヤーの襲来を防ぎきれず蹂躪された、ということですか……」

「……それで、今度、ソードマスターのリビアと魔法使いのキャロルと一緒に女子会を開こうってことになったの！楽しみだなあ。ねえ、めぐみん、どこかおしゃれなお食事処とか……」

「ほらー！その妄想ぼっち！患ってないで早く帰ってくるのです！行きますよー！」

「行くなって……めぐみんも女子会に参加したいの？」

「……」

……だめだこの子！早く何とかしないと！



私はゆんゆんを伴いタイムマシンのあつた洞窟まできた。

「あ、地面に何かの似顔絵が描いてあるわよめぐみん。ププ……これ人間？下手すぎじゃない？ねえめぐみんもそう思わ……痛っ!!ちよ……めぐみん！引っ張らいで！いたたつ！」

私はおっぱい紅魔族の髪を引っ張ってタイムマシンのところまで連れて行く。

「これに乗って過去に行つて、戻ってきたら、アクアとカズマがいなくなつていたのですよ。」

「わあ、なにこれ？ちっちゃいデストロイヤー？」

「これと一緒にあつた手記には、タイムマシンと書いていたようです。過去の、それも、ニホンという国に移動できるものようです。」

「ふーん。それで、どうするの？」

「もう一度これを動かして、過去に行つて、全てをもとに戻します。」

ゆんゆんに宣言するが、ゆんゆんは眉をひそめる。

「もとに戻すつて、過去で何をすればもとに戻るのよ？」

「それは……」

何をすれば戻るのだろう。そもそも過去で私が何をしたかの記憶が無いから、仮にもう一度過去に行つたとしても何をすべきかわからない。

「それが分からなきゃどうしようも無いじゃない。そもそも、本当にそのアクアって人とカズマって人はこの国に来たの？」

「……」

カズマ達の存在を疑われると胸が苦しくなる。

「来ました。間違いないです。とりあえず、中に乗って動かしてみますよ。」

「ああ、待ってめぐみん！これ、どうやって中に入るの？」

私は話を強引に切り上げてタイムマシンをいじりにかかる。

過去に戻つて何をすべきかはまだわからないけれども、戻る手段は確保しておくべきだ。

戻る手段さえあれば、最悪、何度でもやりなおして、絶対、絶対、カ  
ズマ達の待つ屋敷に帰るんだ………

絶対に、絶対に帰るんだ……

………

………

………

## 第14話 彼らのいない場所②

そして2週間が経過した。

「めぐみん！またあの変なモノのところに行くの!?!ちよつとは休みなさーいよ！あなた、あれの調査しだすと飲まず食わず眠らずで、必ず最後は倒れちゃうじゃない！いつも慌てて助けに行く私の身にもなりなさいよ!!そのためだけに生きてるの? ってほど毎日楽しそうに撃つた爆裂魔法もめつきり撃たなくなったし、どう考えても根詰めすぎよ!!」

宿から出かけようとする私の背後、ゆんゆんが声を張り上げる。

「うるさいですよ、ゆんゆん。大丈夫です。やつと何かわかりそうなのです。」

嘘だ。

タイムマシンについて、結局何も分かっていない。

文献なんかも当たろうと思ったが、図書館もデストロイヤーに破壊されていて情報収集もままならない状況だ。

そもそも魔法の法則も無視、あんな規格外で複雑な構造のもの、紅魔の学校でも教えられていない。

「何かわかりそう、ってセリフは何度も聞いたわよ!!いいから、今日は爆裂魔法でも撃ちに行つて気分転換でも……」

「私は……帰れるのでしょうか……」

精神的な限界に近い気がする。

文脈を無視して、弱音が漏れる。



「めぐみん?」

カズマ達のことについて聞き込みをしたこともあったが、誰もがその存在を知らないと述べ、結局聞くのが怖くなり、今では一切聞き込みをしていない。

周りの人や環境に、自分が否定されているようで、だんだんと意志が削られていつている。

「ゆんゆんも私の行動や言動がおかしいと思っっているのでしょうか。周りのみんなもそう思っっているはずです。」

「めぐみんの頭がおかしいって言うのはこの街のじょうしき……痛っ！何するのよ!」

無礼なこの紅魔族のおっぱいを叩く。

世界が変わって何故その私への誹謗中傷は変わらないのか。

私は、はあ、と息を吐き、日に日に心に積み重なっていく不安を吐露する。

「実は、もとの世界なんてもの、本当はなくて、仲間が私を待っている屋敷の夢を見ていただけで、今のこの状況こそが本当のあるべき姿なんじゃないか、と思い始める自分がいます。」

私は、受け入れようと思っっているのだろうか?

「ゆんゆん……私は今のこの現実を受け入れるべきなのでしょう?」

ゆんゆんが私を呆然と眺め、

「私は、もとの世界なんて知らないし、なんとも言えないわよ。」  
と、突き放すように返す。

その後、少し照れつつ、

「でも……」

少しためらいつつ、

「めぐみんは、周りが何と言おうと、自分の愛したものの、自分の信じたものを貫き通す子だつてことは知っているわ。」

周りにくどく、私の背中を押してくれた。

「今回も同じようにすればいいってだけじゃないの?」

「爆裂魔法なんてネタ魔法を使えるだけでアークウイザードを名乗っているめぐみんでしょ。」

「おい、私の究極魔法をネタ魔法などといったことを速やかに詫びてもらおうか。」

そして、ゆんゆんは顔を真っ赤にして、そっぽを向きつつ、

「でも……そんな自分の愛したものを、いつも目を輝かせながら話す……そんなめぐみんのこと……わわ、私……す、す……き、嫌じゃないわよ!」

と、恥ずかしいことを言う。

私は、そんな彼女の態度に、なんだか笑みがこぼれた。

その時だった。

ギルドの冒険者招集の鐘が響いたのは。

『冒険者の皆さんは、早急にギルドへ集合願います! 繰り返しします! 冒険者の皆さん早急にギルドへ集合願います! ダステイネス家の方から大切なお話です!』

「なっ……いいシーンだったのにつ!」

ゆんゆんがガクつと肩を落とした。

そして、言葉を続ける。

「ダステイネス家って、そういえば今、囲っている騎士なんかを王都防衛のために派兵してたわよね。」

「ダステイネス家……」

ダステイネス家は、ダクネスの実家で確か国王の懐刀とか王国の盾とか呼ばれていたと思う。けれども王都防衛のための派兵など、私の知る歴史には無かったはずだ。

……

正直、ダクネスに会うのが怖かった。

もちろん、私は、タイムマシンの調査でこの世界のダクネスを頼るという選択肢を真つ先に思いついた。

けれども……

もし……

ダクネスに、私のことなんて知らないと言われたら……

私はどうすれば……

「ほら、めぐみん、私たちも冒険者だし、ギルドに行かないと！もしかしたら、あのちっちゃいデストロイヤーのことも何かわかるかもしれないわよ！」

「で、でも……」

「いいから！」

躊躇する私の腕をゆんゆんが引く形で、ギルドに向かった。



ギルドには冒険者が集まっており、中心に、彼女がいた。

そう、ダクネスだ。

ゆんゆんがそれを見て言う。

「あ、あのクルセイダーの人、見たことある。ダステイネス家の人だったんだ。そう言えば、ここ最近、めつきり姿を見て無かったわね。」

「彼女はダクネスです。ダステイネス家の一人娘です。」

「え？ダクネスって、めぐみんがパーティーだって言ってた人!?ダステイネス家の人と一緒にのパーティーだったの!?!」

ゆんゆんは、マジで?という顔をする。

「よかったじゃない、めぐみん!ダクネスさんにも話を聞いてみるべきよ!ちっちゃいデストロイヤーの件も協力してくれるかも!」

・・・気軽に言ってくれますね。

「みんな、よく聞いてくれ。」

冒険者がある程度集まったことを確認してダクネスが話し始めた。

ダクネスが冒険者に告げた内容に冒険者一同はとても苦い顔をしている。  
当然だろう。

王都が魔王軍によって陥落したという内容だったのだ。

どうやら王都も、デストロイヤーの進行で大きな被害を受けており、復旧のさなか、ベルディアやハンスといった幹部を含む魔王軍の総攻撃を受けたらしい。

ダクネスは、数カ月前、デストロイヤーに蹂躪された王都からの要請で騎士たちと王都の守りに付いていたとのことだった。

だが、魔王軍の総攻撃を受けて王都は陥落。

第一王女アイリスを逃がすために、その盾となって魔王軍の王女追跡を防いだダクネスは、魔王軍がアクセルの街へ侵攻しようとしていると情報を得てこの街に戻ってきたそうだ。

アイリスは大丈夫だろうか。あの子はとても強いのでちよつとやそつとじゃやられないとは思うが・・・

「と、いうことで、この先、アクセルの街にも魔王軍の進行があると思われる。街の防衛は騎士達と冒険者達との協力が不可欠だろう。住民の避難に関しては……」

ダクネスの話は続いた。

……  
……  
……

「冒険者たちにおいては、街の復旧のさなかで本当にすまないと思っている。ダステイネス家の私財を投げ打ち、特権を失ってでもその働きには報いるつもりだ。何卒、力を貸してくれ。」

ダクネスは頭を下げ、話を終え、散会する冒険者達を見送った後、その場を立ち去ろうとする。

それを見てゆんゆんが私の背中を押す。

「ほらー！めぐみん！声をかけるなら今よー！」

「で、でも……」

ダクネスは王都防衛の失敗からか、かなり憔悴しているようだ。

今、声をかけるべきじゃないのではないか。

それに、声をかけたら、何かが変わってしまいそうな気がする。

ああ、逃げ出したい。

声をかけるだけで、泣きそうになる。

……でも、今のタイミングを逃したら、この絶望的な世界で今後ダクネスに会える保障はない。

私は決死の覚悟で、その場を立ちさろうとするダクネスを引き止める。

「あ……あのー！」

「ん？」

ダクネスがこちらを振り返った。

私は、震える声でダクネスに声をかける。

「だ、ダクネス……」

どうしたのだ？めぐみん。

ダクネスは優しい声と表情で私の名前を呼びかける。

いつもなら、そうだった。

「すまないが、どちら様だろう？」

「……」

ダクネスが私のことを知らない。

私の中で何かが崩れていく。

駄目だ。

止まらない。

「うぐっ……ううー……うっ……だ……だくね……す……  
だくねしゅ……っ……」

「お、おい、どうした!？」

ダクネスはうろたえ、その場に崩れ落ちそうになった私を支えてく

れた。

それから私はダクネスにすがるように泣いた。

なんだか泣いてばかりだ。目からクリエイトウオーターだ。

ダクネスは、自分も疲れ切っていたにもかかわらず私のこの身を  
ずっと支えてくれた。

## 第15話 彼らのいない場所③

ギルドの一角、私とゆんゆんが隣り合って椅子に座り、テーブルを挟んで正面にダクネスが座っている。

「なるほど、そのタイムマシン、とやらで過去から戻ってきたら、世界が魔王軍の手に落ちようとしていた・・・と。」

ダクネスが、普段見せない理知的に考え込む姿勢を見せる。

カズマがいないこの世界。

ダクネスの変態キャラは、カズマの影響が強いのかも知れない。

「それは調べてみる価値がありそうだな。正直、我々はこのままだと魔王軍の進行に耐えられないだろう。歴史を変えろという反則技のようなものでも、今は藁にもすがりたいところだ。」

どうやら、ダクネスが手を貸してくれそうだな。

「改めてよろしく頼む。えーと・・・名前が・・・」

「めぐみんです。」

「ゆんゆんです。」

ダクネスは顔が頬を引きつらせる。

「め・・・めぐみん？・・・に・・・ゆんゆん？・・・あ、いや紅魔族だったか。」

「おい、今私たちの名前を聞いて微妙な表情をした理由を吐いてもらおうか。」

そんな話をしていて最中だった、

息を切らした冒険者がギルドに入ってきて叫んだ。

「ハア、ハア・・・みんな大変だ!!!魔王軍の幹部がこの街に来やがった!!!」

「なんだと!?早すぎる!!」

ダクネスは立ち上がり、その冒険者のもとに行く。

「現状は？相手はどれほどの規模だ？」

「ハア・・・ハア・・・ダクネスさん・・・相手はたった2人だけだ・・・」



正面の門を突破された・・・今は、中央通りで、近くにいた騎士たちと冒険者などで包囲しているが・・・いつまで持つか・・・」

「くっ!!すぐに現場に向かう!!」

そういつてダクネスはギルドを駆け出していった。

ゆんゆんが私に声をかける。

「めぐみん!!」

「ええ。私たちも向かいましょう。」

私とゆんゆんはダクネスの後を追って走る。



現場につくと、冒険者と騎士とが魔王軍の幹部らしき者から距離をとって包囲しているのが見えた。

近づくにつれて、そこに異様な空気が漂っているのがわかってくる。

この異様な空気は・・・間違いない。

「やっと来たか!そこの、時をかける頭のおかしい少女よ!」

「なっ・・・!」

やっぱりこいつだ!!

仮面の悪魔、バニルだ!

どうやら私たちが残機を削った事実も変わってしまい、今も魔王軍の幹部をやっているようだ。

・・・というか、今この悪魔は何て言った?

「時をかけるって、私が過去に行って世界を変えてしまったことを知っているのですか。」

「ああ、いらんことをしおって全く、おかげで魔王軍の幹部に逆戻りだ。せつかく、相談業も軌道にのり、離婚相談から過払金相談まで幅広く相談しやすいバニルさんとして巷でちよつとした話題になりつつあったところを！」

この悪魔は弁護士か何かを始めたのだろうか。

というか、辞めたいのなら魔王に辞表を突きつけるとかできないのだろうか。

悪魔の契約か何かだろうか。

いや、今はそんなことより……

「カズマのことを！アクアのことを！知っているのですか!？」

私はバニルに詰め寄る。

「我輩は全てを見通す大悪魔だ。一部のファンから女体化されまくっているTS小僧と、チンパンジーとの比較動画をアップされる哀れなプリーストのことだろう。」

突然のメタ発言に、え？それ本当に当人たちですか？とも一瞬思ったが、見通す悪魔がいつているのだからそうなのだろう。

悔しいが、こんなふざけた悪魔でも、私の日常を共有できる者が現れたことに嬉しくなってしまう自分がいる。

妙な悪魔だが、私の大切な日常の不可欠な一員だったのかもしれない。

……

「おい、魔王軍の幹部の者、めぐみんから離れろ！」

ダクネスがバニルに向けて剣を構えた。

「そうよ！めぐみんを懐柔しようなんて許さないわ！」

ゆんゆんがバニルに手をかざして魔法を放つ態勢になる。

この世界の2人が私のために戦おうとしてくれる事実には嬉しさを感じてしまう。

でも、私の知っている、人間が大好きなこの悪魔なら、街や人の破

壊をしにここへ来たわけでは無いだろう。

「ダクネス、ゆんゆん、この幹部は見通す悪魔のバニル。どうやら私の知る世界のことも見通しているようです。私の知っている世界では敵対関係にありません。あなたたちとも知り合いです。」

「フハハハハハハ、その通りである。そのの、出番が多いはずなのに人氣投票でパツとしない結果に終わる残念クルセイダーよ！久しぶりである。」

「なあああ!!」

ダクネスは剣を取り落としそうになる。

「フハハハハハハ、それから、そのの……そのの……えーと、誰だっけ？」

「ええええええ!!!」

ゆんゆんが今にも泣きそうな顔になる。

「なんつって！冗談冗談。いつも際どい格好でグツズ化されまくるR指定紅魔族よ、久しぶりである！……おおっと！これは極上の怒りの悪感情、美味である！フハハハハハハ！」

ゆんゆんの顔が真っ赤になって、むぐぐぐぐってなっている。

私たちを囲う冒険者も、え？こいつ本当に幹部なの？って感じで戸惑っている様子だ。

少なくとも一触即発な空気はどこかにいった。

私は場の緊張が和らいだことを確認してバニルに尋ねる。

「バニル、あなたの後ろにいる、その奇妙な人物は誰ですか？幹部の誰かですか？」

バニルは彼の後ろにいる人物に親指を向けて紹介する。

「うむ。こいつは、地獄の公爵の一人、つじつま合わせのマクスウェルという。二つ名のとおり、物事のつじつまを合わせるといいう、二次創作の作者に極めて都合の良いトンデモ能力を持つ悪魔であるな。」

そういえば、アクアも二次創作がどうか言っていた。

気になるけれども、今それは置いておこう。

そいつは、とても異様な悪魔だった。

金髪で左右の目の色が違い、ぞつとするくらい綺麗な顔立ちでバニルと同じくタキシード姿。なんととっても異様なのは、後頭部がまるつきり無いのだ。

ヒュー、ヒューと喘息患者のような息をたてている。

ただ、その悪魔からは公爵級にふさわしい途方もない魔力を感じる。

「こいつは、豚足領主の屋敷の地下に契約によって縛られて捕らわれていたのだ。だが、デストロイヤーの襲撃で領主責任が問われるゴタゴタの中、我輩がちよつと領主に接触してマクスウエルとの契約を解消するよう仕向けたのだ。ちなみに領主は今、行方不明になっている。」

バニルがニヤリと笑った。

豚足領主とは、ここらを治める領主アルダープのことだろう。前の世界でもダクネスの嫁入り事件など何かと関わりあいになることが多かった。

「それで、なぜその悪魔を連れてきたのですか？」

「うむ。貴様の知っている、もとの歴史に戻すことに、マクスウエルのつじつま合わせの力を利用して思うてな。」

え？

もとの歴史に戻す？

「それ!!詳しく聞かせてください!!!!!!」  
私は悪魔の話に食いついた。

## 第16話 彼らのいない場所④

ダクネスやゆんゆん、他の冒険者や騎士たちが私とバニルを囲う中、バニルは語りだす。

「まずは、あの小僧のことだが、あの小僧は異世界人だ。そして日本とはこの世界に存在しない国、異世界の国だ。」

「なっ……!!!」

いきなりショッキングな話しが飛び出す。

確かに、カズマはあまりに常識知らずなところがあったり、想像の斜め上の挙動があったけれども……一応、別の国の人だから、と納得していたけれども……

「そして、チンピラ女神だが、きやつは真正正銘の女神である。日本の死者をこちらの世界に案内していたようだな。」

「……」

確かに規格外の浄化能力や蘇生能力で、アクアには何かしら秘密があるのだろう、とは思っていたけれども……

これだけの話でもうお腹がいっぱいだ。

心を整理するため休憩をはさみたい。

しかし、バニルはこちらの心のうちなど知ったことかと言わんばかりに説明を続ける。

「では、なぜあの小僧がチンピラ女神とともにこの世界に来たか。それは、小僧が異世界で死んだからである。そして、死者を案内するあの女神によってこちらの世界に転生させられた、という経緯である。」

私は聞き漏らすまい、と悪魔の話に集中する。

「だが……」

悪魔はニヤリと笑って続ける。

「小僧のこの世界への転生の遠因となったのは、あの女神が日本で小僧に祝福魔法をかけたことである。」

「……はっ? どういうことですか?」

「どういった法則が働いたのかは分からぬが、小僧が死んだのはあの

女神の祝福魔法の影響だということだ。まったく、人殺しの祝福魔法など、本当に愉快なことをしてくれるネタの尽きないネタ女神であるな。フハハハハハハハハ！」

「……………」

なぜ、祝福魔法がカズマを殺すきっかけになったのだろうか。

いや、でも、アクアの祝福魔法ならあるいは……………」

「な、なるほど、アクアが祝福魔法でカズマを死に追いやり、死んだカズマをアクアが女神として案内してこの世界に連れてきた……………」

「……………」

「ねえ、めぐみん、それってマッチポンプっぽくない？」

「言わないでくださいゆんゆん、私もあえて口に出さないようにしていたのですから。」

でも、でもだ！

そのおかげでカズマはこちらの世界に転生し、私はカズマやアクアと会うことができた。

そう思うと、アクアの祝福魔法は私たちが出会うきっかけになったとも考えられる。

うん、多分そうだ。

そう思っておこう。

「……………さて、今までの話が本来の歴史の話だ。」

バニルは一拍おいて続ける。

「では、なぜ小僧がこちらの世界に来ない、という我々の今いる歴史になっちゃったか。そのターニングポイントはどこか、だが……………」

「アクアの祝福魔法……………」

私はぽつりとつぶやく。

「そう。貴様がタイムマシンで過去の日本でやってしまったこと、それは、あの女神が小僧に祝福魔法をかける前にこれに介入して、その事実を無くしてしまったことだ。その結果、女神の祝福魔法によって

転生するはずだった小僧が転生しないという歴史が生まれてしまった。そして、今の状況がある、ということだ。」

「なるほど……」

つまり、過去の日本で……

①アクアの祝福魔法がカズマにかけられた場合、カズマとアクアがこの世界に来る（本来の歴史）。

②アクアの祝福魔法がカズマにかけられない場合、カズマとアクアがこの世界に来ない（今私がいる歴史）。

……ということだろう。

正直、過去の日本の記憶が全く無いので、祝福魔法に介入したといわれても、覚えがないのだけでも。

「では、私は、もう一度、過去の日本に戻って、カズマとアクアの邪魔をしないようにすればいいのですね。」

「その通りだ。ただ、問題はどうかやって過去に行くか、だ。」

「それは、あのタイムマシンで過去に戻ればいいのではないのですか？」

「それは不可能だ。あのタイムマシンは可動限界を迎えており、修復する技術がこの世界には無い。」

仮面の悪魔はきつぱりと言い切る。

「ではどうするのですか？……後ろのその悪魔の力を使うのですか？」  
「勘違いするな。マクスウェルの力がいくら強大だとしても、これ程狂ってしまった歴史のつじつまを合わせるのとは不可能だ。歴史改変をするのは、小娘、貴様だ。マクスウェルのつじつま合わせの力は歴史改変後の微調整のため使う。貴様が歴史改変に成功したとしても、もとの歴史と些細ずれが生じてしまうだろうからな。その部分のつじつまを合わせるのだ。」

私は後ろの奇妙な悪魔を見て顔をしかめる。

「悪魔にそんなことをさせて、何か代償でもとられるんじゃないですか？」

「もちろん代償は頂くことになるな。だが、貴様はもうこのマクス

ウエルに前払いしておる。なあ、マクスウエルよ。」

「ヒュー、ヒュー……君の絶望の悪感情、とつてもとつても美味しかったよ!!」

マクスウエルと呼ばれた悪魔は無邪気に笑う。

「ヒュー、ヒュー……君の望む通り、手を貸すよ!!」

私はバニルにジト目を向ける。

「あの……全部知ってて、私が絶望する姿をこいつに食わせるために今まで傍観を決め込んでいたのですか?」

「フハハハハハハ! 流石は紅魔族! 賢いではないか! おおっと! これまた美味なる怒りの悪感情、馳走である! フハハハハハハ!」

……やっぱりこの悪魔は嫌いです。

「……で、タイムマシンも使えないとすると、一番肝心な、過去に行くための方法は具体的にどうするのですか。」

私はバニルに強い口調で問う。

「ふむ。それなのだが、忌々しい神々がタイムリープなどというこれまた忌々しい秘術を隠し持っているようだな。」

「ようで? 貴方の力で見通せないのですか?」

「我輩の見通す力は、神気によって阻まれてしまうからな。それに、神々にとつてもタイムリープは秩序を崩壊させる禁忌とされる程の絶大な力のように、実際に使われることは滅多に無いらしい。」

「神にお願いしてもタイムリープできる確証が無いのですね……」

私はハア、と息を吐く。

「それで、どうすれば神とやらに会えるのですか?」

まあ、さっきのカズマの転生の話でうすうす答えに気づいているが。

「簡単だ。神に会うには、死ねば良いのだ。」



やっぱり。

ハア、と私は再度息を吐く。

そして、バナルに言い放つ。

「では私を神の下まで送ってください。」

.....

数舜、場が鎮まる。

「・・・何言っているのめぐみん!!こんな悪魔のいうことを信じるの!」

「そうだぞ!私の前でこの街の者をみすみす殺させてなるものか。」

ゆんゆんとダクネスが私を守る形でバナルとの間に割って入った。

「ゆんゆん、ダクネス・・・」

私はそんな彼女達にできるだけ穏やかに告げる。

「私の知ってる歴史では、ゆんゆんはこの悪魔が一番の友達でしたよ。」

「え?!友達?!」

ゆんゆんが顔を赤くしてバナルの方をチラチラ見る。

「ダクネスもこの悪魔に体に乗っ取られて、ノリノリでしたね。意気投合してましたよ。」

「体を・・・乗っ取られるだと・・・」

ダクネスが顔を赤くしてバナルの方をチラチラ見る。

なんてちよろい2人組なのだろう。

「それに、この悪魔は利害関係が一致していれば、それなりに信頼できるやつです。」

多分。

「でもでも！今の話だと、タイムリープできる可能性なんてほぼ無いに等しいじゃない！」

ゆんゆんがすかさず反論する。

「ゆんゆん、今は他に方法がありません。可能性が無いと言い切れな  
いなら、私はそれに掛けたいんです。」

「でも……！でも！死ぬのよ!? わかってるのめぐみん!!」

ゆんゆんは真っ赤になって私に詰め寄る。

「わかっています。それでも、本来の歴史は、私にとって命を懸けるに  
値する場所なのです。」

「で、でも……！でも……だって……」

ゆんゆんはそのまま黙ってしまった。

ダクネスは私の方を向き問う。

「しかし、この悪魔の言うとおりにするとして、そのカズマという男を  
祝福魔法？で殺すことになるのだろうか？いいのか？お前の大切な者  
なのだろう。」

「カズマには本当に悪いと思います。もしかしたら、カズマは今頃、二  
ホンで幸せに暮らしているのかもしれない。」

私は、ダクネスの瞳をまっすぐに見て伝える。

「それでも……すごく、すごく、わがままかもしれませんが、私は  
カズマとダクネスとアクアと一緒にすんでいたあの屋敷にどうしても  
帰りたい。」

そして、私は、決意を込めて告げる。

「私がカズマを、絶対、絶対、二ホンにいた時よりも、もっと幸せにし  
てみせます！出会ったことを、カズマに後悔なんてさせません!!」

「そうか……」

ダクネスは頷いた。

そして、続けて私に問う。

「その、聞きたいのだが、アクアとカズマとはどんな者たちなのだ？私もパーティーの一員だったとのことだが、どんなパーティーだったのだ？」

「そうですね・・・」

私は、2人の姿を思い浮かべる。

「アクアは、いろんなものに好奇心を示す子供みたいな女の子です。いつもちよろちよろしていて、喜怒哀楽が激しいですね。屋敷では、よくカズマに泣かされています。人の話題の中心になることが多くて、特に宴会では場を盛り上げる天才的な才能を持っていますね。」

「カズマは、最弱職の冒険者です。天性の引きこもり気質で一日中ゴロゴロしていることも多いです。一時、億単位の借金を作っていました。私達に向かつて暴言は吐くし、女の子を見ると鼻の下を伸ばしたり、私たちもたまにセクハラ被害を受けていたりします。」

「なんて素敵な殿方なんだ！是非とも婿に欲しいところだ！」

ダクネスはやっぱりどの歴史でもダクネスだった。

「私たちは4人で屋敷に住んでいます。」

そこで、ゆんゆんが恐る恐る聞いてきた。

「・・・ねえ、めぐみん、私は？」

「ゆんゆんは一緒じゃないですよ。一人で宿を拠点にしているようでしたよ？」

「なっ!？」

どの歴史でもぼっちなゆんゆんが涙目になる。

私は続けてダクネスにパーティーのことを話す。

「私たちのパーティーは、デストロイヤーとか魔王軍幹部とか強力な敵を相手にすることも多かったですが、カズマの機転や皆の活躍で何とか討伐に成功します。王都は健在で、私たちの活躍を耳にしたアイリスが、冒険話を聞きにくるなんてこともありましたね。」

ホームシックを拗らせている私の口が勝手に動き出す。

「私たち四人は屋敷で毎日、賑やかに暮らしています。カズマがゴロゴロしているところにアクアが茶々を入れて、泣かされ、ダクネスが

嬉々として混ざっていったりして。みんなで爆裂散歩に行ったりして。……」

「……それと、ちょむすけという私の使い魔がいます。最近、成長してきたようで、アクアが隠れて餌でもあげているのでしょうか。それから、アクアが大事にしているゼル帝というひよこがいるのですが、……」

「……それと……その……ダクネスと私は……カズマに惚れています。2人でカズマのことを話していたら盛り上がって、いつの間にか朝を迎える日もありましたね。……」

「……あ、最近のダクネスはカズマに対するボディータッチがちよつと酷いと思うのであれば……って……ダクネス？」

ダクネスは真剣な顔で私の話を聞いていた。  
目からぼろぼろと涙をこぼしながら。

「ダクネス？」

「あ、あれ？何だ。何故かとても懐かしい気持ちになつて……」

ダクネスは涙を、グシツと拭って、

「そうか……それは、必ず取り戻さないとな。」

と、力強く私に頷いてくれた。

ゆんゆんがとても不安そうな声で私に問いかける。

「……めぐみん、私を……ライバルをおいていくの？」

私は、ゆんゆんに向かって応える。

「ゆんゆんには本当に感謝しています。ゆんゆんがいなければ、私はこの世界で壊れてしまっていたかもしれない……」

「めぐみん……めぐみんの頭が壊れているのはこの街の……イタツ！もう！何よ！まだ途中までしか言っていないじゃない！」

おっぱいを叩いた私に向かい、ぶんぶん怒ってゆんゆんがわめく。  
「勝負はいったんお預けです。私のライバルにして最高の親友のゆんゆん。ちよつと歴史を変えてきますので、少しだけ待っていてくださいね。」

ゆんゆんは顔を赤くして黙った。

「待たせました。」

私は、バニルに向きなおって言う。

「これからの確認です。私はこれから死に、神のところまで行ってタイムリープの秘術で過去に戻る。そしてカズマとアクアの接触に介入せず、アクアに祝福魔法をかけさせる……。これでよいのですよね。」

「うむ。それで過去から戻ってきたときにはもとの歴史にもどっているであろう。」

「思ったのですが、私はどうやって過去の日本から帰ってくればよいのですか?」

バニルは、淡々と説明する。

「タイムリープは、自分の記憶をそのままに全ての時間を巻き戻す、といった時間移動の方法だ。」

なるほど。つまり、大人になった人が、記憶を保持したまま、子供時代をやり直す、とか、そういった方法なのだろう。

「汝が過去の日本にいた間、可動限界に達していないタイムマシンがそこにあっただろう。それで戻ってくればよい。」

さらに、バニルは、ふうむ、と顎に手を当てて言葉を続ける。

「もつとも、タイムマシンを見つけた当時よりも前の時間に戻って、そもそもタイムマシンに乗らないようにすれば、過去の日本に影響を与えることも無くなるだろうから、それでも歴史は元通りだろうな。」

私が過去の日本に行かなければ歴史が変わらなかつたのだから、過去の日本に行く前の爆裂散歩の時点で、タイムマシンを爆裂してしまえばいい、ということだろう。

待った、タイムリープで時間を巻き戻せるということは・・・  
「おおっと！くれぐれも、小僧がやたらカツコよく見えた紅魔の里の一件や、小僧と布団の中でイチヤイチャやっていたあの時点まで戻ろうとするでないぞ！そんな長時間遡れば、また歴史に変な影響を与えてしまうかもしれぬからな！フハハハハハ！」

「……………もう今爆裂魔法でこの悪魔の残機を削ってやろうか。」

「わかりました。では、さくつとやつちやいましょう。」  
私は仮面の悪魔に向けて言った。

「うむ。我輩自ら、貴様を神のいる天界まで送ってやろう。」

バナルが、殺さずの信念を曲げて宣言する。

いや、歴史がもとに戻れば、きつと私を殺すという事実が無くなるからノーカンだろうか。



私の目の前に仮面の悪魔が立っている。

「覚悟はよいな、紅魔の娘よ。ここには、あの薄汚い女神もいない。蘇生は不可能だ。」

悪魔が言い放つ。

傍らにいるゆんゆんが泣きながら言う。

「やめて……………めぐみんを殺さないで……………」

……………

私はそんなゆんゆんに笑い顔を作って見せる。

そして、

「抵抗はしません。ひと思いにやってください。」  
悪魔に向けて言う。

「ふむ。その度胸や良し。では、さらばだ。」

次の瞬間、ザンツという音とともに首に激痛が走る。  
視界に広がる世界がゆっくりと回っている。

私の首が宙を舞ったのだ。

私の目に映る絶望的な世界は暗転していつて、  
急速に意識が闇に飲まれていく・・・

その最中、私は何度も何度も反芻する。

絶対に、絶対に、カズマ達の待つ屋敷へ帰るんだ・・・

## 第17話 タイムリープ

【めぐみん視点】

気がつくとは私は、一面真っ白な部屋にいた。据えられた椅子に座っている。

目の前にはこれぞ聖母というような神々しい美女がひとり。

・・・神々しいのですが、何か違和感がありますね。

うーん・・・胸が不自然？

美女は私に向けて口を開く。

「めぐみんさん、ようこそ死後の世界へ。私は、あなたの死後の案内をする女神エリス。辛いでしようが、あなたの人生は終わってしまったのです。」

「エリス・・・」

エリスといたらエリス教の御神体だ。国教として崇拝されており、お金の単位にまでなっている。

エリスはこの世界で最も有名な存在といっても過言ではない。

エリスは辛そうな表情で言葉を続ける。

「めぐみんさんは、魔王軍の幹部に首を両断されたようですね。さぞ、痛くて苦しかったでしょう。」

そうだ、私はバニルに首をはねられたんだ。

どうりで首のあたりがジクジクすると思っていた。

いや、今はそれよりも・・・

「あなたには二つの選択肢が用意されています。記憶を消去してこの世界で赤子からやり直すか、天国に行って穏やかな日々を送るか。」  
「どちらも選びません。」

「え?」

私の返事にエリスはきよとんとなる。



私がバニルに殺された理由、それは、神の秘術タイムリープで過去に戻るためだ。そして、歴史を元に戻して、カズマ達の待つ屋敷に帰るんだ。

「私をタイムリープさせてください。」

エリスの眉がピクリと動く。

「できません。」

エリスは厳しい口調で私の申し出を拒絶した。

「めぐみんさんには、先ほど伝えた二つの選択肢から選んでいただきます。この世界は魔王軍に滅ぼされつつありありますので、私としては、是非とも赤子となり、この世界を救う英雄となっていたいただきたいところです。」

「……この世界を救うのであれば、歴史を改変させるのが一番だと思うのですが。」

「……」

エリスは真剣な表情になり、無言で私をまっすぐに見る。

そのまま数秒、私とエリスは視線を交差させる。

やはりタイムリープは神にとっても滅多に用いることができない代物なのだろう。どうかエリスを説得できないか。

私はエリスに向けて言葉を続ける。

「私は、タイムマシンで歴史を変えてしまいました。今、魔王軍に滅ぼされつつあるこの世界は私が招いてしまった状況です。本来の歴史では、カズマとアクアという冒険者がこの世界に降り立ちデストロイヤーや魔王軍の進行を止めるはずでした。」

「アクアって……アクア先輩が……?」

「そうです。女神アクアはカズマと一緒にこの世界に来たのです。で

も、私はその歴史を変えてしまいました。お願いです、エリス。元の歴史に戻すために、手を貸してください。」

「そんな馬鹿な・・・信じられません。」

「でも本当のことなのです。」

エリスは依然として真剣な眼差しで私を見ている。

「どのように歴史を変えたのですか。」

「ノイズという国の研究者が作ったタイムマシンに偶然乗ってしまい、過去の二ホンに行ったのです。」

「あの罰当たりな国ですか・・・」

エリスは殊更に顔をしかめる。

私は話を続ける。

「過去の二ホンでは、本来、アクアがカズマに祝福魔法をかけるはずでした。」

「日本でアクア先輩が・・・と、いうことはあの時・・・」

エリスは心当たりがあるように呟く。

私は話を続ける。

「ですが、私が介入して、その祝福魔法をかけたという事実を無くしてしまっただけです。それで、カズマの転生しない歴史に改変されてしまいました。」

「・・・アクア先輩の祝福魔法が、カズマさん？という方のこの世界への転生のターニングポイントだった・・・ということですか？」

「はい。そうです。」

この女神様はアクアより数倍ものわかりがよさそうだ。助かる。

と思うも束の間、エリスはとても厳しい表情で言い放つ。

「めぐみんさん、仮に今の歴史が変えられたものだとしましょう。それならば、変わってしまった今の歴史こそが真実の歴史です。仮に選択肢を間違えてしまったとしても、それを糧に歴史は積み上がっていくものなのです。自分に都合の良い歴史にしたいとは誰もが思うこと。誰か1人だけに歴史改変の手段を与えることはできないのです。」

エリスは毅然として告げた。

「それに、タイムリープは常に一方通行であるはずの時間を捻じ曲げるもの。秩序を維持することを責務とする我々神々が、おいそれと使っていないものではありません。」

「でも!!このままでは魔王軍にこの世界が滅ぼされてしまいます!!」

私は声を張り上げた。

「女神としてそれでいいのですか!?!世界が滅ぶのを黙って見ているのですか!?!」

「もちろん、この世界を救うために、他の世界から強力な武器や能力を持った転生者を招いて対応にあたっています。」

「でも、転生者が来ても、魔王軍にここまで圧されているのですよね!?!」

「.....」

「カズマやアクアの力が絶対に必要なのです!だから.....!!」  
「めぐみんさん.....」

エリスは声を低くして私に告げる。

「我々が取れる手段をとっても魔王軍に滅ぼされることがこの世界の運命ならば、それが歴史の理なのでしょう。タイムリープを使って、歴史を捻じ曲げても良い理由にはなりません。」

「.....ツ!!」

建前では駄目だ.....

私の本心を訴えるしかない。

「私は、前の歴史に、大事な仲間と大事な場所があります。どうしても、どうしても仲間のもとに帰りたいのです。」

「.....」

「お願いです!エリス!私に協力してください!」  
「.....」

エリスは厳しい表情を崩さない。

「死んだ人には誰しも心残りがあるものです。めぐみんさんと同じように仲間のもとに帰りたいと訴える方がいます。しかし我々はその

申し出を受けることはしていません。」

「ぐっ……!」

私は椅子から腰を下ろして土下座の格好になる。

そしてエリスに乞う。

「……お願いします!どうしても!どうしても帰りたいです!」

「……顔をあげてください、めぐみんさん。」

何度も乞う。

「お願いです!エリス……タイムリープしか手段が無いのです!」

「駄目です。」

何度も何度も乞う。

「……お願いです……どうか……お願いします……」

「すみません……何度乞われようともそれはできません。」

しかし、エリスは首を横に振るだけだった。

駄目だ……どうすれば……どうすれば……

私はエリスを睨んで、

「……爆裂魔法でここら一帯を吹き飛ばしますよ。」

脅しにでる。

「そんなことをすれば強制的に地獄送りです。タイムリープなんて絶対に不可能になります。」

駄目だ……

エリスを説得できそうにない……

「女神チエンジで……」

「どの女神でも同じです。タイムリープが許されることはありません。」

「……」

エリスは表情を少し穏やかにして、私を包み込むように言う。

「さあ、めぐみんさん、どちらになさいますか？この世界のことを考えてくださるのであれば、是非とも赤子に転生して魔王軍を撃つ矛になっただけじゃませんか？貴方ならば新たな人生でも強力な魔術の素養を持てると思いますよ。」

「あの……タイムリープを……」

「できません。」

「……」

あんなに絶望して、

「タイムリープを……」

「駄目です。」

あんなに寂しい思いをして、

「タイムリープを……」

「無理なのです。」

あんなに痛い思いをして、

「タイムリープを……」

「……ごめんなさい。」

……せつかくここまで来たのに。

「わ……私は……」

「駄目です。」

「……か、帰りたいんです。」

「……」

カズマ達とは・・・もう会えないの？

ああ、もう。

涙が溢れてくる。

私はこんなに泣き虫だったのか。

「たいむりーぷを・・・か、かじゆまと・・・あくあと・・・だ、だくねすのいる・・・あの屋敷に・・・」

「ダクネス・・・？」

エリスがぴくりと私の言葉に反応する。

「わ、わたしを・・・うぐっ・・・え、えりす・・・どうか・・・たいむ・・・りーぷさせてください・・・」

「めぐみんさん・・・」

エリスが困った顔をする。

「タイムリープを使わないのは神の都合というだけではありません。めぐみんさんにとっても、物凄く危険なのです。」

エリスは言葉を続ける。

「まず、そもそも成功しない可能性が高いのです。失敗するとめぐみんさんの存在自体が永遠に歴史の狭間を彷徨い続けることになりません。仮に成功しても、狙った日の狙った時間に送ることは困難です。天界がタイムリープを察知すると妨害もあるでしょう。私の最大限の力でも成功率は5%未満でしょう。」

ハア、とエリスはため息を吐く。

「仮にタイムリープに成功したとしても、とても強力な天兵という天界の兵士に追われる可能性があります。天兵に捕まれば、問答無用で地獄送りです。永遠に地獄で苦痛を味わうことになります。」

エリスは頬をほりほりと搔いて困った顔をする。

タイムリープを使わないのは、本心から私のことを思っていることなのだろう。

エリスは優しい声で続ける。

「どうか、私の手でそのような不幸の道案内をさせないでください。さあ、次の人生ではもっと素敵な出会いが待っているかもしれないかもしれませんよ。」

「……でも私は……」

涙をぐしつとぬぐう。

「わたしにとつて……かずまとあくあとだくねすいじょうに……すてきなであいはありません。」

「ダクネス……」

私はずつと鼻水をすする。

「……ばくれつまほうしかのうのないわたしが……ようやくみつけた……いばしよなのです……」

「……めぐみんさん、ひとつ問いたいのですが。」

エリスが私に問を発する。

「ダクネスも貴方たちと一緒にパーティーなのですよね？彼女の様子はどうだったでしょうか。貴方たちとの関係はどうでしたか。」

私はダクネスの姿を思い出す。

「だくねすも……ぐずつ……わたしと同じように……カズマやアクアのことをかけがえのない存在と感じていると思います。」

私はもう一度鼻水をすすり、深呼吸をして言葉を続ける。

「ダクネスが……借金の肩代わりに嫁に行くという事件が起こったのですが、それは私たちが作った借金の肩代わりでもありません……カズマもアクアも、もちろん私も……ダクネスの望まぬ嫁入りを阻止しようと必死になって……」

アクアは必死になっていただろうか？まあ、いいか。

「ダクネスは・・・ちよつと変態が強いですが・・・私は彼女以上の強固な前衛を知りません。私が強敵相手に爆裂魔法を振るえるのは彼女が私を敵から遠ざけてくれているからに他なりません。カズマもアクアもダクネスを支えに感じていると思います。私たちのパーティーには不可欠な存在です。」

そう、彼女は肝心な時に役に立たないと言われるが、私は決してそう思っていない。

いつもパーティーの土台を支えて、守ってくれているのはダクネスだ。

華となる立場ではないが、私たちの活躍は彼女の存在無くしてありえない。

「そうか・・・ダクネス、友達できたんだね・・・信頼してくれる仲間ができたんだね・・・」

エリスは頬をぽりぽりと掻きながら、優しい声で呟いた。

そういえば、なぜエリスはダクネスのことだけ呼び捨てなのだろうか。

それに頬をぽりぽりとかくこの動作・・・

それに、この瞳に髪・・・声もなんとなく・・・

私はエリスと出会った時に感じた違和感が晴れていくのを感じた。不自然な胸の違和感じゃなかった。

「・・・もしかして、クリス?」

「え?」

エリスは目を見開いて狼狽する。

「ななな、何を言っているのですか!?!」

「銀髪盗賊団のお頭ですよね!!!」

「銀髪盗賊団???」



なんということだろう、世間を賑わす大盗賊にして女神なんて反則だ。

設定盛られすぎすぎるい。

私はぐしつと腕で目元の涙をぬぐい、エリスに伝える。

「元の歴史では、クリスとカズマが二人で銀髪盗賊団を名乗っていました。クリスは銀髪盗賊団のお頭で、カズマのことを助手くんと呼んで信頼しているようでした。銀髪盗賊団は神器回収を主な目的としつつ、悪い貴族なんかを狙って平民を助ける正真正銘の義賊です。王都を賑わす義賊でした。私の憧れです。」

「そうですか、そんな歴史が・・・」

エリスは目を細めてつぶやく。

「王都を賑わす、義賊・・・か・・・」

この歴史の王都は陥落したようで、思うところがあるのだろう。

エリスは憂いを帯びた表情となる。

「私も銀髪盗賊団に憧れて盗賊団を結成しました。銀髪盗賊団を陰から支える下部組織みたいな組織です・・・だから、私にとってもクリスはお頭みたいな存在です。」

そう、私は、憧れたのだ。目の前の彼女の義賊としての姿に。

「・・・・・・・・・・」

エリスは静かに私の話を聞いていた。

私は、一縷の望みをかけてエリスに乞う。

「ですから、お頭・・・」

「出来ない部下を・・・」

「助けてくれませんか・・・?」

.....

エリスは静かに目を瞑る。

そして、そのまま私に問う。

「カズマさんにアクア先輩、ダクネスに、それからめぐみんさんは、今のこの荒廃しきった世界を変えることができるんですよね？この世界を救う英雄になれるんですよね？」

「当然です。」

エリスの問いに私はしっかりと返事を返す。

エリスは、フウと息を吐いて、呟く。

「部下を助けるのも、お頭の努めか。」

「え.....?」

そして、エリスは開眼する。

「わかりました。実は私、秩序に背いてまで大事なものを取り戻す、そういう熱い展開、大好きなんですよ。」

そう言つてエリスはニカツと笑つた。

それは、私の憧れるお頭の笑みだった。



「いいですか。これからめぐみんさんをタイムリープによって転生させます。強調させていただきますが、この転生方法は禁忌中の禁忌です。どれくらい禁忌かという点、設定で行き詰まった二次創作の作者が、もういいや、設定盛っちゃえ、タイムリープさせちゃえ、とご都合主義に走るときに使うくらい禁忌なものです。」

なぜみんな二次創作で例えたがるのだろうか。

そもそも二次創作ってなんなんだろう。

「めぐみんさんは、どの時点まで戻ろうと考えているのですか？」

エリスが私に問いかける。

「えーと・・・二週間前に私はもとの歴史でアクアと散歩にでかれています。その時に偶然タイムマシンを見つけて乗ってしまい、過去の二ホンに遡って歴史を変えてしまったので、その散歩の時点に戻ってタイムマシンに乗る前にタイムマシンを破壊したいです。」

「わかりました。ただし、先ほども説明したとおり、狙った時点にピンポイントで戻れる確証はありません。」

「そして、一つ、忠告です。」

エリスは真剣な顔で私に告げる。

「仮に、もう一度日本に行くことになったら、間違っても、日本で爆裂魔法なんて使わないでください。日本という国は、めぐみんさんが想像するよりずっとずっと平和です。日本で爆裂魔法の一発でも放てば、世界中を巻き込み大騒動になりかねません。取り返しのつかない程に歴史は歪曲するでしょう。日本からの転生者を招いているこちらの世界への影響も大きいものと思います。」

二ホンには爆裂魔法は存在しないのだろうか。まあ、この世界でも爆裂魔法を使う者はほとんどいないのだが。

「わかりました。」

私はエリスに返答する。

そして、エリスは微笑みつつも、少し困った顔をして、ハア、と息をつく。

「これで私も女神追放ですね。」

「え？」

エリスは頬をポリポリ搔いて言う。

「タイムリープでの転生というのは、それ程に罪なことなのです。」

無性にエリスに対して申し訳のない気持ち湧いてくる。

「あの……」

何か言わなくてはと思いい口を開いた私を遮り、エリスは言う。

「大丈夫です。もとの歴史に戻すことができれば、私がめぐみんさんをタイムリープさせる理由もなくなります。つまり、今ここでタイムリープさせるという事実も消えるでしょう。この罪は不問です。」

「エリス……」

本当にそんなにうまくいくのだろうか。

「そんな不安そうな顔をしないでください。確かにとつともなく危険で分の悪い賭けです。ですが、私、賭け事で負けたことは無いんですよ。なんとたつて……」

エリス様は笑みを浮かべる。

「私は、幸運の女神様ですからっ！」

本来、有り得ないことだというのはわかる。

私は神に祈ることなどほとんどないが、エリスには本当に感謝だ。

「エリス、絶対に歴史を変えてきますね。」

できるだけ力強く言う。エリスに私の決意が伝わるように。

エリスは微笑み、頷いてくれた。



「では、始めます。」

エリスはこちらに両手を向けて、詠唱を始める。

と、私の周りの空間にとつともなく膨大な神気が渦を巻く。

エリスの額に大粒の汗が吹き出す。

浮遊感があつたと思ったら、私の体が宙に浮いていた。

私たちのいる空間にバチバチと太い電流が走り出す。

空間が大きく揺らぐ。

エリスが詠唱を終えて、私に向けて大声で言う。

「めぐみんさん……いや、めぐみん!!!」

エリスはお頭がそうするように、ニカッと満面の笑みを私にくれる。

「それじゃあ歴史改変……」

エリスは片手を大きく上げ、指を鳴らす。

「いってみよう!!!」

「エリス!!! 本当にありがとうございます!!!」

私が叫んだ瞬間、私の周りの景色がどんどん巻き戻っていく。

あ、バニルに首をはねられた時だ。

と、思った瞬間、ゆんゆんとダクネスが私に向けて真剣に何かを言っている。

と、思った瞬間、ゆんゆんが私と並走している。逆走しているのがなんだか滑稽だ。

ダクネスに泣きつく私、

タイムマシンを調査する私、

ゆんゆんに泣きつく私、

そして、過去の二ホンへ……

……と、その時、バチン！と、大きな音がして、目の前が暗転する。

……まさか、タイムリープ失敗!?

天界の妨害だろうか!?

これまで感じていた浮遊感が無くなっていき、体が重さを感じ始める。

い、意識が……

……

……

……

## 第18話 ターニングポイント

.....

「はっ!？」

唐突に意識を取り戻して、目を開く。

そこは公園だった。

..... そうだ、この公園には見覚えがある。ニホンだ。

爆裂散歩の時点には戻れなかったのか。

××

「えーと、これから.....」

「×」

「え？」

× これからのことを確認しようとした私は、唐突に声を掛けられ、  
びつくりして声の主の方を向く。

声の主は黒髪黒目の美女だった。

カズマをおぶっているこの子、どこかで.....

と、タイムリープで時間を遡ったからか、私に過去の日本での記憶  
が戻ってくる。

..... そうだ、この子はアクアだ! やばい、接触してしまった!

バニルの説明では、私がアクアとカズマのやり取りに介入してはダ  
メなのだ。アクアの祝福魔法を妨げてしまう。

× 私は急いでその場を駆け出した。

××

「×」

× アクアが後ろから声をかけてくるが、これ以上の接触は危険だ!

××

そして公園を後にしてアクア達から見えないところまで来た。

「ハア・・・ハア・・・」

・・・と、途端に不安に襲われる。

もし今の接触でまた歴史を変えることになってしまったら・・・

「・・・ハア・・・ハア・・・2人の様子を見てみましょう。」

私は今来た道をUターンして、公園まで戻る。



隠れながら公園のベンチにいる二人の様子をうかがう。

そこには、カズマに膝枕をするアクアの姿があった。

× 普段絶対に見れない光景だ。

× 多分、アクアはカズマにお金を請求するだろう。

「×」

× アクアが独り言を言っているようだが、二ホン語だからか、私には

× 聞き取れない。

アクアは膝の上のカズマの顔を眺める。

そのまま数秒眺めて、

ふふっ、と笑顔になる。

・・・どんな意味の笑顔なのでしょうか。

その心中がとても気になる。

すぐにでも出て行ってアクアと話したいところを、グツと我慢する。



うと、……どうやらカズマが目を覚ましたようだ。

相変わらずカズマ達が、何を言っているのかわからない。

ところで、二ホンのカズマは私の世界の言葉が理解できなかったよ  
うだが、私と初めて出会ったときには随分と流ちょうに話していた。  
猛勉強して習得したのだろうか。それであれだけ流暢に話せるよう  
になったのなら、紅魔族以上に頭が良いと思う。

カズマとアクアの様子をみつっ、そんなことを考えていると二人に  
動きがあった。

どうやらアクアがカズマに別れを告げて歩き出したようだ。

カズマはそれをぼーっと見送る。

!!  
!!、思ったその時、

カズマがアクアに向けて、何かを叫んだ。

アクアはその大声にビックリしたようで、小動物のように少し怯え  
る感じでカズマの方を振り返る。

そしてカズマの緊張した表情……

気のせいかカズマとアクアを包む雰囲気が増しているよ  
うだ。

私もゴクリ、とつばを飲み込まずにはいらなかった。

カズマは緊張しつつ、少し震える声でアクアに語り掛ける。

……何だろう。

×カズマはアクアに何を言ったのだろうか・・・  
×言葉が理解できないのがもどかしい・・・

×「アクアは、ぽかーん、としたほうけ顔になる。その後、少し困った  
×ような顔をしてカズマに返答する。」

「××

×私の心臓はドクドクとなりっぱなしだ。

×何だろう。

×カズマはアクアに告白したのだろうか。

×好きだと想いを伝えたのだろうか。

×例えそうだとしても、アクアの表情を見ると、付き合うことにはな  
×らなかつたようだけれども・・・

過去にこんなことが・・・

そうですか。そうですか。

今、カズマの想いはアクアに・・・

「うう・・・い、いたい・・・」

胸がぎゅっと締め付けられ、うずくまる。

もう過ぎ去った筈の出来事なのに・・・

彼は将来、私に好きと言ってくれるのに・・・

でも・・・

ああ・・・

私はこんなにも嫉妬してしまっている。

「カズマ・・・私は・・・あなたが他の誰かにとられてしまうのが怖  
いです・・・」

いつの間に私はこんなに強欲に、こんなに弱くなったのだろうか。

・・・思えば、タイムマシンの一連の出来事で、私は自分の弱さをとことん思い知らされた。

泣きじやくって、

周りが見えなくなり、

周りにすがって、

こんなにも嫉妬して、

・・・

・・・ふと、誰かの言葉が胸に浮かぶ。

『私がカズマを、絶対、絶対、二ホンにいた時よりも、もっと幸せにしてみせます！出会ったことを、カズマに後悔なんてさせません!!』

そう、それは私の決意だ。

「・・・そうです、カズマの過去に何があつたとしても、私は絶対にカズマを幸せにするって決意したのです。」

顔を上げて前を向く。

「・・・だから、来てくださいね。カズマが来るのを私は待ってますよ。」

・・・と、その時だった・・・

アクアがカズマに手をかざした。

そして・・・

『ブレッティング』

淡い光がカズマを包む。

もとの歴史で何度も目にしたアクアの祝福魔法の光だ。

随分と懐かしく感じるその光を眺めつつ、私は自然と言葉を漏らす。

「……この瞬間に到達するのにどれだけ苦労したのでしょうか……」

アクアの祝福魔法はカズマに届けられた。

私はそれを確認して、

「では、また後で会いましょうね。カズマ、アクア。」

静かにその場を後にした。

## 第19話 ただいま

タイムマシンのところへ戻る道の途中、そいつは待ち伏せていた。

「貴様が禁忌を犯して過去に転生した紅魔族の娘だな。私は天界の天兵だ。」

異様な気配を放つ、翼の生えた男だ。

一目見ただけで強キャラであることが伺える。

エリスが言っていた天界の追っ手のようだ。

「エリスは・・・無事なのですか。」

「あの女は神の座から追放された。今は天界の一角の牢の中だ。近いうちに地獄に送られるだろう。」

その原因が私にあることに胸が痛む。

「天界規程により、禁忌を犯した貴様には転生も天国送りも認められぬ。地獄送りとなる。ここで引導を渡しに来た。」

そういつて天兵が手をかざすと、一瞬にしてその手の内に光の槍が収まる。

「死ね。」

と、言った瞬間、天兵が物凄い速さで私に接近してきた。

ヤバい。狩られる。

「ライトオブセイバー!!!」

私は叫ぶと同時、杖に爆裂魔法の光を込める。

「!!」

天兵は私の前で急制動し、私と距離をとる。

「む、その光は上級魔法では無く、爆裂魔法の光か。姑息な手を使いおつて。」

もちろん私はライトオブセイバーなんて使えない。ハツタリだ。カズマっばいこずるいやり方が伝染ってきた気がする。

「貴様、この日本で爆裂魔法を放つつもりか。日本で爆裂魔法など使えば取り返しのつかないほど歴史が狂うぞ。」  
「.....」

そう。私は、歴史をもとに戻すためにここまできたのだ。エリスにも、日本で爆裂魔法を使えば間違いなく歴史があらぬ方向に変わると忠告されている。

「まあよい。これで終わりだ。」

天兵はそう言って、ぶつぶつと詠唱を始める。

天兵の前に人の大きさ程の魔法陣が浮かび上がる。格好良い。つて、見惚れていてどうするのですか!!!!

このままだとヤバイです！死にます！

ああ、魔法陣の輝きが増してきました！

地の文が敬語になってしまいうくらいテンパっています！

もうなりふり構わず爆裂魔法で終わらせたいのですが!!

天兵の魔法が発動する・・・

・・・

・・・

・・・

『ちよつとあんたら!!私の世界で何やってるの!!』

甲高い叫び声。

毎日屋敷で聞いていたはずの彼女の声だ。

彼女の姿は見えない。天界から直接声をかけてきているのだろうか。

天兵の目の前の魔法陣が掻き消える。

「む、女神アクア様!？」

『あんたはエリスのところの天兵ね!それに、あなたはさっきのコスプレ嬢!その光・・・爆裂魔法!?!エリスのところの紅魔族の子ね!エリスはあとで説教ね!まったたく!』

そして、パチンという指を鳴らす音と共に、周りの景色が歪む。

次の瞬間、私と天兵は別の場所に飛ばされていた。

どこまでも真っ白い床が続く何もない空間だった。

『ほら、そこならいくら暴れても、外に影響はないでしょ。喧嘩ならそこでやってちょうだい!』

「アクア様!!あなたにも通達が行ってませんか!?女神エリスがタイムリープの禁忌に触れ投獄されたと!それで紅魔族がこの世界に送られたと!」

『はあー?私さっきまで出かけてたから通達なんてわかんないんですけど!てか、パッド女神ならさっきまで私のところにいたんですけど!』

「アンタ、ちゃんとわかるように説明しなさいよ!!」  
「……ですから!!」

私はアクアと天兵のやりとりを唾然と眺める。

「……たまに、アクアは美味しいところを持つていく天才に感じることがある。」

「……全く……アクアは……」

こんな状況なのに、何故か笑みが浮かんでくる。

私は杖先を天兵へと向けた。

「……くっ、駄女神のことは後回しだ。『なんですってー!!!』今は紅魔の地獄送りを……」

『『エクスプロージョン』 ツツツツ!』

真っ白な空間に、真っ赤な爆裂の華が咲く。



『……あのクソ天兵、最後にとんでもない暴言吐いていったわね。エリスの教育はどうなっているのかしら。今度、胸パッド取り上げて、メルカリで出品してやるわ!』

アクアの姿は見えない。声だけが空間に響く。

『それにしても、アナタ、天兵を倒すなんてやるわね。アナタの世界の基準でもかなり強いのに……って、アナタなに寝てるの?』

限界を超えた魔力を使っつてうつつ伏せに倒れる私にアクアが問いかけてきた。

「私は今の超魔法で動けないのです。天兵と戦ったところの先の丘



に、自動車があるのですが、そこまで移動させてもらえないでしょうか。」

『自動車？ああ、そういうえば何だかこの世界に存在しない妙な力を放つ車があったわね。』

そういえば、今アクアと会話してしまっているが、歴史に悪影響は無いのだろうか。

まあ、してしまったことは仕方がない。バニルの連れてきた、あのつじつま合わせの悪魔の力にも期待しよう。

と、私が寝そべる床に魔法陣が浮かび、だんだんとその発光が強くなる。

『そこまで移動してあげるから、あれもエリスの世界に持って行ってよね。』

目の前に広がる白い空間が魔法陣の光に包まれていく。



気がつくと私は、タイムマシンの運転席のところまで移動していた。

「うぐぐぐぐ．．．．．」

私は魔力の枯渇した体に力を込め、なんとか『戻る』ボタンを押す。

タイムマシンがキューンなどと音をたてて起動する。

「ハア．．．ハア．．．」

これ以上は動けない。私はシートに体を預ける。

やるべきことはやったと思うけれども、これで本当に帰れるのだろうか。

．．．．．  
．．．．．

戻った先が、またおかしな歴史だったらどうしよう．．．．元の洞窟からアクアが消えていて、アクセルの街が廃墟となっていて、屋敷に誰もいなくて、誰もカズマとアクアを知らなくて、ダクネスが私のことを知らなくて、死ぬほど痛い思いをして．．．．タイムマシンは宙へ浮遊して高度を上げる。

お願いします。どうか、私を元の歴史に返してください。  
神様、エリス様、ついでにアクア様．．．  
どうか．．．どうか．．．どうか．．．



そして、一面真っ白な光に包まれていく．．．．。

気がつくど、私は元の洞窟へと戻ってきていた。

「めぐみん！大丈夫!？」

アクアがタイムマシンのドアをあけ、心配そうな顔で私を見ている。

なぜ、アクアはそんな顔をしているのだろう。

確か、タイムマシンが急に動き出して空を飛んで．．．気がついたら、元いたこの洞窟だ。

なんだか、すごく長い夢を見ていた気がするけれども．．．

「めぐみん？あなた、泣いてるの？」

「え？」

アクアが心配そうな顔をして私を眺めている。

「あ、あれ？本当ですね。どうしたのでしょうか。」

アクアの顔を見た途端、ものすごい安堵の気持ちがあふれてきたようだけど。

「大丈夫です・・・あれ、体が・・・」

これは爆裂魔法を撃った後の魔力枯渇の症状だ。

「めぐみん、もしかして、日本で爆裂魔法撃ってきたとかじゃないわよね・・・そんなことしたら、大騒動になっちゃうじゃないの。ん？でも今は私の担当じゃないし、別にどうでもいいの？まって・・・あれー？」

『可動限界に達しました』

アクアが頭の悪そうなことを言っている最中、タイムマシンがポーンと音を出して煙を上げる。

「あら、そう言えば、今の警告メッセージがしたらタイムマシンはもう二度と動かせないってあの手記に書いてたわ。めぐみんがタイムマシンで過去に行ってる間、読み直してみたのよ。」

「そういうのは出発する前に知っておきたかったですよ。もし過去に行った時点で可動限界を迎えてたら帰ってこれなくなってたじゃないですか。」

「まー帰ってこれたからよしってことで。」

アクアが、にへら、と笑う。

まあ、そうですね。

と、そこで、なんとなく気になったことをアクアに聞いてみる。

「ところで、アクア、私たち、アクセルで出会う以前に会ったことありませんでした？」

「め、めぐみん！」

アクアは驚愕に目を見開く。

「いったいどこでそんな口説き文句を覚えたの!? 誰に教わったの!? ダメよ。アナタは美少女なのだから、そんな周りくどいこと言わずに正面から気持ちをぶつけるだけでいいの！」

どうやらアクアには心当たりがないようだった。



アクアにおぶってもらい、屋敷の道に行く。

途中で私が過去に行っていた間のことを聞いたが、数分程度で私は戻ってきたようで、その間、特に何も無かったとのことだった。

途中で見たアクセルの街の風景は今日も平和だった。街の景色を見るのが怖いような、そんな気がしたのはなぜだろう。

・・・そして屋敷の前までやってきた。

「ア、アクア、ちよつと屋敷に入るのは待ってください!」

「え?どうして?」

カズマとダクネスがそこにいないのではないか、という妙な不安が襲ってくる。

「い、いえ、何となくなのですが・・・」

「そうね、カズマさんが玄関にフリーズをかけて足を滑らせる罠をはっているかもしれないわね。慎重に行きましょう。」

「あ、いや、そうではなくて・・・」

アクアは私の不安を意に介することなく、屋敷の扉を開け放つ。

「ア、・アクア!?!ちよつと・・・」

怖い・・・怖い・・・怖い・・・怖い・・・



「ふん!お前の息子など、エクスカリバーなどという名剣とは程遠い。精々、ちゆんちゆん丸がいいところだ。」

「い、言ったな！言っとくがな、男の子の待機状態はみんなちゅんちゅん丸なんだよ！俺が戦闘態勢になったら、それはもうデストロイヤー級だぞ！」

屋敷に響くいつもの喧騒。

「まったく。今まで喧嘩していたのかしら。どう転んだらこんなセクハラトークになるのよ。ただまー!!!」

「あー!!!ペロティーナ!!!今鼻で笑いやがったな!!」

「なああああ、ペロティーナはヤメロオ!!」

「ペロティーナ、おかえりを言っただけでしょ」

「アクアまでツ・・・」

懐かしくて懐かしくて、胸に満ちていく安心感。

「アクア！戻ったか！お前もダクネスに何とか言っただけよ！」

「アクア、ダスティネス家の権力でこの屋敷の名義をアクアに変えてやるから、一緒にクズマをこの屋敷から追い出すぞ！」

「あら、いいわね。それなら、ゼル帝にクズマの部屋を使わせてあげましょう。」

「よし、今日の晩御飯は唐揚げだな。えーと、片栗粉はあったかなー。」

・・・ああ、やっと帰って来れた。

ダクネスとカズマが、アクアの背中におぶさる私に声をかけてくれる。

「おかえり、めぐみん。騒々しくてすまん。」

「ああ、めぐみん、おかえり。今日の爆裂は何点だった？」

その言葉に、私は、

「た・ただい・あ、あれ？」

「ど、どうした!？」

なぜか、涙が溢れるのだった。

「た、ただいまっ!!!」

## 第20話 あなたと出会えた奇跡に永遠を！

【バニル視点】

我輩は、ポーションが詰まった箱を両手で担ぎ、それを返品すべくアクセルの街を歩いてた。

「全く、賞味期限切れのポーションなど初めて見たわ。あの賞味期限切れアンデッド店主め、いよいよ頭もゾンビ化してきおったか。」

と、我輩の先、頭のおかしい紅魔の娘と成金小僧が連れ立って歩いて行った。

爆裂散歩などというフザけた日課に向かうところなのだろう。

.....

「ほう、あのロリータ紅魔族め、やりおったか。」

.....と、我輩のもとまで二人組の声が聞こえてくる。

「唐突に思い出したんだけど、俺、日本の服屋で買い物していた時にコスプレをした美少女に声をかけられたことがあるんだよ。俺よりちよつと年下っぽくて、物凄い美少女でさ、俺のことを、ぽーつと見てて、俺に一目惚れしたみたいな眼差しだったな、あれは。」

「カズマに一目惚れ？という夢を見たのではないですか？もしくは、そのコスプレの女の子は頭がおかしかったに違いありません。」

「そんなこと言ってやるなよ。全然わからない言葉で話してたから外国の人みたいだったし、日本の常識とかわからなかったのかもしれないし。」

「ちなみにどんなコスプレだったのですか？」

「どんなって.....あれえー？なんか魔法使いっぽかったような.....あれえー？」

「ほら、やっぱり夢だったのですよ。」

ふむ、マクスウエルのつじつま合わせの力もうまく作用しているようだ。

我輩はそれを確認すると、

「さて、この不良品を処分した後は・・・」

独り言をつぶやき平和なアクセルの街を再び歩き出す。



### 【エリス視点】

「ふわああああ」

私は天界の執務室で、大あくびを漏らした。

ここ最近では死者数も少なく、天界の仕事も少ない。とても喜ばしいことなのだが、気が緩んでしまう。

「そういえば昨日、変な夢を見たんですよ。禁忌に触れて天界の牢獄に囚われる夢なんですけどね。」

私は近くの彼に向けて何気なく話題を振る。

「何を言っているんですか、エリス様、そんな事態になって私が出兵しなきゃならなくなったらどうするのですか。嫌ですよ、私は。だいたい、禁忌なことをなされなくても、気がついたら下界に遊びに行かれたりして、こちらでも苦労しているのですから。」

苦労していると言いつつも、そこに横になって日本のお菓子を食べながら日本の漫画を読んでいる自堕落な天兵が応える。

ちなみに下界には遊びに行っているのではない。神器を回収したりいろいろ大変なのだ。

「たまには世界がひっくり返るレベルの重大事件が起こって、女神とし



て勇者を導きたいものです。」

「ちょｗｗｗｗエリス様ｗｗｗｗ」

天兵がとつてもウザいです。今度、ブラックで有名なあの女神のところへの人事異動でも考えておきましょうか。

「さて、下界の様子でも確認しますか。」

私は、女神の能力を使って下界の様子を確認する。

あそこを歩くのは助手くんとめぐみんだ。

そういえば最近、クリスとして彼らと接してないなあ。

「たまにはお頭として、部下にカツコいいところでも見せたいんだけどね・・・」

そして、私は、次の神器回収について思いを巡らせる。



### 【カズマ視点】

めぐみんと俺は日課の爆裂散歩に来ていた。

「めぐみんの爆裂散歩みたいに俺もスキルを磨く日課でも始めようかな。」

「それはいい心がけだと思います。初級魔法散歩でもするつもりですか?」

「ほら、俺っていったらステイルだろ。常識的に考えて。ステイル散歩とかどうよ。」

「それ、ただの連続下着ドロじやないですか。単に女の子のパンツ盗みまくりたいだけですよね。やめてくださいよ。」

めぐみんが危ない人を見る目で俺を見る。

まあ、めぐみんの調子が戻ってきたみたいで良かった。

昨日、めぐみんが帰ってきてからポロポロ涙を流すという謎な出来事があったが、めぐみんも原因がよくわからないらしい。

アクアとの爆裂散歩の途中でタイムマシンを見つけてそれで過去の日本に行ってきたようだが、そこでなにがあったか、覚えてないとのことだ。

ただ、何かしら思うところがあるようで、昨日から、めぐみんがやたら俺や仲間達にくっついて行動するようになった。

突然、いなくなるのが心配なのだとか。

と、回想してる間に、タイムマシンがあったという洞窟までやってきた。

「本当に壊しちゃうのかよ？ 勿体無いなあ。せめて俺にもタイムマシンとやらを見せてくれよ。」

「駄目です。それでカズマが国に帰りたくなってしまったら困ります。」

「いいだろ、先っちょだけ、先っちょだけでいいから。」

「何ですか？ なんかセクハラっぽいのですが。」

めぐみんはふくれ顔をこちらに見せたあと、洞窟の方面を向く。

そして、洞窟に向けて最強の魔法を放つ。

今日は長めの詠唱入りだ。

『『エクスプロージョン』つつつつつ!!』

爆裂魔法の閃光が走り、次の瞬間、大地を震わす轟音とともに、洞窟のあった位置に天まで届きそうな土煙が舞い上がる。

あんなの喰らってダクネスはよく生きていたものだ。あいつは本当に人間だろうか。俺なら骨のひとかけらも残らないだろう。

そして洞窟は、跡形も無く消え去った。

中に入ったものも木っ端みじんだろう。

「なんだか今日の爆裂は迫力が違ったなあ。怒りのパワーがこもって  
た気がするぞ。」

魔力切れをおこしたためぐみんに魔力を分けつつ声をかける。

「でも、俺もせっかくだし過去の日本に戻ってみたかったな。」

実家に戻るなら、あのゲームをやりたいし、部屋にあった秘蔵の  
アレやアレなんかを処分したかった。まあ、今更だけれども。つて  
か、アレが発掘されてしまったら絶対に日本なんて帰れない。

めぐみんは立ち上がって、ローブに着いた土などをパンパン払いな  
がら言う。

「タイムマシンは可動限界を向かえたとかでつかいものになりません  
よ。そもそも、記憶が消えてしまうので乗っても意味ないです。それ  
に・・・」

めぐみんは、唐突に俺の方に歩み寄り、俺の腰のあたりに腕をまわ  
して密着する。

「もしカズマが戻ってこなくなったら、私はきつと、すごくすごく辛  
いです。」

俺の胸に顔をうずめるめぐみん。

この娘の愛情表現は突然のことが多いから、いつも焦ってしまう。

俺は唐突なめぐみんハグに動揺してどもりながら言葉をハッスル、  
ではなく発する。

「ま、まあ、そうだな、大事なのは今だな！ア、アクシズ教の人も今は  
笑って過ごしなさいって言ってたしな！」

俺のちゅんちゅん丸がデストロイヤーして、めぐみんのお腹にドレ  
インタッチしそうになったので、すかさずめぐみんと少し距離を開け  
る。

めぐみんは上目遣いで、ぶー、と不満そうな顔をして、パイと向こ

うをむいてしまう。

そしてそのまま、

「カズマ、私は・・・過去であったことを全く覚えてはいませんが、」

辛そうに言葉を吐き出す。

「すごく寂しくて、悲しくて、怖くて、諦めてしまいそうで、死ぬほど痛くて、胸が苦しくて、そんな感情だけが残っています。」

「でも、」

めぐみんがこちらを振り返る。

「そんな中で、なぜかわかりませんが、私が強く決意したことがあります。」

目を爛々と紅く灯しながら、彼女の視線は、まっすぐ俺の目を捉える。

「カズマ、」

「あなたがこの場所に来てくれたことを、」

「私は、絶対に、後悔させません。」

そして、優しく微笑み、言葉を紡ぐ。

「カズマ、」

「私と巡り合ってくれて、」

「私のそばにいてくれて、」

「私に大切な場所をくれて、」

「ありがとう」

めぐみんの満面の笑みは、このくそつたれな世界に来てよかったと心から思わせるほどの、最高の笑顔だった。

### 第3章 ダクネス編

#### 第21話 ある紅魔族の少女

【アイリス視点】

.....

.....

.....

..... 気付くと私達は王都の近隣の村まで移動していた。

遠くに王城を眺められる位置にある場所の村だ。

..... と、私の後ろに立っていた人物がドサリと崩れ落ちる。

「はッ!!レイン!!」

私は慌てて振り返る。

「ハア.....ハア.....すみません.....アイリス様.....あまり遠くまで行く余裕が無くて.....」

「よ、よいのです!あなたのおかげで助かりました!それよりあまり喋ってはいけません!!」

レインはハイデルによつて止血を終えていたが、かなり血を失っているようで顔が真っ青だった。

「.....レインは私がおぶります。早く回復魔法で傷を塞がないと.....」

レインの隣にいたクレアがレインを支えながら言う。

見ると、クレアのトレードマークである白いスーツはレインの血で真っ赤に染まっていた。

「そ、そうですね。この村の教会は・・・」

私が言いかけたその時だった。

遠くに見える王城の上層・・・

カツという光が走り、大きな赤い爆炎が王城の上層階を飲み込んだ。  
だ。

ビリビリと大地が震動する。

数秒後れてゴゴゴという音が到達し、

王城からかなり距離があるこの場にまで爆風による圧が届く。

その爆心地は今まで私達がいた場所だった。

「ら、ララティーナ・・・」

「ダステイネス卿・・・」

私と一緒にクレアやハイデルもその光景を見て息をのむ。

ほどなく王城の上層部を覆う煙が晴れていき、上層の吹き飛んだ王城の姿が明らかになる。

「「・・・・・・・・」」

誰もがその光景に言葉を失う。

.....

・・・しかし私たちはここで呆然としているわけにはいかないのだ。

「・・・行きましょう。早くしないとレインが危ないです。」

「アイリス様・・・」

クレアの眩きを背に、私は一步前に進む。

感傷に浸っている暇はない。

王族として生まれた私が進む道は地獄すら生温い修羅の道。

民を見捨てて逃げた私は、きっと地獄に落ちるだろう。

「先に地獄で楽をしようなど許しませんよ、ララティーナ・・・」

私は王都に背を向けて、一步、また一步、道を踏みだす。

来るべき人類の反撃の日に向けて、私は道を歩み続ける。



【ダクネス視点】

この日も平和なアクセルの街の近隣の平野に私達はいた。

「『エクスプロージョン』っ!!」

大気を震わせ、全てを飲み込む爆炎が一带に吹き荒れる。



うむ、いつ見ても惚れ惚れする迫力だ。

ちよつと爆心地に立つてみたいが、下手をすると爆死して周りのみんなに迷惑をかけてしまうからな。今は自重しておこう。

「すす．．．凄いです！」

私の隣には姪のシルフィーナ。私に縋り付き、目を輝かせて爆炎を眺めている。この子は最近爆裂魔法にお熱なようだ。

「ふぐう．．．」

全てを凌駕する強大な魔法を放った小柄な紅魔族の少女は力を使い果たしてその場に倒れこむ。彼女はシルフィーナの前で随分と張り切っていた。いつもよりも力を籠めて魔法を放ったのだろう。

「ママー！凄いです！凄いです！」

シルフィーナは私を揺さぶりながら連呼する。

私はシルフィーナの母ではないのだが．．．

シルフィーナの頭を撫でながら私は語り掛ける。

「そうだろ．．．私の仲間の魔法使いは凄いだろう。」

「わ、私もいつか爆裂魔法を．．．」

「シルフィーナ、それだけは止めるんだ。」

頭のおかしいことを言い出した姪に、私は真顔で言って聞かせる。

「おつとダクネス、うら若き者の将来の可能性の芽を詰むのは止めてもらおうか。」

傍で倒れ込む紅魔族の彼女が恨みがましい顔を私に向けてきた。

「うら若き者の将来の可能性を広げるため悪しき芽は摘んでおくのだ。」

倒れて動けない彼女をおぶりつつ私は彼女に応える。

「あ、謝って！爆裂魔法を悪しき芽とか例えたことをちゃんと私に謝ってください！」

彼女は私の背中で暴れながら、どこかのアクシズ教徒のようにわめく。

爆裂魔法を放つても消耗しきっておらず、まだ結構体力が残っている気がするのだが……

「悪かった悪かった。私もお前のスキルを馬鹿にできるほどマトモなスキル振りをしていないからな。」

まあ、私らパーティーはみんな極端に癖のあるスキル振りをする連中ばかりなのだが……

「さて、まずはこのままシルフィーナを家まで送っていこう。」  
シルフィーナの手をとって私は帰り道を歩き出す。

歩き出した矢先、私は、ふと同じパーティーメンバーの男のことを思い浮かべる。

えーと……

「今日は、あの男は何をしているんだったか……あの男……カズ……えーっと」

「あの男はクリスと一緒に神器回収に出かけてますよ。何でも魔法無効化の腕輪の神器を狙っているとかなんとか。」

「全く……自分らに懸賞金が掛かっているというのにそんな危険なことを……まあ……あの二人なら、そうそう簡単に捕まらないだろうが……」

私は、ハアと息を吐く。

すると、ぼそつと背中から声が聞こえる。

「それにしても、ダクネスにおんぶしてもらうのは久しぶりですね。」

「そうだったか……だが、私なんかよりあの男におんぶしてもらったほうが良いだろう。」

そう、私がおぶっているこの紅魔族の少女は確か、あの男に強い好

意を抱いていて・・・  
そして私も・・・

しかし、背中の少女は、  
「確かにあの男の背中では安心できます。・・・けど、ダクネス・・・私  
はこの頼れる背中も大好きですよ。」  
そういつて私にしがみつく腕に少し力を込める。

まったく、この少女は、よくまあ、こういう恥ずかしいことを何  
気なく言えるものだ。

この魔性の少女、最強魔法の使い手、めぐ・・・

めぐ??

誰だろう？

名前は・・・？

ええつと・・・

・・・

・・・

・・・

## 第22話 夢と現実と

瞼の裏に朝の陽の光の眩しさを感じ、私はそつと目を開いた。

「またこの夢か・・・」

最近、ある夢を見る。

おかしな三人組とパーティを組んでおかしな日常を送っているというおかしな夢だ。

本当におかしなやつらなのだが、夢の中の私はそのおかしな仲間たちのためなら命を張れると本気で思っているようなのだ。

私は盾職クルセイダー、他者のために盾となることは心得ているが・・・

しかし、夢から覚めると、その仲間たちの名前も顔も覚えていない。

「まったく・・・何なのだ・・・」

私は何度も夢に見るくらいに仲間というものに憧れているのか。

自分で言うのも難なのだが・・・私のような趣味全開なスキル振りをするような輩を仲間に加えてくれるようなやつもそうそういない。

故に私は基本的に独りだ。常日頃行動を共にする仲間がいない。

とある盗賊の子がたまに私と一緒に冒険に出てくれてはいるのだが、その子は他にも仕事があるようで常日頃私と一緒にいてくれるわけでない。

・・・

「仲間か・・・」

いや、考えるのはよそう。

きつとこの夢は、昨晚、私の48の夜の一人遊びの中でも最高難易度のアレに挑戦していたからに違いない。

.....

「くウウンっ・・・！」

アレを思い出して調子を取り戻した私は朝の支度を始める。



ここは王都。

私の実家であるダステイネス家の屋敷はアクセルの街にあるのだが、私は今、ダステイネス家の兵を連れて王都防衛にあたっている。

というのも今、王都はデストロイヤーの襲来を受けて深刻な被害を受けている。更に魔王軍に不審な動きがあり、王都が狙われるのではないかという噂もあった。

そこで、デストロイヤーに蹂躪された王都の復興の間、私は兵を連れて王都の防衛に手を貸しているのだった。

ある日の夕刻。

アイリス王女、側近のクレア殿、同じくレイン殿と私はこの日たまたま一緒に休憩をとることができ、王城の中庭でテーブルを囲み、束の間の休憩に話の花を咲かせていた。

「・・・という夢をここ最近毎日見ている、何だか朝から妙な気分になるのです。」

「まあ、ララティーナも最近おかしな夢を見るのですね。」

「え？アイリス様もですか？」

「そうなのです。夢の中では、私にもう一人お兄様がいて・・・そのお兄様なのですが、黒髪黒目で、何というか、その・・・すごく自由気ままな不思議な方で・・・」

「わ、私の夢にもそんな男がでてきます!」

私がおかしな三人組の夢の話を切り出したところ、アイリス様もおかしな夢をみているのだという。しかも、夢に同じような不思議な男がでてくるという。偶然だとは思いますが・・・

それを聞いたクレア殿が口を開く。

「黒髪黒目というと、出生地不詳のどこからともなく現れる強力な能力や装備をもった者の特徴ですね。イケメンのミツルギ殿を始め、黒髪黒目の者達には王都の防衛でもお世話になっていますね。その夢の中の不思議な男というのはどんな強力な能力や装備をもっているのですか?」

クレア殿の疑問に私とアイリス様は目線を合わせる。

え? そんなんもつてた?

いや、もつてへんで。

せやろ、私んとこの男ももつてへんわ。

的なことを目で語り合う。

「いや、特筆すべき能力や装備は持っていないな。それどころか、基礎的な戦闘力が低い奴で、できるだけ楽に生きたいと常日ごろ言っており、日がな一日家でゴロゴロしている冒険者兼ニートだな。」

私とその男のことを思い浮かべて言うとアイリス様もうんうん頷づく。

「アイリス様! たとえ夢であっても、そんな男をお兄様などと呼んで慕うのは許しませんよ! それなら、私をお姉様とお呼びください!」

「クレア様! 願望が漏れています!」

語調強く鼻息荒いクレア殿にレイン殿が突っ込みをいれる。

「クレア、夢の中ではお兄様に随分とお世話になったのですよ。お兄

様は私にいろいろなことを教えてくれました。」

「い、いろいろなエロいこと!?う、羨ま・・・でなく、王族に妙なことを吹き込もうとはなんと不屈きな輩か!会ったら我が剣の錆にしてやる・・・!」

「エロいこととは言ってません。」

アイリス様が真顔で否定する。

「まあまあ、クレア様、単に夢の話ですから落ち着いてください。」

レイン殿がクレア殿を宥める。そしてアイリス様と私に向き直り語る。

「ある書には、夢に見る世界とは、世界のありし可能性の一つである、と記すものがあります。もしかしたらアイリス様やダスティネス卿が見た夢も、この世界の可能性のひとつの現れなのかもしれませんね。」

「世界の可能性のひとつ・・・」

私にとってその言葉は妙に腑に落ちるものだった。

夢にしては、妙に現実味があったのだ。

「夢の中の世界は、今のようによつてテストロイヤーに王都を蹂躪されておらず、王都の住民の表情にも希望がありました・・・」

アイリス様の言葉に、王都の現状を知る我々は続ける言葉を失う。

私も、おかしな仲間たちとの笑いであふれる日々の夢を胸に思い浮かべる。

希望か・・・

「魔王軍の侵攻に日々おびえることのない、そんな世界があるのならば、それはとても素敵なことですね。」

アイリス様はぼつりと言った。

## 第23話 ある青髪のプリースト

「おおっと！誰かと思えば清く気高く美しい高名なプリーストの娘に、凛々しくも美しく不屈の精神を持つクルセイダーの娘ではないか！いらっしやいませー。」

とある魔道具店の扉を開けると、仮面の悪魔の胡散臭い歓迎を受けた。

「ねえ、ダクネス、絶対この悪魔、いやらしいこと考えているわよね。」

「ああ、間違いない。おいバニル、とつとと捌きたい商品をだせ。そしてデメリツトの説明義務を果たせ。」

「何をおっしゃっているのかよくわかりませんが、我が親愛なるお客様方よ！まあ、そちらの椅子にお掛けください、仕入れたの素敵な商品を購入できるラッキーなお客様方！おっと、ただいまお茶をお待ちします。しばし待つが良い！」

満面の笑みを浮かべる仮面の悪魔に私達は胡散臭いものを見る目線を向けつつ、椅子が添えられているテーブルに向かう。

えーと、私はなぜここに来たんだったか・・・

・・・そうだ、私は、隣の青髪青目のアクシズ教プリーストに『巨乳リッチーのところ遊びに行くの！ほら早く準備して！』とか言われて、唐突に魔道具店に連れてこられたのだった。

私達は椅子に掛けてヒソヒソと話し合う。

「ねえ、アレ、絶対変よ！いい？ダクネス、どんなものが出てきてもNOよ！NOというNO（の）！」

「もちろんだ。あんな態度をとるなんて今までの欠陥商品がかすむほどのとんでもないものを売りつけようとしているに違いない。」

小声で話し合う私たちのもとに仮面の悪魔はお茶と液体の入った小瓶を数本持ってきた。



「汝らは屋敷の庭で野菜を育てているようだな。さて、今日の商品はこちら、どんなお野菜も瑞々しく栄養満点に育つ栄養剤である。」

「あら、確かにうちの野菜たち、ちよつとうちのちよつぱい紅魔族みたいに発育が悪くて困ってたのよね。ちよつど栄養剤を探していたところなの。」

仮面の悪魔はニヤリと笑う。

「ふむふむ、そうであろう。そうであろう。」

「ダクネス、お小遣いをちよつぱい。」

「おい！NOはどうしたNO（の）だ！」

ロクに商品説明も聞かずにお金を求めたアクシズ教徒に焦って待ったを掛ける。

一緒に来ておいて良かった・・・

「して、どんなデメリットがあるのだ？どうせ、栄養剤を使うと成長が早くなりすぎて収穫時期が一瞬で過ぎて枯れるとかだろう。」

「ぶー。ハズレー」

「んじや何かしら、値段が物凄く高いとかかしら？」

「ぶー。ハズレー。」

「ではアレだろう。周りの草まで育ちまくって草むしりが大変になるのだろう。」

「ぶー。ハズレー。」

「何よ！わかんないわよ！四択にしてちよつぱい！」

何だかクイズみたいになっているのだが・・・

「野菜の強さが魔王軍幹部クラスになるのだ。」

「ちよつと、なんで野菜とるのに全滅の危険にさらされないとならないのよ！ダメよ！やっぱりこの悪魔はダメ！チエンジよ！巨乳店主をだしなさい！」

アクアが喚きだすと、仮面の悪魔は、やっぱりだめか、といった残念そうな表情でハアと息を吐く。

「この商品を入荷した脳みそカリフラワー幹部店主なら商品の返品に行かせているぞ。」

「じゃあここで待つことにするわ。お茶菓子を持ってきてちょうだい。」

「ほう、悪魔にお茶菓子を所望するとはいい度胸だなダメヨクダメ駄女神が！貴様にはデットリーポイズンとこころてんスライムをお出ししてやるから、美味しく味わってぽっくり逝くがよい！」

「そんなの浄化の力で美味しくいただいてやるわ変態仮面！そろそろ決着をつけましょうか・・・」

「おい、お前たち、店の中で暴れるな！お前たちが本気で暴れると魔道具店が潰れて柄店主が路頭に迷ってしまう！」

今にも戦争がはじまりそうな中、私は慌てて二人の仲裁にはいる。

「ええい！おい脳筋クルセイダー！やはりこの悪質（アクシズ）教徒は出禁だ！次に来るときにはあの小僧を連れて来るが良い！」

「そ、そうだな、あの小僧だな・・・あの・・・えーつと・・・名前は・・・」

あの小僧・・・

確かに私のパーティーに一人男がいたのだが・・・そいつは・・・

おかしいな。名前が出てこない。

「む？あの鬼畜小僧のことを忘れたのか？」

「い、いや、覚えているぞ・・・あ、あいつだろ、あの、えーと・・・」

「え？ダクネス忘れちゃったの!?あんな強烈な鬼畜ニートなんて忘れる方が大変でしょうに！ダクネスポケちゃった？若年性アルツハイマーなの!?!」

「いや、いくら何でもパーティーメンバーのことを思い出せないなど・・・ちよ、ちよつと待ってくれ・・・えーと・・・」

私がうんうん悩む姿をバニルはじつと見ている。

私のことを見通しているのか・・・？

「ふむふむ。なるほどなるほど・・・。これは・・・歴史が・・・うーむ。ちと面倒なことになっているな・・・」

見通す悪魔は顎に手を当てて、何やらぽつりとつぶやく。

「汝、アクセルの街に行くがよい。おそらくそこにいるロリータ紅魔族が厄介なことをしてくれたようだ。」

「は？何をいつて・・・アクセルの街なら今ここ・・・」

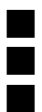
悪魔はコツコツと私の目の前まで歩いてくる。

「夢から覚める時間だ。我輩も少しやる事ができた。」

悪魔は手をすつと上げ、その人差し指が私の額に触れる。

「な、なにを・・・」

私はスツと意識が抜けていき・・・



「・・・んっ・・・」

額に何かが触れる感覚があつて私は目を覚ます。

私が目を開くと目の前で、落ち着いた霧囲気を纏う巨乳プリーストが私の表情をうかがうように私の額に手をかざしていた。

「あら、ダステイネス卿、お目覚めになりましたか。」

「セレナ殿・・・あれ？ここは・・・魔道具店では・・・」

「魔道具店・・・？ここは王都近隣の平原ですよ。魔王軍を追い払ったあとじゃないですか。」

王都近隣の平原??魔王軍を追い払った??

・・・

・・・

・・・そうだ。

私は王都の近くに魔王軍が攻めてきたとの連絡を受けて、兵士や冒険者たちと一緒に魔王軍の討伐に向かっていたのだ。

一通り相手勢を追い払い、その場に築いた簡易キャンプで兵たちと休憩を取っていたんだった。

少し眠ってしまったようだ・・・。

「ダステイネス卿、何かいい夢でも見てましたか？随分と楽しそうな表情をして眠っておりましたか。」

「あ……え？そうでしたか？いや、緊張感が無く申し訳ない……」

セレナ殿がふふふ、と笑顔を作る。

この巨乳プリースト、セレナ殿はデストロイヤーの襲来の被害にあった人を助けたいと、数カ月前に王都に現れたプリーストだ。

プリーストとしての責任感が強く、今日のような戦場に率先して参加してくれて、支援や回復を担ってくれる。それゆえ兵士たちや冒険者たちからの信頼も厚い。

厚いのだが……

「あら？ダステイネス卿、よく見ると手の甲に傷を負っていますね。今、回復魔法を掛けますね。」

セレナ殿の微笑みはまるで聖母のようだ。

セレナ殿は私の手の甲に掌を掲げて魔法を唱える。

『ヒール』

私の手の甲が淡い光に包まれて傷がみるみると癒えていく。

……

だが、なんだろうこの感覚は。

セレナ殿の回復魔法で感じる……私の意思を奪いに来るようなこの感覚はなんだろう。

まあ、傷は癒えているのだし、あまり気にはいけないか。

「いつもすまないな、セレナど……」

私が顔を上げると、

「……」

セレナ殿が私の様子をじつと伺っていた。

まるで何かを確認するように……

「……セレナ殿？私の顔に何かついてるのか？」

「あつ……いい、いえ！他に悪いところはないかなあ、と思つて……」

「そうですか。いや、大丈夫です。流石の回復魔法の腕ですね。すっかり傷も元通りです。」

「それは良かったです。前衛で相手の攻撃を受けるクルセイダーはとても危険なクラスですからね。無理をなさらないように。」

セレナ殿は微笑んで私のもとから離れていく。

傷ついた者への回復魔法や支援魔法、彼女がいてくれるのは心強い。

のだが・・・

なんだかこのプリーストには違和感を持たざるを得ない。

私は、周りの兵たちの様子を見渡す。

なんとというか、セレナ殿を見る目が信頼を通り越して、尋常でない気がする。まるでセレナ殿を神のように崇拜するような・・・

確かにセレナ殿はプリーストとして優秀だ。だが、普通それだけでこんな目を向けるものなのだろうか・・・

いや、神に仕えるクルセイダーの私が聖職者を疑ってしまっただうする。

私は彼女の背中を複雑な気持ちで見送った。

## 第24話 ある黒髪黒目の冒険者

魔王軍討伐の任務から戻った私は兵たちと別れて城下町で復興の様子をうかがっていた。

少し前まで、城下町は一带ガレキだらけだったが、今ではガレキの撤去も済み、ちらほらと露店も現れ始めている。

だが、未だに建物の多くは崩れた部分に簡易に布を張って風雨を凌いでいる状況だ。

人手不足の現状、もとの王都の活気を取り戻すにはもう数年はかかりそうだ。

そんなことを考えながら歩いていると、私に掛かる声があった。

「ダクネス、ダクネス！」

私が声の主に目をやると、そこには銀髪の盗賊クリスの姿があった。

「やっほー、ダクネス。なんだか久しぶりだね。」

「クリスか。本当に、久しぶりだな。確か、最後に会ったのはデストロイヤーがアクセルを襲うよりも前だったか。」

本当に、そのあたりからパツタリとクリスの姿を見なくなったのだ。

「あー、そのあたりからちよつと立て込んじやつてさあ。」

なんだろう、デストロイヤー襲来後に盗賊職の需要が増えたという話は知らないが。

土木作業のバイトでも始めたのだろうか。

「今日はダクネスに伝えたいことがあつてね。」

「私に伝えたいこと？」

クリスの前置きに私は耳を傾ける。

「ダクネス、魔王軍の動きがおかしいんだ。もしかしたら、この王都への総攻撃が近づいているのかもしれない。」

「・・・魔王軍の総攻撃か」

人手が足りない王都、防衛の要である騎士たちも本来の職を離れて復興作業に加わっているような状況だ。

もし本当に総攻撃が迫っているなら騎士たちを本来の防衛業務に戻さないと、魔王軍の攻撃を凌げないかもしれない。

「貴重な情報、ありがとうクリス。しかし、よくそんな情報が手に入ったな。」

「ん、いやあ、盗賊職って結構情報に長けるものだよ。」

まあ、そんなものか。

「これでは、また一緒に冒険ができるのは、だいぶ先になりそうだな。」

私は苦笑しながら言う。

「今度のもつと長期で冒険をしたいのだがな。クリスは突然いなくなる人が多いから。」

「あ、あはは。まあ、私も臨時の仕事とか多いからね。平和になったら、ダクネスも長くパーティーを組める素敵な仲間が見つかるといいね。」

「・・・何だ、なんだが距離を感じるのだが・・・。」

私はむすつとクリスを見る。

クリスは頬をポリポリしながら苦笑している。

「仲間か・・・」

その時、真っ先に頭に浮かんだのは、夢に見たおかしな3人のことだった。

「・・・そうだな、最近は私も苦楽をともにできるパーティーが欲しいと思っていたのだ。」

いつか平和になった時に、あの3人組のような仲間と巡り合えるだろうか。

「そっか、ダクネスずつと言ってたもんね・・・」

「・・・ずつと言ってた？そんな話、クリスにしてたか？」

「・・・え？あー、いや、なんかほら、友達とか欲しそうにしてたでしょ！」

「む。そんなにぼっちに見えていたのか・・・まあ、そうなのだが。」  
確かに私はずっと冒険仲間を探していたぼっちだった。

それは、毎日エリス教の教会でエリス様に、友達ができますように、と祈りを捧げるほどぼっちだった。

「そういうクリスは、平和になつたらやりたいことはあるのか？」

これ以上ぼっちネタを持ち出されるのも恥ずかしいのでクリスに話を振る。

「やりたいことか・・・」

クリスは人差し指を顎に当てて、うーん、と少し考えて、思いついたようにいう。

「私は盗賊団とか結成して巷をにぎわす義賊とかやってみたいね。」

「おい、それを貴族の娘の前でいうか。」

「あはは、そうなつたら、ダクネスも一緒にやろうよ！」

「ふふふ、そうだな。平和な世の中を取り戻したら、な。」

平和。

魔王軍の侵攻に日々怯える現状。

私達が平和を手に入れるのはいつになるのだろうか。

希望。

アイリス様と私が夢に見た世界。

きつとそんな世界がどこかに広がっているはずだ。

「ダクネス・・・死なないでね、ダクネス。もし死んじゃったら、女神エリスはダクネスを許してくれないかもしれないからね。」

クリスは強い口調で、私を戒めるように言うのだった。



「ぐおおおおお！」

目の前のモンスター、一撃熊が叫ぶ。



一撃熊のその剛腕は私の胴をとらえて、ゴン、と鎧を揺るがす重い音が響く。

「ぐ、ぐお?！」

しかし、この程度では私を満足させることなど到底できない。

どのあたりが一撃なのか。これではただの熊ではないか、と説教をしてやりたい。

目の前のモンスター、一撃熊は、え?確かに入ったよね!、みみたいなキョトンとした顔を浮かべる。

「『バインド』!!」

その隙をぬって私の仲間の男が一撃熊を拘束する。バインドの縄は一撃熊の手足を拘束して見事にその動きを封じた。

男は叫ぶ。

「ダクネス!いまだー!」

「はあああああ!!」

私は目の前の敵に力を込めて剣を振るう。

幾千回も続けてきた動作。

刃はまっすぐと相手の首をとらえて・・・

スカ!!!

「.....」

私達二人と一撃熊の時間が数秒停止した。

「ばかー!!!お前それ、逆にどうやって外すんだよ!!目をつむって振ってもあたるだろ!!物理法則捻じ曲げてんだろばかー!!」

「う、うるさい!!いや、確かにとらえたと思ったのだが・・・なんというか・・・相手にあたったと思ったたら、こう、スルツと・・・」

「何がスルツとだ!お前もう剣もつな!ナックルダスターとかのほうがいい!!」

「馬鹿かお前は！ナツクルダスターで戦うクルセイダーがどこにいる！それにそんなもので殴って戦えば簡単に敵を葬ってしまつてつまらないではないか……」

「もういいです。もういいんで、早くその熊を葬ってください。」

その男はすべてを諦めた表情で私を見る。

「そ、そんな目で見ないでくれええ!!ええい!もう剣などいるか!くそたりやああああ!」

私は剣を捨てて相手に殴りかかろうと……

目の前の一撃熊が腕を振り上げていた。

「だ、ダクネス!危ない!」

男の声が響く。

今のやり取りの間で、一撃熊がバインドの拘束を破っていた。

一撃熊が私に向けて手を振り下ろし……

「ダクネス!……!!!」

男の叫びが聞こえる中、私は一撃熊の攻撃を防ごうと咄嗟に手を出し……

## 第25話 動乱の王都①

咄嗟に手をかざした私の腕に、グサリと鈍い痛みが走る。  
生暖かい液体が私の頬に飛び散る。鉄臭い。  
それは切り裂かれた私の腕から飛び散った私の血。

私の腕には一太刀の剣が突き刺さっている。  
防御一点振りの私でなければ腕が切り落とされていただろう。

振り下ろしたの者は、私が王都防衛のために連れてきたダステイネ  
ス家の騎士だった。

私は寝こみを襲ったその騎士を睨みつける。

「お前……気でも違えたか!？」

「お嬢様……!御覚悟を!!」

その騎士は私に二撃目を加えようと剣を振りかぶった。  
「つくそ!!」

私は咄嗟にその騎士にタツクルを喰らわせ体勢を崩した。

「お嬢様!!一撃である世に行きたければ暴れないでください!!」

「馬鹿者!!どこの世界に主を殺そうとする騎士がいるか!」

私はその騎士の剣をもつ腕を抑えて叫ぶ。

「貴様、剣を向けるべき相手もわからないのか!?!誰に何をされた!?!」

「剣を向ける相手は貴方ですお嬢様!それがセレナ様のご命令です  
!!」

「セレナ!?!セレナ殿だと!?!」

その時、私の中にあつたセレナ殿に対する違和感が晴れていく気が  
した。

あの不気味なプリーストの狙いは兵を操ることだったのか。

セレナは敵国のスパイ……?

いや……

「・・・魔王軍」

「うおおお!!お嬢様アアア!」

騎士は私の手を振りほどき、私に2撃目を加えようと腕を振り上げる。

「させるかアアア!!」

私は騎士の剣をもっている方の腕を両手でつかみ、

「ハアアアアアア!!」

そのまま全力を込めて部屋の壁に投げ飛ばした。

「ぐほおっ!!」

騎士は頭を壁に強打して、そのまま意識を失った。

夢でも言われていた気がするが、やっぱり私は剣を持たない方が強いかもしれない。

「はぁ・・・くそっ・・・!」

私は裂かれてだらだらと血の滴る腕を抑える。

言動から、この兵はおそらくセレナに操られていたのだろう。

そして、今までにその予兆はあった。

兵士達がまるで神でも見るかのような尋常でない目線をセレナに向けていたことを思い出す。

仮にそれがセレナの力だとしたら、セレナに操られている兵士はもっと大勢いると考えるべきだろう。

「急がなければ・・・」

私は裂かれた腕に簡易な止血を施し、急いで鎧を身に着け剣を下げて部屋を後にした。



私は王都にいる間、王城で寝泊まりをしていた。

王城で私にあてられた部屋を飛び出した私はアイリス様の私室に向かって一直線に走っている。

階段を上って、廊下を曲がり、広間を超えたその先に・・・

「・・・おい、お前らは東棟の制圧に行け。ベルディア達も予定通り侵攻してきてるみたいだから、私はいったんそっちに合流する。」

王城の兵士たちに指示しているセレナの姿があった。

「セレナアアアあ!!!」

私は剣を抜いてセレナに向かって走る。

この女を倒せば味方の兵たちの異常もどうにかなるかもしれない。

「ん？ダスティネス卿か・・・あの傀儡め、暗殺に失敗しやがったな・・・」

セレナはぼつりと呟く。

そこには我々の援助に余念のなかった熱心なプリーストの姿はない。

「私を守れ!!」

セレナが叫ぶと、セレナの取り巻きの兵士が数名、私の進路を塞ぎ私に剣を向ける。

「どけえええ!!」

私は、進路を塞ぐ兵士達をタツクルで跳ね飛ばす。

「ちい！なんて馬鹿力だ。」

セレナは苦い顔をする。

私は、取り巻きの兵たちに囲まれたセレナに向けて剣を構える。

「兵たちを元に戻せ！さもないと貴様の首を切り落とす!」

「まったく、本当にやっかいな奴だなお前は。何度回復や支援をくれてやっても私の思い通りにならないし、正直、私の能力がこうも通じない人間がいるなんて驚いたよ。どんなイカれた状態異常耐性をしてやがるんだ。」

セレナの口ぶりから、兵たちがおかしくなったのはやはりセレナの能力が関係しているようだ。

何かしら状態異常のようだが、私は状態異常耐性も鍛えに鍛えまくっている。そのため無事だったのだろう。

「セレナ、お前は魔王軍の者だな!？」

私の問いにセレナはニヤリと口角を釣り上げる。

「ご名答。私は諜報と謀略を司る魔王軍幹部セレスディナだ。だが、今頃気づいても遅いんだよ!」

セレナは腕を上げて騎士たちに指示を出す。

「おい、お前とお前と・・・あとお前! ダスイネス卿の足止めをしろ!! 私はやることがあるからな。先を急がせてもらう。」

「セレナ様! 承知しました!!」

セレナの命令を受けた騎士の男と盗賊の男、魔法使いの女の3人が私を取り囲む。

「待てセレナ!!」

ここでセレナを逃がしてしまつてはまずい。

まずはセレナを捕まえて騎士たちの乱心をどうにかさせなければならぬ。

「じゃあなお嬢様、悪いがこの戦いは我々魔王軍の勝ちだ。せいぜいあがくんだな。」

セレナはそう言い、取り巻きの兵たちを伴つてその場を後にする。

私は私を囲む3人に向けて言う。

「お前ら! 正気に戻れ! 本来の使命を思い出せ! 私に刃を向けるとどうなるか、分かっているだろうな!!」

「我々の使命はここでああなたの足止めすることです!」

剣を構える騎士とダガーを握る盗賊が左右から私に襲い掛かってくる。

「ええい! 邪魔だ!」

私は剣を振つて彼らを散らせる。

『『ファイアーボール!!』』

魔法使いが生み出した火の玉が私に向かって飛んできた。

「こんなもの! よけるまでもない!」

私は襲い来る火の玉に突っ込んでいく。

ドムツつと火の玉が着弾して焦げ臭い煙が立ち上がる。

だが、こんなものでは私を足止めすることはできない。

「うおおおおお!!!」

「ひい!!こ、来ないで!!!」

正面の魔法使いはファイアーボールにビクともせず迫る私に怯えて後ずさる。

が、私はこれを逃がさない。

魔法使いの細い腰を抱きかかえて鯖折りの体勢に持ち込み、ぎちぎちと締め上げる。

「きやああああーい、痛いー!!!は、離して・・・!」

魔法使いは握っていた杖で私をペチペチ叩くが、そんなものでダメージを喰らうほど私はやわじやない。

更に力を強めると、締め上げた腰からバキバキと嫌な音がする。

「あぎギギギ・・・」

彼女の足をつたってぴちやぴちやと尿が漏れる。

そして魔法使いは泡を吹いて白目をむき、ぴくぴくと動かなくなつた。

そして、攻めあぐねていた騎士の一人に向けて、

「はああああああ!!!」

私は抱えていた魔法使いを力いっぱい投げつけた。

「うわッ!!」

騎士は魔法使いを受け止めるも、抑えきれずに後ろの壁に激突する。

「くそっ! 『バインド』」

残った盗賊職の男は私を拘束すべくスキルを放つ。

「くッ!!」

バインドの縄が私の上半身を腕ごと拘束する。

力を籠めてみるも、そう簡単には外れなさそうだ。

・・・しかし、足が使えるならば十分だ。

「ダステイネス卿!!覚悟!!!」

盗賊職の男はダガーを振り上げ私に襲い掛かる。

「くらうかああ!!」

私はその男が振り下ろしたダガーを正面から受け止める。

ガンツ!という金属を打つ音が鳴り響き、私のアダマントイト製の鎧がそのダガーの刃を防ぐ。

そして、私の間合いに入ってきた愚かな男に向けて、

「おおおおお!」

足を振り上げて金的をくれてやる。

「パうつ!!」

その盗賊職の男はおかしな声を上げてその場に昏倒した。

そして、私は壁に激突させた騎士を睨みつけて、

「私を襲うようなら貴様も同じ目にあわせてやる。」

「ヒい!!」

その一言で無力化させた。



セレナの消えた方に走ったてきたが、セレナの姿を見つけることはできなかった。

「くそ、テレポートか何かで離脱してしまったか・・・?」

と、駆けている途中に、バルコニーを発見した。

確かこのバルコニーからは城下町の様子を一望できたはずだ。

城下町の様子が気になった私はいったんセレナのことを後回しにし、バルコニーに出て城下町を見下ろした。



すると・・・

「こ、これは・・・」

そこに広がっていたのは・・・

「不味い状況だとは思っていたが・・・」

城下町は至る所に火の手が上がり・・・

「不味いなんてものじゃない・・・」

アンデットナイトの群れが王城めがけて侵攻している様子が見える。

更には、貴族の屋敷ほどもありそうな巨大なスライムが復興中の街を飲み込んでいる。

こんな状況になるまで魔王軍襲来の報告が無いのは、連絡係もセレナの手に落ちたからだろうか。

「これは・・・もう・・・」

その時、私は決心した。

現状、選べる中でおそらく最も非道で最善の選択肢を。

「ダスティネス卿!!」

と、私を呼ぶ声が背面から聞こえる。

私が振り返るとそこには、初老の執事の男。

「無事だったか！セバスチャン!!」

「ハイデルです。」

「・・・ハイデル、アイリス様は？」

「アイリス様はクレア殿、レイン殿と一緒に私室前の廊下で乱心した

者たちと戦っておいでです。私はそれを伝えるべく、あなた様を探しております。」

アイリス様は戦闘中……

どこに行ったか分からないセレナを追うことよりもアイリス様と合流するのが先か。

「わかった。今すぐアイリス様のもとへ向かう。」

「とりあえず、簀巻きになっているそのロープを切りましょう。」

ハイデルはナイフをとりだして私のロープを切っていく。

「他の城内の者は無事か？」

「わかりません……逃げられるものは逃走経路を利用させています  
が……城内の誰が敵かもわからない状況なので……」

この場でハイデルに逃げるよう指示しても危険だろう。一人で行動させるべきではない。

ならばアイリス様のもとへ一緒についてきてもらった方が安全か。

私を拘束していたロープが取り払われると、ハイデルは私の血まみれの腕を見ている。

「ダステイネス卿、腕の手当をしたほうが……」

「いや、これくらいかすり傷だ。唾をつけておけば治る。」

ここぞとばかりに私の言ってみたかったセリフベスト5の一つを口にする。

「ハイデル、アイリス様のもとへ急ぐぞ！」

「……承知しました、ダステイネス卿。」

私はハイデルを引き連れてアイリス様のもとへ走る。

## 第26話 動乱の王都②

【アイリス視点】

『『エクステリオン』!!』

私の放つ剣閃が近衛騎士達の剣を真つ二つにする。

「貴様らーアイリス様に剣を向けてただで済むと思うな!!」

クレアが激昂し、剣の柄で近衛騎士たちを卒倒させながら叫ぶ。

今、私はクレアとレインとともに王城の私室へとつながる廊下で近衛兵と戦っていた。

今朝、私は私室の外で争う音を聞いて目を覚ました。

慌てて部屋の外へ飛び出すと、そこには近衛兵たちと戦うクレアとレインの姿があった。

その後、私も戦いに加わり、現在に至る。

乱心した近衛兵を無力化していき、残るは最後の一人となった。

『『ライトニング』!!』

「ぐう……!」

レインの魔法が近衛兵の手を打ち、握る剣を落とす。

「はあ!!」

「がっ……」

私はレイピアの柄で近衛兵のみぞおちを打って意識を奪う。

私の聖剣は手入れをする者に預けているため、私が扱うのは一般兵用のレイピアだ。

「ハア……なぜ近衛騎士たちがこんなことに……」

私は突然乱心した近衛騎士たちの横たわる姿を眺めて言葉を漏らす。

「わかりませんが、近衛騎士がこうであれば王城の他の兵たちもアイリス様を襲ってくるかもしれませんね……魔王軍の仕業でしょうか……」

レインが疲れた表情で言う。

「まずは、情報収集をしなければな。正気な者を探して、近衛たちの乱心の原因を探ろう。アイリス様、とりあえずお着替えください。」  
まだ寝巻だった私にクレアがそういつた時だった。

「アイリス様!!」

「王女様!!」

こちらに向けて駆けてくる二人の姿。

ララティーナと、彼女を呼びに行つたハイデルだった。

「ララティーナ!! ハイデル!!」

「ご無事でしたか、アイリス様!! 良かった・・・」

私達が無事だったことを確認してララティーナもハイデルも安堵の息をつく。

しかし、私はララティーナが万全でないことに気づく。

「ララティーナ・・・その腕・・・それに火傷・・・」

「ダステイネス卿、大怪我をしているではありませんか! 早く手当をしないと。」

クレアがそういうも、ララティーナは首を横に振る。

「こんなの、かすり傷だ。唾をつけておけば治る。」

少し嬉しそうにそんなことを言う。

ララティーナは卒倒している近衛騎士たちを眺める。

「この状況は・・・そうか、近衛騎士たちもセレナに操られていたか・・・」

「セレナ・・・セレナ殿が!？」

クレアが驚愕の表情を浮かべる。私も同じような表情になつていただろう。

セレナは兵士たちからの信頼がとても厚いプリーストだと聞いている。

「クレア殿、どうやらセレナは魔王軍幹部の一人だったようだ。我々に力を貸すように見せかけて水面下で王城の兵たちを自分の駒にしていたようだな。」

「なっ・・・やってくれたな魔王軍・・・!!」

そして、ララティーナは一拍置いて語りだす。

「・・・それで、ここに来る途中、バルコニーから城下町の様子を見てきたのだが・・・」

「おお！今は少しでも情報が欲しかったのです！いかがでしたか!？」

「結論から言うと・・・王都を放棄すべきでしょう。」

「え・・・」

私は耳を疑った。

今、ララティーナはなんて・・・

王都を・・・放棄・・・？

「ラ、ララティーナ・・・王都を放棄するって・・・」

「アイリス様、城下町には巨大なスライムやアンデットナイトの大群が城の近くまで押し寄せていました。魔王軍は、町を制圧しつつあります。その被害状況は想像を絶するものでしょう。さらに王城の中には、敵に寝返った兵士たちが大勢・・・その数も正確に把握できない状況です。」

私は頭が真っ白になる。

クレアやレインも悲痛の表情を浮かべて押し黙る。

そして、ララティーナは非情にもきっぱりと告げる。

「王都は、事実上、陥落しました。」

王都が・・・陥落・・・？

そんな馬鹿な事があるのだろうか。

強力な冒険者や兵たちが集うこの王都が、

これまで何度も魔王軍の侵攻を凌いできたこの王都が、

デストロイヤーの蹂躪にもめげず復興の兆しが見えていたこの王都が、

生まれてからずっと暮らしてきた私の家たるこの王都が・・・

「陥・・・落・・・？」

「アイリス様・・・」

クレアが私を慰めるように肩に手を置く。

でも、そうじゃない。

なぜクレアはララティーナに言い返さないのか。

我が王都が、魔王軍に敗れるはずがない、と。

なぜそう簡単に陥落などと言い切れるのか、と。

・・・

「そ、そうです・・・！いい、今、城下町は大変なのでしよう!? 私は王族として民を守らねばなりません!!」

そう・・・私は王都の民を守らなくてはならない。

私は強い。

私の力は、今このときのためにあるのだ。

勇者の血を引く私の力は、家族も同然である王都の民を守るための

力・・・!

私の居場所を侵そうとする魔王軍・・・!

許せない・・・!

「クレア! レイン! 戦です! 我々で魔王軍を殲滅します! 私についてきなさい!!」

「アイリス様、」

「ララティーナ! あなたも来るのです! 国王の懐刀として、この都に攻め来る不埒ものを地獄に送るのです!!」

「アイリス様!!」

「何ですかララティーナ!?早くしないと!早くしないと民たちが……!  
!この王都が……!」

「アイリス様、逃げるのです。」

「……はっ?」

逃げる……?

ララティーナは何を言っているの?

敵を目の前にして……逃げると……?

民を見捨てて……王女が逃げると……?

「な、何を言っているのですか……?」

私は震える声で言う。

「何を言っているのですかララティーナ!!」

激昂。

「ベルゼルグ王国第一王女として命令です!!王都に仇す敵を薙ぎ払い  
なさい!!私に付き従いなさい!!今こそ王都を守るときです!!」

「……」

「許せない……!魔王軍!」

私の話を黙って聞いていたララティーナは、

「・・・アイリス様、失礼いたします。」

私の目の前にズイと立って、

「な、なんですか・・・や、やるのですか・・・王族はつよ・・・」

パン!!!

「だ、ダスティネス卿!!!?」

クレアの叫び声が聞こえる。

頬が、じん、と熱い。

痛い。

頬をぶたれた。

お父様にもぶたれたことが無いのに。

その瞬間、私の頭にある光景が浮かぶ。

・・・ああ、あれは初めてお兄様とお会いした時、私はお兄様を嘘つき呼ばわりしたのだ。

それを聞いたララティーナの静かに怒るあの表情。

普段私に対してとてもやさしいララティーナが、私の頬を張ったその瞬間、私の胸に様々な感情が沸いたのだ。

どうしようという困惑、焦り、後悔、恥ずかしさ・・・

そう、それは・・・

それは・・・

・・・いつのことだったか。

・・・

・・・

・・・



私は、頬を抑えて呆然とララティーナを眺める。

ララティーナの血で真っ赤に染まった片腕を見る。

お腹の部分の衣服が焼け焦げ、痛々しい火傷の跡を見る。

私のもとに来るまでどんな戦いをしてきたのだろうか。

ぼーっとそんなことを思っていると、ララティーナが口を開く。

「アイリス様、大変申し訳ありません。いかようにも、この処罰は受けます。とにかく時間がありません故、頭が良くない私はアイリス様のお気持ちまで考えている余裕が無いことをお許しください。」

ララティーナはそう前置きをして語りだす。

「恐れ多くも具申致します。アイリス様は冷静さを欠いており、正常な判断ができないものと考えます。」

私の耳からスツと彼女の言葉が入ってくる。

「アイリス様はお強い。魔王軍の幹部相手でも引けを取らないでしょう。」

平手打ちをされたショックで魔王軍への憎悪の感情がどこかに飛んで行ったようだ。私はただ彼女の言葉を聞く。

「しかし、相手の戦力はいまだ計り切れません。城下町の巨大なスライムはおそらく敵軍幹部のデットリーポイズンスライム、あのアンデットナイトの群れの主は、おそらくそれらを使役する幹部のデュラハンでしょう。さらにセレナも魔王軍幹部であることが判明しています。」

8人の魔王軍幹部のうち、最低でも3人が王都襲撃に投入されている。

「そして、セレナによる王城の混乱を機に魔王軍はありったけの戦力を投入すると考えるべきでしょう。もしかすると、魔王の力を凌ぐとうわさの魔王の娘も出張ってきているかもしれません。」

その戦力の中、聖剣を持たない私が突撃していても・・・

「おそらく返討ちにあうでしょう。」

ララティーナは私の理解を確認しながら、ゆっくりときっぱりと言葉を紡いでいく。

「魔王軍に蹂躪される民を置いて逃げることは、王族として血涙を流す決断と思えます・・・生き残った民はアイリス様を、民を見捨てて逃げた恥ずべき王女と罵るかもしれません。歴史書にもそのような記載されて語り継がれるかもしれません。」

クレアがギリギリと歯を食いしばる。

「しかし、アイリス様は勇者の血を引く人類の希望の光そのものです。我々人類がここで希望の光を絶やすことがあってはなりません。そして我々の再起には御旗として王族の存在が不可欠です。ここでその御旗を失っては我々人類のもつとも大切な拠り所が魔王軍に折られてしまうと同義でしょう。」

レインが目に涙を浮かべて私をじっと見ている。

「情をお捨て下さいアイリス様。王族として生まれたアイリス様がたどる道は、民の血と涙と骨で築かれる修羅の道、地獄すら生温い修羅の道です。」

そしてララティーナは私の両頬を両手で包み込み、私の目をまっすぐに見てゆつくりと言う。

「ですが、そんな道に行くのはアイリス様独りではありません。私がいつまでもお伴いたします。」

「アイリス様！もちろん私もお伴いたしますよ！」

「わ、私も最期までアイリス様と一緒にです・・・！」

「僭越ながら、このハイデルも・・・」

ララティーナに続いて声を掛けてくれたクレア、レイン、ハイデルの顔を私は順に眺める。

そう、彼女らが私と一緒にいてくれる限り、仮に王都が無くなっても、私の帰る場所が無くなるわけじゃない・・・

「・・・レイン」

「何でしょう、アイリス様。」

激情で自ら死地に赴くなどという安易な行動を王族である私がしてはならない。

その安易な行動は人類皆を死地に追いやるものなのだから・・・

.....

・  
・  
・  
・  
・

「……テレポートの準備を。」

私のその一言に張り詰めていた場の空気が緩む。

みんなの表情にわずかながら安堵が浮かび上がる。

私は悔しさを飲み込みきっぱりと告げる。

「……逃げます。」

「逃がすと思っているの? 『カースド・ライトニング』」

瞬間、私の鼻先を黒い稲妻が通る。

「あぐらうらうらう!!」

声にならない叫びをあげたのはレインだった。

「レインっ!!!」

崩れ落ちるレインをクレアが支える。

「いい、痛い! 痛い! いい!!!」

レインの肩に穴があいていた。

血がどくどくと噴き出している。

「見つけたわよ王女様。」

私たちの数メートル先、魔法を放ったのは赤い短髪とネコ科のような黄色い目を持つ美女。

「私は魔王軍幹部のウォルバク。王女様の命をいただきに来たわ。」

## 第27話 動乱の王都③

ウォルバクは手を振り上げて、

『カースド・・・』

「やらせるかあ！」

「・・・ライトニング！」

振り下ろした手の指の先に割り込むララティーナ。

「ぐッ!!」

黒い稲妻はララティーナへと直進し、彼女の鎧に直撃してその一部を破壊する。

が、レインに与えたような致命傷には及ばないようだ。

「へえ、私の魔法を受けてその程度のダメージなんてね。」

ウォルバクは感心したような声を上げる。そして部下に向かって命令を下す。

「お前たち、まずは足止めよ。テレポートを使われないよう魔法使いからやりなさい。」

「行かせるかあ! 『テコイ』!」

ララティーナの掛け声に、ウォルバクの連れていた禍々しい姿の魔王軍の兵たち数名がララティーナに向かう。

囿になったララティーナは私たちに向けて叫ぶ。

「ここは私が足止めます! アイリス様たちはここから離脱ください!」

離脱?

ひとりで足止めする気?

「ララティーナ! 私も戦います!」

「駄目です! アイリス様は生きなければなりません! 逃げるのです!」

それなら、ララティーナも一緒に・・・

魔王軍の兵たちがララティーナを取り囲んで激しい攻撃を加える。

「なんだこんな攻撃！朝にもらったダステイネス家の兵からの攻撃のほうか幾分気持ちよかったではないか！魔王軍の攻撃などこんなものかっ！」

「くっ！なんだこの出鱈目に硬い女は！」

前線ではララティーナひとりに魔王軍の兵たちが手を焼いている。

後ろでは……

「レイン！まずは止血を……！」

「ハア……ハア……クレア様……大丈夫です。まずはテレポートの準備です……」

「その傷で何が大丈夫か!!ハイデル止血だ！私はダステイネス卿に加勢す……くう！」

クレアは、レインを目標として敵の弓兵から放たれる矢を剣ではじき、敵を睨む。

前線に加わろうにもレインやハイデルの傍を離れられない。

……混戦

とにかく、重傷のレインを守らなくてはならない。

レインがあと一撃でも受けたら死んでしまうと思え。

それならば、私も前衛のララティーナに加勢してレインの盾とならねばならない。

私はララティーナを囲む敵兵に手にしていたレイピアで切りかかる。

『『エクステリオン』っ!!』

その剣閃は敵兵の一人を真つ二つに切り裂いた。

それを見た敵兵は動揺して私達から一步距離を置く。

「……へえ、さすが強いといわれる王族ね。黒髪黒目の連中以上の脅威だわ。」

ウォルバクがニヤリと余裕の笑みを浮かべる。

こいつさえ殺れば、あとはどうとでもなる・・・!!  
私は有無を言わずにウォルバクに切りかかる。

『エクステリオン!!』

『カースド・クリスタルプリズン!!』

私の剣閃はウォルバクの前に唐突に現れた分厚い氷の壁にて阻まれ、ウォルバクまでとどかなかった。

「いきなり剣を向けるなんてひどいじゃない。人間の子供は、人に刃物を向けてはいけません、と習うものではなかったかしら。」

「お前は人ではないだろう。」

ララティーナがウォルバクを睨みつけて言う。

ウォルバクはふふ、と余裕の笑みを返す。

そしてウォルバクはその場をさっと見渡して、

「ちまちまやっている私達が押し切られるかもしれないわね・・・」

片腕を上げて掌を私達の方に向ける。

「・・・ということだから、一瞬で終わらせてあげるわ。」

ニヤリと笑ったウォルバクの足元に真っ赤な魔法陣が浮かび上がる。

『太古の真名の名において、原初の力を解き放て・・・』

この詠唱は・・・私が習ったことのないものだ。

しかし、それを聞いたララティーナは、咄嗟に叫ぶ。

「いかん!!爆裂魔法の詠唱だ!!城ごとアイリス様を吹き飛ばすつもりだ!」

爆裂魔法・・・爆裂魔法は攻撃魔法の中でも最高位に位置する魔法。

威力、射程範囲、効果範囲いずれも最大級の魔法、

そんなものをここで放てば・・・

私はレイピアを握る手に力を籠め、

「させません！『エクステリオン』!!」

私がウォルバクに向けて放った剣閃は、しかし、ウォルバクの部下が彼女を庇う形で妨げられる。

その間にもウォルバクの掌に禍々しい破滅の光が完成していく。

「やめろウォルバク！貴様の兵らも巻き込まれるぞ！ええい!!邪魔だあ!!」

魔王軍の兵たちを押しつけているララティーナも尋常でない焦りをあらわにする。

その言葉にウォルバクは口元を歪めるのみ。

破滅の光は今にも解き放たれようと眩しいほどに光度を増す。

と、私がウォルバクに集中していた背後・・・

「アイリス様!!テレポートが完成しました！いけます！早く！」

レインの声が響く。

それを聞いたウォルバクは途端に爆裂魔法の詠唱を止める。

「くっ、やはり先に魔法使いをやっておくべきだったわね。」

ウォルバクの手元の破滅の光が掻き消える。

「お前たち、クルセイダーと王女はあとよ！まずは魔法使いの息の根をとめなさい！」

ウォルバクが敵兵たちに命令を下し、敵兵たちがレインに襲い掛か

るが・・・

「行かせるか！『デコイ』！」

ララティーナの囲スキルによって魔物たちの足が止まり、標的をララティーナへと変える。

「く・・・くそおお、何だこいつのスキルは・・・！嗜虐心に抗うことができない・・・」

「な、なんて強力なデコイのスキル・・・！」

それを見るウォルバクも舌打ちをして苦い表情をする。

「なんて邪魔なクルセイダーなの・・・！体力も底が見えないし・・・！」

敵がララティーナに密集する中、ララティーナは叫ぶ。

「レイン殿！アイリス様とクレア殿とハイデルを連れてテレポルトだ！！」

やっぱり、ララティーナは独りで残る気だ・・・！！

「何を言っているのララティーナ！あなたも一緒に・・・！」

「アイリス様！テレポルトは4人が限界です！誰か独りはここに残らなくてはなりません！！」

私は必死に考える。

・・・テレポルトで数名を遠くに送った後に、また戻って来て・・・  
・・・いや、レインは重症だ。そんな何度も魔法を使う余裕はないだろう。

でも、爆裂魔法をも扱うこの魔王軍の幹部とその敵兵に囲まれている状況に独りで残ったら、耐久力のあるララティーナでもまず間違いなく殺される・・・

それなら攻撃力のある私が残ってこの幹部を瞬殺すれば・・・  
でも、『エクステリオン』を二度も防がれている・・・『セイクリツ



ド・エクспロード』は聖剣が無くて使えない・・・

ああ・・・考えている間にもレインの命のタイムリミットが・・・  
どうすれば・・・どうすれば・・・

私が必死になって考えている間に、ララティーナは勝手に話を進めてしまう。

「クレア殿、すまないが、アイリス様と皆を頼む!!」

「・・・わかりました。」

と、クレアが前線に出ていた私を背後から羽交い絞めにして後ろに下げる。

「は、離しなさいクレア!!ララティーナを独りで戦わせる気ですか!」

「アイリス様、ダステイネス卿ならば大丈夫です。我が国・・・いや、世界でも屈指のクルセイダーです。こんなところでやられるお方はありません。」

確かに彼女は世界でも屈指のクルセイダーだろう。

でも、私は納得できない

だって・・・

「ララティーナ・・・」

彼女に手を伸ばす。

「私と一緒にずっと道を歩んでくれるって・・・あなたはついさつき・・・」

うまく言葉が出てこない。

「・・・わ、私とその言葉に・・・どれだけ・・・」

ララティーナは、敵の攻撃を一身に受けつつ、ウォルバクに油断ない眼差しを向けつつも、

「アイリス様、私はいつもあなたと共にあります。我が一族は耐えることに関しては他の追隨を許しません・・・。それと・・・」  
どこにそんな余裕があるのか、うつすらと笑みを浮かべる。

「アイリス様、外の世界は・・・意外と素晴らしいものです。」

そして・・・

「レイン殿!!早く!!」

「行かせるものかっ!! 『カースド・・・』」

「駄目エえええっ!!ララティーナああアア!!」

「・・・『レポート』!!!」

「・・・ライトニング!!!」

ウォルバクの指先が黒く禍々しい光を帯び、  
それよりも数舜早く現れたレポートの光が私達を包み込んだ。



・・・

・・・

・・・気付くと私達は王都の近隣の村まで移動していた。

遠くに王城を眺められる位置にある村だ。

・・・と、私の後ろに立っていた人物がドサリと崩れ落ちる。

「はっ!!レイン!!」

私は慌てて振り返る。

「ハア・・・ハア・・・すみません・・・アイリス様・・・あまり遠くまで行く余裕が無くて・・・」

「よ、よいのです!あなたのおかげで助かりました!それよりあまり喋ってはいけません!!」

レインはハイデルによつて止血を終えていたが、かなり血を失っているようで顔が真っ青だった。

「・・・レインは私がおぶります。早く回復魔法で傷を塞がないと・・・」

レインの隣にいたクレアがレインを支えながら言う。

見ると、クレアのトレードマークである白いスーツはレインの血で真っ赤に染まっていた。

「そ、そうですね。この村の教会は・・・」

私が言いかけたその時だった。

遠くに見える王城の上層・・・

カッという光が走り、大きな赤い爆炎が王城の上層階を飲み込んだ。

ビリビリと大地が震動する。

数秒後れてゴゴゴという音が到達し、

王城からかなり距離があるこの場にまで爆風による圧が届く。

その爆心地は今まで私達がいた場所だった。

「ら、ララティーナ……」

「ダステイネス卿……」

「……」

私と一緒にクレアやハイデルもその光景を見て息をのむ。

ほどなく王城の上層部を覆う煙が晴れていき、上層の吹き飛んだ王城の姿が明らかになる。

「……」

誰もがその光景に言葉を失う。

……

……しかし私たちはここで呆然としているわけにはいかないのだ。

「……行きましょう。早くしないとレインが危ないです。」

「アイリス様・・・」

クレアの眩きを背に、私は一步前に進む。

感傷に浸っている暇はない。

王族として生まれた私が進む道は地獄すら生温い修羅の道。

民を見捨てて逃げた私は、きっと地獄に落ちるだろう。

「先に地獄で樂をしようなど許しませんよ、ララティーナ・・・」

私は王都に背を向けて、一步、また一步、道を踏みだす。

来るべき人類の反撃の日に向けて、私は道を歩み続ける。

## 第28話 ダクネス VS ウオルバク

【ダクネス視点】

レイン殿が生み出したテレポートの光をぬってウオルバクの黒い稲妻が突き抜ける。

が、既にそこに人影はなくなっていた。

「ちい、逃がしたわ・・・。」

ウオルバクは苦虫を噛み潰したように顔をしかめる。

そして私の方を向く。

「王女様の命をとる任務は失敗ね。まったく、邪魔だったらないわ。あなた。」

「ふん、悔しければ、私を屈服させてみるがいい。」

「悔しい？いえ、私は感心しているわ。私の魔法や部下たちの攻撃をあれだけ受けても、顔色を変えないその胆力に。」

部下に囲まれるウオルバクがこちらを見て言う。

「残念だったな、ウオルバク。あの程度では、到底私を満足させることはできない。」

「ええ。そうでしょうね。だから、最後にあなたにプレゼントをあげるわ。満足してくれると嬉しいのだけけど。」

ウオルバクの黄金の猫科の目が鋭く輝く。

「お前たち、ここから離れて本隊と合流しなさい。私はこの女にプレゼントをあげてから合流するわ。王都陥落に景気よく花火をあげたい気分だし。」

「わかりました！ウオルバク様、この女の硬さは尋常でないもので、どうぞ油断なさらぬよう！」

ウオルバクの部下は、そんな言葉を残してウオルバクを残して去っていった。

そこに残ったのはウオルバクと私の二人。

「さて、最期にあなたの名前を聞いておきましょうか。残された人間どもにあなたの武勇を伝えてあげるわ。」

「・・・ダステイネス・フォード・ララティーナ。だが、この名は貴様への冥土の土産とさせてもらおう。」

「ダステイネス・・・なるほど。どうりで並々ならない胆力だと思つたわ。」

ウォルバクは愉快そうに笑みをつくる。

「部下も逃がしてしまって、いつまでそんな余裕でいられるか！」

私はウォルバクを掴むために床を蹴り彼女に接近する。

器用さの低い私ではあるが、相手を掴んで動きを封じてしまえば、筋力でねじ伏せることができるだろう。

『カースド・クリスタルプリズン』!!』

「くッ!!」

ウォルバクが放った氷結魔法は私の腰から下を氷漬けにして床に縫い留める。

「これしきッー!」

私は腰元の氷を両手を組んで殴る。

私の殴った部分にヒビが入る。

大丈夫だ。これくらいならば腕力で破壊できる。

と、ウォルバクの足元に先ほどと同じ真つ赤な魔法陣が浮かび上がった。

『・・・太古の真名の名において・・・原初の力を解き放て・・・』

大気がビリビリと振動する。

ウォルバクの手の中に破滅の光が収束していく。

これは、逃げるのは不可能だろう・・・

そして・・・

「これを見ても顔色を変えないなんて、流石ね、ダステイネス卿」  
ウォルバクは感心したように言う。

爆裂魔法が完成したようで破滅の光から放たれる熱気がこちらに  
伝わってくる。

「・・・どうせ爆裂魔法の射程からは逃れられないからな。」

「・・・じゃあ、さよならね。ダステイネス卿・・・」

「それで私を倒しきれぬならな。」

「悪いけれども、骨すら残らないわ・・・」

私は魔法耐性を高めるべく、力を込める。

大丈夫・・・

今まで私は耐久力だけを鍛えに鍛え上げてきた。

・・・周りにどれだけ馬鹿にされても。

耐久力で私の右に出るものはいない。

アイリス様のためにも、私は死ぬわけにはいかない。

「・・・『エクスペロージョン』ッ!!!」

ウォルバクがそう叫ぶと同時、



私の目の前が、白く、白く、輝いた。

私の全身を包むのは熱気だろうか。

私の全身を走っているこの感覚は痛みだろうか。

なぜか不気味なほどに音が聞こえない。

何も聞こえない。

私の心臓は止まってしまったのだろうか。

私は立っているのか、倒れたのか。

上はどっちだろう、下はどっちだろう。

私の体はなくなってしまうのだろうか。

だんだんと暗くなっていく。

もしかして既に私は地獄にいるのだろうか。

アイリス様を置いて・・・？

いや、私は死ぬわけにはいかない。

アイリス様を残して死ぬわけにはいかない。

クリスにも死ぬなど言われた。

しかし・・・

私の意思とは関係なく、世界の色は黒く、黒く染まっていく。

「ダクネス来ちやダメ！意志を強く持つて！」

・・・誰だ・・・？

・・・聞き覚えのある声だ・・・

そして、暗闇の中、私は、小さな暖かい光を見つけた。

その光は次第に私を包んでいき・・・



「・・・我が爆裂魔法を受けきっておきながら、これしきの爆裂魔法で気を失うとは・・・いつかダクネスとは決着を・・・と思っっていました。これは戦わずして私の勝ちみたいですね。」

馬鹿を言うな、めぐみん。私はこれしきの魔法で屈したりはしない！

「ちよつとダクネス！そんな神様崩れの邪神ちゃんドロップキックみたいなやつにあっさりやられないでちょうだい！まったくダクネスはやっぱり私の支援魔法がないと駄目ね。まったく。」

おいおい、アクア。私が何度お前の身代わりとなって守ってやっただと思っっているのだ。支援魔法がなくなるとも私はこの程度なんともない！

「おいお前ら、なんちゃって冒険者のララティーナお嬢様にあんまり無謀なことやってやるな。ですよね、ララティーナお嬢様。これに懲りたらあんまり無策に敵に突っ込んでいかないでくださいね、ララティーナお嬢様。」

か、カズマ！ら、ララティーナお嬢様はやめろとあれほどいつているだろう！

まったく、どいつもこいつも馬鹿にして……！

いいだろう。

お前たち……まとめて……



「…………ぶっ殺してやるっツツ  
」  
「なっ…………!!」  
!!!!!!!

私の咆哮がその場に響いた。

ウォルバクは驚愕の表情をこちらに向ける。

「わ……私の爆裂魔法を受けて消滅しないどころか意識を保っている  
ですって…………?なんてふざけた耐久力なの…………」

「……ハア、ハア……こ、こんなもの……ハア、ハア……め、め  
ぐみんの爆裂魔法の威力と比べれば……た、大したことないな。テイ、  
ティンダーと勘違いしたぞ……ハア……ハア……おかわりはな  
いのか?」

「めぐみん……ですって?」

ウォルバクの頬を一筋の汗が流れる。

めぐみん……?

はて、誰のことだろう。

自分で言っておきながら、意識がおぼつかなくて、よくわからない。

「そう．．．あの小さな子が．．．」

ウォルバクはなぜか懐かしそうな表情をする。

「私の負けね。悪いけれども、今の一発で私の魔力は枯渇状態だわ。」

ウォルバクは私を見据えつつも後退していく。

体中に激痛が走るも、私はそれを無視してゆっくりと前進する。

「ハア．．．ハア．．．ま、まて、ウォルバク．．．ぶっ殺してやる．．．」

「ぶっ殺されるのは勘弁ね．．．ダステイネス卿、あなたがこの王都から無事に逃げられたら、また会いましょう。」

ウォルバクはそう言って、王城の階下へと降りていく。

私はウォルバクを追って走り出そうとするも、その場のガレキに足を取られて倒れてしまう。

「くっ．．．」

そうだ。

まずはこの王都から脱出しなければ．．．

そして、アイリス様達と合流するのだ．．．

私はそのまま体を引きずり、這って前進する。

「ハア．．．ハア．．．」

私が進む道はアイリス様とともに歩む修羅の道。

決して止まることは許されない。

「ダクネス．．．!!!」

誰の声だろう。

さつきも聞いたような……。

いや、今はそれどころじゃ……

「全く、天界逝きはいったんどうにかなったみたいだけど……とりあえずポーションを持ってきたから、これ飲んで!!」

「ハア……ハア……アイリス様……今、行きます……」

ずるずると体を引きずって前へと進む。

「だ、ダクネス!?!」

その時の私は、生死の境をさまよい、正常な思考ができなかったのだろう。

ただ、前進することしか頭になかった。

「ダクネス……ごめんね。ダクネス。」

その言葉を最後に、トンと喰らったみねうちで、私の意識は闇に落ちた。

## 第29話 その夢の終わりに新たな希望の光を！

「なあ、ダクネス」

「どうした、カズマ」

私達二人は屋敷の取っ組み合いの姿勢になっただま言葉を交わす。

どうしてこうなったか、というと、えーと・・・

そう、確か、この男が私のことを肝心な時に役に立たないとか、ハーレム構成員3号だとか、言って・・・

「ぶ、ぶっ殺してやるっ!!!」

「う、うおおおおお！なに改めてキレてんだよ!!ちよつとまで、ストツプストツプ!!」

カズマが焦って私に待ったのポーズをとる。

「おいダクネス、なんか爆裂散歩に行ったためぐみん達いつもより遅くないか!？」

「?何をいまさら。アクアも一緒だし、ギルドで食事でもしてから帰ってくるのではないか。」

「いや、そうかもしれないけど・・・」

どうしたのだろう。普段から帰りが遅くなることが常習なこの男が何をそんなに心配しているのだろう。

「ダクネス、ちよつと様子見てきてくれよ。」

「は?言い出したお前が見に行けばいいだろう。」

「いや、俺じやどうも行けそうになくてさ。」

「・・・?お前は本当に何をいっているのだ。」

普段からおかしな言動をとる男だが、今日は本当におかしいな。

どこかに頭でもぶつけてしまったのだろうか。

「何か気になることでもあるのか、カズ・・・?・・・マ?・・・あれ?。」

そういえば、この男は誰だろう。

・・・いや、覚えているはずだ。

だって、私はこの男のことが・・・

「ああ・・・なんかヤバいみたいだな。」

気付くと、目の前の男は足の先や手の先が透明になって消え始めている。

「ま、待て!!えーと・・・か・・・ず・・・」

「ダクネス、多分、め×みんは、アクセルの街にいると思う。」

「めみん?アクセルの街?それは、ここのことではないか・・・お前、さっきから何を言ってる・・・」

「俺はこの世界じゃ、存在してはいけないヤツみたいだからさ、独りぼっちな××みんのところに行って支えてやってくれよ。」

「・・・みん?おい、それは一体・・・」

「×ぐみ×は、多分アクセルの街で、今頃独りで泣いてる・・・」

「おい、お前、消えるのか?お前は一体・・・」

私の目の前で、名前の知らないその男が姿を消した。



「ア・・・アクセルの街・・・」

「ダクネス!気づいたの!?!」

目を開けると私はクリスにおぶわれて王都の城下町を進んでいた。

「ぐっ・・・か、体が・・・いた・・・」

「大丈夫!?!いや、でも目を覚ましてよかった。無理やり口の中に流し込んだポーションが効いたのかな。ほんと、死んじやうかと思ったよ・・・」

死んじやう・・・?

・・・そうか、私は魔王軍幹部の爆裂魔法を喰らったのだった。

それで、その後、誰かに声を掛けられて気を失って・・・

あれはクリスの声だったのか・・・



「クリス・・・ありがとう。・・・それにしても、よくあの時、敵まみれの王城に乗り込んでこれたな・・・。」

「ちよつとね、裏技というか、神業をつかってね。」

「・・・。」

盗賊職の侵入スキルの奥義か何かだろうか・・・

いや、それよりも・・・

「クリス、お前・・・傷だらけじゃないか・・・。」

クリスには無数の刀傷や青あざ、火傷の跡がある。

この王城の上層から逃げる間に敵にやられたのだろうか。

「いやあ、王城の中は潜伏スキルで比較的スムーズに行けたんだけど、王城を出てから潜伏スキルの通じないアンデットナイトに襲われてね。逃走スキルでなんとか逃げてこれたけども、少し傷を負っちゃった。」

「・・・もういい。・・・私も自分で歩け・・・うぐう・・・。」

クリスの背中から降りようとするも、体が思ったように動かない。

その何気ない動作だけで体中に激痛が走る。

「ああ！動いちゃダメだよ！爆裂魔法なんて喰らっておきながら、まともに休んでもいないんだから。」

クリスが心配してくれるが、私には行かなければいけないところがある。

「・・・アクセルの街・・・。」

「アクセルの街？」

「ああ・・・そこで、私を待っている者がいるはずだ・・・。」

「誰の事？」

「・・・わからない」

わからない。でも、不思議と使命感が私の内から湧き上がっている。

アイリス様の居場所がわからない今、その居場所が知れるまで私はその使命感に従うべきだろう。

「王城を移動している間に魔王軍が話しているのを偶然聞いたんですけども……」

クリスは言い辛そうに口を開く。

「アクセルの街が次の魔王軍の侵攻点らしいよ。」

「……なら、なおさら急がないとな……」

そこには、私の実家がありお父様もいる。

そして、私が冒険者として育った大事な場所でもある。

王都同様、アクセルの街もデストロイヤーの襲来を受けて復興中だ。

できるだけ早く街に戻り魔王軍の侵攻に備えなければならぬ。

「……私としてはこんなボロボロなダクネスを、危険なところに行かせたくはないんだけど……」

クリスは眉を顰めつつ低い声で言う。

「まあ、頑固なダクネスだし、ほつといっても行こうとするだろうからね。」

「……さすが親友。……よくわかっているじゃないか……」

「せめて動けないダクネスを、実家まで連れてってあげるね。」

「……おいおい、王都からアクセルの街までどれだけ距離があると思つて……」

「あそこ、見て。」

クリスは目線を城下町の先へと向ける。

「……ああ、私も気になっていたが、あれは……」

クリスの目線の先では、雷撃やら炎やら氷柱やらが生まれては消え、そのもとで戦闘が行われている様子がうかがえる。

「紅魔族が王都の住民の避難のために駆けつけてくれたみたいなんだ。あそこまで行けば紅魔族のレポート部隊がいるはずだよ。」

「……少し距離があるみたいだが……」

「大丈夫。もう王城から脱出して、アンデットナイトの群れからも逃げ切ったからね。それに……」

クリスは横顔でニカツと笑みを作って言う。

「……いつも私はダクネスの背で守られてたんだ。ダクネスがピンチのときくらい、私の背中で守られてよ！」

「クリス……ありがとう……」

私は親友の頼れる背中に顔をうずめる。

守ることを生業とするクルセイダーの私。

誰かに守られるというのは、いつぶりだろうか。

その安心感に気を抜いてしまった私は、

彼女の背中であたまた眠りに落ちてしまう。

そして……



目の前のベットに眠る美少女、彼女はめぐみん。

カズマとアクアと私は、ベットの傍らで彼女の様子を伺っていた。

先ほど、ギルドで突然倒れたという話を聞いて、急いで屋敷に連れ帰りベットに寝かせている。

アクアが言うには命に別状はないようだが……

と、ずっとぐったりとしていたためぐみんに変化があった。

「……うう。」

「お、気がついたか！めぐみん！」

「めぐみんが起きたの!？」

カズマとアクアが声を上げる。

めぐみんはゆっくりと目を開き、その目がぼんやりと私達を映す。

「全く！突然倒れたって聞いたから、心配したぞ。」

そう、私たちはめぐみんをずっと心配していたのだ。

「めぐみん、どこか調子の悪いところはないか？」

「私の曇りなき眼によると、原因はあのヘンテコ悪魔ね！うちのめぐみんに酷いこととしてまったく！今度みんなでお礼参りにいきましよう！」

私とアクアの声が被る。

めぐみんはぼーっと私達を見ながらゆっくりと口を開く。

「……とても、とても怖い夢をみました。カズマ達が私の前からいなくなっていて、このアクセルの街が廃墟のようになって……どうしよう、どうしようって……」

めぐみんは、話しながら震えだす。

目にはうつつすらと涙が浮かぶ。

相当に怖い夢だったのだろう。

確かに、みんなが突然いなくなつて、アクセルの街が廃墟になるよ  
うなことがあるば、私も正気ではいられないと思う。

「おい、大丈夫か、めぐみん？俺らはみんなここに居るから。」

カズマがめぐみんの手を握って安心させようとする。

「そうだぞ。アクセルの街だって、今日も平和だ。めぐみん、外を見て  
みる。」

平和な街の景色を見れば、めぐみんも少し安心できるだろう。

めぐみんはゆっくりと起き上がって、躊躇しながらも、窓の外を見た。

そこにはいつものアクセルの街の平和な風景。

めぐみんの充血した瞳に光が戻ってくる。

めぐみんは、ホッと息をついて、こちらを向きなおした。

「・・・いつたい、あの夢はなんだったのでしょうか・・・カズ・・・」

「ん？めぐみん？どうしたの？」

めぐみんはこちらを振り返った瞬間、顔が真っ青になる。

「おい！めぐみん！顔が青いぞー！」

いつたいどうしたののだろうか。

まるで信じられないものを見るような眼だ。

「カ・・・カズマは？」

「カズマ？」

アクアが首を傾げる。

めぐみんが突然私たちの知らない者の名前を出したのだから当然だろう。

「おい、めぐみん、カズマとは誰のことだ？」

私もできるだけ優しい声を意識してめぐみんに確認をする。

めぐみんは再度震えだす。

「え・・・今、私の手をカズマが握ってくれていて・・・」

「めぐみん、カズマが誰のことかわからないけれども、アナタが震えていたから私が手を握ってあげたのよ。」

「そうだぞ、めぐみん、怖い夢を見て混乱しているのではないか。ついていてあげるから、しっかり休め。」

ギルドで倒れたのもそうだが、本当にこの紅魔族の子はどうしてしまったのだろうか。

何か錯乱する呪いでもかけられてしまったのだろうか。

・・・いやまて。

「な、なんで・・・カ×マ・・・カズ×は・・・」  
その紅魔族の子はぼろぼろと涙を流す。

この子は・・・

「×  
×みんな、私たちがそばにいてあげるから。ほら。」  
目の前の青髪の女性が紅魔族の少女の頭をギュツと抱擁する。

この子達は・・・誰だろう。

「ア×ア・・・お願いですから、冗談を言わないでください！ダクネスも！」

「・・・め、めぐ××。」

紅魔族の子は私の名前を呼ぶ。

しかし、私はこの子が誰かが分からない。

「×  
×マを探しに行きましょう×ア！ダクネ・・・ス・・・」

「ダクネス？誰？」

！！

青髪の女性は眉をひそめる。

「ダクネスは・・・？今・・・そこにいたダクネスは？」

何をいつているのだこの子は。  
私なら、ここにいるだろう。

×  
×私は目の前の二人のやりとりを呆然と眺める。

×  
×ん、ここにいたのは私1人じゃない。あ、屋敷の幽霊の子のいたず

らね！今度叱りつけとくわ！」

い、いや、私がここにいるじゃないか……！

「……う、嘘ですよ。」

……私が見えないのか？

「め×み×、ほんとうに大丈夫!?ちよつと落ち着いて！そうだ！元気がでるように、今まで誰にも見せたことのない最強の宴会芸を×××だけにを見せてあげるわ！ちよつと準備してくるから待っててね!!!」

「×、×ク!!駄目!!お願い！行かないで!!!」

青髪の女性がバタバタと部屋を後にする背後で、紅魔族の少女が必死に手を伸ばして叫んでいる。

バタン!!

紅魔族の少女は必死になりすぎて、ベットから落ち、顔を床にぶつける。

顔を上げると、零れ落ちる涙と鼻血でぐちゃぐちゃだった。

……その時、私の頭にある声がよみがえる。

『ダクネス、多分、×××は、アクセルの街にいると思う。』

『俺はこの世界じゃ××存在してはいけないヤツみたいだからさ、独りぼつちな××のところに行って支えてやってくれよ。』

×××は、多分アクセルの街で、今頃独りで泣いてr……』

……ああ、多分、あいつはこの紅魔族の少女のことを言いたかったのだな。

そうだ、私はこの少女のところに行かなければならない。

「行かないで×××  
!! ××× . . . ! お願い . . . ダクネス . . . ××× . . . .」

私の名前を呼んで、独り泣いている、この子のところに . . .

フツと窓の外から風が吹く。

目の前の子は、

窓の外に目を向け、

廃墟となったアクセルの街を見て、

. . . どさり、とその場に倒れた。



私が次に目を覚ましたのはダステイネス家の実家のベットだった。

クリスは無事に私をアクセルの街まで届けてくれたのだ。

私は急いで支度をして、魔王軍による王都陥落の報告をすべくギルドに向かう。

そしてこの物語の舞台は、アクセルの街へと移る。

私はそこで、別の歴史を知るといふ一人の紅魔族の少女と出会うことになる。

この世界で行われる戦争を盤面ごとひっくり返そうとする頭の



ふつとんだ紅魔族の少女。

ここから先の物語は、その紅魔族の少女に語り手を譲るべきだろう。

私がおかしな夢を見ることはもうない。

なぜなら、その夢は・・・

## 最終章 エリス編

### 第30話 月夜の銀髪盗賊団

ゴーン、ゴーン、ゴーン

轟音が邸宅全体に響き渡る。

それは侵入者の存在を知らせる警鐘の音。

「銀髪盗賊団が現れたぞー！こっちだー！」「くそ、見失った！」「もつと隅々まで探るんだ！奴らは逃走スキルや潜伏スキルの使い手だぞ！」「王城では謎のスキルで兵士達を次々昏倒させたそうだぞ！」「しかも無尽蔵の魔力の持ち主とのうわさだ！」「魔法使い職をもつと連れてこい!!」

警備兵の叫び声、駆ける音が邸宅に鳴り響く。



#### 【クリス視点】

ここはとある大貴族の邸宅。夜も更け、皆が寝静まる時間帯、月光を受け、二対の影が壁に伸びる。

「お頭、神器はこの先の広間を抜けた場所にあるんですよね？」

二対の影の一方の主、銀髪盗賊団のひとり、仮面をつけた黒装束の男、サトウカズマこと、私の助手君が私にヒソヒソと確認の声をむけた。

「そうだね、『宝感知』だと、この広間の先からとっても強い宝のにおいがするよ。だけど、広間には結構な人数の警備兵が集まってきているね。」

他方の影の主、銀髪軽装の盗賊団の頭、つまり私は、入り口沿いに広間の中をこっそりと覗き込み、助手君に答えた。

「いったんこいつらをどうにかしないといけませんね。」

助手君も同じように広間をのぞき込んだ。

広間には十人ほどの警備兵が集まっている。

私たちの行方について情報共有しているようだ。

私たちはヒソヒソと中に潜入する算段を立てる。

「何かいい作戦はある?」

「そーですねえ・・・お頭が大声あげて奴らの前に姿を現して、そつちに敵が目を取られている隙に俺が広間に侵入するってのはどうでしょう。」

「キミはサラツとろくでもないことを言うよね。アタシに囿になれっていつてんの?そこは普通、男である助手君の役目じゃない!」

「ほら、俺、男女平等主義者じゃないですか。」

「なんというか・・・こんな時だけ男女平等をふりかざしちゃうあたり、逆に不平等を感じちゃうよね・・・」

私は静かにハア、とため息をつく。

まあ、これでいてこの助手君、潜入の場面になると他に類を見ない才能を発揮する。

王城への潜入の時の大立ち回りなんて本職の私ですら感嘆の声をあげてしまった程だ。

あ、いや、私の本職は女神業か。

助手君はあたりを見渡すと、ハッと何かに気づいたような表情する。

「じゃあ、こうしましょう。」

そういつて助手君は、背中にかけて小型の弓をとり、矢を番えた。

矢の指し示す先は、廊下の続く先、遠くにあるガラス窓だ。

「ン『狙撃』ッ!!」

助手君の手元から放たれた矢は、遠くにあるガラス窓を正確に射抜く。

ガシャン!と、窓ガラスの弾ける小気味よい音が廊下に響いた。

広間の中の警備兵は、その音を聞いて反応する。

「今の音は!?!廊下の方からだ!」

私たちの潜んでる広間の出入口へと複数の警備兵の足音が近づいてくる。

「なるほどね！これで警備兵が廊下の窓に気を取られている隙に広間に潜入しようってことね！」

足音が近づいてきていることを確認して、私は潜伏スキルを発動・・・

「お頭！失礼します！『潜伏』ッ!!」

「え・・・ひゃああ!!」

助手君が私の腰に腕を回しながら、潜伏スキルを発動した・・・つて！ちよつと！そこお尻！お尻さわってる!!ここぞとばかりにわしゃわしゃしてる!!

警備兵たちが潜伏中の私たちの目の前を通り過ぎていく。

・・・ここで大声を出すわけにはいかない・・・

目と鼻の先、警備兵が駆けていく中、私は涙目になりつつ、壁に張り付いて警備兵が過ぎていくのを見送った。

・・・数分後

「ううう・・・アタシ、裁判すれば絶対に君から多額の慰謝料を請求できるよね・・・」

あたりに警備兵の気配がなくなったことを確認して潜伏スキルが解かれた後、私は目に涙を溜め、さめざめ呟いた。

「いやいや、お頭、これはあれです、迫りくる敵からお頭を守るためにやったことであつて、言わゆる緊急避難つてやつですつて。」

白々しくもそんなことを口走るセクハラ野郎に怒りの眼差しを向ける。

「ねえ、アタシも潜伏スキル使えるんだから、わざわざボディータッチとか不要だからね。仮に私も混ぜてくれるとしても、触れるのはお尻じゃなくていいんだからね。肩とかにちよろつと触れる程度でいいんだからね！」

「お頭、何をおかしなことを言ってるんですか。別々に潜伏スキル

使ったんじや、俺がセクハラする大義名分が無くなるじやないですか。」

「開き直り!?おかしなことを言ってるのは君の方だからね!」

どうにもこのセクハラ助手、私がクリスである時はやりたい放題である。

知つてのとおり、私は盗賊のクリスであり、この世界を管理する女神エリスでもある。

私がエリスの時は、なんというか、それなりに畏敬の態度を示してくれるのだけれども・・・

だから、私はできるだけ優し気な表情と声（つまり女神モード）で助手君に告げる。

「・・・サトウカズマさん、あなたには部屋でひとりでいるときに、人に見られたくないことをしている時に限って運悪く誰かが部屋に入ってくる呪いが降りかかることでしょう。」

「エ、エリス様・・・女神顔で言うのやめてください・・・マジで勘弁してください・・・調子に乗って申し訳ございませんでした!!」

そんなどうしようもない茶番をしつつも、私と助手君は問題の広間を抜け、神器を求めて先を急ぐ。

危険な侵入においても私達二人とも随分と余裕がでてきたものだとつくづく感じる私だった。



『宝感知』のアンテナがフルに立つ宝物庫までやってきた。

私が開錠スキルで宝物庫の扉の鍵をいじくっていると、助手君から声がかかる。

「それにしても、今回の神器はアイギスの下位互換って感じですかね。」

確かに、そうとも評価できるかもしれない。

私たちが目的とする神器は、それを装備すると装備者に向けられた魔法を無効化する腕輪だ。

魔法耐性をあげるものならば、紅魔族の里の「魔術師殺し」があるが、あのような大型のものでなく、もちろんバッテリー切れなどにもならない。そもそもあれは神器ではないが。

魔法やスキルを無効化するものならば、聖鎧アイギスがあるが、今回の神器は腕輪なのでもちろんアイギスのように失礼なことを喋るような装備品ではない。

真正正銘の神様印の装備品。RPGでいえばラスボスを倒した後、隠しダンジョンの最奥に眠っているクラスの伝説級の装備品だ。

ところで、この魔力無効化の腕輪やアイギスに対して、どんな存在にもダメージを与えられる最強魔法、エクスプロージョンを放てばどっちが勝つのだろうか。いつかやってみたい。

……まあ、それはよいとして、この神器も例にもれずというか、所有者以外の者が装備すると本来の力が発揮できない。

いや、この神器は、発揮できないというのではなく大きなデメリットを背負うことになる。

すなわち、所有者以外の者が装備すると、最凶クラスの猛毒の状態異常に襲われるのだ。

「そうだねー、悪用なんてされたら大変だけど、まあ、悪用される以前に装備者が猛毒ですぐ死んじゃうっていうのも危険だね。それを未然に防止するためにも早々に回収しないと……つと、宝物庫の扉、空いたみたいだよ。」

カチャリと音を立てて宝物庫の鍵が外れた。

私たち二人は、ゆっくりと扉を押し開け、宝物庫の中に侵入する。

宝物庫の広さは、助手君の屋敷の居間くらいだろうか。

宝物庫を見回してみる。

敵感知スキルに反応はないようだ。

……と、宝物庫の最奥、ご丁寧にも台座に乗せられる形で目的の腕輪が置かれていた。

「うーん、どう見ても怪しいよねえ……」

「でもお頭、あの台座、毘感知にはひっつかからないですね。」  
私たちは訝しみながら、警戒しながらも台座の傍まで近づくと。

そして、神器の腕輪に手をかけた瞬間・・・

「とっげきーーーーー！！！！」

掛け声とともに、複数名の警備兵達が宝物庫の窓から侵入し、私と助手君を取り囲む。

どうやら、宝物庫狙いだとあたりをつけて窓の外に待機していたようだ。

「ハーツハハ！銀髪盗賊団め、我々に気づかずまんまとここに現れおって！！貴様らが敵感知スキルをもつことは把握済みだ！我々は敵感知遮断の魔道具を使って存在を隠していたのだ！」

宝物庫に響く妙に説明口調な声。

複数名の警備兵たちの後ろから声の主が姿を現した。

その姿態は、がっしりとした体格、ジャケットを羽織り、ハットを被った中年の男性。

「でたね、とっつぁん！！」

そう、彼は何故か、私たちの逮捕に異様に執心しており、銀髪盗賊団の名前を聞くとどんな場所にも嬉々として現れる憲兵である。まるで日本で有名な怪盗アニメ、ルパン三世の銭形警部だ。

ちなみに私はテレビシリーズを全て網羅している。

好きなエピソードは『愛のダ・カーポ』

推しキャラは次元大介。

そして助手君も当然このアニメを知っているわけで。私と助手君は、その男を銭形警部の呼称、とっつぁんと呼んでいる。

「銀髪盗賊団め、今日こそ逮捕してやる。この包囲網を突破できるものなら突破してみろ！お前ら、抜かれるなよ！！」

「「「押忍！」」」

私たちの周りを警備兵が取り囲み、私達にじりじりとにじり寄ってくる。

四方や上方をチラリと見やるも抜け道になりそうなところが無い。

まさに王手。まるで将棋だね。

「はあ・・・助手君、四方囲まれちゃって、これはちよつとお手上げかなあ・・・？」

「そうですねお頭・・・俺らもここまでですかね・・・」

私は息を吐いて諦めの態度を示すべく両手を挙げてとつつあんの方に向けて歩く。

助手君が私の後に続く。

「おつと、おかしな真似をするなよ。まあ、素直にお縄にかかるというなら悪いようにはしねえよ。」

私達の素直な降伏の態度を見てとつつあんが上機嫌に声を上げた。

「そうだね・・・助手君!!!」

『ウインド・ブレス』!!!」

私が唐突にしゃがみ込むと、後ろでこつそりとクリエイトアースで土を生み出していた助手君が飛び出し、目の前の警備兵に向けて風の初級魔法で目つぶしを喰らわせた。

「ぎゃー！目が、めがー!!!」

目の前の警備兵はとつつあん含め、目を抑えて悶絶する。

「突破ー!!」

私と助手君は目の前で悶絶している警備兵達をかき分けて宝物庫から脱出する。



### 第31話 予感

「くそー!!!者ども、追えー追えー追えー!!!」  
背後でとつつあんの大声が響く。もう目つぶしから回復したようだ。なんとという超人。

邸宅内を警備兵から逃げ回る。

私と助手君は逃走スキルを使っているのだが、相手は速度強化の支援魔法を受けているようではなかなか振り切れない。

むしろこのままだと・・・

「やばい!!追いつかれる!!助手くん!」

「ハア、ハア・・・お頭!ここは俺を置いて先に行ってください・・・」

「な、なに言ってるの!?!」

女の私を庇って先に行かせるなんて、それじゃキミが捕まって・・・

「ハア、ハア、も、もう走れませんお頭・・・最近屋敷で喰っちゃ寝し放題で体力が・・・」

私は助手君（メタボ予備軍）の後ろに回ってお尻を蹴り上げた。

「しようがないね・・・『ワイヤートラップ』!」

私は後方に向けて鉄製のワイヤーを張り巡らせた。

後方からとつつあんが叫ぶ。

「おおっと!貴様らがワイヤートラップを使うことも把握済みだ!ワイヤー切断部隊前にでろ!」

どうやらワイヤー対策もお持ちのようだ。

しかし・・・

「これでもくらえ!!!」

私はそう言って液体の入った瓶をワイヤーが張られた廊下の天井に向けて投げた。

瓶は勢いよく天井にぶつかって割れ、張られたワイヤーに中の液体

をまき散らす。

「助手君!!」

「任せてくださいお頭! 『フリーズ』!!」

・・・?

「あれ? 凍りませんか?」

「助手君! ちがーう!! 火がほしかったの! あの液体は油だよ!」

「ええ!? お頭! それならそうと早く行ってくださいよ! 凍らせて切断されにくくする作戦かと思いましたよ!」

「言わなかったあたしも悪いけど! つてか凍らせたら切断されにくくなるの? じゃなくて、ほら! やつらが呆気にとられている今! ほら早く! ああ・・・冷やしちゃったけど、ちゃんと火つくかなあこれ・・・」

警備兵たちに目をやると私達の意図を把握したようでワイヤーの切断に取り掛かりつつある。

「おらあー! これでも喰らいやがれ! 『ティンダー』!!」

助手君の手のひらに生じた炎は油のかかったワイヤーへとまっすぐ進み、油に着火して激しく燃え上がった。

「あ、あちちち!!!! くそお! 誰か、火を消せえええ!!」  
炎の舞い上がる廊下の先、とつつあんの声が響いた。

私と助手君は向かい合って、頷き合い、例のセリフを高らかに叫ぶ。

「あばよーとつつあーん!」

「ぐぬぬ、次こそは逃がさんぞ! 銀髪盗賊団!」

廊下をかける私たちの背に、とつつあんからお約束の返事が届けら

れた。



貴族の邸宅から無事逃げ切った私たちは街のはずれで足を止めた。

「ハア・・・ハア・・・今回も何とかだったね・・・」

「ヒー・・・ヒー・・・フリー・・・もう無理・・・もう・・・も・・・モロロロロロロロロ」

「いやあああああ!!」

盛大に胃の内容物を逆流させた運動不足過ぎる我が助手・・・

「ちよ、ちよっと、その小川で顔洗ってきなよ。そんなんでよく冒険者が務まる・・・うぷ・・・」

貰いゲロを何とか寸止めして酸っぱい助手君から鼻をつまんで距離をとり、しっしつと小川へ促す。

あ、ちなみに女神はゲロをしないから。綺麗な虹ができるだけだから。

助手君はトボトボと小川に歩いて行った。

しかしまあ、毎度毎度危ない目に合ってるけど、それでも今まで一度も捕まらない私たちの悪運も相当のものだなと改めて思う。

私たちは二億の賞金首、捕まったらもうアウトなのだけれども・・・

私は回収した腕輪を仕舞うと、ごろんと芝に横になり足を投げ出し夜空を見上げる。

夜空には満天の星が輝き、大きな月が真ん中に鎮座している。

この世界も地球と同じように衛星が周回してるんだな、などと考え

てしまう私はやっぱりこの世界の住人とは異質な存在なわけで・・・

・・・

そういえばカズマ君から聞いた話では、アクア先輩はたまにぼうつと月を見上げることがあるのだとか。

・・・

アクア先輩——カズマ君に天界からこの世界に引きずり込まれた女神。

・・・

私がこの世界で先輩に会うと、天界では見たこともないような表情をいつも見せてくれる。

・・・

先輩はこの地に降りて何を思うのだろう。

先輩は月を見上げて何を思うのだろう。

女神から解放されるって、どんな感じなんだろう。

仲間と一緒に日々を過ごすって、どんな感じなんだろう。

・・・

・・・

・・・羨ましいな

「……クリス？」

「……え？」

「どうしたんだよ、ぼーっと空なんて見上げて。」

声を掛けられてふっと現実に戻った。

「い、いやあ、ちよつと考え事をね。」

「ふーん、まあ女神様で盗賊だもんな。俺には考えられないほどの働き者だし、俺には考えられないくらい大きな悩みも抱えてるんだろうな。」

そういつて彼は私の隣にごろんと寝転がった。

大きな悩みだなんてとんでもない、ひどく個人的な事だ。

私は自分の腕を枕にして彼の方に体を向ける。

「今回もありがとね。キミのおかげでまたどこかの誰かが救われるよ。」

「今度は俺じゃなくてめぐみんあたりを連れてつてくれよ。あいつはいつもやる気いっぱいだし。つていうか、これまでは不法侵入に窃盗、せいぜい傷害くらいだったけど、ついに現住建造物放火にまで手を染めちゃったよ……ハア」

「あそこの廊下は石造りだったから大事にはならないつて。大丈夫大丈夫。そもそも私たちは王城で王女様にステイールをかましてるからね。どうあがいても捕まったら極刑だよ。ふふふ。」

「ふふふ、じゃないんだけど……ハア」

彼の、やれやれ、といった態度がなんだか可笑しくて私は笑ってしまった。

そして、彼に何気なく問いを発する。

「あのさ、先輩つて今幸せなのかな？」

彼は目線だけこちらにチラリと寄越して口を開く。

「先輩つてアクアのこと？さーなあ、少なくとも酒を飲んでる時とゼル帝の面倒見てる時は幸せそうだよ。でも、どうなんだろうな。今日なんてめぐみんとのボードゲームでぼろ負けしてダクネスに縋り付いて泣いてたし。そういう昨日はダクネスに飲みすぎだつて酒を没

収されてめぐみんに泣きついてたな。ん？一昨日もめぐみんの杖を物干し竿代わりにしてブチ切れためぐみんに泣かされて……って、あいつ泣いてばかりじゃねーか……そんな真面目な顔でどうしたんだよ？」

「え？あ、ああ……ご……ごめんね。」

無意識にカズマ君の顔を凝視してしまっていたようだ。

「はっ！つ……ついに女神フラグが……」

「立ってないから。」

馬鹿なことを言い出した彼に突っ込みを入れた瞬間、彼が叫ぶ。

「あ!!!フラグで思い出した！そういえば今日の夜はめぐみんルートでお泊りイベントが発生してたんだっ！CG回収逃すところだった！あぶねえあぶねえ！」

「まずそのギャルゲ脳をなんとかしなね……」

カズマ君は慌てて立ち上がって私にお別れの言葉を向ける。

「じゃあまた！どうやって天界まで帰るかわからないけど、クリスマスも気を付けてな！」

「あ……ね、ねえ！」

「ん？」

——もうちょっとだけ話を……

私は上半身を起こして彼を引き留めていた。

彼は走り出そうとした足を止めてこちらを振り返る。

私は彼に向けて伸ばしかけた腕を途中で止める。

「あの、いや……その……あ、ありがとね！」

「?……おう、じゃ、またな。」

……

彼が私のもとから離れていく。  
私は伸ばしかけた腕を静かにおろす。

### 第32話 エリス様の憂鬱

【エリス視点】

魔法無効化の神器を回収した私は天界に戻ってきていた。  
天界の執務室。日常業務に一区切りつき、ハアと息をつく。  
そして物思いにふける。

.....

私はあの瞬間、どうしてカズマさんを引き留めようとしたんだろう。

アクア先輩の話をもう少し聞きたかった？

そう、確か、あの時は旅立った先輩のことを羨ましいと思ったんだ。

もし先輩でなく私がカズマさんと旅立つことになっていたら・・・

.....

確かに銀髪盗賊団としてカズマさんと義賊をしているとき、私は昂  
(たかぶ) っている。

常に危険と隣り合わせなのは確かだけれども、ドキドキしている。  
楽しいと感じている。

とつつあんの包囲網をかいくぐったときなんて、本当にたまらな  
かった。

思い出すだけで顔がにやけてしまう。

.....



貴族の邸宅から逃げ切ったあと、地面に寝そべって見上げた夜空の月はなんだかいつもよりも淡く見えた。

あの時、カズマさんともう少し話をしたいと思った。その時間ももう少し続けばと思った。

そして、別れるのが寂しいと・・・

・・・

・・・

・・・

「はああああああああん!!!」

ぐるぐる回るその時の回想と落ち着かない感情に、私は頭を掻いて大声をあげた。

「ど、どうしたのエリス!?いきなり悩まし気な声をあげて・・・」

「はえええ!?!」

突然と声をかけられたことに驚いた私が顔を上げると、そこには私の先輩にあたる女神が立っていた。先輩といってもアクア先輩ではない。

彼女は時を司る女神にして私の先輩にあたる女神だ。

その先輩が部屋に来て私の目の前に立っていたことにも気づけないくらい私は考えに没頭していたようだ。

先輩が訝し気な表情をして私を見ながら問う。

「何か悩みごとかしら?」

「い、いえ、ちよっと下界にいるアクア先輩のことなんかを考えてまして・・・」

「アクア・・・あの駄目神がどうかしたのかしら。そういえばエリスはあのトイレの神様と仲が良かったものね。最近、彼女の姿を見ていな

いと思ったら地上に遊びに行ってたのね。まったく、日本での業務はどうしたのかしら。」

「あ、あははははは．．．まあ、地上に降りたのは、いろいろ事情があったようですよ．．．」

正直、私は、目の前の先輩に苦手意識を抱いている。

アクア先輩とは真逆の性格、冷静沈着で感情が読めないというか、鉄面皮というか、人間味がないというか、仕事人間というか。まあ人間ではなく女神なのだけでも。

そんなキャリアアウーマン系女神は早々に話を用件へともっていく。

「まあいいわ。エリス、あなたに聞きたいことがあったの。」

「な、何ででしょうか？あ、とりあえずお茶でも．．．」

「結構よ．．．あなた、地上で神器を回収しているようね。」

「ええ、まあ。あ、そういえばこの腕輪も回収してきたもので．．．」

「回収した神器ってどうしているの？」

「神器をどうしているか．．．?」

意識高い系女神の先輩は脱線もせず淡々と私に問いを向けてくる。

なんだか取り調べを受けている気分だ。

「えーと．．．危ない神器なら封印して使えないようにしますし、新たな所有者が見つかるようであれば魔王軍への対抗措置として別の所有者に授けていますが．．．。」

「ふーん．．．」

．．．なんだろう、すごく嫌な予感がする。

「実はね、エリス、あなたには、天界に敵対する可能性があるんじゃないか、という容疑がかかっているわ。」

「……は？」

これ以上なくらい阿呆な顔になっていた気がする。  
意味がわからない。

なぜ私が天界に敵対しなければならないのだろう。

とりあえず私は周りを見渡し『ドツキリ大成功!』と書かれた立札をもった天使の姿を探す。が、見つからない。

「なにキョロキョロしているの?」

「え、え……つと、私は神器を回収していただけなのですが、なぜそんな疑いがかかっているんですか?」

確かに神器の力をもつてすれば、天界の戦力にも対抗できるかもしれない。けれども、そんなことをしようなど欠片も思っていないのだけれど……

「ああ、勘違いさせちゃってるみたいね。ごめんなさいね。あなたに容疑がかかっているのは、神器を回収しているから、という理由ではないわ。」

「で、ですよね!でしたら、なぜ私にそんな容疑が……」

「エリス、あなた、禁忌を犯したようね。」

「……は？」

本日二度目となる阿呆な顔を目の前の女神へと向ける。

禁忌?……何だろう。

私が天界規程に背くようなこと……そんな……あ、カズマさんの蘇生?

でも、あれはアクア先輩の神様レベルの理不尽リザレクションに付き合わされているだけであって……いや、最近では私の方もカズマさんの蘇生を後押ししている気もする……

「あの……確かにとある冒険者の方を複数回蘇生させてはいますけれども、あれはちゃんと事後に然るべき手続きをとって……」  
「そうじゃないわ。」

・・・何だろう、ほかに心当たりなんて・・・

「あなた、タイムリープを使ったわね。」

「はえ??」

本日三度目となる阿呆な顔を目の前の女神へと向ける。

私は全く身に覚えのない指摘をうけて素っ頓狂な声を上げてしまっていた。

タイムリープを使った？

タイムリープとは、簡単にいうと時間を巻き戻す術である。

タイムリープは、天界の秩序の崩壊を招いたり、タイムパラドックスの発生により時空間が崩壊するという説もあるほどに危険なものだ。

そして、タイムリープは成功する可能性がとてつもなく低い。

ゆえに、天界規程によって使用が厳禁とされており、使用者には厳格な罰が与えられ、神格をはく奪されることになっている。

そのような代物であるため、それを使う女神は滅多にいない。少なくとも私は使われた例を知らない。

「わ、私にはまったく身に覚えがないのですが・・・」

「まあ、タイムリープによって歴史が変わって、タイムリープを使ったという事実自体が改変されたのでしょよね。」

・・・そ、そうなの??

確かにタイムリープで歴史改変がされたことを知覚できるのは、時を司る女神が見通す悪魔くらいだといわれている・・・

「で、でも私にはタイムリープを使う理由なんてありませんよ?」

「あなたがタイムリープを使った理由は私もわからないわ。でも別の歴史のエリスには何かしら動機があつたんじゃないかしら。」

そんな・・・別の歴史の私はなぜそんな馬鹿なことを・・・

もしかして、別の歴史の私は本当に天界への敵対とかを企てていたり・・・

・・・いや、私は英雄譚とかが大好きなので、世界を守るにはタイ

ムリープで歴史を変えるしかないとか、そういった方向で絆(ほだ)されるとチヨロくもタイムリープを使ってしまうかもしれない。

・・・ありえる。

自重の気持ちでいっぱいになっていた私に向けて意識高い系女神は言葉を続ける。

「でも、いきなり神格をはく奪されたりはしないわ。天界でも相應の調査をして証拠を揃える必要があるからね。あと、重大なタイムパラドックスが生じていないかの調査も必要だし。」

ということは、証拠次第では、私の神格がはく奪されるということか。

確かタイムリープの罪には地獄送りの刑という極刑が科されていたような・・・

途端に全身に冷や汗がわき、顔が青くなつていくのがわかる。

「それで、あなたに上から通達があるわ。」

「な、なんででしょうか・・・」

「あなたの女神の能力と権限を、調査終了まで凍結します。」

「・・・え?」

### 第33話 ホームレス女神

【クリス視点】

「お腹すいた・・・」

女神の能力と権限を封じられた私は着の身着のままです。クリスとして下界におりていた。

困ったことに私はこの世界に資産を全く保有していない。

手に入れたお金はほとんどをエリス教の教会に寄付しているし、余った分も酒代に消えてしまっている。

それでも衣食住は天界で確保されていたから、困ることは全くなかった。

それがまさか、身に覚えのないタイムリープの罪で一転、無一文となつて路頭に迷うことになろうとは・・・

まったく、私にタイムリープをそそのかした頭のおかしい人は一体誰なのか。会ったら文句の一つもいってやりたいところだ。

・・・と、半ば八つ当たりのことを考えるのはここまでにしよう。

とりあえず、当面は下界で過ごすさなければならぬのだからまずはクエストでもこなしてお金を稼ぐしかない。さすがに私利私欲のため盗みに入るわけにもいかないし・・・

クウ、と私のお腹が音をたてる。

「ああ、お腹すいた・・・」

エリス教会の炊き出しに・・・いや、女神である私が信者の炊き出しのお世話になるのはちよつとどうなのか。

でも、このまま飢えていてはクエストもままならない。

私はすぐる思いで、事情を理解してくれそうな彼のもとにむかうことに・・・



「女子会よ！女子会をするの！」

目の前の水の女神様が高らかに宣言した。

「では安楽少女の駒をこのマスに移動して安楽女王に進化です。．．．いきなり女子会とはどうしたのですか？アクア。」

ボードゲームで遊んでいたためぐみんが反応する。

勝負相手のカズマ君も．．．

「アクア、大体お前は女子じゃなくバB．．．

『ゴツトブロおおお!!』．．．グッハアアア!!!」

「ああああああああ！女王—————!!!」

「にやああああああ!!!」

いろんな叫び声が屋敷に響く。

ボードゲームの駒を盛大にぶちまけつつカズマ君が居間の隅まで吹っ飛ばされ、めぐみんが叫び、近くで寝ころんでいたちよむすけまでが巻き込まれている。

．．．．．

そう、私は当面天界に戻れないため、ダクネスやカズマ君のいる屋敷に厄介になることにしたのだ。カズマ君には私の境遇を説明して了解をもらった。アクア先輩達も私のことを歓迎してくれた。

そして、この屋敷の女性人口が増加したことでもなにかしらピンと来たらしいアクア先輩が唐突に女子会の開催を提案したのがここまでの話だ。

そんなアクア先輩にダクネスが口をひらく。

「女子会といっても、別にカズマがいなければできないような話もないだろう。仲間外れはいささか可哀想ではないか。」

「まったく！ダクネスはこれだから女子力が低いと言われるの！可愛いララティーナちゃんの名が泣く．．．いたい！なにをするの！ボードゲームの駒を投げつけないで！この間、ダクネスがこっそり可愛いク

マさんの下着を通販で取り寄せたのを黙っていてあげたの・・・いたい！いたい！ボードゲームの盤で叩かないで！カズマさーん！カズマさーん！」

ダクネスに叩かれているアクア先輩にカズマ君が声をかける。

「何？じゃあお前ら今日の晩御飯は外で食べてくるのか？言つとくけど、小遣いはやらんぞ。」

「何言ってるの？外に出ていくのも面倒だし、屋敷で女子会をやります。カズマは料理スキルで私たちに美味しい料理を提供してから外泊でもどこでも好きなところにいくがいいわ。」

「なめんな。」

ダクネスに加えてカズマ君にも叩かれそうになったアクア先輩は私の影に隠れた。

「クリス！守って！女神に害を及ぼそうとする悪しき者どもから女神の従者として私を守って！」

従者でなく私も女神なのですが・・・休職中だけでも。

でも2対1は少しかわいそうな気がするので、私はカズマ君たちをなだめる側に回る。

「まあまあ、私もキミの料理を手伝うから。部屋を借りるんだからそれくらいはさせてよ。ほら、ダクネスも許してあげな。アクアさんも意図せず煽る形になっちゃったみたいだし。」

「意図せずってのが厄介なのだが・・・」

ダクネスはぶつくさ言いながらボードゲーム盤をテーブルに置き、めぐみんと一緒に駒を拾い出す。

「じゃあいいわ。女子会じゃなくて女子風呂にしましょう。今日はみんなで一緒にお風呂に入りますよう！」

「もちろん俺もみんな一緒に構わんぞ。」

「このやり取り、前にもやった気がしますが、もちろんカズマは別ですよ。」

めぐみんから当然のように一蹴されたカズマ君はぶつくさ言いながら晩御飯の支度をするために台所に向かっていった。

私は彼の手伝いをすべく後を追いかけた。





「おーい、お前らーご飯ができたぞーテーブルを片付けろー」

カズマ君と私は調理を終え、料理をもつて居間に戻った。

ん？なんか人数が一人増えて・・・

「アクア様ーご飯が来ましたよーさきつ、上座へどうぞどうぞ！・・・これはクリームシチュー！ちよつと、このお酒と合わないでしょ！もつとこつてりしたものを！こつてり系を要望するわ！申し訳ありませんアクア様、すぐに作り直させま・・・はぶっ！」

「・・・あんた、何でいんの？」

カズマ君が平手打ちで突っ込んだ相手はアクシズ教のプリーストのセシリーという女性信者だった。

居間ではアクア先輩とセシリーが早くも酒盛りを始めていて、もう二瓶めにとりかかろうというところだった。

「お客様に向かって、何でいんの、とは随分なご挨拶ね。なけなしのお金で手土産のお酒を買ってきてあげたというのに！」

「その手土産、今自分で飲んでるよね。というか、あんたの分のご飯は作ってないぞ。」

「なっ!?目の前にそんな美味しそうなクリームシチューがあるのにお預けなの？あなたには分かち合いの心は無いの？」

「おい、酒に合わないからつて作り直しを要求したやつがどのツラ下げて言いやがる。そんなに飯を食いたきや、ちよむすけ用のキャットフードがあるからそれをくれてやるよ。」

カズマ君は、そう言いながらも追加で一人分の食器を準備する。

めぐみんがちよつと引き気味に呟く。

「ほんとにアクアが二人になったみたいですね・・・あ、カズマ、私も配膳手伝いますよ。クリスはお客さんなので座ってもらって結構ですよ。」

「いやいや、居候つてのも肩身が狭いんでこれくらいはやらせてよ。」

めぐみんとそんな会話をする私をセシリーの目が捕らえた。

「あーあなたはエリス教徒のくせに妙にアクシズ教の気質のあるクリスさん！ここであったのも何かの縁！ぜひ私と一緒にアクシズしませんか？」

「いや、アクシズって何さ。ってか私は前にも言ったけど改宗するつもりは・・・」

「そういえば、クリスはアクア祭りの時にアクシズ教の出店を手伝ってくれたりしたわね。あの時はありがとうねクリス。」

「ええーそうなのですかアクア様！それはもう半分くらいアクシズ教といつても過言ではないのではないじゃありませんか！ほら、ここに入信書があるから署名するといいわ。多分、そのぺったんこなおっぱいもエリス神の呪いだと思うのよ。いい？アクシズ教の経典に記される真実、それは、エリスの胸は・・・」

「うるさいよ!!!」  
私はそこにあつたボードゲームの駒を掴んでセシリーに投げつけた。

「きやー！何をやるの！背教者めー！」

「なんだ、クリスとセシリー、知り合いだったのか。」

私達の様子を見て、料理を並べていたカズマ君が何気なくいう。

「あ、あはは、まあちよつとね・・・」

絶賛アクシズされた直後の私は落ち着くために水を一口飲むことにする。

私とセシリーはめぐみんが結成した盗賊団の構成員として顔を合わせていた。

そこでなぜか息が合ってしまい、アクシズ教への勧誘を受けている。

「それで、何しに来たんだよ。」

「そうそう、ここに来た目的は他でもないわ！お宅のめぐみんさんを私に下さい。」



### 第34話 酔いどれ女神

それは王都で起こった事件。

セシリーの話によると、王都のアクシズ教団が販売する聖水に毒が混入されるという事件が連日発生したらしい。

幸い被害者はでていないようだが、アクシズ教の聖水の販売が停止してしまったとのことだ。

そこで、アクシズ教団は事件を調査し、犯人特定に至ったのだが、その犯人は、エリス教徒の信者であり、且つ、そこそこの通った冒険者だったのだ。

早速、王都のギルドにその冒険者を捕まえるよう依頼がなされたが、その依頼はことごとく失敗したらしい。

そしてアクシズ教団は、最終的に数々の魔王軍幹部を葬ってきた名うでの冒険者であるカズマ君たちのところに話をもってきたとのことだった。

「エリス教の子がアクシズ教団の聖水に毒を・・・」

私は呟き、頭を抱える。

これまでエリス教団がアクシズ教団の信者にいたずらを受けていたことは知っている。仕返しのひとつもしたくなるという気持ちもわかる。でも、私の信者がそんな人命にもかかわるようなことをするなんて・・・

セシリーは話の締めくくりに高らかと声を上げる。

「というわけで、ついに破壊神エリスの封印が解けて、世の中に邪悪が広がりつつあるようです。聖戦の日はちかいわー!」

本人を前にしてそれをいうか・・・というか、そんな変な設定、私には無い。

「セシリー、エリスをあんまり悪く言わないで頂戴。」

アクア先輩がフォローしてくれ・・・

「あの子は、ちよつと胸を偽装して信者を集めるっていう淫売なところがあるけれども、そんな破壊神呼ばわりされるようなことなんてな

くて、単にちよつとむつつりスケベなところがあるだけで・・・痛い！クリス何をするの！やめてやめて！」

アクア先輩の頭をポカポカ叩いていた私の傍ら、カズマ君がセシリーに向けて言葉を続ける。

「お前ら聖水なんて売り出してたんだな。一応聞くけど、ただの水とかを聖水と言い張って売ったりしてないだろうな。詐欺だぞそれは。」

「そんなわけないじゃない！水を司る女神アクア様の聖水は評判なのよ！たまに、アクア様の聖水は色が濃いことがあるだとか、ちよつとしよっぱい気がするだとか、そんなお客様の問い合わせがあるくらいで・・・」

「ねえカズマ、なんだか私、公然とセクハラを受けている気がするのになぜなのかしら。」

「おい、本当に聖水という名で変なもの売りつけてないだろうな！」

何だか話が脱線しつつあるような気がする。

ところでエリス教の聖水に変な噂はないだろうか・・・後で確認しよう・・・

話に一区切りついたところでセシリーは住まいを正してその場の面々を見渡し、頭を下げる。

「それで、どうか犯人を捕まえるのに協力してほしいの！お願い！」

セシリーの依頼に対して、まずダクネスが声をあげた。

「私は手伝うぞ。同じエリス教の信者に容疑がかかっているならば、その真偽を確かめたいところだ。」

「きやー！ダクネスさんカッコいい！では契約成立ということでの書類のこの欄にサインを・・・」

「おい・・・これはアクシズ教の入信書なのだが・・・」

「王都が舞台だと爆裂魔法が撃ちにくいという不満はありますが、私もまあいいですよ。」

「きやー！めぐみんさんカッコいい！結婚してー！」

「なんでそうなるのですか。」

めぐみんは事あるごとに抱きついてくるセシリーを引き離しつつ

答える。

「ねえ、私も連れてつってもらっていいかなあ。私もエリス教徒だから気になるんだ。」

もし本当に私の信者がそんなシヤレにならないことをしているなら、私にも責任がある。

いくら今は女神としての権限が凍結されているといっても見過ごせる問題じゃない。

最後に聞かずにがな、といった様子でアクア先輩が締めくくる。

「じゃあ賛成多数により可決つてことで・・・」

「俺はいかないぞ。」

「何ですってKYニート！この流れで、まさか反対するの!?あんた空気が読みなさいよ！」

「お前だけにはKY言われたくないわ。妹に会いに王都に行くならやぶさかではないが、何でアクシズ教団を助けるために行かなきゃならないんだよ。俺はあの白スーツの策略で王都へのテレポートが止められてて出禁状態だし、王都は俺にとって何かと危険なんだよ。」

カズマ君に銀髪盗賊団として高額の懸賞金がかけられている事情を知るダクネスやめぐみんも少し複雑な表情になる。

「危険っていったって、王城でニート放題好き放題やったから王城の人に目をつけられてくるくらいでしょ。身から出た錆ってやつよ。」

「俺はできるだけアクシズ教団とかかわらないで生きたいんだ。それにこれは厄介毎に巻き込まれる流れだ。俺はいかないからな！絶対だぞー！」

「鬼！アクマ！カズマ！クズマ！キャベツ野郎！」

「なんだところら！また泣かされたいか！」

カズマ君とアクア先輩がぎゃあぎゃああと喧嘩を始める。

結局、その場ではカズマ君が首を縦に振ることはなく、食事はお開きとなってセシリーは帰っていった。



女子風呂を終え、パジャマ姿になった私はカズマ君と二人、彼の部屋でお酒を飲みなおしていた。

今日はいろいろなことがありすぎて、誰かに愚痴を吐きたい気分だった。

でも、ダクネス達がいるところでは天界サイドの話をするのができない。

女神のことも盗賊のことも何でも話せる相手はカズマ君しかいないのだ。

というわけで私は愚痴を聞いてもらいに彼の部屋に来たのだった。

そして私はお酒を片手にここぞとばかりに愚痴を吐きまくっていたのだった。

「おいおい、ちよつと飲みすぎじゃないのか？」

カズマ君が眉を顰めて言う。

「だいじょうぶだいじょうぶ！なんたって、私は幸運の女神様なのよ！あははは！」

「お頭、完全に出来上がってますよね。なんかアクアみたいな口調になってますよ。」

我が助手君が心配してくれるが、私はこれで結構お酒に強いのだ。

さつきからちよつと気分が良くてフラフラして饒舌になる程度にしか酔っていない。

カズマ君に心配されたことに気を良くした絶好調な私は話を続ける。

「・・・それで回収した腕輪の神器なんだけどね、天界でその先輩に没収されちゃってさあ。」

「女神ってやんちゃでお転婆なのばかりだと思ってたけど、そんなお局系女神もいるんだなあ。なんか堅苦しそうでニート気質の俺には天界は無理だなー。」

「あはは。私も最近、下界に降りることが多いから天界と比べちゃってね。天界の堅苦しさは以前に増して感じちやってるよ。ほんとに、

「この世界の人達が羨ましいよ。」

「まあ、ここもロクな世界じゃないけどな・・・」

「そう？でも私はキミが結構この世界のことを気に入ってくれていると読んでるんだけどなあ。」

「・・・なんかもうこの世界で生きていくことを受け入れつつはある・・・」

「うんうん！この世界の管理者として嬉しいよ！今は管理業はお休み中だけど・・・」

私は床にころん、と仰向けに倒れる。

私のことを何でも打ち明けることができるのは彼だけだ。

だからか、彼といるときは、そう、気を張らなくてもよい。

なんだかいつもよりお酒の回るペースが早い気がする。

「女神の資格が封じられてるんだっけ？俺なら長期休みだと思つてめっちゃ好き勝手やるけどな。」

彼がおつまみのさやえんどうをポリポリ食べつつ言う。

「確かにそうだよ。長期休暇だと思えばいいか。女神はいろいろな規則に縛られて休みも自由も無いし、そのくせ誰かに褒められるわけでもないし。あ、キミが私を褒めてよ。崇めて、甘やかしてよ。」

「どっかのダメな女神みたいなこと言うなよ・・・」

「あはは、・・・でも先輩がそんな風に言いたくなるのもわかっちゃうかも。」

.....

「はあ、地獄送りになったらどうしょ・・・悪魔となんて一緒にやっていける自信ないよ。」

「まあ、悪魔の中にも子供たちの送り迎えを日課としているご近所に評判な気のいい奴もいるかもしれないだろ？」

「そんなの、いるわけないでしょ。」

彼は私を不安にさせないように言ってくれるのだろう。

でも本当につらいのはこの世界のみんなと会えなくなることだ。



それを考えると・・・

・・・

・・・

・・・

「ねえ、王都のエリス教の子が聖水に毒を混ぜてるって事件なんだけど・・・」

私が上半身を起こして話を始めたところ、私の話の先を読んだらしいカズマ君は先回りして返事をよこした。

「あー、俺は行かないって。クリスも今は女神としての権限とかを封じられちゃっているんだろ？それなのに、わざわざ首を突っ込まなくていいんじゃないか。」

強情な彼に対して頬を膨らませてみせる。

「ねえ、お願い！ほんとにエリス教の信者のしわざなのか、知りたいの。」

彼が嫌がる気持ちもわかる。

別に彼を無理に誘う必要はないのだ。

でも・・・

「仕事熱心すぎだつて。今くらい休んだほうが・・・」

・・・でも今は、なんだか、彼にわがままを言いたい。

「カズマさん・・・どうか、お願いします。」

彼に甘えてみたい。

「え、エリス様・・・」

やっぱり、

「カズマさん・・・」

結構酔っているのかもしれない。

「ずるいですよ、エリス様・・・」

彼の手をとり両手で包みこむ。

「カズマさん・・・」

「ぬおおおおおおお・・・」

彼は何かに耐えるような表情をしていたが、最後には観念したよう  
で、ぽろりと言葉をこぼす。

「しよーがねえなあ・・・」

「やったああ!!ありがとうございますカズマさん!!」

「おわあ!!」

私は彼に飛びついていった。

勢いあまって彼を押し倒してしまう。

ごとん、

と、衝撃でお酒の瓶が床に倒れてころころと床を転がっていく。

突然のことに戸惑っている彼の顔が目の前にあった。

彼が困ったような表情をする。何だか可愛く思えてしまう。

こくん・・・

どちらともなく唾をのみ込む音を立てる。

酔いが回っているはずなのに、五感が冴えわたっている気がする。

私はそのまま、目を細め、目の前の彼との距離を縮めて・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

いや、待つんだ私。落ち着け。

酔いが回ってなんだか大胆になっているのは自分でもわかる。

今日はいろいろなことがあって精神的にやつれ気味だったというの  
もわかる。

わかるけれども、

これはいくら何でもやりすぎなんじゃないだろうか。

思考が散漫になりつつある中、理性を振り絞って思考をフル回転させ  
せる。

私は女神。

特定の誰かに肩入れするなど・・・あれ？

今の私は女神としての能力と権限を凍結されている。

ある意味女神じゃないとすら言えるのでは・・・

・・・いや、そうじゃない。

女神か否か、じゃなくてもっと根本的な問題がある。

そう、私はめぐみんの気持ちを知っている。

友達であるダクネスの気持ちも知っている。

これ以上先に進めば、私の友人達はどんな気持ちになるだろうか。

そう、ダクネスなら、これが寝取られ・・・とかいつて喜・・・

・・・

・・・いや、そうじゃない。

友人達を裏切ることになるんじゃないのか。

そもそもこのところから考えよう。

第一、私はカズマさんのことをどう思っている・・・

「うおおおおおおおおお!!!!」

目の前の彼が突然叫んで、覆いかぶさっている私をもとの座った体  
勢に戻した。

私は突然のことにビクリと体を震わせてされるがままになってい

た。

そして、彼は叫びながら部屋を飛び出して行ってしまった。

その後、すぐにアクア先輩達の大声が聞こえてくる。

「大変！欲求不満のカズマさんが発狂しながら屋敷を飛び出していったわ！アクセルの街の女性を襲う気よ！みんな止めるのよ！または警察を呼ぶの！」

「カズマ！どうしたのですか!?!」

「おい待てどうしたカズマ！くっ、この寝巻で追いかけるのも・・・」

その声を聴きながら、私はしばらく呆然と頭の中で状況を整理する。

そして何となく彼の奇行のきっかけに辿り着く。

「そうだよね・・・」

彼には好きな人がいるんだよね・・・

裏切れないよね・・・

・・・

私はそのまま横向きに倒れる。

・・・私はなんて卑しい女神だ・・・

・・・いや、今は女神じゃないか・・・

・・・もう神格なんて・・・

ふと、日本で有名な、あのセリフが頭に浮かんだ。

「やつはとんでもないものを盗んでいきました・・・か・・・」

まだ少し酔いが回っているのかもしれない。

彼の部屋の窓越しに見える月が、いつもより小さく、遠くにあるよ

うに見えた。

### 第35話 恋心

助手君の部屋でやんちゃしてしまった翌日、私にあてがわれた部屋の片隅で私は体育座りで頭を抱えていた。

「ううう、私はなんて馬鹿なことを・・・」

酔った勢いとはいえ昨日の自分の言動を振り返って酷く鬱になり、軽く死にたくなる。

ダクネスやめぐみんの気持ちを知っていながら酔った勢いで助手君に手を出そうとするなんて・・・

私のバカ！バカ！私ってホントバカ！

「あああああああああ・・・もう・・・死にたい・・・」

もう天界の処分など待たずに書置きでも残して地獄に旅立とうかと思っていた矢先、コンコン、と部屋の扉がノックされた。

「どうぞー・・・」

乾いた声しか出ない。

ガチャリと部屋の扉が開き、私の苦悩の中心たる人物が姿を現す。

「おはよクリス、昨日はよく眠れたかー？ご飯出来てるから居間に集合なー」

「あー、ありがとう・・・」

そして彼は何もなかったかのように戻っていった・・・

・・・って待った。

え？何で彼はあんなにも平然としているの？妙にスッキリとした顔をしているの？昨日あんなことがあったのに、あの賢者然とした態度は何？もしかして気にしているのは私だけ？私が勝手に舞い上がったたり落ち込んだりしているだけ？もしかして私ってすごく間抜けなの？バカなの？死ぬの？

ひとしきり疑問が頭を駆け巡った後、今度は彼の態度に納得いかなくなる私。

なぜ私ばかりこんな悩まなきやいけないのか。

それに、私が彼に対してあんな態度を見せたにもかかわらず、相手に全く意識されないのは面白くない。

そんな理不尽かつ面倒くさいことを考えていることを自覚して、ぽろりと言葉が漏れる。

「まるで普通の女の子だ・・・」

私は、悲しいような、嬉しいような、切ないような、折り合いの付けられない気持ちのまま、トボトボと朝食の席へと向かう。



「王都へ行く?」

この屋敷の三人娘の声が午前の食卓に響いた。

「ああ、俺も行くから、さっそく準備しようぜ。テレポト屋は白スーツのせいで使えないし、めぐみん、テレポトが使えるゆんゆんをお願いしておいてくれよ。」

「テレポト屋が使えないのはクレア殿のせいではなく、9割方お前の自業自得なのだな。」

「うるさいぞ、クマさんパンツ。」

「んなああああ!」

ダクネスが真っ赤になって叫ぶ。

その傍ら、私は少し驚いていた。

彼のことだから、あの時は酔ってたし王都行きの承諾は無効だ、とか言い出すのかと思っただけでも・・・

私のわがままにちゃんと答えてくれたんだな、と妙な嬉しさがこみあげてしまう。

・・・ああ、これはもう重症だ。

めぐみんは助手君の態度に疑問をもったようで彼に問いかける。

「別にゆんゆんをアッシーにするのは、いいぞもつとやれなのですが、カズマは昨日あんなに頑なに行きたくないと言っていたのに、どう

いった心変わりですか？というか、大声で屋敷から飛び出していった理由を未だ聞いてないのですが。」

すかさずダクネスも同調して追及に加わる。

「そういえばクリスも昨日の夜は部屋にこもりきりだったな・・・お前たち何かあったのか？」

私にも話をふられ、脈拍が早くなる。

昨日のことを追求されるといろいろ不味い。

冷や汗も出てきた・・・

「きき、昨日はちよつとアレがソレでああなつて・・・」

私が訳のわからないことを言い始め、めぐみんとダクネスが顔をしかめたところ、すかさず彼がフォローしてくれる。

「あー昨日は、ちよつと王都の毒混入の件でクリスと話しててな。クリスに面倒事を押し付けられそうになって逃げたんだ。でも、困った人々を放っておけない英雄気質な俺は一晩たつて使命に目覚めたんだよ。」

「カズマさん、私は突つ込まないわよ。」

「その使命に目覚めたきつかけが何かを聞きたいのですが・・・もういいです。どうせ、ロクなことじゃないでしょうから・・・」

「クリスもこの男の腰を浮かせる難儀さがわかっただろう。いつもクエストを嫌がる男だから、その気にさせるのにどれだけ私達が苦勞しているか・・・。」

「あ、あははは・・・」

それ以上、追及を受けなくなかった私は、唐突に話の舵を別の方向に切る。

「それにしても！毒混入の事件、セシリーの話だと、王都の冒険者たちでも犯人捕獲に失敗してるんだよね！王都の冒険者は高レベルの強者ぞろいのはずだけど・・・犯人は相当のやり手のようだね。」

と、思いついたことを早口でしゃべる私。

「まあ、うちには数多の強敵を屠ってきた超つよいカズマさんがいるから大丈夫よ！」

「はっはっはっ、お前、一番の関係者のくせに完全に俺に丸投げしよう



とじているだろー。」

「超つよいカズマさんが、死んじやつてもちやんと蘇生させてあげるから大丈夫よ！」

「はっはっはっ、お前、一番の関係者のくせに巻き込まれただけの俺に命張れっていつてるだろー。」

アクア先輩と助手君がそんな漫才をしている中、蘇生に関して、私は一点、気づいてしまった。

助手君の服をクイクイする。

そして彼の耳元で他の人に聞かれないようひそひそと小声で話しかける。

(ねえ、今回キミが死んじやつても私が案内するわけじゃないから生き返してもらえないかもしれないよ・・・おそらく昨日言ったお役所系女神な先輩が案内してるだろうから・・・)

(・・・まじかよ。なんかもう辞めたくなくなってきたんだけど・・・) すかさずへタレる彼に私は苦笑した。



その後、準備も整い、私たちはゆんゆんのテレポートで王都に到着した。

今現在のパーティは、助手君、アクア先輩、めぐみん、ダクネスに私だ。

セシリーは『ごめんなさい！アクセルの街の教会を離れられないの！あ、お土産はよろしくね、ところでんスライム☆しもふり赤ガニ味(王都限定)を所望するわ』とのことで一緒ではない。

ゆんゆんはテレポートで私達を送ってくれたときに『仮面の友達と約束があるけれども、どうしてもというなら・・・』とかボソボソ言っていたところ、めぐみんに『は？なぜ私達がゆんゆんを誘ったことになってるのですか？馬鹿なのですか？死ぬのですか？』とか言われて泣きながらテレポートでアクセルに帰ってしまった。

助手君は、戦力になるゆんゆんには一緒についてきて欲しそうで、

めぐみんに文句を言っていた。

そんなこんなで、私たち一行は事件の詳細を聞くべくアクシズ教会を目指して王都の通りを歩いていった。

ちなみに私は銀髪盗賊団として捕らえられないよう、目深にフードを被り、銀髪を隠している。なお、フードは猫耳つきだ。

フードを買うとき助手君が『異世界なのに猫耳のついてないフードを被るなんてとんでもない!』と言って引かなかったためだ。

王都の賑やかな雰囲気テンションが上がったアクア先輩は声を上げる。

「さあ、せっかく王都に来たんだしおしゃれな飲み屋に行きましょう！」

「アクア、遊びじゃないのだぞ。」

ダクネスがすかさず突っ込む。

私達が向かうアクシズ教会は、今いる王都の繁華街を抜けた先だ。

繁華街は屋台や路上芸やらで活気にあふれている。

仲間連れや家族連れの姿も見え、カップルらしき人達もちらほら見える。

そんな往来の人々を眺めつつ、私はふと思う。

「……そういえば私、今までデートとかってしたことが無かったんだ……」

「……ねえ、助手く……」

「カズマ、この一件が終わったら、一緒に食事にも行きませんか？王都には爆裂ラーメンなるものがあるらしいのです。」

「……」

「なんだそのネーミングからしてアウトなものは……それにしても、その名前どこかで聞いたことがあるような……?」

「素敵なネーミングじゃないですか。それで、一緒に行くのですか？行かないのですか？」

「あのなあ、俺はあんまり王都をうろうろしてるといういろいろ不味いん

だつて。」

「大丈夫ですよ。カズマが捕まりそうになったら、爆裂魔法で王都を更地にしてやりますから。」

「お前・・・魔王軍もビツクリだよ。はあ、しよーがねえなあ・・・」

・・・

めぐみんに向けられた承諾のセリフは、昨夜、私だけに言ってくれたものなのに・・・

いやいや、考えるのはよそう。

この胸が締め付けられるような痛みも、きつと一過性のものに過ぎないのだから・・・

### 第36話 疑心

アクシズ教会に着いた私たちは、その信者から問題のエリス教冒険者についての情報を聞き出していた。

ダクネスがなぜかエリス教信者の印の入ったペンダントをこれ見よがし掲げ、一人だけお茶を出されずに真つ赤な顔して喜んでいた以外、特に問題もなく情報を得ることができた。

どうやら、問題のエリス教徒の冒険者、普段は物腰の柔らかな戦士職だったようだが、事件の数日前から人が変わったように荒々しくなってしまったらしい。

ちなみに今現在、その冒険者は消息不明とのことだ。どうやらギルドで捕縛依頼が掲げられていることを察知して身を隠してしまったらしい。

ちなみに、販売停止になっていたアクシズ教の聖水は、近日販売を再開するようだ。

そこで、私達はとある作戦にでることにした。

アクシズ教会で情報収集をした日の翌日の深夜の時間帯・・・私たちはアクシズ教会の聖水が保管されている倉庫にいた。

「それにしても犯人、現れないね。」

アクシズ教の聖水に毒を混入するという特殊な手段をとってくるあたり、何かしら、そのやり方に犯人の趣向性というか、意図というものがあるような気がする。というのはカズマ君の言だ。

「・・・・・・・・」

そうであるならば、アクシズ教の聖水を再度狙う可能性が高いのではないか。闇雲に探すよりも、改めてアクシズ教の聖水を狙ってくるのを待つ方がよいのではないかと考え、昨日から聖水の保管してある倉庫を見張っている。

「・・・・・・・・」

ちなみに、交代で見張ろうということで、この時間はカズマ君とアキラ先輩、それに私の三人が見張っている。

「・・・・・・・・」

見張っているはずなのだが・・・

「くかし、すぴー・・・」

「アクアさん・・・」

「こいつ・・・アクシズ教の女神のくせに、アクシズ教団を助ける気があるのか・・・」

目的の相手が一向に現れず、あまりに手持無沙汰なため、アクア先輩が夢の国に旅立ってしまった。

先輩に目をやり、カズマ君はため息をつく。

「ハア・・・やつぱりそう都合よく相手さんが現れてくれることも無いか・・・作戦を練り直したほうがよいのかもしれないなあ・・・」

「ははは、でもまだ二日目だし、もう少し粘ってみようよ。」

「これで何日待つことになるのやら・・・」

やつぱりアクシズ教のことなんてほっといて帰るかあ、などとぶつぶつ言う彼に、私は、何気に提案してみる。

「ねえ、君は特定の信仰をもってないんだよね？ならエリス教に入信してみない？」

「いや、これまで無宗教で苦労したことなんてないし。俺は日本で宗教の話とかされると耳を塞いでたくらいだからな。クリスには悪いけど、宗教とかがって苦手なんだよ。」

「無宗教で苦労したことは無いの？神や超常的な存在に助けを求めたいとか思ったりしないの？」

「うーん・・・誰かに助けてほしいって思うことはあるけど、まさか本当に神様がいるなんて思ってたしなあ。」

確かに、日本人の多くは神が存在するとは思ってないだろう。だからといって、それが不幸に直結するわけではない。

実際、神の存在を信じていなくとも、自分の力で人生を切り拓いている人は多い。

むしろ、神に頼らない方が自らの力を信じ、強く生きていけるのではないだろうか。

・・・だとしたら、

「・・・カズマさん、」

・・・この世界にも女神という存在は、

「必要ないのかもしれないですね・・・」

「ん？どうした？・・・!!」

・・・!!

そのとき、首の後ろあたりにビリリとした感覚があった。

彼も同じように感じたようで驚いた顔をしている。

この感覚は・・・『敵感知』だ！

私と彼は頷き合って、この場に訪れる敵の姿を物陰から探る。

すると、コツコツと靴の音が聞こえ、その音がどんどん大きくなつてくる。

「あ・・・」

私の目はその犯人の姿をとらえた。

その男は、私も知っている、とても信仰心の厚い戦士職のエリス教  
信者だった。

「・・・そんな・・・何で・・・」

私の頭の中は疑問符でいっぱいだった。

男は毎日エリス教会に通いつめてお祈りをしてきていたとても  
真面目な人なのに・・・

「お、おい、クリス大丈夫か!?顔が真っ青だぞ!」

私はショックでその場を動けないでいた。

「おいこらアクア!起きろ!支援魔法だ!目標のやつが来たぞ!」

「むにやむにや・・・あと5分・・・」

「あーもう!これじゃ実質俺一人じゃねえか!」

カズマ君が頭を抱えて声を上げた。

すると、その声に気づいた男は私達の隠れている方に目を寄越す。

「なっ!お前、なぜここに・・・」

男はカズマ君を見て明らかに動揺の態度を示した。

「ねえ、知り合いなの?」

私はカズマ君に尋ねる。しかし・・・

「い、いや、まったく知らないんだが・・・」

カズマ君は、ほんとうに心当たりがなさそうな、わけがわからない、といった表情をしている。

「連れはその盗賊だけか・・・そうか・・・」

男はニヤリと顔を歪ませた。どうやら私のことなど取るに足りないといった感じだ。

.....

「お、おい！クリス！相手がどんな奴かもわからないのに前にでるな！」

隠れていた場所から数歩前にでる私に、カズマ君が注意をくれた。

しかし、私はその男にどうしても確かめたかった。

そして、返答次第では、エリス教の女神である私が・・・

私はその男に問いかける。

「・・・あなたが、アクシズ教の聖水に毒を混ぜたの？」

「ククク・・・ああそうさ。」

男は邪悪に笑う。こんな笑い方をするなんて、本当に人が変わってしまったかのようにだった。

「・・・なんでこんなことをしたの？」

「お前は知らないかもしれないが、俺にはアクシズ教に深い恨みがあつてなあ、ククク・・・」

それを聞いた私は、腰に掲げるマジックダガーに手を添えた。

「お、おい、クリス！」

カズマ君が私に向かって声をあげた。

「・・・黙って。これは私自身が決着をつけなければいけない問題みたいだから。」

「ほう、盗賊ごときが、この俺を倒せると思っているのか。」

目の前の男も腰をおとして攻撃態勢に移行する。

そして、異様な殺気を放つ。

私もマジックダガーの柄を握り、相手を睨みつける。

「待て！クリス！」

後ろで私を止めるカズマ君の声がするが、もう後戻りはできない。

次の瞬間にも死合は始まる。  
睨み合う私達の視線がぶつかり合う。  
辺りがシン、と静まり返る。

.....

次の瞬間・・・

「はあああああああああ！」

「おおおおおおおおお！」

「『ピュリファイケーション』!!!」

「ぎゃあああああああああ!!!」

「・・・え？」

私とカズマ君は素っ頓狂な声をあげた。



気が付くと、目の前の男は、私の後ろにいたアクア先輩の浄化魔法を受けて、シユウウウウ・・・と煙を上げている。

・・・煙???

「何だかそのエリス教徒、汚物のように私の浄化欲を刺激するんですけど・・・ふわあああ・・・」

先ほどまで眠りこけていたアクア先輩は目をこすりつつ、あくびを掻きつつ、そんなことを言う。

「ぐ・・・き、貴様も隠れていたとは・・・ここはいったん退きや・・・」



『ピュリフィケーション』『ピュリフィケーション』『ピュリフィケーション』『ピュリフィケーション』『ピュリフィケーション』『ピュリフィケーション』『ピュリフィケーション』『ピュリフィケーション』『ピュリフィケーション』『ピュリフィケーション』  
！』

「ぎゃああああ、体が浄化され・・・やめ、ヤメロオオオ！」  
「・・・・・・・・」

私とカズマ君は目の前の男が浄化されるのを呆然と眺めるしかなかった。

っていうか、なぜ浄化されるんだろう？私の信者ってそんなに邪悪だったの？

なんとも理解に苦しむ光景を目の前に、私は固まるしかなかった。

そして、それもつかの間、目の前の男は跡形もなく浄化されてしまった。  
・・・・・・・・

「ふいー、結局私のお手柄だったわね！」

「いやー！おかしいだろ！なんで、ただの人間が浄化魔法で浄化されるんだよ！」

カズマ君は、私の心の叫びを代弁してくれた。

「あれ、人間じゃないわよ。」

「え？」

「いつだかアルカンレティアの温泉を毒まみれにしてくれたガチムチスライムがいたじゃない。アレよアレ。」

アルカンレティアの件、私も天界から様子を見ていたので知っている。

相手はデットリーポイズンスライムのハンスという魔王軍の幹部だ。

確かに、ハンスは捕食した相手に擬態できるという能力をもっていたはずだけど・・・

「でも、あのスライムって、アクアさんのゴットレクイエムで浄化した

んじゃ??」

「したわよ。でも、飛び散ったスライムの一部が浄化を逃れたのかもしれないわね。そこから他の生物を捕食して回復してったんじゃないかしら。まあ、私も本気を出すまでもなかったから、力はだいたい衰えてたみたいだけど。」

「じゃあ、エリス教の信者は自ら悪事を働いたわけじゃなくて、ハンズに取り込まれたただだったんだ・・・」

「そうみたいね。」

捕食されて犠牲になった信者は可哀想だが、犯人はスライムの擬態だったという事実が知れば信者が汚名を被ることはないだろう。

信者の名誉は保たれそうだ。本当に良かった・・・

「さて！もう夜も遅いし、今日は宿に戻って休みましょう！こんな倉庫じゃロクに休めもしないわ！」

「お、お前・・・」

こうして、王都の毒聖水事件は一応の解決を迎えた・・・

・・・のだが・・・

私の本当の戦いは、

これから始まるのだった。

### 第37話 決心

翌日の昼前、助手君とめぐみんは爆裂ラーメンなるものを食べるに宿を出ていった。

そして、ダクネスと私は、アクア先輩に連れられ、王都のグルメ探しに付き合っていた。

「やっぱり王都のご飯はアクセルの街と比べて値段が高いわね。カズマにもう少しお小遣いを貰ったほうがよかったわ。あ！あつちに爆裂レストランって看板を掲げてる頭のおかしいお店があるわ！見に行きましょう！」

「アクア、また転んで怪我をするからあんまり走るな。」

なんだか子供の面倒を見る親のようなことをいうダクネスに続いて歩いていると、私の耳に不穏な声が届いた。

「ああ、もう破産だよ畜生！エリス教の司祭め！騙しやがって！」

私はその声に足を止めざるを得なかった。

騙す？エリス教の司祭が??

私の前を歩いていたダクネスが、突然足を止めた私に気づいた。

「おい、クリス、どうした？」

「ああ・・・ごめん、ちよつと先に行つててくれないかな。私、寄らなきやいけないところがあつたんだ。また宿で合流しよう。」

「？まあいいが、お前は王都じゃお尋ね者なんだから、あまり目立った行動はするんじゃないぞ。」

「あはは、心配してくれてありがと、ダクネス。」

そういつて、私は、ダクネスとアクア先輩を見送り、先ほどの声の主を探しだした。



間もなくその声の主を見つけることができた。

その人はまだ昼間だつていうのに酷く酔っぱらっているようだった。

私は、その人に声を掛ける。

「ねえ、さつきエリス教の司祭から騙されたとか、何とかいってたよね

？」

「んんん？だれだあ？」

「ねえ、教えて。エリス教の司祭との間で何があったの？」

「んー、まあ、隠すことじゃねえが……っていうか、むしろ、誰かに聞いてもらいてえくらいだよ、兄ちゃん」

「兄ちゃん、じゃなくて姉ちゃんね！」

その男は熱心なエリス教徒の商人だった。

だが、商売がうまくいかなくなって頭を抱えることになったらしい。

そんなとき、エリス教の司祭が、男に対してエリス様への信仰心が足りないのだと指摘する。

そして、エリス様に信仰心を示すため、霊験あらたかな幸運のツボや札などを男に購入させたようだった。

男は藁にもすがる思いで司祭の提供するよくわからない物を買っていき、そして、最終的に破産し、取り立て屋から逃げ回って今に至っているとのこと。

「騙されたのは俺だけじゃねえ……家族や恋人との仲がうまくいっていないヤツらなんかは、司祭の格好の獲物のようさ。同じように幸運が訪れるとかって騙されたやつが、それは大勢いるらしいぜ。俺なんかまだいい方で、酷いと薬なんかを買わせて依存させてるもあって話もあるくらいだ。」

……

……私は、話を聞くにつれ、呆然自失に陥っていく。

エリス教会の上層にそんな部分があったなんて……

それに気付かなかった自分の愚かさに、ほとんど呆れてしまう。

何が女神だ。

教会の上層の金儲けのダシになっているだけじゃないか。

「ごめんね……」

「え？何のことだい？」

「ごめんね……本当に……」

私は、怪訝な顔をする酔っ払いの前から、ふらふらと立ち去った。

．．．．．  
エリスへの信仰心が強く、大きな悩みを抱えている者ほど陥りやすい詐欺。

一番悪いのは信仰心を逆手にとって詐欺行為を働く者たち．．．だけれども．．．

私は特定の国教を持たないカズマ君のいた日本を思い出す。過去、宗教の政治利用から脱却した世界。

特定の宗教を信仰していなくても幸せそうに笑う人々がいる世界。

そもそもエリス教という宗教自体がこの世界にとっての害なのかもしれない．．．

そもそも女神という存在自体が害なのかもしれない．．．  
だとしたら私は．．．

．．．．．

「．．．クリス?どうした?」

ふと、そんな声がかかる。

それは、私を惑わす彼の声。

私を普通の女の子にさせる彼の声。

「そんな、ぼーっとしていると、よく足を滑らせて小川に落ちてくアクアみたいになるぞ。」

顔を上げると、私の大事なものを盗んでいった彼の顔。

めぐみんは一緒じゃないようだけど、どうしたのだろう。

もしかして．．．彼はめぐみんより私のことを優先してくれたのだろうか．．．

「あはは．．．」

「ど、どうした?ほんとになんか変だぞ。」

自分に都合の良い解釈をして、勝手に心を昂らせている自分に対し

て自嘲の笑いが浮かぶ。

・・・そうだ。

私は普通の女の子として生きたいんだ。

女神なんていう、誰彼構わず愛を振りまく八方美人でなく、ただ一人の誰かのために、この身と愛を捧ぐ一人の女の子に・・・

そうだ、どうにか天界の目から逃げ切って、

この世界でクリスとして・・・

そして・・・また彼にわがママを・・・

私は彼の方に向かって一步を踏み出し・・・

「エリス様！大変です！」

背後から掛けられた声に、踏み出そうとした私の足が止まる。

後ろを振り向くと、そこにいたのは羽の生えた男、私のもどで働く天界の天兵だった。

「魔王軍の幹部が天界に現れました！至急お戻りください！」

「え・・・」

なんでこのタイミングで・・・

それに、突然力を奪っておきながら、急に戻れと言われても・・・

「既に女神の能力の凍結は解除されています！」

「そんな・・・」

私は普通の女の子として生きると・・・

「神器を奪われ、時を司る女神様も苦戦しています！このままでは持ちません！」

普通に恋をして、デートをして・・・

「早急にお戻りください！」

わがママをいって甘えて、キスをして・・・

・・・  
・・・  
・・・

.....

「い、嫌だ・・・！」

「エリス様・・・？」

「嫌だ!!天界も宗教も女神も知るもんか!!そんなもの、消えてなくなっちゃえばいいんだ!!」

私は、子供がそうするようにわめき、その場を走り去る。

「クリス!？」

「エリス様!!」

後ろから、カズマ君と天兵の声が聞こえるが、  
全力で、走って、走って、走って、逃げる・・・



「ハア、ハア、ハア・・・」

どれくらい走っただろう。

気が付くと人通りの少ない場所に出ていた。

「ハア、ハア、ハア・・・」

私は膝に手をつき、肩で息をする。

そして、先ほどのことを思い出す。

抑えきれない感情に、私は逃げ出してしまったのだ。

「私は・・・私はどうすれば・・・」

嘗て感じたことのない心の重圧に苦しめられ、

「ああ・・・あああああ・・・」

私の目からは涙が溢れていた。

「あら、どうされました？」

その時、ふいに優しい気な女性の声が届く。

「え？」

そちらを向くと、エリス教のプリーストの女官が立っていた。

そこはエリス教の教会の前だった。

「何か事情がおありのようですが、よろしければ教会によつていきませんか？ 懺悔などされると、少しはその心の荷が軽くなるかもしれないよ。」

「あ、ああ・・・私は・・・私は・・・」

と、ふいに、女神が教会で懺悔をするという滑稽な姿が頭に思い浮かぶ。

そして、なんだか可笑しくなってしまう。

「ふふ・・・そう・・・だね・・・少し・・・よつてこつかな。」

そのプリーストは、にこり、と優しい笑みを浮かべて私を案内してくれる。

「はい。では、どうぞ。」

教会の中に入ると、エリス教徒と思しき数名が長椅子に腰かけ、祭壇に向かい祈りを捧げている。

と、その中の一人、真ん中程の席にダクネスの姿があった。

・・・どうしてここに？ というか、アクア先輩は??

私はダクネスの隣に移動して、同じように長椅子に腰掛ける。

私に気づいたダクネスはヒソヒソと声を掛けてくれた。

「む、クリスか。・・・どうした？ 目が赤く潤んでいるぞ。何かあったのか？」

「え?」

そうだ、私は泣き顔のままだった。

今更それに気が付いた私は慌てて涙を拭い、ダクネスに返事をする。

「い、いやあ・・・あれだよ・・・えーと・・・ちよ、ちよつと路上で感動する劇を見ちやつてさあ・・・」

「なんだ、突然用事があるといつて消えたと思ったら、劇を見ていたのか。それなら私達も誘ってくればよかったのに。」

「ごめんねダクネス・・・ほ、ほら、感動して泣いちゃう顔とか見られなくなかったし！ それより、アクアさんは一緒じゃなかったの？」

「それが・・・アクアは、足を滑らせて小川に落ちてってなあ・・・泥



だらけになったんで今は宿に戻っているのだ……。」

「アクアさん……。」

カズマ君の言った通りになっている……

「ダクネスはどうしてここに？」

「私は、今回の事件も無事に解決したことをエリス様にご報告と感謝をしにきたところだ。そういうクリスはどうしたのだ？」

「あ、私は……うん、私も同じような感じかな。」

「そうか……。」

ダクネスはそのまま祭壇を見つめて何か物思いに更けるような眼差しをし、

「なあ、クリス、私は本当に友人を作るのが下手で、エリス様に毎日友達ができるようにお祈りを捧げていたこと、話したことがあったな。」

静かに語り始めた。

「うん、聞いたよ。それで、初めてできた友達が私だったっていうのも。」

「そう。それで、私は何となく思ったりしたのだ。クリスは、エリス様が遣わしてくれた神の遣いなのではないかと。」

「え……。」

惜しい。

「名前も似ているしな。」

ダクネスは微笑む。

「しかしだ、クリスが仮に神の遣いであろうと神自身であろうと、私は、クリスが友達になってくれたことで……独りじゃないと心から思えたことで、本当に、本当に救われたのだ。」

ダクネスはそう言って、私の方を向いた。

「今更だが、私の友達になってくれて、ありがとう、クリス。」

友人からの突然のまっすぐな言葉に私は顔が少し熱くなる。

「そして、もしクリスが神の遣いならば……エリス様に心から救われた人物がここにいると、どれだけ感謝してもしたりないと、そう伝えてくれ。」

そういつて、彼女は、いたずらっ子のように笑った。

「ダクネス・・・」

それから、ダクネスは、正面を向きなおし、手を胸の前で組み、目を閉じた。

・・・

私は教会の中を改めて見渡した。

・・・私の横の少し離れた席に座る男の人がぼつぽつと呟く声が聞こえる。

「エリス様、先日、無事に妻が出産を終えました。いただいた幸運に心より感謝いたします。」

・・・耳を澄ますと後ろの席から、聞き取れるか聞き取れないかわからないの女の子の声が聞こえる。

「エリスさま、おじいちゃんのおかげをなおしてくれてありがとうございます。」

・・・みんな、こうして女神に祈りを捧げるんだ・・・

私は目をつぶり手を胸の前で組み、心で女神に声を掛けた・・・



【クリス・エリス視点】

（エリス、私、天界の命令に背いて逃げてきちゃったよ・・・私は・・・どうすればいいのかな・・・）

（・・・クリス、私も見ていましたよ。あなたはどうしたいのですか？）

（わからない。さつきまでは普通の女の子として生きたいと思ってたけど・・・ダクネスの話聞いて、この教会で祈りを捧げるエリス教

徒の子達の声を聞いたら、なんかよくわからなくなっちゃって……)

(女神という存在に救われる方も多いですよ。私も、この世界に神や信仰が不要だとは思えません。)

(……そうだよ。でも、私はやましい思いを抱いたり、他人に嫉妬をしたり、嫌なことから逃げ出したり、正直今は女神としてやっていく自信がないよ……)

(そうですか……)

(私の方が、誰かに救ってほしいくらいだもん、あははは……)

(……大丈夫ですよ。)

(?)

(大丈夫です。)

(……エリス?)

(……クリス、忘れないでください。あなたには、この私が付いています。あなたの進む道は、この幸運の女神が照らします。仮令、あなたがどのような選択をしても、私があなたをいつまでも支えます。だから……)

(……)

(だから、勇気をもって踏み出してください。恐れずに進んでください。あなたの意志あるところ道は拓けます。)

(……エリス……)

(さあ、本番はここからですよ!)

(……ありがとう、エリス、どうか、弱い私を支えてね。)

(任せてください。あなたの進む道に……祝福を!)



【クリス視点】

.....

私はゆっくりと目を開けた。

信者の子達が神に救いを求める理由、何となくわかった気がする。

信者の子達の心を支えとなるのは誰か、救いの手を差し伸べるのは誰なのか。

そして・・・私は誰か。

「ダクネス、私、ちょっと行くところあるから、そろそろ行くね。」

「ん、わかった。気をつけてな。」

ダクネスはこちらに微笑みを向けて私を送ってくれた。

私は席を立ち、教会の入り口に向かって歩く。

「私は・・・女神だ。」

「え？」

私が小声でこぼした言葉に、入り口近くにいたプリーストの女官さんが反応した。

「あの、お会いした時から何となく思っていたのですが・・・あなた様はもしかして・・・」

不味い・・・女神であることがばれた!?

「・・・もしかして、女性なのではないでしょうか」

私は盛大にずっこけた。



私が教会の外に出ると、ちょうど、そこでカズマ君と鉢合わせた。

「クリス、突然どうしたんだよ・・・」

彼が私のことを心配してくれる。

「ごめんね、キミには恥ずかしいところ見られちゃったね。」

「ま、まあ・・・それはいいんだけど・・・大丈夫か？」

「うん、もう大丈夫だよ。ありがとう、カズマ君。」

私はカズマ君に笑顔を向ける。

「そういえば、めぐみんはどうしたの？宿から出ていくとき一緒だったよね？」

「ああ、あいつ、爆裂ラーメンの味に気が入らなかったみたいで、こんな爆裂とは認めません、とか言っただけで店の人に絡みだして、面倒になって置いてきたよ。」

「そ・・・そうなんだ・・・」

なんとというか・・・やっぱり彼は本当に巻き込まれ体质だと思う・・・

「それより、なんか天界がピンチとかって話じゃなかったか？突然声かけてきた羽の生えたあいつは誰なんだよ？」

「ああ、彼は天兵って言って、まあ、天界の兵士かな。いきなりエリス様、とか呼んでくるし、あの場に助手君しかいなくてよかったよ。」

「いや、まあ、そうなんだろうけど、そんな悠長にしてていいのかよ？魔王軍の幹部が現れたって、おそらくハンスだろ？」

「だろうね。しかも、時を司る女神の先輩が劣勢なんて、相当ヤバそうだね。」

それを聞いた彼は黙って下を向き、何やら難しい顔をする。

「なあ、クリス・・・俺も・・・」

「カズマさん、良くないことを考えていますね。おそらく、天界に行くために自ら命を投げ出そうと・・・そんなことは、女神として絶対に許しません。」

「え、エリス様・・・」

「大丈夫です。私の幸運を見くびらないでください。」

私は彼に向けてガッツポーズを作る。

「あ、そうだ!!」

大事なことを忘れてた。

「??」

私は、頭に疑問符を浮かべる彼に向かって手を伸ばした。

「『ステイール』!!!」

伸ばした先の掌がステイールの光を放つ。

「なっ!?いきなり何だ!?!」

彼が怪訝な表情になる。

彼に向けて握っていた掌をそっとひらく。

「・・・って、何も盗られてないじゃないか。」

「いや、確かに返してもらったよ。」

私は彼に笑顔を向けて言ってる。

・・・彼に抱いた、淡い気持ちを吹っ切るように。

「君に盗まれたものは、しっかり返してもらったよ!」

・・・さよなら、私の恋心。

こうして、私の最初で最後の恋が幕を閉じた。

私は笑顔で彼に告げる。

「・・・さて、じゃあ、ちよつと行ってみようかね。」

そして私は今一度、女神としての道を踏み出す。

もう一人の私とともに。

### 第38話 エリス VS ハンス

【エリス視点】

長い間、不可侵を維持していた天界の風景は一変していた。床が、柱が、壁が、あらゆるものが溶かされ、残骸となっていた。やはり、敵は強力な毒をもったデッドリーポイズンスライムのハンスなのだろう。

辺りの様子を探っていると、遠くの方に人影を発見した。

「あの人影は・・・先輩?！」

私はその人影の方へ走り寄る。

間違いない。時を司る女神にして、私の先輩の女神だ。

髪や服の一部が溶かされている。幸い傷跡などは見当たらない。回復魔法で傷口を塞いだのだろうか。

しかし、明らかに憔悴しており、激戦の後がうかがえる。

「大丈夫ですか、先輩。」

「あ、ああ、エリス、戻ってきたの・・・?！」

「ええ。遅くなってすみません。しかし、この状況は・・・」

「あなたのこの天兵から話がいつていると思うけれども・・・デッドリーポイズンスライムの仕業よ・・・。」

先輩は何があったかを語ってくれる。

「私のせいよ・・・。人間に擬態したスライムに気付かず天界に通してしまつて・・・油断したわ・・・いきなり襲い掛かってきて、神器の腕輪を奪われたの・・・」

腕輪とは、私が下界で回収してきた魔法無効化の腕輪だろう。

所有者以外が装備すると、猛毒にかかるというデメリットがハンスの毒を強化してしまったようだ。

「相手はどれくらい脅威なのでしょうか。」

「はつきり言つて、最悪ね。勝つイメージが描けないわ。毒の威力がとんでもないから、近づくとささえできないし・・・魔法は無効化されるから、浄化魔法も無意味だし・・・」

「他の女神への応援要請は・・・？」

「応援要請は意味がないでしょうね・・・というか・・・」

「というか？」

先輩は痛ましい表情で告げる。

「この場所を放棄せよ、という上からの指示があったわ。」

「え・・・ここを放棄・・・？」

私はその言葉に愕然となる。

この場所は私にとって出会いと別れが沢山つまった場所だ・・・

「死者達は一時的に、隣の世界の、死に戻りする変な日本人や嫉妬の魔女とかがいるところの女神に案内させる予定らしいわ。ハア・・・まさか、魔王軍に天界を落とされると思わなかつ・・・エリス!!!」

「・・・!!!」

その瞬間、バシユツという音とともに私の背後で何かが弾けた。

それがハンスの毒の塊だと分かった時には既に、私の頭を包むベールがはじけ飛んでいた。

私のベールは、状態異常耐性を極限まで上昇させる神器。

しかし、その神器が一度の毒の塊を受けてもろくも崩れ去ってしまった。

「・・・何だあ、また女神がふえたのかあ」

振り返ると、十数メートルほど先に邪悪な表情をしたエリス教信者の姿があった。下界でハンスに取り込まれたエリス教徒の戦士職の男性の姿だ。

私はハンスに向かって声を低くして語りかける。

「その姿で・・・まだ罪を重ねるつもりですか。」

ハンスはニヤリと邪悪な笑みを浮かべる。

「さあな。そもそも俺に罰を与えることができるやつがどこにいる。」

「・・・あなたには私が天界を代表して罰を与えます。」

「神器の力を得た俺に敵うとでも思っているのか。」

ちらり、と吹き飛ばされたベールを見ると、ボロボロになりシューという音をたてて白い煙をあげている。



一撃で神器をこのようにするとは、なんて出鱈目な毒の威力だろう。

まともに喰らえば、あっというまに体が溶けてしまっただろう……

「ククク、俺の毒の力に焦っているようだな。」

「そんなに余裕をみせていては、足をすくわれますよ……『浄化せよ』!!」

下界ではピュリフィケーションと呼ばれる魔法。

私は右手を正面に掲げて浄化の光をハンスに放つ。

ハンスはまともによける動作もせずに、浄化の光をその身で受ける。

ハンスにぶつかった光は霧散し消え去ってしまった。

それなりに神気を込めて放った魔法だったが、魔法無効化の神器の影響か、まるで効果がない。先輩の言ったとおりだ。

「ククク、それで終わりか?では、こちらもいくぞ。」

そう言つて、ハンスはその手をスライム状に変化させる。

「オらああ!」

ハンスは叫びながら、スライム状になった手を鞭のようにふるってこちらに攻撃を仕掛けてきた。

……私の背後には先輩が控えている。私がよけると先輩に攻撃が及んでしまう。

私はとっさにその場に結界を張ってハンスの攻撃を受けとめた。

可視化する程に強い結界を張ったのだが、ハンスの攻撃を受けた部分はじわじわと消失してしまふ。

「くう……なんて強い毒……」

「エリス、大丈夫!?!」

後ろから先輩が叫ぶ。とにかく今は消耗しきっている先輩の安全を確保することが先だ。

だが、相手の意識がこちらにある中、先輩を逃がしきれんだろうか。

・・・と、その時、

「・・・ぐっ!？」

ハンスが息をのむ。

死角から、ハンスに向けて光の槍が襲い掛かったのだ。

物理判定のため、魔法無効化の神器を縫って攻撃が通ったようだ。

「エリス様、大丈夫ですか!？」

槍を放ったのは私に天界の危機を知らせてくれた天兵だった。

「く・・・ござかしい・・・」

ハンスは天兵を睨む。

ダメージを与えることはできたようだが、火力が全く足りていない。

ハンスから発せられる瘴気で威力が減殺されているようで、それこそ蚊に刺された程度にしか喰らっていないようだ。

ハンスは自身にダメージを与えうる存在である天兵へと、意識を向ける。

「いいだろう、先に、貴様から喰らってくれる。」

ハンスは天兵に向けて液状の毒を飛ばして攻撃する。

天兵は時にこれを躲し、時に結界でダメージを防ぎ、何とか持ちこたえてくれている。

普段自堕落ニートな天兵が戦場でなかなか役立ってくれる・・・

私はこの機を逃さないよう、先輩に向けて言葉を放つ

「この隙に、先輩はお逃げください!」

「エリス、あなたも逃げるのよ!ここはもうだめ、放棄するのよ。撤退するの。」

「私は何とかハンスを撃退できないか手を尽くしてみます。」

「・・・?何を言ってるの!?!やつの毒の強さを見たでしょう、一歩間違えれば即死よ!」

「もちろん、危なくなる前には逃げるつもりです。ですが、天兵の攻撃も少しは効果があるようなので、勝機を探ってみます。それに・・・」

「それに？」

私は先輩の目を見て告げる。

「ここは……私はずっと死者の方の案内をしてきた想い入れのある場所なんです。なので、好き放題されるのは面白くありません！」

「……………」

先輩は困ったような表情で私を見て何かしら思案し、ゆっくりと口を開いた。

「……………わかったわ。気を付けてね。」

「はい、では、またあとで」

先輩は、その場から光の粒子となって消えていく。

「……………この子が天界に敵対するなんて、ありえないわね……………」

去り際、先輩がぼそりそんなことを呟っていた。

……………

天兵の光の槍は微々たるものだけれどもダメージを負わせることができた。

それなら持久戦に持ち込み、弱らせてから封印してみるか。

私は天兵に叫ぶ。

「天兵!!援護は任せてください!!そのまま攻撃を続行です!!」

「御心のままに!!」

戦闘でテンションアゲアゲな天兵がカッコつけて返事をした。

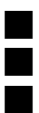
イラっとするが、今は流す。

『速度増加』！『体力強化』！『魔法抵抗強化』！『状態異常耐性強化』！

私は自分と天兵に支援魔法をかける。

「さあ、試合再開です！」

戦いの幕は切って落とされた。



私達の戦術は単純だった。

ハンスの攻撃は私の結界で防ぎ、天兵が隙をみて光の槍で攻撃を加

える。

ハンスが近づいてきたら、全力で離れ、遠距離を保つ。  
そして支援魔法が途切れないように維持する。

戦い始めてどれだけ時間がたっただろうか。

私たちは何とかダメージを受けずに、攻撃をつなぐことができている。  
た。

ハンスはスピードが遅いため速度強化した私たちに攻撃を与えずにいる。

「グソ．．．ちよこまかと．．．！」

ハンスにいら立ちが見える。

「ならば．．．」

ハンスは両手を天に向けて掲げる。

「これならどうだ!!!」

「．．．？」

そして、手の平から、巨大な毒の塊を上空に発射した。

毒の塊は上空の高い位置まで進み、停止して．．．

「．．．．．!!!」

弾けて、雨となり、私たちの下に降り注いだ。

回避不可能な毒の雨。

私達は結界で毒の雨を凌ぐ。

しかし、降りしきる毒雨で相手の動きをとらえることが困難となり、隙をついたハンスが天兵に肉薄する。

「．．．!!」

天兵は慌てて距離をとろうとするも、ハンスの攻撃の方が一瞬早かった。

猛毒の腕で、毒雨のダメージが蓄積していた結界を切り割く。

天兵は身を躲そうとするが、ハンスの攻撃が天兵の羽にまで及ぶ。

「ぐあ．．．!!」

毒の腕の攻撃を受けた片翼は煙を上げて溶かされていく。

そして、機動力が大幅に失われた天兵に、ハンスが反対の腕でどめの一撃を繰り出す。

「これで終わりだ!!」

「危ない!!」

私は咄嗟にハンスと天兵の間に割り込む。

ハンスの片腕が目の前に迫る。

私は全力で結界を張ってこれを防ぐ。

「ほう……よく間に合ったな!」

「くっ……なんて強い毒……」

神気で張った結界がハンスの毒を受けてどんどん溶けていく……

みるみる溶けていく結界を何度も再構築して防御に徹する。

「ははは、これで詰みだ!俺の強化された毒にいつまで耐えられるかな!!」

「ぐっ!!!」

一瞬でも気を抜いたら結界が破られるだろう。

どうする?何ができる?

どこかに転移?だめだ!そんな隙与えてもらえない!

タイムリープ?もつとだめだ!予備動作すら不可能だ!

「ククク、女神討ち取った!」

ハンスが高らかに勝利を宣言する。

天兵の方を伺うと、白目を向いて泡を吹いている。

先ほどのハンスの攻撃を羽に受け、ショックで気絶してしまったのだろう。

私は今何ができるか必死に考える。

このままどれだけ耐えられるだろうか。

ハンスの毒が加速して結界の再構築が間に合わなくなってきた。みるみる結界が薄くなる。

あと何分食い止められる?

いや何秒?

死へのタイムリミットが着々と迫るも、この状況を打破するイメー  
ジが湧いてこない。

私は、ここで終わりかもしれない。

絶望的な状況の中、ふいにそんな思いが生じる。  
その思いは私の頭に走馬燈を走らせる。

女神化に戸惑ったけど頑張ろうと心に誓ったこと、  
初めて死者を案内したこと、  
アクア先輩に無理難題を押し付けられたこと、  
ダクネスの真摯な祈りが届いたこと、  
クリスとして初めて下界に降りたこと、  
カズマさんにパンツを盗まれたこと、  
王女様の神器を奪うため王城で大立ち回りしたこと、  
エリス祭りで自らの姿で人々の目の前に立ったこと、  
めぐみんさんの盗賊団に加わったこと、  
普通の女の子と女神との間で揺れた末、  
女神の道を歩む決意をしたこと、

女神としてたくさんさんの信者ができて、胸躍る冒険ができて、素敵な  
人たちに出会えて、……

「本当に……楽しかった……」

猛毒が押し寄せ、結界が崩れる中、私は静かに目を閉じ、消失を覚  
悟した……

## 第39話 祈り

数時間前、王城のある会議室にて

【アイリス視点】

「・・・というわけで、アクシズ教の毒入り聖水事件は魔王軍幹部の仕業であるということがギルドからの報告で明らかになりました。」

「魔王軍幹部ですか？」

「はい。以前アルカンレティアで討伐されたと思われていたデッドリーポイズンスライムが消滅しきっておらず、冒険者に擬態して我らが城下町に紛れていたとのことですよ。」

「そうですか・・・」

私は城下町の情勢について、クレアからの定例報告を受けていた。

「すみません、検問が甘かったかもしれません。私の采配ミスです・・・」

クレアは深く頭を下げる。

「いいえ、クレア、擬態されているのは容易に判別することは困難でしょう。擬態といえば、エルロードのドツペルゲンガーも厄介な相手でした。」

私はお兄様の姿をしたドツペルゲンガーのラグクラフトを思い出す。

「・・・そういえばエルロードの王城の寝室でお兄様の姿をしたドツペルゲンガーにあんなことをされそうになったのだ・・・」

ドツペルゲンガーとの一件を思い出して顔が熱くなる。

「・・・？どうされました、アイリス様？何だか顔が火照っているようで美味しそう・・・ではなく、具合が悪そうですね？」

クレアがずい、と接近する。

「いいえ、何でもありません。クレア、よだれを拭いてください。」

クレアは慌ててよだれを拭いた。

「ところで、クレア、今回デッドリーポイズンスライムを討伐したのは

どなたでしようか。魔王軍幹部を討伐した功績を称えて私自ら褒章を授けたいところです。」

「はい、それが……討伐者はどこぞの冒険者とのことですが、匿名希望とのことで……。」

「匿名希望?!」

何か私達に気づかれると良くないことでもあるのだろうか。

「はい、アイリス様。名誉なことというのに、慎ましい冒険者です。」

「……もしかして……。」

「どうなさいました? アイリス様?」

「いえ、何でもありません、クレア。」

「? そうですか、では私は雑務が残っていますのでいったんこれで失礼します。」

クレアは一礼して、会議室をでていった。

私も自室に戻ろうと席を立った時……

(アイリス、アイリス、)

私を呼ぶ声が聞こえた。

この声は……

「お、お兄様ですか!」

「ああ、お兄ちゃんだぞ。王城の内部は把握しているとはいえ、誰にも見つからずにアイリスを探し出すのは結構苦労したぞ……。」

単身で誰にも見つからず王城に忍び込むなんて……ある意味ドツペルゲンガー以上にとんでもない。

いや、それよりも……

「い、一体どうしたのですか、突然!」

私は、突然のことで少しパニック気味に矢継ぎ早に質問を繰り返す。

「お、お兄様! 一時記憶を失っていたと伺いましたが、大丈夫ですか? 私のことを覚えてくれますか? どれだけ言ってもクレアはお兄



様にあわせてくれないくれないのです！あ、城下町で魔王軍幹部を撃退したのはお兄様達ですよね！」

「ア、ア、アイリス！しー！しー！しー！見つかったら記憶消去以上に大変なことをされそうだから！」

興奮を抑えることができない私にお兄様は必死になつて私の暴走を止めようとする。

「もも、申し訳ありません、お兄様……ついお会いできたのが嬉しくて止まらなくなつてしまいました……」

「ああ、もちろん世界一可愛いアイリスがお兄ちゃんに興奮するのはお兄ちゃんも興奮するが、今は結構急いでいて……」

きわどいことを言いつつも、わりと真剣な表情のお兄様に、私も少し冷静さを取り戻す。

「急いで？いかがなさいました？」

「実は……」

……

エリス様が天界で魔王軍と戦われているということ。

しかし敵が強大で、苦戦されているということ。

そんな普通では信じがたいことをお兄様は語る。

それでも私は知っている。

お兄様が想像の斜め上の出来事に巻き込まれる体質をもつ不思議なお方だということ。

「……それでアイリスには、王都のエリス教徒の祈りをエリス様に届ける手伝いをしてもらえないかと思つてな。」

「エリス教徒の祈りを……ですか？」

「ああ、女神つてのは、信者の信仰心が力の源らしくて。下界の俺らが天界のエリス様を助けるためにはこれしかないだろうと思つてな。ベルゼルグ王国はエリス教を国教にしているんだし、アイリスも信者だろ？」

「そうですね……では、至急エリス教の教皇様を介して王都の信者の

方々をお願いしてみますね。」

「ああ、エリス教徒も教皇とかアイリスとか偉い人達の言葉なら、エリス様が天界で魔王軍幹部と戦ってるとか突拍子もない話を信じてくれるだろ。むしろ俺は、こんな素直にアイリスが応じてくれたのがビックリだわ。」

「何となく、お兄様は想像つかないようなことに巻き込まれる体質の持ち主だと思っっていますので。」

「あ・・・ああ。」

お兄様は、微妙そうな顔をして頷いた。

その時、

「アイリス様ー、お勉強のお時間ですよー」

レインの声が廊下の奥から聞こえた。

「ヤバイー！この急いできに王城でもめ事を起こすのは避けなきゃな。」

お兄様が潜伏スキルで、その場を去ろうとしつつ、私に声をかけてくれる。

「アイリス、頼んだぞー！」

「あ・・・お兄様ー！」

私は、お兄様を引き留めようと一瞬思うも、自分のやるべきことを思い返す。

そして、お兄様に教えてもらったいいまわしで・・・

「チョー任せてください、お兄ちゃん！ですから・・・お兄ちゃんも、きつと、魔王を倒してくださいねマジで！アイリス、チョー待ってるから。」

「あ、うん、えーと・・・まあ、そうだな。お兄ちゃん、頑張っちゃおうかな・・・うん、そのうちな、そのうちー！」

そうして、お兄様は潜伏スキルで姿を消した。

「アイリス様？今どなたかとお話しされておりましたか??」

その場に現れたレインが眉根をひそめる。

「いえ・・・それよりも、至急エリス教の教皇と連絡をつないでください

い。それから、緊急時用の王都全体に届く拡声の魔道具の準備を。」  
「ア、アイリス様?！」

私からの突然の指示にレインは目が点になる。

お兄様・・・

アイリスはお兄様の期待に応えてみせます・・・！



城下町の中心近くにある広場。

王都のエリス祭りの際には様々な飾りつけで彩られて、祭りの中心となる場所だ。

広場の真ん中にはステージが設置されており、祭りの演目の舞台となっている。

その日の夜は、エリス祭りの日ではないにもかかわらず、広場が王都のエリス教徒で埋まっていた。

今、その中心でエリス教徒に天界の危機を説いているのはエリス教の教皇様だ。

「・・・というわけで、アイリス様の下にエリス様より天啓が下りました。」

教皇様とお話をする際、まさかお兄様からの依頼であると言うわけにいかず、私が直接エリス様より天啓を授かったということにしている。

教皇様は最初訝し気ではあったけれども、私が必死に訴えたことと、傍らにいたクレアが剣を抜きかけたことで、快い協力の返事を得ることができた。

「それでは、この件に関して、アイリス第一王女殿下より信徒兄弟の皆様へお言葉を賜ります。」

教皇様の取り次ぎを受けた私は教皇様に代わって前が出る。

そしてエリス教信者の方々を見渡し、皆様の心に響くよう、はつきりゆつくりと話を切りだす。

.....

「親愛なるエリス教徒の皆様、私は、エリス教の信徒の一人にして、ベルゼルグ王国が第一王女、ベルゼルグ・スタイリツシュ・ソード・アイリスです。」

「火急の件とはいえ、これだけ多くの皆様が集まってくれたことに、エリス教の皆様は深く真摯な信仰心を感じております。」

その声は拡声の魔道具によって、王都全域に届いているだろう。

「我が国は国教であるエリス教の教えに従い、そしてエリス様の祝福を賜り、樹立以来、数々の戦いに勝利してきました。」

「覚えておりますか。我らの幸運の女神様がベルゼルグ王国領のアクセルの街に降臨されたことを。」

「エリス様が私達の傍におり、いつも私達を見守っておいでなのは信徒の皆様には自明でありましょう。」

「皆様、思い出してください。」

「我らの生が、どれだけの幸運に満ち溢れているのかを。」

「生まれてきた幸せを」

「美しいものに触れたときの幸せを」

「友や家族と心を交わしたときの幸せを」

「何かに打ち込み心より楽しいと感じた幸せを。」

「思い出してください。」

「我らがこれまで、どれだけの祝福を受けてこの場にいるのかを。」

「我々の世界がどれだけエリス様の祝福であふれているのかを。」

「目を閉じてください。」

「今、我らが母なるエリス様は天界にて、その蹂躪を目論む悪鬼羅刹と

戦われております。」

「今、エリス様の慈愛に、加護に、祝福に報いるときは来ました。」

「我が国は武の国！さあ、我々の祈りをもって、我らの女神とともに戦いましょう！」

「ともに天界を守るのです！」

虚空に向けて剣を振るう。

「『エクステリオン』!!」

放たれた剣閃の光は、宙を切り裂き、月を目指して、夜空の先へ先へと進む。

「我らの祈りがどんな悪意や狂気をも貫く力となります！」

「やあ!!!」

私は握り締めた剣を月に向かって掲げる。

そして、

「母なる女神エリス様へ!!!」

天までとどくよう、腹の底から全力で叫ぶ。

「我らの祈りよ、エリス様に届け!!!」



## 第40話 決着

【エリス視点】

．．．．．  
．．．．．  
．．．トクン、

「．．．？」

私の心臓が大きく脈打った。

私の胸に炎が宿る。

私の胸に宿った炎はどんどん熱を増し、体全体を包み込んでいく。

「．．．これは、エリス教徒のみんなの信仰心？」

力が湧きだす。

崩壊寸前だった結界が厚みを増す。

そして徐々にハンスの毒を追い返していく。

ふと、私の胸の底から無数の言葉が浮かんでくる。

『エリス様！負けないでください！』『我々はいつもエリス様の味方です！』『エリス教に入信して祈りを捧げたら、彼女ができてモテモテになりました！』『今度は我々がエリス様を支える番です！』『ちよつとー、私のこともあがめなさいよー！』

私のもとに無数の祈りが届く。

祈りじゃないのも混ざっているけれども．．．。

『無事をお祈りしております！エリス様！』『私の祈りも受け取ってください！』『エリス様！頑張ってください！』

私の口から自然と言葉が漏れる。

「．．．これだから女神は．．．たまりませんね．．．」

信者の想いが溢れんばかりに心の奥から湧きだす。

『どうか、ご武運を・・・エリス様!』

私は膨大な神気を結界として体にまとわせた。

これならハンスのもとに踏み込んでも毒に耐えることができる。

『私たちの祈りの力を存分にお使いください!』

ハンスがこちらの様子が変わったことに疑問の声を上げる。

「・・・ん?なんだ?」

『エリス様!エリス様!』

私は拳を握り、静かに脇に構え、腰を落とす

『負けないで!エリス様!』

信者の子たちがくれた熱を拳に集中させる。

抑えきれなくなった熱は実体化して炎の形をとり、ゆらゆらと揺れる。

「そ、その炎は・・・」

ハンスは私の拳を凝視し、あからさまに動揺しだした。

「ま、まずい!もつと強力な毒で・・・!!」

私に放たれる毒の勢いが強まる。

しかし、私が纏う結界は揺るがない。

『がんばって!えりすさまー!』

私は足に力を籠め、一足飛びにハンスの懐に潜り込んだ。

「なっ・・・!!!」

突然目の前に姿を現した私にハンスは驚愕の表情を浮かべた。

『さあ!!!』

『母なる女神エリス様へ!!!』

『我らの祈りよ、エリス様に届け!!!』

私は短くハンスに最期を告げる。

「これがあなたの敵に回した宗教の力です・・・!」



そして・・・

・・・掛け声とともに、

全ての信仰心をのせた拳をハンスの身に叩き込む。

「ゴッドブローオオオオオオオオオオオオ  
!!!!!!」

拳がハンスの胴をとらえる。

拳が触れた先からハンスの体は浄化されて消滅していく。

浄化の光はさらに広がり、ハンスのすべてを飲み込んでいく。

「ぬおおおおお、体が・・・体が浄化される・・・!!!」

ハンスの絶叫が天界に響く。

「・・・おおオオオオオオオオオオオオ  
!!!!!!」

「さあ、地獄に旅立ちなさい!!!」

ハンスの体は四散し、その欠片も次々と浄化されていく。

「・・・また・・・女神に・・・やぶれる・・・の・・・か・・・」

そして、ハンスは跡形もなく天界から消滅した。

・・・  
・・・

・・・

「ハア、ハア、ハア・・・」

力を使い果たした私は、その場にドサリと崩れる。

「・・・か、勝った・・・」

そして、目を閉じ、私は眩く。

「・・・ありがとう。」

そのまま私は、深い眠りについた・・・

最終話 この素晴らしい天界に祝福を！

【カズマ視点】

「おかえりなさい。食事にします？お風呂にします？それとも、あ・た・し？」

「エリス様、芸が増えましたね。」

スペランカーのごとく死んだ俺は見慣れてしまった一面真っ白な部屋で椅子に腰をかけている。

向かいには慈愛に満ち、神聖な雰囲気を持つ絶世の美女、エリス様が鎮座して、こちらに向かって微笑んでいる。

「エリス様が天界にいてくれてよかったですよ。もし、女神権限を失ってて、蘇生させてもらえなかったら・・・なかつたら・・・あれ？なんか、それも悪くは・・・。」

「カ、カズマさん！思っても口に出さしないでください！」

エリス様が慌てる。

まあ、蘇生云々はいいとして、この女神様の顔をまた見ることができてよかった。

「無事に天界からの容疑が晴れたみたいで良かったですわ。」

「ありがとうございます、カズマさん。どうやら時を司る女神の先輩が私を庇ってくれたみたいです。タイムリープの件は勘違いだった、と上に説明してくれたようです。」

「タイムリープかあ・・・そういや前にめぐみんながタイムマシンで過去に行ったとかなんとか言ってたなあ・・・」

もしかして事の発端はめぐみんにあるのではないだろうか？

俺は何か重要なことに気づいてしまいそうになり、首を振る。

これ以上、思考を進めるとまた厄介毎に巻き込まれそうだ。

「い、今カズマさんが聞き捨てならないことを言ったような気がしますが、ここは敢えて聞き捨てます・・・」

秘密ですよ☆、のポーズをエリス様が俺にくれる。

俺の胸はその動作にドキツと高鳴る。

「・・・あ、天界に戻れなくなった私に部屋をお貸しくださったことにお礼を言わないといけませんね。ありがとうございます。」

エリス様は満面の笑みでお礼の言葉をくれた。

この非の打ちどころのない美女があの時俺にキスしようとしたんだよなあ・・・

「エリス様、そういうえばあの夜のことなんですが・・・」

「あの夜??」

「ほら、俺の部屋で飲んだじゃないですか。」

「ええ・・・と、ちよつと記憶にないのですが・・・」

「ええ!?エリス様、俺にキスしようと思いましたよね!」

「??」

エリス様は困惑の表情を浮かべる。

「??じゃないですよーマジで記憶にないんですか!」

もしかしてあの時のエリス様、もといエロス様の言動はただ酔っぱらった勢いの悪ノリだったのか。モテ期到来中の俺の『フラグ感知』スキルにビンビンきたのは間違いだったのか・・・

俺が一人落ち込んでいると、エリス様はクスクスと可愛く笑っている。なんだか手玉にとられて、からかわれてないか俺。

項垂れる俺に、それから・・・とエリス様が言葉を続ける。

「カズマさん、天界の危機にエリス教徒の子達を動かしてくれて、ありがとうございます。おかげでこの天界が救われました。」

「ああ、うまくいったみたいで良かったですよ。アイリスがうまくやってくれました。」

まあ、俺は毎度おなじみの他力本願を發揮しただけだが。

と、それにしても・・・

「それにしても、デッドリーポイズンスライムが暴れたにしてはその痕跡が無いですよね、ここ。天界って随分頑丈なんです。」

俺はキョロキョロしながら疑問に思っていたことを口にする。

「天界の建造物は神気で結構簡単に修復可能ですから。」

何だか、紅魔族の里でも似たような展開なかったか？

「一時はここもボロボロだったんですよ。仮設の部屋で死者の案内を行っていましたが、天界の厳かさや神聖さを演出するのに苦労したものです。」

うちの駄女神もそうだが、女神というのは演出にこだわる性分なのだろうか。どっかの紅魔族みたいだ。

俺が考えていると、早くもうちの駄女神の声がこの場に響く。

『カズマさん、カズマさん、はやくきてー、ごはんがさめちゃうんですけどー』

「・・・いつもながら、騒々しくてすみませんね、エリス様。」

「いいえ、私も最近、これが無いと物足りなくなってきましたから。」

エリス様が微笑む。

もう少しこの微笑みを見ていたかった・・・

「さて、もっとゆっくりしていきたくったんですけど、戻りますかね・・・」

「カズマさん、もとの世界に帰る前に、少しだけ私の話を聞いてくれませんか。」

何だろうか？告白だろうか。

座りなおす俺にエリス様は話始める。

「私は今回の一連の騒動で改めていろいろ考えさせられました。この天界が必ずしも安全ではないこと、エリス教も全てが清廉潔白ではないこと、私の女神としての使命・・・」

どうやら愛の告白では無さそうだ。

「そして私は改めて気づかされました。私は女神として人を祝福していただけではなく、多くの人から祝福を受けていたことを。」

そして真剣な表情で俺に語る。

「カズマさん、おそらくあなたにはこの先、魔王との決戦が控えていることでしょう。」

「控えてませんから！やめてくださいよ、そのセリフ、本物の女神様がいうと確実にフラグじゃないですか！」

アイリスのセリフといい、最近俺の周りで魔王戦フラグが乱立するのは何なの!?

「すみません。ですが、私は、魔王を討ち倒すのはきつとあなただと、そう確信しています。」

「その根拠のない自信はどこから湧いてくるんですか……」

俺、さつきバナナの皮を踏んで転んで死んだんだぞ。

「私の……女神の勘がそう告げているんです。」

「あー！『私の勘が……』とか、それ、シャレにならないセリフなんでマジで勘弁してください!!」

「そうなのですか？ふふふ……」

この女神様、確信犯だ。間違いない。

「はあ……まあ、魔王討伐はいつか、一生あるかないかの絶好調の本当にノリノリな時ってことで……俺は元の世界に戻りますね……」

「はい。期待していますね。」

何を期待しているのだろうか……

と思いつつ、俺はもとの世界に戻る門へと歩む。

「では、旅立つあなたに幸多き事を。」

エリス様の声に送られ、俺は元の世界への門へと飛び込む。

魂がもとの体へと引き寄せられる。

光の先へと進んでいく。

……そして、魂と肉体との一体化を感じた時、

ふいに幸運の女神様の声が俺の胸に届いた。

「カズマさん、」

「ときに弱音を吐きたくなるでしょう。」

「ときに耐え難い苦難に陥ることがあるでしょう。」

「誰かに支えて欲しくなることがあるでしょう。」

「本人が意図したにせよ、そうでないにせよ、苦痛を伴う決断に迫られることは必ずあるものです。」

「そんなときは、」

「カズマさん、」

「どうか、勇気をもって一步を踏み出してください。」

「踏み出す勇気が出ないときは、どうか、思い出してください。」

「私が見守っていることを・・・。」

俺はゆっくり目を開ける。

とある女神様の祝福をうけながら。

「・・・この天界から、あなたを！」

完

番外 ウイズ編 リッチーと学ぶ取引の基礎  
第1話 借金店主

【ウイズ視点】

「はわ…はわわわわ…」

「おい借金店主。これはどういうことか説明してもらおうか。」

魔道具店の前に佇むバニルさんと私の目に映るのはいつもの魔道具店の扉……に打ち付けられた木の板。

「ごっこ、これはですね、たたたたぶん私達の魔道具のあぁ、あまりの有用性に危機感をもった競業の魔道具店のししshしs仕業で……」  
「ほうほう、変換ミス店主よ。どれ、ちよつと我輩の全てを見通すこの眼を見るがよい。」

「きよ、拒否します…」

店の扉に打ち付けられた木の板にはデカデカとこう書かれていた。

『差押え』

「拒否します。ではないわ!!! 貴様! いつの間に新しい借金を作った!! 先月によくやくこれまでの借金を返済できて、いざこれから、というところだったではないか!!!」

「ひいひいーご、ごめんなさいごめんなさい! 超高級ポジションを購入するにあたって、ちよつとお店の資金では足りなくて…即日にお金を貸してくれるという親切な金融業の方から…いえ! 絶対ポジションは売れると思っただんです! 借金なんてあつという間に返せると思っただんです!」

「なるほどなるほど、それが例の賞味期限切れのポジションであるな…して、その金融業者に借りたという借金の元本と利子と弁済期を教えてくださいらおうか。」

「うっ……………」

じりじりと滲みよるバニルさん。



だらだらと顔中に汗が流れる私。  
これは…観念するしかない。

振るえる手で懐から金融業者との間で交わした書面を取り出して、  
おそるおそるバニルさんに提示する。

バニルさんはそれをしげしげと眺めて、  
「なん…だと…」

途端にギョツとした顔をする。

ああ、仮面越しでもわかるその表情。  
バニルさんの全身から放たれるそのオーラ。  
悪魔でもない私でも分かる。  
とてつもない怒りの悪感情。

わなわなと身を震るわすバニルさんが口を開く。

「…ふむ。利子が、といち、とはどういうことか。」

「さ、さあ…どうということでしょう…」

今にも爆裂しそうな仮面の男性から少しずつ後ずさって距離をとる。

「…ふむ。計算すると返済しなければならぬ額が2000万エリス  
ほどのようであるが…」

「…わからない…私には何のことか、さっぱりわからない…」

この距離なら本気で逃げれば逃げ切れるだろうか…

「…ふむ。1か月後までに返済しないと魔道具店が競売にかけられる  
ようだが…」

「わからない…何もわからない…」

そうだ！テレポート！

…いや、今逃げたら、とんでもない目にあわされる気が…  
…でも、逃げないのもヤバイような…

バニルさんは、書面から目を離して天を仰ぎ…  
…ほどなくして、ふう、と息をはく。

おそろおそろバニルさんの一挙手一投足を注視する私。

そして、バニルさんは私にニツコリと優し気な笑みをくれる。  
仮面越しではあるが慈愛に満ちたその表情に私は安心して…

「バニルさん！ふたりで力を合わせれば借金なんてすg

「『バニル式殺人光線』!!!」

ぎゃああああああああああああああああああああああああああああ

アクセルの街の一角に私の叫び声が響いた。



残債務：2000万エリス

猶 予：残り1カ月

## 第2話 サキユバス店のリッチー①

私の魔道具店は差押を受け、さらに保全処分とかで中に入ることも禁止されてしまった。

立入り禁止の理由は私が経営を続けると借金返済から遠のくからということようだ。なんて勝手な判断なのだろう。

「…まったく、汝は魔道具店経営という手段を失って、どうやって借金を返済するのだろうか？」

「…うう、冒険者としての登録が残っているはずですので、クエストでも受けようかと…」

殺人光線を受けたことによる戦闘不能状態から立ち直った私はバナルさんに向かって言う。

「…または高価に買い取ってもらえるはずのリッチーの爪を売ります…ふふふ…両手両足で20枚は用意できますので…うふ…」

私が震える手でペンチを持ちながらそんなことをいうと、バナルさんが危ない人を見る目つきで、ちよつと引き気味に私を見る。

「脳みそが杏仁豆腐のような汝のことであるから、そんな考えしかないと思っただわ。」

「杏仁豆腐!？」

「ちよつと我輩についてくるがよい。」

バナルさんはそう言って、そそくさと歩き出した。

いったいどこに行くつもりだろう。

まあ、バナルさんには何かしら考えがあるのだろう。

悔しいがバナルさんは杏仁豆腐な私より何手も先のことを考えている。

バナルさんはアクセルの街でもあまり人の通らない路地をズンズンと歩いていく。

やがて薄暗い路地に入って何やら怪しげなお店の扉をあけたところ

ろで、私は恐る恐るバニルさんに問いかけた。

「あ、あの、いったいこのお店は…」

「いいから入るのだ。」

バニルさんは私に構わず薄暗いお店の中に入っていく。

私も後を追ってお店の中に入る。



照明でほんのりと照らされた店内は紫やピンクといった配色が目立っていた。

息を吸うと、甘い香りで鼻腔が満たされる。

なんだか…

なんだか…変な…

なんだか…妙に…いやらしい！

いやらしですよバニルさん！

「あ、あの、バニルさん…そろそろ私をここに連れてきた理由を…」

しかし、バニルさんは私の問いかけに構わず黙って店内をきよろきよろしている。

も、もしかして…

ここがああ噂の『らぶほ』とかいう施設で…

借金は我輩が返すから代わりに汝の体を我輩によこすがよい、とか言ってる…

「ばばばバニルsあん…わわwwたし、こ、こっこの準備が…いいえ、けっして嫌というわけではなくですわね！たた確かにずつと一緒に働いているわけですし！いつかはそんなことも…なんて考えなくもないですが…ですが、わ、わ私もまずは安心させてほしいというか、ま、まずはシャワーでも浴びて落ち着いて…」

「落ち着け、変換ミス店主よ。汝にはここで働いてもらおうと思って

連れてきたのだ。」

「……………えっ…」

働いて？

らぶほの従業員になれってことだろうか？

いや、そもそもここは、らぶほなる施設なのだろうか？

……………待った。

もしかして、だ。

私はある答えに辿り着き、冷や汗をたらたら垂らす。

もしかしてここは、あっち系のお店じゃないだろうか。

そう、いわゆる個室付き浴場とかつてやつじゃないだろうか。

それなら、このいやらしい雰囲気もうなずける。

…ああ、絶対そうだ。

バニルさん、今回は本当に頭にきているようなので、私に体で稼いで来いってことを言いたいのだろう。

確かに短期間でそれなりに稼ぐならこれも一つの手かもしれない。

アンデッドな私でも、ちよつと特殊な趣味がある人には需要があるかもしれない。

でもでも、人間を捨ててはいるが、私だって捨てたくない一線があるのだ。

私だって、そういう○ナホとしてじゃなく、そういう行為に愛が欲しいというか…

そんなことをぐるぐると考えていると、店の奥から小柄な可愛らしい少女が顔を出した。

「バニル様！いらっしやいませ！どうされました？」

「おお、最近チンピラ冒険者と行動を伴にすることが多く何かと世話をやいているうちに少し好意が芽生えてきてしまったロリサキュバスよ、いらっしやいましたー。」

「ばば、バニル様！出会いがしらにどうでもいいことまで見通さないでください！だいたい私達悪魔の悪感情なんて美味しくないじゃないですか！」

「ふむ。して、店長はいるか？ちよつとお願いがあつてきたのだ。」

「お願いですか…？まあ、私たちのお店はバニル様の庇護下にあることで、ヤクザみたいな青髪女の難を免れておりますので、大抵のことでしたらお受けできると思いますが…」

「まあ、お願いというのは難でもない。このポンコツリッチーをこの店で働かせてはくれないだろうか。」

「はあ…」

バニルさんにロリ呼ばわりされたサキュバスさんは私のほうをしげしげと見る。

この子、体つきはめぐみんさんのように平べったい感じではあるが、着ている服が妙に艶めかしい。

布面積が非常に狭い。

「はは…ど、どうも…」

とりあえずぎこちない感じになってしまったが私はその子に挨拶する。

バニルさんは続けて口をひらく。

「このポンコツ店主は、前に魔道具店で汝に有無を言わず襲い掛かったポンコツぼっち紅魔族とポンコツ勝負をして僅差で勝利するくらいのポンコツリッチーではあるが、見てのとおり体だけは男好きするものをもっているのだな。」

「バニルさん！酷いですー！」

私は涙目でバニルさんの服を掴んでゆさゆさ揺さぶる。

そんな私たちに向かつてロリサキュバスさんが言う。

「はあ…まあ人手はいくらあっても助かるので問題ないと思いますよ。この店はあまりお客様からお金をいただいてませんから、お給金はそんなにだせませんが…」

「構わぬ。悪いが、このポンコツをこき使ってやってくれ。」

「ああ！ついに店主やリッチーって部分を取りましたね！！めぐみさんみたいに変な通り名がついちやうのでやめてくださいよ！」

揺さぶる手をさらに強くしてバニルさんに食って掛かる。

が、バニルさんはそんな私には気にせずロリサキュバスさんと話しを進めていく。

「では、店長にその旨を伝えてきてはくれぬか。」

「え、ええ、分かりました。ちよつと待っていてくださいね。」

私のことなのに私は蚊帳の外で話が進められていくのだけでも、そもそも私は肝心な部分を理解していない。

「ちよつと待ってください!!そもそも、ここは何のお店なんでしょう!？」

「む？なんだ今更。話しておらんかったか？」

「話しておらんかったですよ！この店の雰囲気！この子の衣裳！これはどう見てもソーp…」

「この店は、男性冒険者に良い夢を見せるといいうサービスを提供しているサキュバスの店だ。」



今、リッチーな私はなぜかサキュバスさん達が経営するお店でサキュバスの格好をしている。

結局、お店で働くことについては面接もなくあっさり決定された。まあ、公爵級悪魔のバニルさんの依頼なので、下級悪魔のサキュバスでは逆らいようが無いのだろうけれども。

このサキュバスのお店は本番行為などは一切無し、サービス内容は男性冒険者が希望する夢を見せるといっただけのようでも私も渋々なが

ら承諾して今に至る。

バニルさんはいつの間にかお店から姿を消していた。

「……………」

それにしても…

衣裳がすごい。具体的にどう凄いかという布面積が凄い。

普段太陽光から身を守るために厚手のローブを羽織っている私からすると、これはいささか防御力が低すぎる。

胸を隠す部分もおやまのてっぺんは隠されているものの、それ以外の部分、形が露わになっている。

お腹や背中なんて堂々と出ているし、おへその下のきわどい部分なんてハートマーク型に肌が露出されている変態形状だ。

お尻の部分には悪魔の尻尾がぶら下がっており、頭には蝙蝠の羽をモチーフとしたカチューシャを被り、一見するとサキュバスだ。

「はあ…しかし店主さん、こう改めて露出して見ると本当に立派なものをお持ちですね…私達サキュバスでもこれほどのものを持っているのはそうそういませんよ?」

「あ…ありがとうございます。」

私の胸をしげしげと見つめながらロリサキュバスさんが関心している。

「さて、お店のシステムは先ほど説明した通りです。ここはそういうお店ではありませんが、お得意様なんかには別料金でお酒を出してお話を聞いたりするスペースもあります。まあ、こういう接待は別に嫌ならしなくても構いません。とりあえず、ウイズさんにはお客様を席までご案内する部分をお願いします。」

「は、はい。わかりました。」

ロリサキュバスさんから一通りの説明を聞き、いざ接客開始となった。



私の指導はこのロリサキュバスさんがしてくれるらしい。  
私たちは、入り口付近に立ってお客さんを待っている。

私も一応魔道具店で荒くれたお客さんたちの接客はしていたので、接客自体に不安は無いのだが…

ちらり、と下を向いて自分の格好を確認する。

うん。大事な部分は隠れている。

逆に言うとなんか大事な部分しか隠れていない。

これは少し激しめに動けば布がずれて、見えちゃいけない部分まで見えてしまうのではないだろうか…

「…これも慣れでしょうか…」

「慣れだと思いますよ？ 私なんか生まれてこの方、こんな格好をずっとしていますので。まあ、私たちサキュバスは男性の精気がご飯のようなものなので何かとこの格好が都合がいいんですね。」

…サキュバスも大変だ。

いや、性という面で見ると優秀なのだろうか…

私も人間だった頃から、もつと勇気を持っていれば、いろいろ拗らせることもなく…

とか軽く自分の人生を振り返っていると、私が働き始めて第一号となるお客さんが店に入ってきた。

「いらつしやいませ」

私とロリサキュバスさんが合わせて挨拶をする。

「ああ、今日もよろし…」

そこまで言っただけで目の前の人物は私と目が合ったまま固まった。

この人は…確かダストさんと一緒にパーティーを組んでいたクルセイダーのテイラーさんだったか。

テイラーさんが口を開く。

「て、店主…さん…？」

「は…はい…店主です…まあ、今は店主じゃありませんが…」

テイラーさんは、冷や汗を流しながら固まっている。

何だか見られたくないものを見られてしまったような、そんな表情だった。

テイラーさんはアクセルの冒険者の中では真面目で通っている。きつと、いろいろなイメージとかに気を遣っていたのだろう。硬派を意識していたのだろう。

そんなテイラーさんに対してロリサキュバスさんが無慈悲にも無邪気に笑いかける。

「テイラーさん！いつもいつも本当にありがとうございます！今月は特に利用が多いですね！何かむしゃくしゃすることでもあったの…」「ああああああああああああああああ!!!」

テイラーさんは突然叫びだす。

そして私に向かって手を合わせる。

「て、店主さん！お願いだ！ここに来たことは仲間のみんなには…いや、この町の冒険者には…いや、俺が来たことは忘れてくれ！なかつたことにしてくれ！頼む!!」

「は、はあ…」

私は圧倒されつつ返事をする。

それなりに人生経験がある私は、男の人が溜まったものをすつきりさせるために、こういうサービスを利用したくなるというのは理解しているのです、別に気にしないのだが…

硬派なイメージを保つのも大変だ…

その後、テイラーさんはチラチラ私の方を気にしながらもロリサキュバスさんの案内を受けて夢のオーダーをして帰っていった。

それを見送った後、ロリサキュバスさんが口を開く。

「テイラーさんは、いつも他に人の来ていない早い時間帯にくることが多いですね。」

「は、はあ…」

この子、結構プライバシー意識が低いみたいだ。私も気を付けなければ…

その後、ちらりとテイラーさんのオーダーの内容を見たところ、『いたいけな少年になって強気な女性冒険者に押し倒されたい。』との夢の要望が書かれていた。

これにはさすがに少し引いた。



その後、冒険者や機織り職人さんなどを相手にこの店でオーダーを受け続け、ある程度慣れたところで今日の仕事は終わった。

なんだかテイラーさんと同じようにお客さんがみんなこちらを気にしてチラチラと私への視線を向けてくるのが気にはなった。

まあでも、トラブルもなく一日は過が過ぎたので、よしだ。

「それにしても、日当が5000エリス…食事は砂糖水で我慢するとして…借金の返済まで全然足りない…」

私が途方にくれていると、私が退店するのを待ちわびたかのように声が掛かった。

「フハハハハハハ！バイト初日はどうであつたエロコスプレ店主よ？街の男性冒険者が汝のエロコスプレを噂しておつたぞ！」

「エロコスプレ呼ばわりは止めてくださいバニルさん！だいたいバニルさんがあんな恰好させたようなものじゃないですか！」

私はバイトで溜まつたうっ憤をここぞとばかりにバニルさんに吐き出す。どうせ怒りの悪感情は食べられるのだ。であればたつぷり食べさせてあげよう。

「バイトは恙なく終わりましたけど、ここでバイト一か月していたつて全然借金なんて返済できないじゃないですか!!ほかにも返済の宛を探さないと…」

「汝には魔道具店から離れてもつと巨視的に取引というものを学んでもらいたかつたのであるが…まあよい。初日は仕事を覚えるのでそれどころでは無かつたであろう。」

「はあ…今日は早く帰って休みたいです…」

私かとほとほと歩き出そうとするとバニルさんは私に疑問の声を向ける。

「汝、魔道具店で寝起きしていたのに、そこが立入禁止になって、どこで休む気なのだ？」

私の足がピシツと止まる。

そういえば魔道具店で暮らしていた私だったが、泊まる場所も無くなってしまうのだ。

今日の給料で宿を借りる？それじゃ借金なんて一生掛かっても返済できないじゃないか。

私が途方に暮れているとバニルさんが声を掛けてくれる。

「そんなことだろうと思っただわ。どれ、我輩についてくるのだ。」

「うう…バニルさああん…」

私は、バニルさんが寢床のことを気にしてくれていたことに感動しつつ、バニルさんの後についていく。

……

……

「…それで、これは何ですか？」

私は目の前の何やら箱状のモノを呆然と見ながらバニルさんに尋ねる。

「うむ。よくぞ聞いてくれた。これは我輩が汝のために用意した今日からの汝の屋敷だ。」

ちなみに私たちがいるのは河川敷。川に掛かった橋の真下の空間だ。

「店主よ。この素敵な一軒家は成金小僧の知識で我輩が再現した段ボールハウスなるものだ。小僧の国では段ボールハウスで河川敷なんか人居を構える者が無数にいるらしい。引越しが大変便利であるし、馬小屋なんかよりもプライバシーが守られ、何といても家賃が破格の0エリスである！」

「そ、そんな…こんな寒空のもと吹けば飛ばされるような紙の家で寝泊まりしろと…」

私が茫然自失に陥っていると…

「ちなみに我輩、今日は自分のへそくりでアクセルの街で一番高級な

ホテルのスイートルームを抑えておる。」

「え？それなら私も…」

「ああ残念、汝も泊めたいのはやまやまであるが生憎部屋は一つしかとっていないのだ。サキユバス店での汝の態度を見るに、男と一緒に泊まるのはどうも危機感を覚えるようなので、まことに遺憾ではあるが我輩は独りで泊まることにする。うーむ、まことに遺憾である！」

「バニルさん！いつも悪魔には性別が無いとか言ってるじゃないですかああああ!!もう胸でもお尻でも触っていいんで私も一緒にいいじゃないですかああああああ！」

「うーん、やはりリッチーの悪感情はさして美味くないな。人間であつた頃の汝の方が美味であつたぞ。」

「余計なお世話ですツツ!!」

私の借金完済までの道のりは果てしなく遠い…



借金：2000万エリス

日当：5000エリス

猶予：残り1カ月

### 第3話 サキユバス店のリッチー②

サキユバスさんのお店で働きだしてから早1週間。

この露出過多なサキユバス衣裳や仕事にも慣れてきた。

日当は初日から変わらず一日5000エリス。やっぱり他にあてを探さなきゃな、等と仕事中に考えられる程度には余裕が出てきたその日、まだ開店早々の時間帯、出入口付近でいつものようにお客さんを待っている、サキユバス店の扉が開く。

この時間帯だと、テイラーさんかな…などと考えながら「いらっしやいませ」とお客さんに声を掛ける。

：ちなみにテイラーさんは最初こそ私がいることで挙動不審な態度をとっていたが、もう私が居ることに慣れてしまったようで既に5回もこの店で顔を合わせている。お客さんの中でもトップクラスの来店率だ。魔道具店には全然顔を出してくれなかったのに。希望の夢の内容もだんだんレベルが高くなって行って、ちよっともう私にはついていけない。なんというエロセイダーなのでしょう。

：おっと、いけない。接客に集中しなければ。

そう思い、入り口の扉から入ってくるお客さんに魔道具店接客でつちかったスマイルを向ける。

扉を開け来店したのは…バニルさん??

いや、バニルさんにしては身長が低すぎる。私よりも低いのではないだろうか。

見ると恰好も少し変で、バニルさんの仮面をつけ、その顔の部分以外、頭がすっぽり隠れるフードが付いた全身ローブを着ているお客さんだった。

ただ、秘めている魔力は相当のモノのようでアクセル街でも超上位クラスの魔力が感じられる。

その仮面客は私の姿に気づくと、ビクリと体を震わせてキョロキョ

口と周りをうかがうような挙動不審な態度をとっている。

お客さん？ですよね？

私は戸惑いながらも怪しげな仮面客を案内しようと声をかける。

「あの、お客様ですよね？こちらへ…」

と、私が言いかけた瞬間、ロリサキュバスさんが私の背後からトテトテと現れ…

「あーゆんゆんさん！最近はお無沙汰でしたね！」

その場に現れたロリサキュバスさんに声を掛けられた仮面客はビクリと大きく体を震わせ叫ぶ。

「わー!!!店員さん！私のことはぶつころりーと呼んでとあれだけ言っただじやないですかー!!!」

仮面客は可愛らしい声で抗議する。

それに対してロリサキュバスさんは…

「あー！そうでしたね、ごめんなさい、ぶつころりーさん。最近お無沙汰で心配したんですよー、以前はあれだけ毎日…」

「わー！わー！わー!!!」

プライバシー侵害系サキュバスにより個人情報漏洩されてしまったゆんゆんさん…

実はこのロリっ子、狙ってやっているんじゃないだろうか。

ゆんゆんさんも気の毒に…



店の奥に移動して客席に着いたバニル仮面のゆんゆんさんは私に疑問の声を向ける。

「ところで、店主さん…ですよ？店に入った瞬間にビックリしましたよ。凄いい恰好ですね…」

「うう…ゆんゆんさん、言わないでください…これはバニルさんから提案なんです…」

「ええ!!バニルさん、こんな変態趣味があつたんですか!?!完全に変態仮面じゃないですか!」

「あ、いえいえ。衣裳じゃなくてこの店で働くことの提案です。私、ちよつとした事情で借金をつくつて魔道具店を差押えられてしまつて…」

「ええ!?店主さん、大丈夫なんですか?借金ついていくらなんですか?良ければ私が援助しますよ。私、友達の数は一向に増えないんですけど、おかげで交際費がかからないから貯金通帳の残高だけは増える一方なんです。」

「ゆんゆんさん…」

私の中に、羨むべきか、憐れむべきか、複雑な感情が芽生える。

…あれ?涙が。

「ゆんゆんさん、ありがとうございます。とても有難い提案なのですが、もとは私が作った借金ですし、ギリギリまで頑張ってみます。見通す悪魔のバニルさんもついてくれていま…います?…いますので。」

「店主さん…なんで最後のところ微妙な感じになつたんですか…。でも、本当にどうしようもなさそうな時は頼ってくださいね!頼ってくださいね!あ、それからゆんゆんさんじゃなく、ぶつころりーさんです。」

大事なことなので2回も鼻息荒く言うゆんゆんさん。

仮面が私のもとにズズイと迫って来てちよつと怖い。

「あ、ありがとうございます、ぶつころりーさん。それにしても、ここにくるのは男性冒険者ばかりなのに、女性の利用なんて珍しいですね。女性視点で性的な夢を見せてもらうなら、それはサキュバスよりインキュバスの領分であるような気がするのですけれども…」

「ううう。違うんです…私の悪友…顔見知りの人からサキュバスサービスのことを聞いて、最初は遊びのつもりだったんです。けれども、一度夢を見せてもらったら夢の中の友達があまりにも私に優しくしてくれるんで、どんどん夢の世界にのめり込んでいってエスカレートして…」

なんだかイケない遊びにハマる女性みたいなことを言い出したゆんゆんさん。



これが以前カズマさんが言っていた夢女子というものだろうか。

私とゆんゆんさんがお互いちよつとイタイ事情を打ち明け合い、微妙な空気になっていると…。

「おー店主さん今日も出勤かい。いやー眼福眼福。つて、ボツチ紅魔族じゃねーか。おこれよ。」

ちよつとよく来店してきたチンピラ冒険者ダストさんが私達の存在に気づいて声をかけてきた。

私がサキユバス店で働いていることは既にこの街の男性冒険者の間で話題になってしまっていて、たまにこんな風に声をかけられることがあった。

ダストさんから声をかけられた目の前のバニル仮面ゆんゆんさんが猛る。

「ちよ…いせつかくこんな風に変装してきているのに、私が来ていることが周りにバレるような発言は控えてくださいよ！それと、ここでは、私のことはぶつころりーと呼んでくださいって何度も言ってるでしょー！」

どうやらダストさんはゆんゆんさんが常連であることを知っていたようだ。

「なあ、おごつてくれよゆんゆん。俺、この利用料で今日は晩飯代がねーんだよ。俺ら友達じゃねーか。」

「うっ…そ、そんな甘言に惑わされませんよ…で、でもちよつと今日は夜予定が空いているところで…」

明らかに甘言に惑わされつつあるゆんゆんさん。

見通す能力の無い私でもダメ男にひっかかり散財させられる不憫なゆんゆんさんの将来の姿が浮かんでしまう。

というか、ダストさんは晩御飯のお金も無くなるならこんなサービス利用しちやだめだろう。

というか、客席ブースでそんな言い合いをしないでもらいたいのだけれども…

心の中で律儀にツツコミを加えているとゆんゆんさんが気づいた

ように私に言葉を向ける。

「そういえば店主さんは借金生活を送ってるこのことですけど、ちゃんと食べてるんですか?」

「うっ…それが…数日砂糖水を吸ってパンの耳を齧る生活で…」

私が恥ずかしながら伝えると、それを聞いてダストさんとゆんゆんさんの表情が固まる。

「その…すまねえ…晩飯が一食だけ食えないくらいで騒いじまって…これ、今晚食べようと思ってたんだけど店主さんにやるわ。」

そういつてダストさんはズボンのポケットに手を突っ込み柿の種を取り出して私に…

「いりませんよ!」

それを見ていたゆんゆんさんが意を決したように言う。

「あ、あのーきよ、今日は私がおごりますから…店主さんの仕事が終わったら晩御飯を食べに…食べに行きましょう…行くのはいかがでしょうか…どうか私と一緒にご飯を食べてください。よろしくお願ひしますっ!!」

「あ…あの、一世一代のプロポーズみたいに言ってくれるのは凄く嬉しいのですが、今日も遅くまでシフトがあるので…ああ!そんな仮面越しにもわかるくらいにこの世の終わりのようなオーラをださないでください!!」

ゆんゆんさんの提案は私にとっても魅力的であつたけれども今は借金のこともあるので、流石に仕事が優先だ。

「なんだオイ、それならこの店の奥の接待ブースで食事すればいいんじゃないか。店主さんにも休憩時間くらいはあるんだろ。」

「ええ。休憩時間もちゃんとありますし、それなら大丈夫ですよ!」

ダストさんが提示してくれた案に、世紀末を迎えていたゆんゆんさんが途端に元気を取り戻す。

「ほんとですか!あ、あわわ、ダストさん!お食事することになっちゃいましたよ!どどどどうしましょう…あ!とりあえず美容室に行つてこないと!それと、新しい服を買つて…ちよ、ちよつと高いけど魔力メラも…そうだ、お土産はいくらくらいのを準備すれば…」

「おいボツチ娘、お前、おめかししても店内ではずっと怪しげな恰好で姿隠してるじゃねーか。それに、お土産って、いったい何を催すつもりだよ?」

「だってだって!!お誘いしたのにお土産も用意しないなんて失礼にあたるじゃないですか!それと、ボツチ娘じゃなく、ぶつころりーです!」

「あの…他のお客さんもちらほら来つつありますし、とりあえず二人とも落ち着いて席について夢のオーダーでもしてくださいね。」

そして、私は立ったままのダストさんを少し離れた席に座らせて業務に戻った。

その後、私は休憩時間になるまで接客に勤しむ。

ちなみに、ゆんゆんさんがその日にオーダーしていった夢の内容だが、4年に1度の誕生日を祝ってもらおう、という内容だった。なぜか、ゆんゆんさんが祝ってくれた人にお土産を渡すというディテールまで書かれていた。

それ、普通は貰う側ですよ…

…少し涙がでた。



休憩時間。

サキユバス店の接待ブースの一角。

「なるほどな、借金2000万エリスねえ…そりやまた大層な額だな…」

ダストさんが普段見せない神妙な顔つきで呟く。

その横に座っていたゆんゆんさんが声を低くしている。

「なるほどな…じゃないですよ。なんでダストさんがいるんですか。私、店主さんに奢るっていいましたけど、ダストさんには奢りませんよ?」

「おいおいゆんゆん。相談役が一人より二人いた方が店主さんの心強いんじゃないか。それなら、みんなで食事することになるだろ。」

そして、お前はその場の一人だけにおごるような薄情なヤツなのか。そんなだからいつも独りで食事をしているんじゃないか。このマスターボツチ。」

「うぐ…そ、そう言われればそんな気も…あと、ゆんゆんでなくぶつころりーです。」

私の借金返済作戦の話聞いていたダストさんも輪に加わり、私達は食事がてら私の借金の返済を目標とした話し合いが行われていた。

私はため息をつき話を進める。

「はあ、ここでのお給料じゃ完済まで何年かかることやら…」

「なあ、店主さんの力なら金融業者のところにカチコミに行つて黙らせることもできるんじゃないか。」

「い、いえ…流石にそんなヤクザみたいなことなんてせず真つ当にやりたいとは思ってますから…」

「真つ当ねえ……」

ダストさんは目を瞑つてしばし黙考し…

「あ、サキユバス店員さん、この酒同じやつもう一杯。」

「ツ！酒代は自分で出してくださいね!!」

ゆんゆんさんにどなられた。

私が呆れているとダストさんは真剣な表情で私に向かって言ってきた。

「店主さんは、商品を全部差押えられちまったのかい？」

「いえ、幸運にもいくらかこの世で最も深いダンジョンに保管していた商品が数点あります。」

「な、なんつーところで保管してやがるんだ…」

ダストさんが少し引き気味に言うが、気を取り直したように、こほん、と咳払いをしてから真剣な表情をして口を開く。

「よし、店主さん。体売ろう。」

「…ダストさん、目が怖いです。あと、文脈が変です。」

私がつっこむと更にゆんゆんさんが追撃する。

「ダストさんのゴミ！産廃！女性の弱みに付け込んで商売のかたにしようなんてゲスですよ！ゲストですよ！」

「…なっ！てめえゆんゆん！お前は俺にだけ突っ込みが激しすぎなんだよ！いや、別に店主さんに一線を越えるようなサービスをしろというので無くてだな…」

「偉そうに借金の相談にのる前に、まず私がダストさんに貸したお金を返済してくださいよ！それと、私はぶつころりーです。」

「えええい！それは次のリザードランナーレースで勝ったら返すっていつてんじゃねーか！おっぱい紅魔族は少し黙ってる！あとで質疑応答の時間を設けてやるから！」

猛るダストさんは、ゆんゆんさんを黙らせて話を続ける。

「いいか、店主さん。この店に来た男性冒険者を少しの時間だけ接待ブースに案内するんだ。そこで隣に座って商品を売りつけるんだ。相手が首を縦に振らないなら距離をつめろ。首を縦に降るまでそれを続けるんだ。そうすれば必ず売れる。あと、余計な商品説明は聞かれない限りする必要はない。むしろしない方がいい。」

それを聞いたゆんゆんさんは冷たい目をダストさんに向けながらつぶやく。

「それ、ただの色仕掛けじゃないですか。」

「ああそうさ。この店に来るのは溜まってる冒険者だ。効果は抜群だよな、ぶつころりー。」

「知りませんよ！あと、ぶつころりーじゃなく、ゆんゆんです。あ、間違えた。っていうか、詐欺ですよそれ。相手は商品が欲しくてお金をだすわけじゃないじゃないですか。」

「この馬鹿ボッチ!!」

「ばかば…!?!」

口をあんぐり開けたゆんゆんさんに向かってダストさんが早口でまくし立てる。

「別に商品が欲しいかどうかなんてどうでもいいんだよ!!金を出すやつはそれが物質的なものであれ精神的なものであれ自分の欲を満たすために金を出すんだ！そして、ここに来店した客は売買交渉という大義名分を背負って、それはもうエロい恰好の店主さんに超至近距離まで密着してもらえるんだ！そんな二人だけの空間というサービス

を得ることができるとだ！ついでに魔道具までついてくる！その一連のサービスに金を出すだけの価値があると考えるヤツがいるなら、それは公正な取引だ！このサキュバス店だって精神的な満足を提供して、それに納得するヤツから金を巻き上げてるんじゃないか！お前は、この場所でそれが不当だ詐欺だって大声で言えんのか!?わかったか、このファツキンボツチ!!」

「ふあつき…!?!」

ゆんゆんさんが涙目になりながらダストさんの首をしめる。

その隣で私はダストさんの提案について考える。

私の魔道具がついで扱いされているのに思うところがあるけど、ダストさんの言うことはわかる。

でも…

「でも、サキュバス店での勤務中に魔道具販売をするなんて職務怠慢なうえ営業妨害じゃないでしょうか…」

私の懸念に対して、ダストさんはゆんゆんさんからの絞首を何とか自力で解いて答える。

「ゲホッゲホッ!!クソ、魔法使いのくせになんて筋力だ…店主さんの懸念は、商品が売れたらその代金の一部を間借り代として多めに支払うことでなんとかなるんじゃないか?そもそもここは客単価が5000エリスだろ。俺の方法なら一人から5万エリスくらいは巻き上げれるだろうから、まあ3割くらいをこの店に還元するなら店としても利益が上回るんじゃないか。」

「うーん…いずれにせよ、それはお店と相談ですね。」

「まあ、この接待ブースは今みたいに、普段から空いてますからお店として提供する場所は用意できますけど。」

「え??ロリサキュバスさん、いつの間に…」

気付くと私の隣にロリサキュバスさんが座ってちゅーちゅーとジュースを飲んでた。

この子、いつも絶妙なタイミングで登場するのはなんなのだろう。

ロリサキュバスさんは話を続ける。

「あ、私も休憩時間に入りましたから。今日終わったら一緒に店長に

話してみましようか。」

「え？本当ですか?!?って、私、まだやるとは…」

そこで改めてダストさんが提案したやり方について考える。

まず私がそんなキャバ嬢みたいなことをすることについてだが：そもそも、この店で働いていることからして水商売に足をつっ込んでいるようなものだし、当初より羞恥心はだいぶ薄らいでいる。

もし生理的に受け付けないようなお客さんが相手だとゾツとしなくもないが、ダストさんの話だと、こちらから営業をかけるお客さんを選べるという利点もある。

あわよくばイケメン男性とお近づきになることも…

…って、いけないいけない。

そもそも、場所が魔道具店じゃないだけで、私が上手に商品の魅力を伝えて買ってもらえるのであれば、それはもう魔道具店での接客とさほど変わらないんじゃないか。

「確かに悪くは無いですね…わかりました。ダストさんの言うことを前向きに考えてみようと思います。」

「ええ!?店主さん、やるんですか!?他の人の案ならともかく他ならぬダストさんの案ですよ!?!」

「オウコラ、クソボツチ、表に出やがれ!シバいてやる。」

「ダストさんが私に勝てるわけじゃないじゃないですか。もうここのお代は自分で出してくださいね。っていうか私にお金返してくださいよ。」

「うぐっ、お前、ほんとに俺だけには容赦ないよな…」

…この2人実はかなり息が合ってるよなあ。

などとぼーっと二人の茶番劇を眺めつつ、私は今日の仕事が終わった後、サキユバス店の店長にどう説明しようか、とかダンジョンから回収してくる商品は何にしようか、などダストさんの計画を前向きに考えるのだった。



借金：2000万エリス

持ち金：3万エリス

猶予：残り3週間



## 第4話 サキユバス店のリッチー③

ピンクと紫を基調とし、甘い匂いの漂うサキユバス店の一角。  
大きなソファーに隣同士で腰掛け座る私と男性冒険者の二人…  
その空間はカーテンで仕切られていて、外界から遮断された空間が  
存在していた。

私は隣の男性冒険者へとの距離を詰める。

「あ、あ、ダメだ、店主さん…そ、それ以上は…」

何かの崩壊が迫るような声が男性冒険者の口から洩れた。

その声を聞く私も何だか火照って来て、思わず声が漏れる。

「すごい…こんな…熱く…おっきくなつて…あん、なんだか…たく  
ましい…ん…」

人間であつた時ですら私の身体はこんな火遊びを知らなかった。

「ああ、て、店主さん…そんなに荒っぽくしたら…も…もう…!!」

私の目の前の男性冒険者が迫りくる崩落に切なげな声を上げる。

私ももはや、あられもない声を抑えることができない。

「まだ…あん…まだいかないで！もつと…もつと…あああん！」

そして私は……………

「あああああああ…ア痛！なな、何!?なにするんですかバニ  
ルさん!!」

突然、後頭部に殴打を受けた私は涙目で後ろを振り返り、仮面の大

男の姿を捉える。

「ええい！様子を見に来てみればサキュバス店の接待ブースでカーテンに隠れて何をやっておるか！このアバズレ店主が!!」

「あ、アバズレ店主!?ひ、ひどい！謝ってくださいバニルさん!」

「謝るのは汝のほうだ！店内で卑猥な叫び声を上げながら隠れて花火なんぞで遊びおって!!」

「ああああ！店内で花火してたことがサキュバスさん達にばれちゃうから、しー！しーです!」

私は慌ててカーテンを閉めなおそうとするが、バニルさんがカーテンを掴んでそれを妨害する。

「なにが、しー！だ、汝はこの店を焼失させる気か！この放火魔め!」  
「大丈夫です！これはカズマさんからお知恵をいただいて再現した線香花火なるものですが、半径1メートル以内の物や人には自動で炎耐性が付与される魔術を埋め込んでいる魔道具です！延焼なんて絶対ありませんよ!」

バニルさんは胡散臭いものを見る目で私を見る。

「ほう、物にも炎耐性が付与されるから、店に着火する心配は無い…と？」

「ええ、勿論です！超強力な耐性が付与されますからね!」

私は胸を張って答える。

バニルさんの尋問が続く。

「それは線香花火を中心に半径1メートル以内の物に有効なのだかな？」

「はい!…ば、バニルさん…そんなウオーリーを探すような目で欠陥を探さないで下さい!」

「ふうむ。して、半径1メートルというが、その線香花火自体に超強力な耐性は…」

「……………付与されます…」

「ふむふむ。なるほどなるほど。で、汝はどうやってその線香花火に

火をつけたのだ？」

「そ、それは…イ、インフェルノで…」

ポチャン。

線香花火の火玉が燃え尽きて、その下に準備していた水を張った桶の中に落ちた。

「ほうほう、なぜにファイヤーボール…いや、ティンダーや小僧のジツポを使わなかったのだ？」

「そ、それは、ちよつと付与される炎耐性が強すぎまして…その程度の火力じゃ効果が無い……みたいなの…」

「で、この初心者の街で上級魔法を習得しているのはいったい何名いるのだろうか。」

「えー、そ、そうですねえ…私と…ゆんゆんさんと…うーん…あ！爆裂魔法でも着火できると思うので、めぐみんさんでもいけるはず…！」

私が必死に説明しようとしていると、目の前でバニルさんは大きく息を吸い込んで…

「いけるはず…」

…じゃないわボケエエエエ!!」

バニルさんのキアラ崩壊気味な声がサキユバスの店に響いた。

そんな私達のやりとりを私の隣で見ていた男性冒険者さんの顔が引きつる。

「て、店主さん…確かに綺麗な花火だったけれども俺の知り合いには上級魔法を使えるヤツがいなくて…悪いけど商品は買えないぜ…」

そう言つて、そそくさとその場を離れていってしまった。

私は男性冒険者に手を伸ばす。

「ああ……まっつて！まだとっておきの商品が……！何てことしてくれたんですかバニルさん！もう少しで落とせそうだったのに！」

私がプンスコとバニルさんに食って掛かると、バニルさんは嫌そうな顔をする。

「まあいいです。先日、ダストさんから魔道具の商売方法をご教授していただいて、その方法をとってから魔道具がバカ売れなんです。今まで苦労して売ってきていたのが馬鹿に思えるほどですよー、あーっははははは！」

「なんとということだ……赤貧店主がサキユバス店の雰囲気当てられてキャラ崩壊してしまっつておるではないか……。」

「あーっはっはっはっはっは」

私の高笑いがサキユバス店に響く。



さて、今日も今日とて仕事が始まる。

色仕掛け作戦はとてもし上手い具合に進んでいたが、サキユバスさんのお店を使わせてもらっつている手前、サキユバスサービスの仕事を疎かにはできない。

既にサキユバス店で働き始めて2週間ほど経ったが、私の顔見知りの男性冒険者のほとんどにこのお店で遭遇している気がする。というか、この街の男性のほとんどがこのお店を利用していたのではなからうか。

なんとという入れ食い独占状態。これでよく女性にその実態がバレていなかったなあ、と感心してしまう。

そんな風に考えていた束の間、キィイと音をたててお店の扉が開く。

今日もいろいろと溜まっつている冒険者のご来店だ。

私は来店した冒険者の方にサキュバス直伝のエロい微笑み方でお出迎えの言葉をかけ：

「いらっしやいま…」

…ようとして少し動揺してしまう。

サキュバス店に姿を現したのは、バニルさんの仮面をつけた金髪のお客様だった。

バニルさんの仮面、先日ゆんゆんさんも着用していたけれども流っているのだろうか…

仮面のお客様は大きな目のマントを羽織って体躯のほとんどが隠れているが、そのマント自体が高級な生地であることが一見してわかる。そして、お客様から放たれる気品のあるオーラ。間違いなく貴族のお客様だ。貴族のお客様の来店なんて珍しいこともあるものだ。

それにしても…

仮面で覆われていない部分、サラリとしてツヤのある金髪に顎の形や口元のシャープさなどを見ると、この方は間違いなくアレだ。

イケメンだ。

男性にしては少し身長は低く細身であるが、イケメンだ。

生まれ育ちが全く異なる冒険者が真似しようとしても到底醸し出すことのできないような気品を宿している。つまりイケメンだ。

…ごくり。

意図せず私は獲物を見る目でつばを飲み込みのどを鳴らしていた。間違いなくお金持ち（しかもイケメン）。

これは私の色仕掛けをフルに発揮する絶好機会！

そしてあわよくば御近付きになり、玉の輿のチャンス！

貴族様のお財布にかかれば借金なんてポケットマネーでどうにかなってしまうのではないだろうか。

私は、キョロキョロとしている貴族様に改めてお声を掛ける。

「いらっしやいませ♡どうぞごいちちへ♡」  
ハートまでつけちゃう。



貴族のお客様は記入ブースに着席して、サラサラとオーダー用紙に必要な事項を記入している。

それにしてもこの貴族様、私が挨拶してここまで、私の言葉に相槌を打つだけで一度も声を聞かせてくれなかった。ここまで秘密主義だと是非ともその正体を暴きたくなってしまう。

…と、記入が終わったようだ。

金髪仮面のお客様は用紙を私へと差し出した。

「はい、では少々お待ちくださいね♡」

そういつて、私は用紙をお店の奥に持っていく傍ら、その記入内容に目を通してみる。

…って、紙の枚数増えてませんか？

…

…

…

えーっと…夢の内容の欄に書かれている別紙参照ってなんですか。

私は用紙に重ねられていた別紙に目を通して、固まってしまう。

## 【別紙】

王都の城下町、人垣をかき分けて私は一人の少女の姿を探し求めて町中を駆け回っていた。

「アイリス様！アイリス様！」

くそっ、この通りにいらっしやると思ったのだが…

と、正面に、私と同じくアイリス様を探して駆けまわっている同僚

の姿を見つけた。私はその同僚へと声をかける。

「レイン、アイリス様は見つかったか？」

「いいえ、クレア様、商店街のほうは一通り見まわって城下町の方々にも聞いて回ったのですが、足取りがまったくわかりません」

「クソつ、ここ最近、アイリス様は我々の探索経路を読んでおられるようだ。探索網をB区画まで広げてみよう」

「…何だかいつぞやのお城でのあの方の逃走劇を思い出しますね…」

「うっ!!…嫌なことを思い出させるな」

ここ最近、アイリス様の脱走癖はエスカレートして行って、私もレインも見つけ出すに一苦労していた。

レインは増援を要請してくるということそのままテレポートでいったん城に戻っていった。

私は先にB区画まで行こうとして…

「ぎゃああああああ!!」

裏路地から覚えのある声の悲鳴を聞く。

この声は…アイリス様!?

私は急いで悲鳴の聞こえてきた路地へと駆け込んだ。

…と、そこには町娘のお姿をしたアイリス様が暴漢3人に囲まれて  
いる光景が広がっていた。

アイリス様は私の姿を見つけて叫ぶ。

「クレア! 助けて!! 怖いっ!!」

暴漢共がアイリス様の視線を追って私の存在に気が付く。

「…おっ?…なんだ、王城の騎士様がこんなところになんのようにだ!」

私は腰に掲げていた剣を鞘から抜いて暴漢共を睨む。

「貴様らただで済むと思うな…今襲おうとしている人物が誰かわからないようだが、せいぜい後悔するがいい」

「いくら騎士様だからって女一人で何ができるってんだ、やっちまえ  
!」

「オオオオオ」

暴漢共は3人一斉に私に襲い掛かってくる。  
が：

「ふん、遅すぎる」

私は、これらの攻撃を軽くいなして：

『ルーン・オブ・セイバー!!』

一瞬で暴漢共が手にする武器を全て真つ二つに切り裂いた。



私の前で正座をする暴漢3人。

「も、申し訳ありませんでした！とても可愛い子だと思ってついつい誘拐したくなってしまつて…まさか王女様だったなんて…で、でも、こんな天使のような子が目の前にいたらそんな気が起きてしまうのはしかたないだろ…」

私はその暴漢の弁明を聞いて…

「…ふむ、わかりみが深い」

この暴漢、よくわかっている。とくに天使のような子という表現が素晴らしい。

私はなかなか見どころのある暴漢に慈悲をかけることにしてやる。

「本来は王族を危険な目にあわせたのに対してこの場で打ち首と処すところだが、アイリス様の半端ない可愛さをよく理解しているようなのでここは不問としてやろう」

私の情けを受けて暴漢たちは地に頭を擦り付けた。

「クレア!!」

アイリス様はそれまでカタカタと震えて私達の様子を伺っていたが、ひと段落ついたことを把握して私の胸に飛び込んできた。

「クレア!!怖かった！怖かったです!!」

私のスーツに顔を埋めて泣きつくアイリス様。

その御頭をなでなでしながら私は優しく声を掛ける。

「アイリス様、城下町はこのような危険もあります。城を抜け出した



くなるお気持ちも分かりますが、あまり心配をかけさせないでください……」

「だって……だって……」

アイリス様は涙を目に溜めて私を見上げる。

ああ、なんと綺麗な吸い込まれそうな瞳だろうか。

「……私……クレアに私のことを見つけてほしかったのです……」

アイリス様のか細いお声が私の胸を打つ。

アイリス様は少し赤くなって恥ずかしそうに言葉を続ける。

「最近は何もいろいろなことを学ばなければならなくなってきた、前のようにクレアと一緒にいる時間が少なくなってしまう……私……すごく寂しかったのです……」

私のスーツを握る手がきゅつと強まる。

「……クレアが私のことなんてどうでも良くなるんじゃないかって……不安で……クレアの気持ちを確かめたくて……」

アイリス様は少し俯いて消え入りそうな声を発する。

「クレア……私、もっとクレアと一緒にいたい……」

おっと、これはエモい。激エモだ。

私はアイリス様をきゅつと抱きしめる。

王族御用達の石鹸の香りがふわりと漂う。超絶美少女の香りだ。

「アイリス様、私はいつでもアイリス様と共にあります」

私のその一言を聞いたアイリス様は私のことを強く抱き返す。抱き合ったことで伝わるアイリス様の体温が少し高まって……

「クレア……今日の夜、私の部屋に来てくれませんか……」

モテキはいりました。



その夜、私はアイリス様の御部屋に訪れていた。

「クレア…今日はありがとうございました。」

「いえ、寂しい思いをさせてしまって、申し訳ありませんでした」

「いいのです。それより…あの…」

アイリス様はベットの隣でもじもじとしている。

どうしたのだろう。

しばらくして、アイリス様は決心したように掌を握って、俯きつつ  
恥ずかしそうに言う。

「クレア…今夜は私と一緒に寝ませんか？」

「アイリス様…」

私は、優しい笑みを浮かべながらアイリス様のもとに近づく。

寝巻のアイリス様の両肩に優しく触れ、アイリス様の潤んだブルー  
の瞳と視線を交わす。

アイリス様の透き通るような白肌色でぷるぷるの頬を私の片方の  
掌で包み込むと、アイリス様は頬をピンクに染めて、ほうと息を吐き  
眩いた。

「クレア…今日は私のことを見つけてくれて、ありがとうございます。私はクレ  
アをお慕いしています」

………

………

………

あ…あ…ああアイリスさまあああああ！

えもえものえも！

すこすこのすこ！

尊い尊い尊い尊い尊い！

ATM！

A（アイリス様） T（尊い） M（マジで）！

続く。

【別紙終わり】

…続くのか。

私は仮面のお客様の正体を理解して、ツツコミどころの多すぎる百  
合百合なその用紙（小説？）を担当のサキユバスさんにそつと手渡し  
て、このことは忘れようと努めるのだった。



深夜。

仕事が終わって家路（河川敷の段ボールハウスまで）の途中、私は  
信じられない光景に唾然となる。

「ハ、これは…」

そこには私が今日冒険者の方に自信をもって進めた魔道具『どんな  
目的地にでも自動で案内してくれる靴』が道端の目立たない場所に捨  
ててあった。少し前まで雨が降っていたせいで、泥まみれになってい  
る。

今日おすすめた時は、冒険者の方はあんなに熱心に魔道具の話を  
鼻の下を伸ばしながら聞いていたのに…。

…捨てられた靴を拾って、それを黙って見つめながら私は思う。

確かに扇情的な恰好をすることで魔道具は面白いほど売れた。

しかし、私が提供していた魔道具は購入した冒険者の方にとっては

価値の無いものだったのだ。

私は今まで何をやっていったのか。

…その場で魔道具の靴をハンカチで拭きながら、私は思う。

私は仮にも魔道具店の店主。

お客様には魔道具で喜んでもらうためにこれまで頑張ってきたのだ…

体でサービスしてお金を得ることは私が望んでいたことではない。

…履いている靴を脱ぎ、魔道具の靴に履き替えながら、私は思う。

サキユバス店でのサービスでも限界は感じていた。

あと二週間では到底借金を返すまで稼げない。

もっと主体的にお金を稼ぐことを考えなければならない。もっとしつかりと。

…私は履いている靴に目的地を告げる。

「魔道具さん、私を差し押さえられている私の魔道具店まで送ってくださいませんか。」

私の声に呼応して魔道具の靴は淡い光を放ち、自動で動き出す。

私の足が魔道具の導きに従い、一直線に魔道具店へと向かい…

…その直線上に存在した馬小屋の壁に、私は正面から激突したのだった。



計5回の正面衝突と2回の池ポチャの末、私は普段の5倍の時間をかけて魔道具店に到着した。

「ううう…何なのこの魔道具、ちつとも使えない…」

なんだかあまりに惨め過ぎて泣けてきた。

「まったく、そんなもの一度検品すれば欠陥であることが理解できそうなのだがな…」

と、魔道具店の屋根の上から声が聞こえてきた。

「バニルさん…」

「どうだ店主よ、サキュバス店で何か学ぶことはあったか」

月光を背後にバニルさんがニヤニヤと笑いながら私に尋ねる。

「そうですね、やっぱり私はあのようなサービスよりも魔道具でお客様に喜んでもらいたいということがわかりました。期限があと二週間なので、その間で返済できる方法をもっと自分なりに真剣に考えてみます。」

「ふむ…自分でやり遂げようとする姿勢は立派であるな」

バニルさんはそういって、馬小屋の屋根から降りて私のもとまで歩いてくる。

「主体性を持つことは良いことだが、ただ魔道具を売るというだけでは今までと何も変わらんぞ、ポンコツ店主よ」

「…そ、それは、商品を気に入って買ってもらえるようにお客様にしっかりした説明を…」

と、言いかけたのを聞いてバニルさんは、はあと大きなため息をつく。

「…汝の欠点は自分のイメージにとられすぎるところだな」

…イメージにとられすぎって…今日サキュバス店に来たクレアさんに言っただけよ。

「そして汝はいろいろところで寛容すぎる。寛容さというのは人間の基準では美德なのであろうが、寛容故に汝は他人の機微に疎い。」  
「うぐっ…」

正論を突かれて私はぐうの音ももらす。

「確かに、サキユバス店のサービスもあのチンピラの色仕掛け抱き合わせ商法も、魔道具販売とは全く異なるように思われるな。汝が体を提供するのが嫌だというのならそれはそれでよいだろう。しかし、どんな取引においても共通することがあるな。」

バニルさんは話を続ける。

「それは相手の需要があった上でのこちらの供給だ。これは全ての取引の基本中の基本だ。汝は順序が逆なのだ。汝がどれだけ供給したいと考えても、相手の需要がなければそこに取引は成立しない。サキユバス店ではそのあたりを理解して欲しかったのであるが…まあ、期限まで残り2週間、その辺りをよく考えて汝なりにあがいてみるといい」

「バニルさん…」

意外にも真つ当なアドバイスをくれたことに軽く感動してしまった私はバニルさんをじつと見つめる。

「ではな、店主よ。段ボールハウスに帰るときにはその魔道具の靴は履き替えた方がよいぞ」

バニルさんはそういつて魔道具店の反対側へと歩いて行った。

何だかんだいつて私のことを考えてくれているバニルさんには感謝だ。

明日、サキユバス店に行つてお仕事を辞めさせてもらつて、お金の稼ぎ方を本気で考えてみよう。

心機一転を感じた私は家に帰ろうとして……男性冒険者がこそこそと魔道具店の裏に歩いていく姿が見えた。

こんな深夜になんだらう？

「おお、きたかきたか」

男性冒険者が向かった先からはバニルさんの声も聞こえる。

私は気になって、冒険者が向かった魔道具店の裏をのぞいてみる。

そこでは男性冒険者とバニルさんが立ち話をしていて…

「バニルさん、例のものは…」

「ああ、もちろん用意しておるぞ。我輩は汝の需要を満たすものを供給する自信がある。まずは正面アップと首筋アップ。胸元アップ。それから屈んだ姿のバック、これは引きだな。それとふとももアップ…ふうむ、なかなかのフェチ具合であるな。全部でしめて5万エリスだ」

「くう、少し高いが、永久保存版だ。仕方ねえ…」

男性冒険者はバニルさんからハガキのようなものを受け取る。

私は気になってそつとそのハガキのようなものを盗み見ると…

「…ってこれ、私がいかがわしい恰好をしてサキユバス店で働いてる写真じゃないですかあああああああ！いつ撮ったんですかあああああああ！！」

「…うおっ!?!店主さん!?!」

「せっかかないい気分ですれそうだったのに!!バニルさんのバカあああああああ！」

「ふむ。リッチーの怒りの悪感情、美味ではないが珍味だな」

「バカあああああああああああああああ！！」

深夜のアクセルの街に私の声がこだました。

■ ■ ■  
残 債 務 : 2000万エリス

バ イ ト 代 : 6万エリス

魔 道 具 販 売 : 200万エリス

ウイズブロマイド販売 : 5万エリス

猶 予 : 2週間

## 第5話 わらしべリッツィー

アクセルの街からほど近い平原。

私は真剣な表情で正面を睨む。

一筋の汗が頬を伝った。

心臓は早鐘を打つ。

冒険者として格上の強敵と戦っていた時でさえこれほどの緊張を感じたことがあっただろうか。

いや、無いといいきることができない。

周りの大勢の冒険者たちも私と同じ方を向き一様に緊張した面持ちでいる。

私たちの目の前、平原の先には大地を覆いつくさんとする粉塵が巻き上がる。

決して、負けられない戦いが繰り広げられようとしていた。

私は汗の滲んだ手で一枚の紙券を握りしめている。

——時は満ち、拡声の魔道具でその場一带に声が響いた。

『リザードランナーレース第86回アクセルダービー、さてランナー達の姿が見えてまいりました!!』

リザードランナーレースの戦いの火蓋が切られる——

私は、単勝1番グラムマツルギー、オッズ10.4倍の馬券をくしゃくしゃにするほどに強く握り、幸運の女神エリス様に祈りを捧げる。

『さあ、ランナー達が見えてまいりました。先頭はグラムマツルギー、追って2番手は一馬身差ユリシンフォニア、更にエターナルボッチーが3番手だ!』

よし、出だしは順調。



しかし、まだ、だ。

たとい始めは先頭を走つていようとも、展開次第ではどうにでもなる。人生のように。

『…さあ第一コーナーを回った！ここで一機に駆け抜けたのはエターナルボッチーです！一機に先頭に躍り出ました！孤高の勇士エターナルボッチー2位のグラムマツルギーと一馬身差です！』

1位を譲ってしまったが、大丈夫。

今は体力を温存しておく場面だ。

焦って仕掛けてはロクなことにはならないのだ。人生のように。

『おおっと！現在3位のユリシンプオニアがこの直線で加速する！グラムマツルギーを抜いて2位に付けた！更にエターナルボッチーにぐんぐんと迫る！』

『第2コーナーを回ってユリシンプオニアがコース内側から迫る！！エターナルボッチー逃げきれるか！！激しい競り合となった！！ユリシンプオニア頭差でややリードか！！』

『最終コーナーを回ってトップはユリシンプオニア！！2位のエターナルボッチーとは半馬身差！！残り500メートル！！ここで3位グラムマツルギー加速した！！速い速い！！トップ集団との差をぐんぐん詰める！！』

「きたきたきたきた！！」

私は思わず叫ぶ。

残り400メートル！！

『グラムマツルギーがエターナルボッチーに並んで………抜きました！！エターナルボッチーを抜いてグラムマツルギー2位です！！そのまま先頭のユリシンプオニアに迫る！！』

残り300メートル！！

『さあグラムマツルギー、ユリシンプオニアとハナ差となった！！ユリシンプオニア逃げる！！これを追うグラムマツルギー！！グラムマツルギー並んだ！！二頭並んで残り100メートルのトップ争いです！！！！』

会場が熱狂に包まれて大きく湧き上がる。

『残り50メートル、グラムマツルギー1位に躍り出た!!! ユリッシンフオニアを抜きました!!! グラムマツルギー、一直線にゴールへと駆ける!!!』

「やっつたあああああああ

『ああああああつと!!! グラムマツルギー転倒!!! なんとグラムマツルギー転倒だ!!! ユリッシンフオニア、これに巻き込まれる!!! 前代未聞のアクシデントが起こってしまった!!! 大丈夫でしょうか?! 横を掛け抜けるのはパットメガミー! ゴールイン! 1位はパットメガミーです! アクセルダービー、春のリザードランナーレース、優勝はパットメガミーです!!』

.....

全財産をつぎ込んだ私は真つ白な灰になった。



「ま、まさか…ギャンブルで無一文に逆戻りとは…前回何かを掴んだような汝の態度は何だったのだ…」

「うううう…だつてだつて! 年に一度のG1レースで通常よりも倍率が高いってダストさんが…ダストさんがあああああ」

リザードランナーレースで盛大に全財産を溶かした私はバニルさんの宿泊する宿の一室でバニルさんに泣きついていた。

バニルさんは嫌そうに私を払いのけようとするが、このやり場のない気持ちを受け止めてほしくて私はバニルさんに必死にしがみついていた。

「どう解釈すれば、先日の我輩の助言からギャンブルで一攫千金を狙

うという答えが導かれるのだ!? 実は汝は債務超過なこの状況を楽しんでいのではないか!? 本当に魔道具店を取り戻す気はあるのだろうか!?」

「私だつてこの短期間で一気に借金を返す方法を真剣に考えたんですよ…考えたんです…考えたんですがああああ」

「それでギャンブル…完全に破産者の思考ではないか…はあ」

バニルさんが大きいため息をつく。流石に私に愛想を尽かしてしまつたのだろうか。バニルさんに見捨てられたら私は…私は…

と、捨てられるも何も、そもそも拾われているかすら怪しい私にバニルさんから問いかけがあつた。

「ときに、汝はわらしべ長者という話を聞いたことがあるか?」

「ぐすん…：…わらしべ長者…?」

「あの姑息さにかけて右に出るものがない小僧の国に伝わるおとぎ話のようだな。手元に藁しかない貧乏人が藁を元手に屋敷を手に入れたとされる話だ」

「藁から屋敷を、ですか…それはなんと…羨ましい錬金術ですね」

「錬金術では無いぞ。これは物々交換の結果である。アブを括り付けた藁、ハチミツ、反物、馬と次々に物々交換を繰り返していつて遂には屋敷を手に入れた、という話である」

そんな上手い話があるとは…

バニルさんは説明を続ける。

「売買は通貨を介して物をやりとりするが、もとを辿れば売買とは物々交換に由来するものだ。物々交換によって現れた物の『価値』を代替可能、保管可能、持ち運び可能なものとして顕在化させたものが通貨であつて…と、まあ小難しい話でもおバカな汝の脳がエクスプロージョンしてしまうであろうからそこはいいとして…」

「ひ、ひどい!!」

サラツと私をdisるバニルさん、これさえなければ尊敬できるのに…!

「まあ、人をdisるのは悪魔としての礼儀みたいなものだ。こればかりはなんともならんな」

そしてサラツと人の内心を見通す悪魔なバニルさんは説明を続ける。

「物々交換を成功させる秘訣は自分の持ち物が相手にとってどれだけの価値があるかを見抜くことだ。汝は物々交換を通して相手の価値観というものを見通す能力を養うのだ。然れば、店主として返り咲いたときに少しはマシな商売感覚が身に着くであろう」

「な、なるほど……」

見通す悪魔の助言に私は首肯する。悔しいが、私も自分の商才はほんのちよつとだけ優れていないところがあることを自覚している。その点、バニルさんの商才は抜群で、その助言も的確な気がする。

「汝は弁済期日までの2週間、物々交換で2000万エリス相当の取引を成功させるのだ」

「う…なんだか途方もない達成目標な気がします」

商才がほんのちよつとだけアレな私にとっても、その困難さは十分に理解できる。

「できなければ、路頭に迷うのみだ」

「…わ、わかりました。では、まずはこの世で最も深いダンジョンに保管している魔道具を持ってきて…」

私はどの魔道具を持ってこようか考えるが、すぐにバニルさんの発言で思考が中断される。

「いや、汝の保管している魔道具を欲しがらる輩は残念ながらこの世に存在しないので…」

「ひ、ひどい!!」

「この世に存在しないので、我輩からこれをやろう」

2回も同じことを言いながらバニルさんは少し変わった形の石を私に放り投げてよこした。

私はその石を手に取りしげしげと見つめる。形が少し変なこの石は特に魔力も感じない。

「…なにか特別な石なんですか?」

「いや、それはさつき我輩が適当に拾った石である」

「て、適当に拾った…」

「ほれほれ行ってこい。心配せずとも、必ずそれを欲する輩が現れると、見通す悪魔が宣言しよう」

自信満々に宣言するバニルさんを、私は胡散臭いものを見る目で見ざるを得なかった。



「えー…変わった形の石ですよー…珍しい石が欲しい人はいませんかー…」

仕方なく私は差押えられている魔道具店の前で石を売り込むが、当然といえば当然、通りすぎる人は奇妙なものを見る目線を私に向けるだけで石には誰も興味を示さない。

そんな状況が3日も続けば、仮面の悪魔の役立たず!と叫びたくもなってきた、商才抜群との評価を撤回したくもなってくる。

だいたいこんな何の変哲もない変な形の石ころを欲しがる人なんて「あああああああ!ちよつと!なにその石!ええつ!?!な、何これ、すごい!え!?!ヤバイヤバいんですけどー!欲しいんですけどー!」

…——いた。

「あ、アクア様、いいところに行らっしゃいました」

「ウイズ、女神の目にかなう石を見つけってくるなんてやるじゃない!これはSSRRだわ!」

「え…SSRR?」

聞きなれない単語に戸惑っているとアクア様は話題をうつす。

「それにしても、お店に遊びに行こうとしたらお店に入れなくなつて凄く心配したんだから!大丈夫なの?ちゃんと食べてる?」

「ご心配をおかけしてすみません…まあリッチーは食べれなくても死なないので…ここ最近はサキュバスさんのお店で働いていたのでアクア様に顔をお出しする機会もありませんでしたよね」

「なつ!あんな悪魔臭いお店で働いてたですつて!?!そんなところで働いていたら腐乱臭に悪魔臭が混じつてハエも寄つてこなくなるわよ!」

「え…私、腐乱臭します…!?!」

アンデッドな私だがお店の店主として清涼感には最大限に気を遣っているつもりだ。

というか、腐乱臭って――

シヨックで顔を青くして自分のにおいを嗅いで確認する。

腐乱臭…してたら死にたい…もう死んでますけど…

「あ、ごめんねウイズ！大丈夫！女神な私の嗅覚は普通の人間の数倍はアンデッドとかに敏感なの。普通の人間の嗅覚では腐乱臭なんて嗅ぎ分けられないから大丈夫よ多分」

「た、多分…??」

私はわなわな震えながら、この件が片付いたら高価な香水を買ってやると心に誓う。

「ウイズ、それで、その石なんだけれども…」

「香水香水香水…」

「うい、ウイズ…?」

「こうす…え？あ、ああ！石ですね！えーつと…」

シヨックで一瞬自我を失っていた私は我に返って、現状を思い出す。

「えーつと…アクア様、石をお譲りするのは構いませんが、差し支えなければ何かと交換という形でいかがでしょうか」

本来であれば、対価など要求しないところだが、そうも言っていないので勇気を振り絞って私はアクア様に提案する。

「交換ねえ…仕方ないわ…これだけは出したくなかったのだけれども、私の宴会芸の中でも禁止手ともされているーつ、神の『見えざる手』を披露してあげるわ！それで手をうって頂戴」

「え、宴会芸…」

確かにアクア様の宴会芸はお金をとれるレベルだけれども、流石にそれでは物々交換としてゲームオーバーだ。

「アクア様、卑しくて申し訳ないのですが、何か形のあるものを交換していただけないでしょうか…」

「形のあるものねえ…」

そういつてアクア様は懐をぐそぐそして布辺を取り出す。

「これなんてどうかしら？」

「えーっと…なんですかこれは？」

「パンツよ」

「パンツ!!!」

まさか対価に下着が提示されるなんて予想していなかった私は思わず叫んでしまう。

アクア様が痴女だったとは！

「ちよつとウイズ、何だか女神な私に無礼なことを思つてそんな気がするのだけれども、これは別に私の脱ぎたてパンツとかじゃないわよ」

「は、はあ…」

「これはね、ダクネスのなの」

「……」

「違うの違うの！流石に私も他人のパンツを差し出すような鬼畜じゃないわ！これには理由があるのよ！」

と、慌てたアクア様は弁明する。

「ダクネスが部屋でこのパンツを試着してたときに私が偶然部屋に入っちゃつてね。その下着を可愛いわね、つて褒めたら、ダクネスが顔を真っ赤にして、いらないつてゴミにだそうとしてね。勿体なくて私がもらつてきたのよ。宴会芸に使えるかと思つてね」

宴会芸で使われるパンツ…ダクネスさんもかわいそうに…

「ウイズにあげるわ！あ、汚くは無いけれども、ダクネスが一度だけ試着したものだから洗つてから使つたほうがいいわよ」

「は、はあ…」

まあ、何でもない石よりはパンツの方が需要があるだろう。

「それじゃあ取引成立ね！ありがとウイズ！」

そして私は石ころをアクア様に渡してパンツを手に入れた。広げてみると可愛い熊さんの刺繍が入っていた。

ダクネスさん、可愛いのが好きなんですわね…

ちなみにその後おまけで宴会芸の『見えざる手』も披露してもらったが、本当に見えなくて…なんかすごかった。



熊さんパンツを手に入れたものの、これは誰が必要とするのだろうか。

デザインは子供向けだけれどもサイズは大人用という何だかモラトリアムで背徳的な感じがするそれを、みよーんと伸ばしながら考える。

「…まあ、石ころよりは需要ありますよね」

私がそう呟くと、そんな私に向けて男性の声が掛かった。

「て、店主さん、道の真ん中でパンツを広げながら何をなさっているのですか」

私は声の主を目をやると、この街でも有名な凄腕冒険者で魔剣を掲げた男性の姿があった。

「あ、あなたは確か、マ、マー…」

「ちよつと待ってください！僕の名前の頭文字を言おうとしているのであれば、いきなり違ってます！頭文字は『ミ』です！」

「ああ、失礼しましたミツヒコさん」

「店主さん、僕を、体は子供頭脳は大人な名探偵の取り巻きのひとりのおませなそばかす少年みたいに呼ばないでください。僕の名前はミツルギです。」

「そうでしたそうでした。ミツルギ…メイヤさんですね」

「店主さん、僕を、国連太平洋方面第11軍横浜基地衛士訓練学校第207衛士訓練部隊B分隊所属の訓練兵 兼 御剣財閥の次期当主みたいに呼ばないでください。僕の名前はミツルギキョウヤです。と  
いうか、随分マニアックなところを攻めますね…」

「失礼、噛みました…」

「噛んだんじゃない、わざとだ」



「噛みまみた」

「わざとじゃない!？」

こほん、とミツルギさんは気を取り直して言葉を続ける。

「……ところで店主さん、お店が差押えられたというお話をお聞きしたのですが、借金を返すあてはあるのですか？なんなら僕と一緒に高額の達成報酬のあるクエストに行きませんか」

「ミツルギさん、お誘いいただきありがとうございます。ですが、私も返すあてというか、今頑張っている最中で……もう少し粘ってみようと思います」

ミツルギさんのお誘いは嬉しいのだけれども、私としては何とかバニルさんの課題を達成したかったので、やんわりとお断りする。

そして手元のパンツのことを思い出して。

「そうだ、ミツルギさん、この下着はいりませんか？熊さんの刺繍が可愛くないですか？きつとお似合いですよ！」

「い、いえ、流石に女性もののパンツをはく趣味は無くて……すみません……」

「ですよね……いえいえ大丈夫です……折角アクア様から頂いたパンツなので、どなたかちゃんとした履き手を見つけてあげたいのですが……」

「今、なんて？」

その瞬間、ミツルギさんの態度が急変した。いったいどうしたのだろう。

「え……ちゃんとした履き手を見つけてあげたい……と」

「その前に、なんて言いました？」

「えーっと……頂き物のパンツと……」

「誰からですか？」

「あ、アクア様から……」

それを聞いたミツルギさんが驚愕の表情を浮かべて硬直する。

「ミツルギさん……？えっと……とりあえず試着済みのパンツですので、一度洗ってから欲しい人を探してみま……」

「ください」

「……え……ええ、ええ!？」

「ください」

「でもさつき女性もののパンツをはく趣味は無いって…」

「無いです。ください」

「あ、ありがとうございます…では洗ってから…」

「僕が洗いますので。ください」

「は、はあ…」

態度を一変させてパンツに執着するミツルギさん…確かミツルギさんのパーティには二人女の子がいたはずだ。多分その子達にあげるのだろう。多分。

「では…ミツルギさん、差し支えなければ何かと交換いただきたいのですが…」

「ああ…そうですね！えーっと、お店を買い戻すためにできるだけ高価なものがいいですよ…ではフレアタイトか高純度マナタイトか、どちらかではいかがですか？いずれも100万エリスは下らないアイテムですよ」

そういつてミツルギさんは両手に一つずつ鉱石を取り出す。

私はそれをじーっと見つめて考える。

フレアタイトは希少であり高価であるけれども使う場面が限られている。それに対してマナタイトは冒険者に必要とされる場面が多い。ダンジョンに潜ってMP切れになるということはよくあることでマナタイトは重宝されているのだ。

感覚としてはフレアタイトが欲しい私だったが、論理的に考えてマナタイトの方が交換先としてより多くの人が想定されると判断する。私も成長したものだ。

「…えーっと、ではマナタイトを頂いてもよろしいですか？」

「わかりました。ではこちらをどうぞ」

そういつてミツルギさんは右手のマナタイトを私の手に収めてくれた。

その代わりにお渡ししたダクネスさんの試着済みパンツを、ミツルギさんは大事そうに懐に入れてその場を去っていった。



「だ…駄目だ…」

需要が尽きないだろうと思われて入手した高純度マナタイト。確かに需要は多かった。

しかし駆け出しの街の冒険者の方たちには一度きりの使い切りアイテムにそこまで高価な品を交換品として提示できない。

この3日間、マナタイトの交換にに応じてくれる冒険者の方は複数いらっしゃるのだが取引は成立していない。

もういつそ価値としては落ちても交換に応じた方がいいのだろうかと考え始めた頃…

「…あら？」

何となく差押えられた魔道具店の前まで足を運んだ私が目にしたのは店の前に立つ魔法使い風の金髪の女性の姿だった。

あの方は確かこの国の王女様の側近の一人ではなかっただろうか。

確か名前は…

「えーっと、もしかして、レイン様ですか？魔道具店に何か御用でしたか？」

「え…？私はレインですが…あ、こちらのお店の店員さんでしょうか？すみません、差押との板版が張り付けられているのですが、営業していませんでした…はあ…」

レイン様は目下にはクマができ、ひどく疲れた様子でため息を吐く。

貴族でありながら地味目な印象が相まって、ひどく幸薄そうに見える。何だか他人事とは思えない。

「レイン様…何か魔道具をご所望だったのですか？」

「いえ…魔道具といいますが、鉱石なんですけどね…少し前に希少な鉱石が眠る甲羅を背負う玄武が出たという話を聞いてここアクセルの街に来たのですが…目的の鉱石が見つからずに途方に暮れていたところでした。それで、もしかしたら魔道具店に売ってないかと思った

のですが…」

「ご、ごめんなさい…」

疲れ気味の声を聞くとなんとなく申し訳ない気持ちになって謝つてしまう。

「レイン様、 鉱石というのは…もしかしてマナタイトですか？」

私は少し期待しながら問うが。

「いえ…マナタイトではありません」

レイン様は申し訳なさそうな顔をしつつ事情を話し出す。

「私の家で経営している領土では武器防具の売買が主産業となつていくのです。ですが、武器防具を製作する鍛冶屋で用いられているある鉱石が最近市場に不足しているようで…大手の鍛冶屋が現在抱えているその鉱石の力が切れてしまうと武器防具の販売なども滞ってしまうのです」

…ある鉱石？

私の中で嫌な予感が芽生えた。

「…それで、少し前にアクセルの街で大量の鉱石を甲羅に背負った玄武が現れたとの情報を頼りに私自身足を運んだのですが…今回の玄武からのその鉱石の採掘量はとても少なかったようで、その鉱石を取引できる方がいなくて途方に暮れてしまつて…継る思いで魔道具店に足を運んだのですが…」

私は何となく先の展開が読め、震える声で問いかける。

「ち、ちなみにその鉱石というのは…」

まさか…

「…………フレアタイトです…」

…………

マツルギさんから提示された選択肢に対しての自分の選択を呪う。

いや自分の運のステータスを呪うべきだろうか。エリス様はアンデッドに慈悲は無いのだろうか。

「れ、レイン様…ち、ちなみにフレアタイトがあったならば何と交換して頂けるのでしょうか…」

私が青ざめた顔をしながら問うと、レイン様が応える。

「交換…ですか？えーつと…大手鍛冶屋が回らないと私の領土も赤字で大変なことになってしまいます…つきましては何としてもフレアタイト鉱石が必要で…交換といいますが、2000万エリスまでなら現金でお出しする所存です」

それを聞いた瞬間、私はレイン様の下から駆け出した。

扉を破壊する勢いで冒険者ギルドに駆け込み、

冒険者たちが泊まる宿に駆け込み、

全力疾走でアクセルの街を一周し、

アクセルの街で一番高い物見やぐらのでっぺんに登って叫ぶ。

「マツルギさあああああん!!!」

!!!

さあああああん……………

あああん……………

……………

その声は空しくやまびことなって木霊した。

…その後、結局マツルギさんの行方は知れず、アクセルの街中でフレアタイトを所持してそうな鍛冶屋や冒険者の方のもとを訪れたが軒並み全滅だった。

私は残りの一週間で、玄武の甲羅からフレアタイトを発掘した少数の冒険者の情報を総当たりすること…。



【レックス視点】

「う、嘘だろ…」

王都から離れた廃墟に巢食ったゴブリンロードの討伐依頼。

それが王都のギルドで俺達が引き受けたクエストだった。

ホブゴブリンやゴブリンチャンピオンなど上位種にも後れをとらなくなった俺達。パーティーはゴブリンロードの適正レベルに達し、その討伐を自信をもって受けたのだが…

俺の傍らには戦闘不能となったソフィとテリーが多量の流血の中で沈んでいる。

俺自身も片足に大きな傷を付けられて逃げることも困難な状況だ。

俺は目の前に無数に湧いているゴブリンロードを取り巻くゴブリンの群れを睨む。

ゴブリン達は風前の灯の状況である俺らに向かってゲタゲタと下品な笑みを浮かべている。

…死

その言葉が脳裏をよぎる。

王都から離れたこんな廃墟に蘇生魔法が使えるアークプリーストは来てくれるだろうか。

ここで死んだら生き返れる可能性も皆無だ。

ああ、こんなところでモンスターに囲まれて終わるのか。

本気で全滅の危険を感じたのはアクセルの街の付近でホーストとかいう悪魔と戦ったとき以来だ。

そういえばアクセルの街で出会ったあの紅魔族の少女、めぐみん、と言っただろうか。

彼女の勧誘に成功していれば爆裂魔法でこの状況に起死回生の一手が打てたかもしれない。

噂では、めぐみんは最近王都でもよく耳にするカズマという冒険者とパーティーを組んでいるという。

それまで王族による進軍によっても打ち取ることができなかった魔王軍幹部を次々に討伐しているとのことだ。そして、あのカツルギとかいう魔剣持ちと同等に王都でも魔王討伐への期待が日に日に大きくなっている。

「全く…爆裂魔法も馬鹿にできないな…」

俺は、絶望的な状況下、らしくもない感傷に浸ってポロリと言葉を漏らした。

それでも終わりは着々と近づいてきて…

ゴブリンロードがゴブリン達に突撃を指示する一声を発する。

「グゲゲゲ！ギエエえええエエエエ！」

ロードの声にゴブリン達は、各々武器を構える。

俺はその声を聞いて死の予兆に冷や汗が噴き出し震えが止まらなくなる。

が…

「うおおおおおおおおお！！」

俺は恐怖を振り切るように、ゴブリン達の気概に負けないように腹の底から声を振り絞り武器を構える。

恐怖に負けてなるものか！！

「うおおおおおおおおお！！」

『『エクスプロージョン』ツツツツ！！』

途端、目の前に廃墟を飲み込まんとする巨大な魔法陣が輝き、ゴブリンロードを中心に閃光が飛来した。

その瞬間、俺の目が映したのは真っ赤に染まる景色、俺の鼓膜を破れんばかりに震わせたのは目の前から迫ってきた爆音。

それは爆焰という名の蹂躪だった。

圧倒的な破壊の顕現、爆裂魔法が目の前に降り注いだのだ。

ゴブリン達は一瞬にして全滅する。

「す、すげえ…」

芸術的にすら感じるその暴力を目の前に俺は呆然とすることしかできない。

と、粉塵が舞い上がる中からユラユラ揺れる人影が現れる。

「…誰だ…？…めぐみんなのか…？」

そう問いかけたが、人影から返答は無い。

その時、俺はその存在が必ずしも味方とは限らないと改めて警戒をして武器を構えなおす。

「めぐみん…にしてはグラマラス過ぎるな…お前は一体…」

粉塵が晴れていき、その人物の姿態がだんだんと明らかとなる。

と、その姿が明らかとなった時、俺はゴブリン達に睨まれた時以上の恐怖で体の芯が凍り付く感覚を味わった。

爆裂魔法をも行使する魔術使い手。厚手のローブ。青白い顔色。噂にしか聞いたことが無かったその姿態は…

「そ、そんな…リッチー…だと…」

バカな、最悪だ！なんでこんなところにアンデットの王が…!!!

物理攻撃が無効で魔法の耐性もあり、様々な状態異常を引き起こす不死王の手という凶悪な能力に爆裂魔法まで使えるという魔術の極地に立つ命の冒険者。リッチー。

リッチーは俺を見据えて口角をニチャリと不気味に釣り上げる。

「…見つけたアア」

その一言で俺に死の感覚が舞い戻り、カタカタと奥歯が震えだす。

なけなしの勇気を奮い立たせる気も起きないほどに恐怖と絶望が俺の体を支配する。

ただただ唾然とするしかない俺の目の前には気が付くとリッチーが接近しており、そのヒヤリと冷たい両腕で俺は両肩を掴まれる。

そうか、ドレインタッチで俺のなけなしの生命力を吸う気なんだな

…



…ああ、終わる。  
俺は死を覚悟した。

「フレアタイト鉱石を、譲ってくださいあああああああ!!」

……

……………

……………

「……………は?」

俺は目の前のリッチーが泣きながら話す事の経緯をただただ呆然と聞いていた。

「うう…それで、必要だったのがまさかのフレアタイト鉱石で…玄武から鉱石を発掘した冒険者の方々をこの数日間探し回ったのですが、誰も持っていないくて…ぐすん…昼夜眠らずに森を駆け抜けて、峠を越え、ダンジョンを踏破して、魔王城にも行ったのですが…フレアタイトが…フレアタイトが…見つからず…ふえええええ…」

魔王城にも行ったって…この涙目リッチーは何者だろう…いや、怖すぎるから聞かないけれども。

「あ、あの…フレアタイト…なら持ってますよ」

「フレアタイト…持って…る…うわああああああん!」

「なっ!?ど、どうしたんですか!?なんで泣くんですか!」

「ふわあああ…だって、期日まで残り二日で…もうだめだって思って…それでも頑張って探し回って、探し回って、やっと…やっと…ふわあああ!!」

俺は突然目の前で泣き出すリッチーにどう接するべきか本気で困る。

「ぐす…ああ、失礼しました…では私が持っているこのマナタイトとあなたのフレアタイトと交換してもらえませんか…」

「こ、交換ですか…？」

フレアタイトなんて救ってもらった命に比べれば何てことは無い。命を助けてもらいながら恐れ多いにも程がある！俺はフレアタイトを当然に無償で渡そうとして。

「リッチー…さん…マナタイトと交換とかそんな…」

「ええ!? マナタイトでは不足でしたか…!? そうですよ…フレアタイトは2000万エリスもの価値がありますもんね…でもどうしましょう…私の持っているものを追加でお譲りするといつてもマナタイト以外だと、線香花火くらいしか…そ、それとも私のパンツを…」  
「いいいいいいいいいい!! そんなそんな!! 結構です! 結構ですから!!」

俺は道具入れから素早くフレアタイトを取り出してリッチーに差し出す。

「フレアタイトはあげますから! マナタイトもいりませんから!」

リッチーはフレアタイトを両手に差し出す俺をしばし呆然と眺めて

「いえ! 私はわらしべ長者です! 交換に応じてもらわないと困ります!」

今度は頬を膨らませてぶんぷんと怒り出した。随分と感情表現が豊かなリッチーだ。

「…わ、わかりました。何だか申し訳ないのですがフレアタイトとマナタイトを交換しましょう…いいんですか?」

「やったあ! ありがとうございます! これでやつと…やつと…ふええええええん」

感極まって泣き出すリッチー。きつと疲れすぎて情緒不安定になっっているのだろう。

と、そのリッチーは何か気づいたように途端に泣き止んだ。



まあ、無害そうな人だったから大丈夫だろうけど。それにしても2000万エリスの借金とは…

「あ」  
そういえば、ゴ布林ロードの討伐報酬は2000万エリスだった。

あのゴ布林どもを一掃したのはあの人だから当然報酬はあの人が得るべきだろうが…

「名前も名乗らず行っちゃった…」

まあ、リッチーだから報酬も受け取れないか。

とりあえず俺はそう思うことで納得し、仲間を担ぎ上げて教会に向かうのだった。



【ウイズ視点】

「店主さん、こちらがお約束の2000万エリスです！とても助かりました！ありがとうございます！」

私はレイン様から手渡された2000万エリス分の金貨が入った袋を胸に抱きアクセルの街中を段ボールハウスへと向かっていた。

今日は既に夜のとばりが下り、街の家々からは灯りが漏れ飲食店からはクエストが終わった冒険者たちの酒盛りで賑わう声が漏れている。

流石にお金を返す先の金融業者も営業終了しているだろうから、このお金を返すのは明日だ。

ずっしりとした2000万エリス分の袋の重み。

私自身が石ころから物々交換を経て手に入れたお金だ。

バニルさんはこれを見たらどんな顔をするだろう。

「うふ」

これでまた魔道具店の店主としてバニルさんと一緒にお店経営が

できる。

この機会に魔道具の陳列棚の模様替えをしようか。  
アクア様はまた来てくれるだろうか。新しい紅茶を仕入れなければなあ。

そうだお世話になったサキュバスさん達が喜びそうな魔道具も取り寄せよう。

さっそくひよいざぶろーさんのところにいかないとな。

「ふふふ」

そんなお店経営の未来図を描くことが、

楽しくて、

嬉しくて、

わくわくして、

「ふふふん」

鼻歌混じりに夜道を歩く私。その視界に、

「ふふー♪…あらっ？」

とある建物を深刻な顔をして見上げる商人風の男が映ったのだった。

## 最終話 この素晴らしい魔道具店より愛をこめて！

借金を返済するに足りるお金2000万エリスが入った袋を胸に抱えて鼻歌を歌いながら上機嫌で夜道を歩む私が目にしたのは、とある建物を深刻な顔をして見上げる商人風の男性だった。

その男性は周りの状況を気にする余裕もないようで私のことに全く気が付かない。

ただただ目の前の建物を見上げている。

それは何だか魔道具店の差押えを受けた私の姿と重なって、とても他人事だとは思えずに私は…

…頑張って他人事と思い込むように努めた。

…だって、ここで情けを掛けるのはどう考えても厄介毎に巻き込まれる流れだ。そうはいくものか。どこの誰かは存じ上げませんが、エリス様の祝福があることを祈っています！強く生きてください！

心の中でそう呟き、私は2000万エリス金貨がはいった袋をぐつと抱えてその場を後にする。

男性は私が傍を通りすぎたことも全く気が付かない。

………

…えーつと、そうそう、魔道具店の将来設計を妄想していたんだっ  
た。

そうだそうだ、この機会に折角だから王都辺りに支店を出して、  
ゼーレシルト伯爵に支店長をお願いして…

そうなるともう少し融資を受ける必要があるから…

あるから…

………

………チラリ

私は後ろを振り返る。

先ほどの男性が小指くらいのサイズに見える距離まで来たが、男性

は最初に目についた時と全く変わらない体勢でその場に立ち尽くしている。

……

…だめ！駄目よ！ウイズ！

お人好しがたたって痛い目にあったことだって数えきれないんだから！

きつと、あの男性は別に困り事があって途方に暮れているとかそんなことは…

そんなことは…

……

……

「あのく…先ほどからずっとそちらで立ち尽くしてなにかあったのですか…？」

良心の呵責に耐え切れずに私の足は、男性の下まで動いていた。

ああもう、私のばか！

こんなところが商人向きでないのかもしれない。

商人向きなバニルさんの悪魔な性格がこんな時に羨ましく思う。

私が声をかけたにもかかわらず、男性は自分が声をかけられていると気が付かなかったようで、私の方をチラリと見て数秒固まっていた。

「……え？あ、あんたは…？」

自分に声を掛けられたと気づき、男性は私の声に反応する。

「夜分遅くにこんばんわ。私はウイズと申します。何かお困りですか？」

「あ、ああ…心配をかけてしまったんだな…って、あんた後ろ手に何を隠しているんだ…」

「お構いなく」

私は2000万エリスが入った袋を男性の視界に入れられないように後ろ手で守るように持つ。

男性は訝し気な表情をしつつも話を続ける。

「ま、まあいいか…いや、今見ていたこの建物は俺が住んでいた屋敷で、明日競売で売られる予定だったんでな…」

…うわー、どこかで聞いたことのある話だ。

「この屋敷は妻と暮らした屋敷で、たくさんの思い出が詰まった屋敷だったんだが…昨年、妻が亡くなってから商売の方も不運が続いて…王都でも頑張ったんだが結局大量の借金を抱えることになってな…しまいにはエリス教会の悪い司祭にも騙されて、遂に屋敷も差押えられてしまつて…」

…エリス様！頑張つて！もつと頑張つて！

「結局、借金の2000万エリスが返済できなくて…情けない限りだ」  
「に、2000万エリス…」

ばつちり2000万エリス金貨の入った袋を抱える私の両手が震えだす。

これはダメ！これだけは駄目なんだから！

「この屋敷で一緒に過ごした妻は幼馴染で…俺が仕事に打ち込んでいるときもずっと俺を献身的に支えてくれてたんだ…」

いいから！そんなちよつといい話とか、今はいいから！

「生憎俺達に子供はできなかつたんだが、それでも俺は幸せだったよ。妻が亡くなってから、この屋敷を見るたびに妻との思い出が頭に浮かんできて…」

あああ、やめて！それ以上はよくない！よくないです！

私は震える手で2000万エリスの入った金貨袋を守るように抱え直す。

これは私の魔道具店のためのお金！

魔道具店のためのお金だから！

魔道具店のためのお金だから…

「大事な屋敷だったから何とか借金を返済しようと頑張つたんだがな…フレアタイトを2000万エリスで買い取ってくれるって貴族様がいることを聞いて必死でフレアタイトも探したんだが…結局だめだった…」

魔道具店のためのお金だから…



だから…

……

「うー…うー…」

「…それで、柄でもないが、この屋敷にお別れをしに…な、なあ、あんた、さつきから苦しそうに何を唸ってるんだ…?」

私は葛藤に葛藤を重ねて…!!

「うううう…!!!」

「え?これは…?」

私は唸りながら、エリス金貨のつまった袋を振るえる両手で突き出す。

半面、心の中ではもう一人の私が、ちよちよちよ、何やってるのよ?!馬鹿なの!?!と激しく私を叱咤する。

「こ、これを…!!!」

「なんだよ、その袋がどうかしたのか…」

そういつて男性は私が手にする袋に触れて気づく。

「なっ!!これ、金が入った袋か…?」

「…に、2000万エリスはいつています…わ、私の気が変わらないうちに早く持つて行ってください…」

ああああああ、何言っているの私は!このお金がなければ私の魔道具店が…!!!

私は歯を食いしぼる。

「は、早く…!」

「いやいや!そんな受け取れるわけないじゃないか!!」

男性は強く否定するが…

「つべこべ言わず受け取りなさい!!!ああああああ!!もおおおとおおおお!!」

もうどうにでもなれというヤケクソな気持ちで私はエリス金貨の収まる袋を男性に投げつけた。

「いつつてえ!!」

男性にぶつかかった袋の口からジャラジャラと金貨が散乱した。

「…つて、おい!あんた!まで!待つてくれ!!」

男性の声を背後に私はその場を駆け出した。



アクセルの街でも最も宿泊料金が低い貴族御用達の高級ホテルの一室。

「ふわあああああああ、わだじがー、わだじが超頑張ってやっと手に入れたお金だったのにー」

「えええええい！突然部屋に押し掛けてきたと思ったら、しがみついて泣きわめきおつて！鬱陶しいわ！近所迷惑だわ！」

私は男性の下を去ったその足でバニルさんが泊まっているホテルまで行き、その勢いでバニルさんを押し倒していた。

そして私を引きはがそうとするバニルさんに抵抗して、しがみついて泣き続けていた。

バニルさんはハアと溜息を漏らす。

「だいたい見ず知らずの他人の借金の肩代わりなど、もう商人として致命的なまでの善性よ。いっそ出家してプリーストのリッチーという新たなジャンルを開拓してみるのがよかろう」

「だって！だって！あんな話を聞かされたら…わああああああああああ」

「くっ…なんとということだ！このリッチー、話数を追うごとに女神レベルに知能が低下しているではないか」

いつの間にかバニルさんは引き剥がすのを諦めて私しがみつくままになっていた。

私はそのままバニルさんの胸を涙で濡らし続けた。

……

「うう…ひっく」

「少しは落ち着いたか」

「は、はい…ぐずっ…バニルさん、ありがとうございます」

私はゆるゆるとバニルさんから離れる。

バニルさんはキュツと服の胸元を直す。

「汝はとことん商人には向いていないようだなATM店主よ。感情的になりすぎだ。悲しみの悪感情は我輩の好みではないのだがな」

「うう…(づ)めんなさい…」

「汝も知つての通り、我輩の好みはがっかり感や怒りの悪感情だ」

「知つてますよ…私がどれだけ食べられたことか…」

「ただ、がっかり感には、希望や嬉しきといったプラスの感情が必須でな」

バニルさんはフウと息をはく。

「…だから我輩としては、いつも傍にいる汝には笑顔でいて欲しいと思うのだが」

え…??

私に笑顔で…??

私は一瞬目の前の悪魔が何を言っているのか理解できなかった。

「バニルさん…」

それを理解した私は少し顔が熱くなり…

「あ、寝るときは段ボールハウスで寝るように。このホテルは一人増えると追加料金がとられるのでな」

「……………」

「…ふむ。たまにはリッチーの悪感情も悪くはないな」

…この悪魔!!



返済期日当日。

結局私は当日まで金融業者の方にお金を渡すことが出来なかった。すなわち、私の魔道具店はもうすぐ私のものではなくなる。

私とバニルさんは魔道具店の前に佇んでいた。

「もうそろそろ競売が始まるな。落札者が決まればもはやこの店は落

札者のもの。仮に金を用意できても買い戻すことは容易でないぞ」  
バニルさんが柄にもなく真面目な口調で声を発した。

「…ええ。仕方ないです」  
私は俯きながら応える。

「それでも私は魔道具販売を辞めるつもりはありません。あいにく私は寿命を気にする必要は無いので、お店はいつか買い戻しますよ」

私はバニルさんに顔を向けて笑い顔を作る。  
うまく笑えているだろうか。

「…いや、我輩としてはそんな悠長なことを言わずにさっさと買い戻して金を作ってダンジョン製作に取りかかって欲しいのだが」  
「……」

人がアンニユイな気分浸ってるのに…バニルさんのほか。

「…しかし、我輩もなかなか魔道具店での生活は気に入っていたのだ。寂しくなるな」

「バニルさん…」

私はバニルさんがそんな発言をしたことに驚く。

悪魔であつても寂しくなることがあるんだなあ。

…それからバニルさんも私も無言になる。

私は魔道具店に改めて目をむける。

思い返せばこのお店でいろいろなことがあつたものだ。

魔道具店に歩み寄り、そつと壁に手をつく。

掌を通して魔道具店での出会いや別れ、再会の思い出が私の心の中に流れ込んでくる…

魔道具店で多くの冒険者の方に対して商品を案内する毎日。

魔道具店でアクア様に紅茶をお出しして聞かされる与太話。

魔道具店の棚の陳列の最中、私の背では届かない高い棚にある魔道具をスツと代わりにとつてくれるバニルさんの姿。

思い出すのは、人間の冒険者だった時よりも多くの人と話すことになつた毎日、取るに足りない日常ばかり。

「いつかまた…この場所で…皆さんと一緒に…」

私は呟いたその声と同時に

「ウイズさん!!!」

私の背後から男性の大声が聞こえた。

私はその大声に一瞬びくりとなり、背後を振り返る。

そこには、バニルさんの隣にハアハアと肩で息をつく見覚えのある男性の姿があった。

そう、その男性は私がエリス金貨の袋を投げつけた商人風の男性だった。

「はあ、はあ…や、やつと見つけた…：ウイズさんがこの魔道具店の店主だって知らなかったから、情報を得るのに手間取っちゃった…」  
「ど、どうされたのですか…」

私が男性に声をかけたところ、男性は私の前にじやらじやらと音のなる中身をつまんだ袋をドンと置く。

「…2000万エリスある。借りた分は返させてもらうぜ」

「2000万エリス…って…ええええええ!!わ、私がお渡しした分で借金を返済しなかったのですか!?!」

「…いや、あの金で俺の借金は返させてもらったんだよ」

「じゃ、じゃあどうして…?」

私が男性に問いかけると男性は少し言いづらそうに話し出す。

「ああ…妻と過ごしたあの屋敷だが…結局、売ったんだ」

「うう、売った…!?な、なんで…大切な屋敷じゃ…」

私はわなわなと男性に問いかけるが、男性はすつきりとした顔で私に語る。

「ああ。ウイズさんからもらったお金で借金を返済した後、妻の言葉を思い出してな…『商人ならば施しをうけてはいけない。商人ならば自力で稼いだ金でなんとかしてみせろ』俺が駆け出しの商人だった頃に妻から言われた言葉だ。妻は大商人の家の末娘で、商人の在り方に

ついて一家言あつたんだらうな」

男性は照れ臭そうに続ける。

「どん底であつても商人ならば乞食の精神なんて絶対にもっちゃいけねえんだ。今後も商人として続けていくなら屋敷に依存してちやいけねえ」

「ほう」

男性の隣のバニルさんが何やら関心したような声を出す。

「それに、妻との思い出はここにある」

そういつて男性は自分の胸を強めにたたく。

「と、言うことだ。俺は改めてゼロから成り上がってやるさ。でなきや大商人の末娘の妻の墓標にも顔向けできねえ。ウイズさんもしろいろ理由あつて魔道具店が差押えられたんだらうが、お互いまだまだこれからだぜ」

男性はそういつて私の肩に手を置いて笑う。

「さあ、こうしちゃいらねえ。俺は王都で取引の種になりそうなネタがあるんだ。なんでも王都では毒入り聖水事件で聖水に対する不信感が広まつてるそうじゃねえか。その信用回復に一役買えないかつてな。じゃあなウイズさん、また顔をだすぜ。エリス様の祝福があらんことを」

茫然する私の前で男性は話すだけ話して颯爽とその場を去つていった。

残されたのは2000万エリスの入った袋のみ。

「ふむ。一人で勝手にしゃべつて行つてしまったな。にわか雨のような男よ。しかし、即物的な縛りから脱したあの男はこれから商人として期待できるな」

バニルさんはそういつて2000万エリス金貨の入った袋を拾う。

「ほれ店主よ。汝の行動が招いた結果だ」

そういつて私に袋を差し出した。

私はバニルさんの方をじつと見つめて

「…バニルさん、こうなることも見通していたのですか。だから今まで妙に冷静だったのですか」

そんな私の問いかけに、

バナイルさんは少し口の端を歪めてこたえる。

「さあな」

私は頬を膨らませた顔をバナイルさんに向ける。

「もう、バナイルさんのほか」

その言動に反してアンデッドな私の胸には少し暖かいものが宿っていた。

借金 完済



【バナイル視点】

「…ということがあったのですよ、アクア様」

「ふうん、それは災難だったわね。魔道具店が差押えられて遊びに行く場所が減って一か月間寂しかったわよ」

「寂しく感じてくれたんですね…！」

店主は何がそんなに嬉しいのか、なんちゃって女神に笑顔を向ける。

「それで、今日の目玉商品なのですが…」

店主はニコニコしながら愛おし気に棚の商品を眺める。

「…嬉しそうな顔をしておって」

借金店主よ、商売においては相手のニーズを的確に把握することが大事だ。

しかし、それよりも大事なことがある。  
それはどんなときでも諦めずに続けることだ。  
そして、続けるために重要なこと、それは楽しむことだ。  
まあ、楽しむことにかけてはこのリッチー店主に及ぶ者はなかなかいないのではないだろうか。

「う、うー…、届かな…あ…」

我輩は、店主が商品を取ろうとして背伸びをしている先の高い棚に手を伸ばして、目的の商品を手に取り店主に渡してやる。

商品を手にしたウイズは少し驚いたような顔を我輩に向けて、そして、実に嬉しそうな顔をして我輩に笑いかけた。

「また一緒に頑張りましょうね！バニルさん」



半年後…

「はわ…はわわわ…」

「ふむ、借金店主よ。我輩の記憶が確かであれば、半年前に同じような出来事があった気がするが」

リッチーが店主を務める極めて唯一無二の魔道具店。その前に佇む悪魔の我輩とリッチーの店主。

店の扉に打ち付けられた木の板、そこにはデカデカとこう書かれていた。



『差押え』

店主はアンデッドよろしく顔を青ざめさせて声を震わせる。

「ま、まったく誰のいたずらでしようかね…ははは…」

アンデッドのクセに顔中に汗をかく店主はそんなことを言いながら、我輩と距離をとる。

当然我輩がこれを逃すわけはなく、

「ほうほう。どれ、ちよつと我輩の全てを見通すこの眼を見るがよい。」

「きよ、拒否します…」

……

「仮にいたずらでないのなら、どんな経営センスを持っていれば半年で二度も店舗の差押さえを受けることができるのであろうなあ。いやはや、全てを見通す我輩でも流石にこの結果は予測の範疇を超えるなあ。もしこの世界にそんな店主がいるようであれば脳の欠陥が重すぎるので、一度脳にメスを入れてみたいものだなあ」

我輩はにっこり笑いながら店主との距離を一步詰める。

そして魔道具店店主のリッチーは、だらだら冷や汗をかきつつも我輩に笑いかけた。

「ま、また一緒に頑張りましょう！バニルさ」

『『バニル式殺人光線』!!!』

ぎゃああああああああああああああああああああああああ

アクセルの街の一角で、今日もポンコツ店主の声が響く。

この素晴らしい天界に祝福を！  
ウイズ編  
完